

# 史跡 高知城跡 高知城跡

— 内堀跡西側地区埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2013. 3

高知市教育委員会



# 史跡 高知城跡 高知城跡

— 内堀跡西側地区埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2013. 3

高知市教育委員会





桐紋瓦 (806)



桐紋瓦 (805)



煙管 (802)



縁部向付 (774)・漆椀 (782)



匙 (783)

平成 17 年度調査 SK13 遺物出土状況





平成17年度調査SK4遺物出土状況



同セクション





桐紋瓦 (805・806・804)



縩部焼向付 (774)



被熱した肥前産染付壺蓋 (94)



肥前産染付碗 (972)



京焼皿 (993)





尾戸焼碗 (247)



尾戸焼碗 (1031)



尾戸焼碗 (174)



尾戸焼碗 (44)



尾戸焼花生 (676)



軟質施釉陶器皿 (723)



土師質土器型 (741)



焼塩壺 (715・711)



## 序

史跡高知城跡のある大高坂山は、市の中心部に位置する標高44mの丘陵です。鏡川と江ノ口川とが東西に自然の外堀をなし、浦戸湾から外海に通じるこの地は、すでに南北朝期からの築城が伝えられ、戦国の雄・長宗我部元親も秀吉配下となった後に、城下町の移転を図った要所です。

いま仰ぎ見る高知城の堀は山内氏の築城によるもので、焼失を経つつも再興を果たした近世城郭です。現在、内堀の多くは埋められ、かつての城の全貌は古絵図等で偲ぶのみとなっています。

平成17年、西堀地区における開発計画に伴い発掘調査が実施され、内堀石垣のほか周辺の侍屋敷等の遺構が確認されました。そして17世紀初頭の土坑からは、秀吉配下でも限られた武将のみが使用を許された「桐紋瓦」が発見され、築城の歴史を探る上で大きな意義をもつ区域として注目を浴びることになりました。この結果を受け、地権者との協議を経て、管理団体の高知県が取得し史跡に追加されるに至りました。今後、当地の築城の変遷をたどるうえで、埋もれていた史実にも光が当たるものとして期待されます。

この報告書が、高知市の中近世史を理解するうえで何らかの役割を果たし、また地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成25年3月  
高知市教育委員会



## 例　　言

1. 本書は、高知市教育委員会が平成17年度と平成21年度に実施した高知城跡内堀跡西側地区的発掘調査報告書である。
2. 調査対象地は、平成17年度調査区が高知市丸ノ内1丁目27番3号、平成21年度調査区が高知市丸ノ内1丁目3番23号に所在する。
3. 調査期間と調査面積は次の通りである。資料整理、報告書作成は平成17年度から24年度にかけて行なった。

[平成17年度]　試掘調査 平成17年11月29日～12月7日、調査面積320m<sup>2</sup>

本調査 平成18年2月13日～3月11日、調査面積511m<sup>2</sup>

[平成21年度]　試掘調査 平成21年6月12日、調査面積50m<sup>2</sup>

本調査 平成21年6月15日～7月10日、調査面積225m<sup>2</sup>

4. 調査体制は以下の通りである。

調査主体 高知市教育委員会

調査事務 [平成17年度] 高知市教育委員会 生涯学習課主査 門田麻香

[平成21年度] 同主任 高石敏子

調査担当 高知市教育委員会 生涯学習課指導主事 浜田恵子 梶原瑞司

5. 本書の執筆と編集は浜田が行い、遺物写真は梶原が撮影した。

6. 調査にあたっては、株式会社穴吹工務店、有限会社北村工務店、高知県教育委員会文化財課をはじめとする関係諸機関の方々の協力を得た。

7. 発掘調査にあたっては松田直則、池澤俊幸をはじめとする諸氏から助力を得、中川功氏からは現地情報や写真資料の提供等についてご協力を賜った。

また、遺物の資料調査について大橋康二氏、金子智氏、絵図の調査について大脇保彦氏、吉松靖峯氏はじめ諸氏のご教示を賜った。

8. 発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。

[発掘作業] (平成17年度) 上田善右 岡崎達男

(平成21年度) 井上正 橋田幸明 森沢正典

[測量補助] (平成17年度) 片岡和美 (平成21年度) 田上浩 大野佳代子

[整理作業] 井澤久未 横尾洋子 酒井暢子 島村加奈 松木富子 村上裕紀 森木愛子

渡邊可奈子 和田エリ

9. 掲載している平面図の方位は国土座標を基準としている。巻末の報告書抄録における経緯度については世界測地系の数値を使用している。

10. 遺構の略号は、土坑:SK、柱穴及び小型の穴:P、戸戸:SE、性格不明遺構:SXとした。

11. 出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。遺物は高知市教育委員会が保管している。注記の略号は平成17年度調査が「05-KC」、平成21年度調査が「09-KC」である。



# 本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第Ⅲ章 平成17年度調査	
第1節 調査の方法	10
第2節 調査の成果	
1. 試掘調査	12
2. 基本層序	20
3. 遺構と遺物	22
(1) 土坑	25
(2) 瓦溜り・遺物集中	100
(3) 包含層出土遺物・その他の遺物	104
第Ⅳ章 平成21年度調査	
第1節 調査の方法	145
第2節 調査の成果	
1. 基本層序	146
2. 遺構と遺物	151
(1) 土坑	152
(2) 井戸	169
(3) ピット	176
(4) 性格不明遺構・瓦溜り	177
(5) 包含層出土遺物・その他の遺物	184
第Ⅴ章 考察	
第1節 絵図、文献にみる高知城跡内堀跡西側地区の性格と変遷	196
第2節 高知城跡内堀跡西側地区検出遺構の性格と変遷	209
第3節 高知城跡内堀跡西側地区出土遺物の様相	215

## 挿図目次

Fig. 1 高知城跡内堀跡西側地区平成17・21年度調査区位置図	2
Fig. 2 寛文己酉高知絵図(抜粋)	8
Fig. 3 高知城跡及び周辺の遺跡	9
Fig. 4 調査区風景	10
Fig. 5 平成17年度調査区位置図及び試掘坑配置図	11
Fig. 6 TP1・5セクション図・TP5石列出土状況図	15
Fig. 7 TP3セクション図・TP7土層柱状図・TP3・4石垣検出状況図	16
Fig. 8 TP5・6出土遺物実測図	17
Fig. 9 TP3・7出土遺物実測図(1)	18
Fig. 10 TP7出土遺物実測図(2)	19
Fig. 11 平成17年度調査区北壁セクション図	21
Fig. 12 平成17年度調査検出遺構全体図	23
Fig. 13 SK1平面図・セクション図・出土遺物実測図	25
Fig. 14 SK2・3平面図・セクション図	26
Fig. 15・16 SK2出土遺物実測図(1)・(2)	27
Fig. 17 SK3出土遺物実測図	29
Fig. 18 SK4平面図・セクション図	30
Fig. 19～24 SK4出土遺物実測図(1)～(6)	32
Fig. 25 SK5・6平面図・セクション図・エレベーション図	38
Fig. 26 SK5・6出土遺物実測図(1)	39
Fig. 27～29 SK6出土遺物実測図(2)～(4)	40
Fig. 30 SK7平面図・エレベーション図	44
Fig. 31～38 SK7出土遺物実測図(1)～(8)	46
Fig. 39 SK8・9平面図・セクション図・遺物出土状況図	54
Fig. 40～42 SK8出土遺物実測図(1)～(3)	55
Fig. 43・44 SK9出土遺物実測図(1)・(2)	59
Fig. 45 SK10平面図・セクション図	61
Fig. 46～58 SK10出土遺物実測図(1)～(13)	63
Fig. 59 SK11平面図・エレベーション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図(1)	78
Fig. 60 SK11出土遺物実測図(2)	79
Fig. 61 SK12平面図・セクション図・遺物出土状況図	80
Fig. 62～72 SK12出土遺物実測図(1)～(11)	83
Fig. 73 SK13～16平面図・セクション図・エレベーション図	95
Fig. 74～77 SK13出土遺物実測図(1)～(4)	96
Fig. 78 SK15・16出土遺物実測図	100
Fig. 79・80 瓦窯1出土遺物実測図(1)・(2)	101
Fig. 81 集中1・4出土遺物実測図	103
Fig. 82 II層出土遺物実測図	105
Fig. 83・84 I層・擾乱層出土遺物実測図(1)・(2)	106
Fig. 85 平成21年度調査区位置図	145

Fig. 86	平成21年度調査Ⅱ区北壁・東壁セクション図	147
Fig. 87	平成21年度調査Ⅱ区南壁・I区東壁セクション図	148
Fig. 88	平成21年度調査検出遺構全体図	149
Fig. 89	SK1～3・7平面図・セクション図	152
Fig. 90	SK1出土遺物実測図	153
Fig. 91	SK2・3出土遺物実測図	154
Fig. 92	SK4・P2平面図・セクション図	155
Fig. 93～96	SK4出土遺物実測図(1)～(4)	156
Fig. 97	SK5・6・P1平面図・セクション図	160
Fig. 98	SK5・7出土遺物実測図	161
Fig. 99	SK8・13平面図・セクション図・エレベーション図	162
Fig. 100	SK9・10・11平面図・セクション図	163
Fig. 101	SK8・10出土遺物実測図	164
Fig. 102～104	SK11出土遺物実測図(1)～(3)	165
Fig. 105	SK12平面図・セクション図	168
Fig. 106	SE1平面図・セクション図・SE1側板実測図(1)	170
Fig. 107～109	SE1側板実測図(2)～(4)	171
Fig. 110・111	SE1側板・釘実測図(5)・(6)	174
Fig. 112・113	SE1出土遺物実測図(1)・(2)	176
Fig. 114	瓦溜1平面図・セクション図	178
Fig. 115	SX1・瓦溜1出土遺物実測図(1)	179
Fig. 116・117	瓦溜1出土遺物実測図(2)・(3)	180
Fig. 118	瓦溜2・3・4出土遺物実測図	183
Fig. 119	I・III層・搅乱層出土遺物実測図	185
Fig. 120	高知城跡内堀跡西側地区調査区の推定位置	205
Fig. 121	絵図にみる高知城内堀西側の変遷(1)	206
Fig. 122	絵図にみる高知城内堀西側の変遷(2)	207
Fig. 123	高知城跡内堀跡西側地区検出遺構の分布と変遷	214

## 表目次

Tab. 1 平成17年度調査土坑一覧表	22
Tab. 2～33 遺物観察表(陶磁器・土器)	108
Tab. 34 遺物観察表(石製品・金属製品・ガラス製品)	140
Tab. 35 遺物観察表(古鉄)	140
Tab. 36～39 遺物観察表(瓦)	140
Tab. 40・41 遺物観察表(木製品)	143
Tab. 42 平成21年度調査土坑・井戸一覧表	151
Tab. 43～49 遺物観察表(陶磁器・土器)	186
Tab. 50 遺物観察表(石製品・金属製品)	193
Tab. 51 遺物観察表(瓦)	193
Tab. 52・53 遺物観察表(木製品)	194
Tab. 54 絵図・文献にみる高知城跡西側の変遷	205
Tab. 55 H17-SK13出土遺物の器種別出土点数と組成比	219
Tab. 56 H17-SK3・4・H21-SK4出土遺物の器種別出土点数と組成比	219
Tab. 57 西弘小路遺跡SK3出土遺物の器種別出土点数と組成比	220
Tab. 58 H21-SK4陶磁器の生産地別出土点数と組成比	220
Tab. 59 H17-SK6～12、西弘小路遺跡SK84、金子橋遺跡SK2～4・6・7・9出土遺物の器種別出土点数と組成比	223
Tab. 60 H17-SK6～12陶磁器の生産地別出土点数と組成比	224

## 写真図版目次

巻頭図版1 平成17年度調査SK13遺物出土状況
巻頭図版2 平成17年度調査SK4遺物出土状況、同セクション
巻頭図版3 出土遺物(桐紋瓦、織部焼向付・被熱した肥前産染付壺蓋・肥前産染付碗・京焼皿)
巻頭図版4 出土遺物(尾戸焼碗・尾戸焼花生・軟質施釉陶器皿・土師質土器型・焼塙壺)
PL. 1 調査区遠景、調査区遠景(下面検出遺構調査時)
PL. 2 上面検出遺構完掘状況、下面検出遺構完掘状況
PL. 3 調査区北壁、調査区南壁
PL. 4 SK4遺物出土状況、SK4セクション
PL. 5 SK3セクション、SK6セクション
PL. 6 SK7遺物出土状況、SK7完掘状況
PL. 7 SK12遺物出土状況、SK12完掘状況
PL. 8 SK8遺物出土状況及びセクション、SK13セクション
PL. 9 SK15セクション、SK15完掘状況
PL. 10 包含層1層遺物出土状況、SK2・4・7遺物出土状況
PL. 11 SK10・12・13遺物出土状況
PL. 12 SK13遺物出土状況、調査区風景、作業風景

- PL. 13 営林局石列出土状況、TP5石列出土状況
- PL. 14 TP3石垣出土状況
- PL. 15 TP7掘削風景、TP7自転車・瓦礫出土状況
- PL. 16 TP7内堀跡掘削状況、TP7内堀跡下層セクション、TP7自転車・瓦礫出土状況、TP3石垣出土状況、TP4石垣出土状況、TP4石垣と土留め出土状況、TP6包含層II層遺物出土状況、TP4掘削風景
- PL. 17 SK1・2・4出土遺物
- PL. 18 SK4・6・12出土遺物
- PL. 19 SK6・7・12出土遺物
- PL. 20 SK7出土遺物
- PL. 21 SK7・8出土遺物
- PL. 22 SK8・9出土遺物
- PL. 23 SK9～12出土遺物
- PL. 24 SK10～12出土遺物
- PL. 25 SK12出土遺物
- PL. 26 SK12出土遺物
- PL. 27 SK12・13出土遺物
- PL. 28 SK13出土遺物
- PL. 29 SK13・瓦溜1・土器集中4出土遺物
- PL. 30 包含層I・II層・搅乱・内堀跡1層出土遺物
- PL. 31 調査区風景、II区上面検出遺構完掘状況
- PL. 32 II区北壁、II区北壁セクション
- PL. 33 II区南壁、I区東壁
- PL. 34 SK1半截状況、SK2セクション
- PL. 35 SK3・7、SK4半截状況
- PL. 36 SK4セクション、SK4・12完掘状況
- PL. 37 SK5完掘状況、SK5セクション
- PL. 38 SE1掘方検出状況、SE1半截状況
- PL. 39 SE1完掘状況、SE1木炭出土状況
- PL. 40 瓦溜1・SX1検出状況、瓦溜1遺物出土状況
- PL. 41 SK2遺物出土状況、I区東壁セクション、SK5、瓦溜1遺物出土状況
- PL. 42 SK4出土遺物
- PL. 43 SK4出土遺物
- PL. 44 SK4・5・11出土遺物
- PL. 45 SK11出土遺物
- PL. 46 SK11・SE1・瓦溜1出土遺物
- PL. 47 瓦溜1～3・包含層I層出土遺物
- PL. 48 搅乱・包含層II層・SK11出土遺物、SE1井戸側板



## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

高知城跡内堀跡西側地区は国史跡高知城跡の西端に位置している。高知城内堀の西に接するこの地点は、江戸時代には侍屋敷、その後は堀端の縁地に転じ、幕末頃には馬場が設けられたことが史料によって知られているが、明治8年（1875）には堀の南西側に旧裁判所が設置され、以降、堀西側の敷地は旧宮林局、裁判所などの国有地となっていた。また、高知城西側の内堀は終戦後に埋め戻されており、現在に至っている。

### （1）平成17年度調査

平成17年、周知の埋蔵文化財包蔵地である高知城跡の範囲内にあり、当時四国森林管理局の所管であった本地点が売却されるとともに、民間業者によるマンション建設計画が立ち上がり、それに伴う埋蔵文化財の有無についての照会が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に対し提出された。これを受け、当教育委員会が試掘調査を平成17年11月29日から12月7日にかけて実施した。

試掘調査の結果、対象地の7箇所に設定した試掘坑のうち、東部の試掘坑にて高知城の内堀跡を検出し、西部側の試掘坑でも近世の遺構と遺物を検出した。

この時、地権者からは西側の用地をモデルルーム建設地として活用する旨の計画が出されており、今後の敷地内の開発によって遺跡の一部が破壊されることが懸念された。このため地権者との協議を経て、遺跡に影響を与える範囲において当教育委員会が発掘調査を行い、併せて遺跡の下層部分についても発掘調査を行うこととなった。本調査は平成18年2月13日から3月11日にかけて実施した。

本調査の結果、さらに近世前期に遡る重要な遺構が確認されたことから、国・高知県・高知市が協議を重ね、地権者の承諾が得られることから、県による対象地の買い取りの後、本地点を国史跡に追加することが決定された。対象範囲はその後、平成19年7月26日に国史跡に追加された。

### （2）平成21年度調査

平成17年度調査区の南側に接する一画は、周知の埋蔵文化財包蔵地である高知城跡の範囲内にあり、現在は個人の宅地となっている。本地点において、平成21年1月に個人住宅の建て替え工事が計画され、それに伴う埋蔵文化財の有無についての照会が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に対し提出された。これを受けて、当教育委員会が試掘調査を平成21年6月12日に実施した。

試掘調査では、試掘坑内にて近世の遺構と遺物を検出した。試掘調査の結果を受けて、高知県教育委員会の指導の下、地権者と当教育委員会の間で協議が行われ、建物の建設予定地において当教育委員会が発掘調査を実施することとなった。本調査は平成21年6月15日から7月10日にかけて実施した。

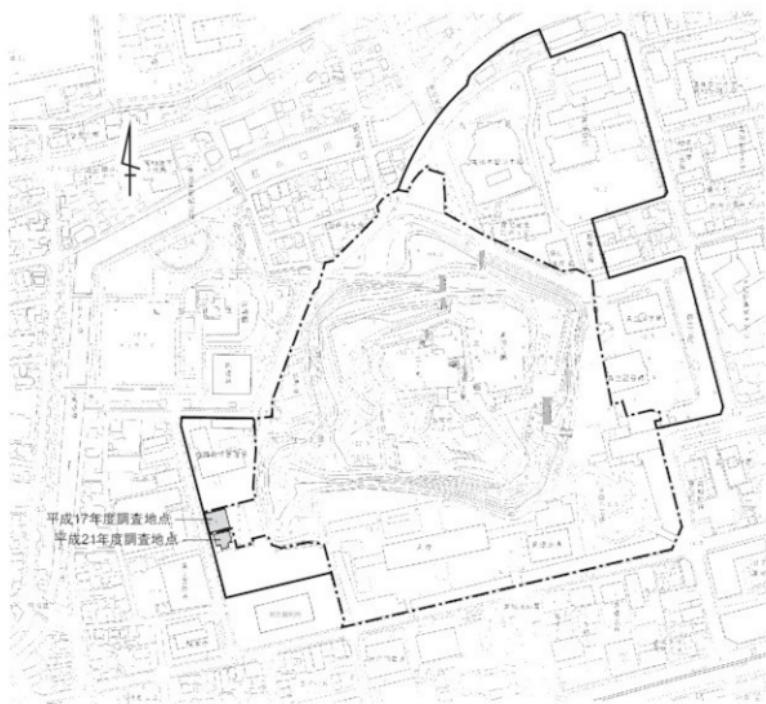


Fig.1 高知城跡内堀跡西側地区  
平成 17・21 年度調査区位置図

— 国史跡高知城跡  
— 高知城跡  
(※跡・包蔵地の範囲は2013年3月現在のもの)

## 第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

### 1. 地理的環境

高知城跡が所在する高知市は、土佐湾に面した高知県のほぼ中央部に位置する。市域の西部及び北部は東西に山地が連なり、東部の高知平野には浦戸湾が深く入り込んでいる。河川は、鏡川が市の西北部から東流して浦戸湾に注ぎ、南国市北部及び香美市西部域からは国分川が西流し、江ノ口川、舟入川を合わせて浦戸湾に注いでいる。現在の平野部の殆どは古くは内海であったが、その後、鏡川などによる堆積や、隆起、干拓による埋め立てなどによって、近世以降ほぼ現在の状態になったものである。

高知市の中心市街地は、北部は標高400～600mの東西に連なる山地、南方を300m級の帯状の山地、西方をなだらかな丘陵によって開まれた平野部にあり、周囲には大高坂山、小高坂山、能茶山、比島山、葛島山などの小分離丘陵が存在している。しかし、かつては鏡川によって形成された三角州上に広がる低湿地であったため、平野部の土地は総体的に低く、集中豪雨、台風、津波による水害が繰り返されてきた地域でもある。一方で、平野部に深く入り込む浦戸湾は自然の良港となり、近世には、浦戸湾に注ぐ鏡川、江ノ口川の水運によって、交通至便の立地環境を得ることとなった。

高知城跡は、小分離丘陵の大高坂山とその山裾の微高地上に立地している。大高坂山の北側を流れる江ノ口川は、河川改修によって現在は東へ直線的に延びているが、かつては川筋が南側に大きく迂回し、山のすぐ北西側まで迫っていたことが近世の絵図から知ることができる。

### 2. 歴史的環境

#### 周辺の遺跡

縄文時代の遺跡としては、高知市北部の丘陵に立地する福井遺跡や宇津野遺跡から、縄文時代の遺物が出土している。また、南部の長浜チドノ遺跡からは縄文時代前期の羽島下層式土器、北部の正蓮寺不動堂前遺跡からは縄文時代中期初頭の舟元I式土器や礎石錐、縄文時代後期～晩期の条痕文土器や磨研土器、西部の柳田遺跡からは縄文時代後期～晩期の土器、鶴部遺跡からは縄文時代晩期の土器が出土している。

弥生時代には、福井遺跡、高知学園裏遺跡、初月遺跡、北秦泉寺遺跡など、丘陵沿いを中心に遺跡が増加する。高知市西部域では、流路跡が検出された柳田遺跡から弥生時代前期の大築式土器などが出土し、丘陵部先端の微高地上に立地する御手洗遺跡では、弥生時代中期の集落跡が確認され、土坑や竪穴住居跡などが検出されている。また、近隣の鶴部遺跡でも弥生時代の遺構や遺物が検出されている。この他には、山地・丘陵部に立地するかろーと口遺跡、城山遺跡、高天原遺跡などがある。注目されるものとして、県下最古の中広形銅矛2本が池地区的長崎から、有柄式石剣と片刃石斧が北秦泉寺遺跡から出土している。また、大高坂山の北西側に立地する尾戸遺跡においても、弥生前期の太型船刃石斧の出土が報告されている。

古墳時代の遺跡では、高知市北部の山麓に、吉弘古墳、愛宕不動堂前古墳、宇津野1号墳・2号墳などの後期古墳が点在する秦泉寺古墳群が存在する。また、高知市西部から南部にかけての丘陵部

や山腹には、朝倉古墳、舟岡山古墳、高座古墳、塚ノ原古墳群が存在する。また、平野部においては、中島町遺跡や西秦泉寺遺跡などが確認されている。

古代の遺跡では、高知市北部の微高地上に、白鳳～奈良時代の瓦を出土する秦泉寺廃寺跡があり、この他にも、東久万池田遺跡、西秦泉寺遺跡、吉弘遺跡、松葉谷遺跡、高知学園裏遺跡などがある。高知市の南西部域では、鴨部遺跡で古代の掘立柱建物跡、柵列、溝跡などが検出されている。また、丘陵部先端の微高地上にある神田ムク入道遺跡でも古代の掘立柱建物跡や土坑が検出されている。

中世には、大高坂城跡、福井中城跡、万々城跡、安楽寺山城跡など、多くの山城が丘陵部に立地するようになる。大高坂城跡は南北朝期に土佐の南朝方として活躍した大高坂氏の居城とされる。大高坂氏が暦応2～3年（1339～1340）に北朝方の攻撃を受け敗退した（<sup>注1</sup>）後、天正16年（1588）には長宗我部元親が岡豊城から大高坂山城に移り、その後同氏が浦戸城へ移る天正19年（1591）までの間、大高坂山が長宗我部氏の居城となった。高知城三ノ丸跡の平成16年度発掘調査では、現存する東石垣の背面で長宗我部の時代に遡る天正期の石垣が検出され、桐紋軒丸瓦も出土している。

近世の遺跡では、高知城跡の他、高知城伝下屋敷跡、弘人屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡などが確認されている。高知城は享保12年に焼失するが再建され、現在、国の重要文化財に指定されている。平成5年度の御台所屋敷跡の発掘調査では、ピット、礎石、溝、石垣などの遺構が検出されている。城下町では、藩関連の屋敷跡である高知城伝下屋敷跡、上級・中級武士の屋敷跡である弘人屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡などの調査が行われ、近世城下町の様相が次第に明らかになってきている。近世の窯跡には、尾戸窯跡、能茶山窯跡がある。尾戸窯は、承応2年（1653）、高知城の北西に位置する尾戸に開かれた藩の陶器窯で、文政5年（1822）に窯場が能茶山に移転する。能茶山窯は城下町の西方に位置し、文政3年（1820）に藩の磁器窯と陶器窯、民間の陶器窯が開かれている。

開成館跡は慶応2年（1866）に土佐藩が創立した勸業貨殖および技術教育の統括機関であり、慶応3年に山内容堂と英公使の通訳官アーネスト・サトウとの会見がなされた。明治初期には外客接待の場として「寅賓館」と改まり、明治4年（1871）に、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、杉孫七郎、板垣退助、福岡孝弟らによる会談が行われている。

#### 古代から中世の大高坂山と周辺の環境

高知城及び高知城跡平成17・21年度調査地点が所在する大高坂山とその西側の地点は、古代には高坂郷に属していた。高坂郷の名称は10世紀初めの『和名類聚録』に見えており、そこには「土佐郡 五郷 土佐・高坂・鴨部・朝倉・神戸」とある。こうした記述から、律令制下における高坂郷の開発は平安時代にはすでに進められていたと考えられる。

南北朝時代には、土佐の在地領主らが二派に分かれて争い、大高坂を主戦場に度々合戦が行なわれたとされる。『佐伯文書』によると、在地の有力地頭とみられる大高坂氏が城を構え、「大手」「一城戸」「西大手」「西之城戸」などがあったとされている。また、城主である大高坂松王丸は戦死し、暦応3年（1340）に所領は堅田氏に恩賞として与えられたと記されている。

その後、天正16年（1588）には、岡豊城から居城を移した長宗我部元親が大高坂山に城を構えている。『長宗我部地検帳』には天正16年正月における大高坂郷の状態が記されており、「弓場ヤシキ」

「大テンスノ下」「御土居」などの語がみられる。長宗我部氏は天正19年(1591)には居城を浦戸城へ移している。

### 高知城築城と近世城下町の形成

関ヶ原合戦後、土佐国を与えられた山内一豊は、慶長6年(1601)に長宗我部氏の居城であった浦戸城に入城した。その後、国内統治の要衝の地として大高坂山を城地に選び、慶長6年9月に築城を開始した。慶長8年(1603)には本丸の建物と二ノ丸石垣までが竣工し、慶長16年(1611)に三ノ丸が完成して高知城の竣工に至った。築城当初、城山の名称は「河中山」とされたが、城下がたびたびの水害に悩まされたため、その名を忌んで、慶長15年(1610)に「高智山」と改めた。

正保年間(1644~1648)の『正保城絵図』<sup>(注2)</sup>、及び慶安5年(1652)の『慶安五年高知郭中絵図』<sup>(注3)</sup>によると、城の南側と西の掲手門付近には下屋敷があり、南東及び北東には侍屋敷が置かれていた。また、寛文9年(1669)の『寛文己酉高知絵図』<sup>(注4)</sup>(Fig.2)では、城の南東に「御馬場」、東北には江ノ口川に接して「御作事場」「御米蔵」「御武具蔵」などの藩の施設がみえている。

これらを囲んで、城の東・西・南に内堀が巡らされ、北は江ノ口川(当時の大川)が堀としての役割を果たした。城門は東西南北の4棟が設けられ、東を追手とし、西を掲手とした。

築城に並行して、城下町の造営も進められた。南の鏡川と北の江ノ口川を天然の外堀とし、東側と西側は新たに堀を設けて外堀とした。これらの外堀に囲まれる区域が郭中とされ、上級・中級武士の居住区となった。さらに郭中を挟んで、西には上町、東には下町を配した。上町は主に足軽、武家奉公人など下士の者を住まわせ、下町には武士の生活を賄うための町人の居住地区が設けられた。上町、下町と郭中の境界は、東は廿代橋より南に堀詰を経て鏡川に至る線、西は江ノ口川より南に金子橋、築屋敷に至る線がこれにあたり、郭中との境には外堀とともに、土堤を築いて両者を区画している。

### 高知城西側の景観と変遷

高知城の西側内堀に接する一帯には、西大門から西に向かう「西大門筋」と、内堀に沿って南北に延びる筋があり、これに面して侍屋敷が並んだ。寛文9年(1669)の『寛文己酉高知絵図』(Fig.2)には、内堀南西角に藩閥連とみられる屋敷の絵が描かれており、そこから西大門に至る南北の筋には堀の西岸に沿って「福岡内丞」「安東其右衛門」「桑山伊左衛門」の侍屋敷がみえている。

しかしその後、元禄11年(1698)10月6日には、北奉公人町から出火した火災が城下に広がる大火となった。『南路志』によると、城内は「御下屋敷、鐘撞堂、御花畠之内御茶店、御厩、大御門南脇之堀焼失。」、城下は「大御門筋、同北之町、横町今東廿代町迄一筋、帶屋町筋不残、本町筋深尾若狭屋敷今東へ南側不残、中鷗町ハ高畠小傳次屋敷今不残、南与力町半分、南片町之東へ焼通。南ノ方ハ掛川町、唐人町今、北ハ廿代町を限、東ハ下知田町迄悉焼失也。」とあり<sup>(注5)</sup>、城内的一部と城下町の大部分が焼失した。この大火によって内堀西側の侍屋敷も被害を受け、以後、堀西側の侍屋敷は撤去され、前面の筋は弘小路となった。<sup>(注6)</sup>

また、享保12年(1727)2月1日には、越前町から出火して廿代町、細工町、種崎町、蓮池町、農人町、新町、新市町が焼失し、翌2日に出火した火の手は北奉公人町、堺町、唐人町、浦戸町、掛川町、朝倉町に及んだ。さらに火災は城内にも及び、大手門、西ノ口大門、北ノ口大門他の数棟を

除いて城郭の大部分が被害を受け、天守、本丸、二ノ丸、三ノ丸も焼失した。<sup>(註7)</sup> この享保の大火灾の後、延享4年（1747）9月27日には城門の呼称が変更される<sup>(註8)</sup>とともに、搦手側の「西大門筋」も「西弘小路」と改められた。

その後、嘉永年間（1848～1854）には、堀西側に南北九十六間東西八間の馬場が設けられた。<sup>(註9)</sup>  
**近代以降**

明治4年（1871）の廃藩置県の後、高知城は明治6年（1873）に本丸と追手門などを残して表御殿、奥御殿など殆どの建物が撤去され、高知県の管理のもと公園に指定された。その後、南面の内堀は北岸を埋めて幅を狭くされた。南西側では明治8年（1875）に旧裁判所が設置され、堀西側の敷地は旧營林局、裁判所などの国有地となった。

昭和16年に始まった太平洋戦争のなか、昭和20年7月4日の大空襲によって高知市の大部分は焼土と化した。終戦後の混乱の中で、昭和20年8月27日に高知市は建設局を設け、同時に建設委員会を設立して市街地の復興再建にあたった。昭和20年11月4日には連合軍が高知に到着、後続部隊は朝倉と日章の日本軍旧兵舎に駐屯し、西弘小路の電気局が軍政部に当てられた。この時、瓦礫の山と化した市街地を清掃するに際し、市街の瓦礫を高知公園の堀に廃棄し、堀を埋め立てて公園や県庁への市民の往来を安易にすることが軍政部から指示されたという。<sup>(註10)</sup> こうした経緯を経て、東側と西側の堀の埋め立てが行われた。

埋め立ての後、東側の藤並神社沿いにあった堀跡は公園、西側の堀跡は裁判所と營林局などの国有地となった。西側の堀跡はその後一部が国指定史跡に加えられ、現在に至っている。

#### 【註】

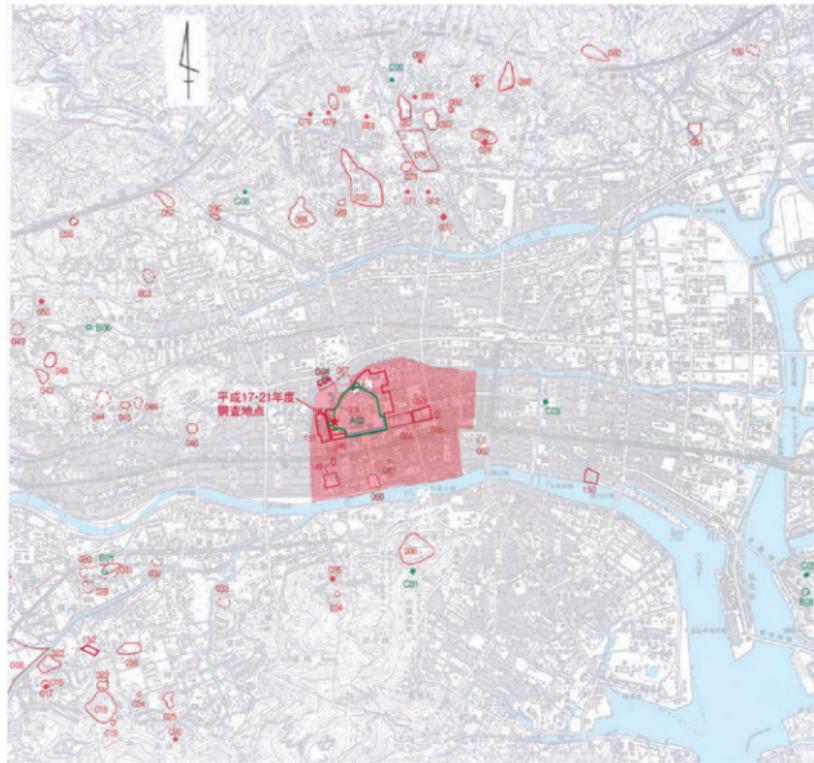
- 1)『土佐國圖鑑集拾遺』
- 2)『正保城絵図』国立公文書館所蔵
- 3)『慶安五年高知郡中絵図』高知市民図書館所蔵
- 4)『寛文己酉高知絵図』高知市民図書館所蔵
- 5)『南路志』巻七十「豊昌公御代七」、「豊昌公御代七付録」
- 6)『高知市沿革歴史』　『高知市沿革歴史』は松野尾章行著、濱口真澄校の自筆本で、明治35年成稿。
- 7)『南路志』巻七十五「豊敷公御代一」「城下大火、御城本丸まで焼失　附公義御差出」
- 8)『皆山集』
- 9)『皆山集』『高知市街誌稿』　『土佐之国史料類纂　皆山集』第九卷高知県立図書館 昭和50年
- 10)『高知市戦災復興史』高知市 1969年

## 【参考文献】

- 横川末吉「第一編 古代・中世」『高知市史 上巻』高知市 1958年
- 平尾道雄「第二編 近世」『高知市史 上巻』高知市 1958年
- 『高知県の地名』平凡社 1983年
- 『角川日本地名大辞典39高知県』角川書店 1986年
- 『特別展－絵図の世界』安芸市歴史民俗資料館 1998年
- 『高知城下町読本－改訂版』土佐史談会・高知市教育委員会 2004年
- 『描かれた高知市－高知市史絵図地図編』高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市 2012年
- 『土佐国史料集成 南路志』高知県立図書館 平成6年
- 『土佐国史料類纂 観山集』高知県立図書館 昭和50年
- 『柳田遺跡－ショッピングセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994年
- 『史跡高知城跡I－高知市立動物園跡地の史跡整備化に伴う御台所屋敷跡発掘調査報告書』高知県教育委員会 1994年
- 『高知城跡－伝御台所屋敷跡史跡整備に伴う発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年
- 『高知城三ノ丸跡－石垣整備事業に伴う試掘確認調査概要報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年
- 『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
- 『史跡高知城跡－本丸石垣整備事業報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004年
- 『史跡高知城跡－丸ノ内緑地試掘確認調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2006年
- 『史跡高知城跡－三ノ丸石垣整備事業に伴う発掘調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2010年
- 『西弘小路遺跡－高知法務総合庁舎新官邸埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012年
- 『鶴部遺跡－市立鶴田小学校体育館・プール増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会 2002年
- 『神田ムク入道遺跡－宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会 2005年
- 『尾戸窯跡－共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会 2007年
- 『開成船』高知市教育委員会 2007年
- 『金子橋遺跡－第六小学校屋内体育館及びプール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会 2008年
- 『高知城跡－西堀地区試掘確認調査報告書』高知市教育委員会 2009年
- 『西弘小路遺跡－総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会 2010年
- 『史跡高知城跡－北曲輪地区埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会 2011年
- 『神田ムク入道遺跡－グループホーム及び地域密着型特定施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会 2012年



Fig.2 寛文己酉高知絵図 (抜粹) (高知市立市民図書館平尾文庫所蔵)



### ■ 郡中参考地

No.	道路名	時代	No.	道路名	時代	No.	道路名	時代
A02	国府別城跡・高知城跡	近世	049	福井別城跡	中世	082	古弘道跡	古代
063	高知城跡・大高坂城跡	中世・近世	050	福井古墳	古墳	083	松賀谷道路	古代～中世
008	柳原山道路	礪文～古墳	053	善保宇城跡	中世	084	野野道跡	古代
016	舟見山道路	弥生	055	福井遺跡	礪文～中世	085	日の岡古墳	古墳
017	舟見山古墳	古墳	056	月井遺跡	弥生	086	北条泉寺古跡	弥生
018	神田古城跡	中世	057	万々城跡	中世	087	森古墳	古墳
019	ケジカ城遺跡	弥生	060	南御星敷跡	近世	088	善泉寺城跡	中世
020	高知古墳	古墳	061	中島町遺跡	古墳	089	善泉寺仁井田神社裏古墳	古墳
022	鶴泊城付近道路	弥生～中世	062	因幡城跡	中世	090	野野城跡	中世
023	シルタニ遺跡	弥生～古代	064	弘人星敷跡	古墳	136	一宮別城跡	中世
024	高神城跡	古墳～古代	065	帝原町遺跡	古墳	146	高知城伝下屋敷跡	古墳～近世
025	神田通道路	弥生～中世	066	尾戸遺跡	近世	149	今子橋遺跡	近世
026	神田ムク入道道路	弥生～中世	067	尾戸空跡	近世	150	西成船跡	近世～近代
029	鷺沼城跡	礪文～古墳	068	安樂寺山城跡	中世	151	西弘小路遺跡	近世
030	神田山城跡	中世	069	東久万池田道路	古代～中世	152	御手衣道路	弥生～中世・近世
031	能美山城跡	近世	070	安房不動堂前古墳	古墳	153	御手筋道路	近世
032	行ヶ坂跡	中世	071	泰小学校校庭古墳	古墳	154	高知御史跡	近世
033	久寿野ノ丸道路	弥生～中世	072	安房神社裏古墳	古墳	155	熊糸山城跡	近世
034	小石木町道路	弥生	073	西御氣寺遺跡	古墳	156	東持羅立郎跡	近世
035	小石木山古墳	古墳	074	泰原寺別城跡	中世	158	吸江城跡	中世～
036	南山城跡	中世	075	泰原寺立廢寺跡	古代	159	高知市宿禰史跡	近世
040	井手城跡	中世	076	土居の前古墳	古墳	C01	野中巣山墓	近世
043	高知小畠御遺跡	弥生～古代	077	前里城跡	中世	C02	古弘古墳	古墳
044	福井西城跡	中世	078	宇津野2号墳	古墳	C03	梅井跡	近世
045	福井中城跡	中世	079	宇津野1号墳	古墳	C04	寺田寅彦邸跡	明治
046	福井元尾城跡	中世	080	宇津野道路	礪文	C05	伊藤兵部宗勝墓	近世
048	からーと1号道路	弥生	081	善泉寺新屋敷古墳	古墳	C06	善名古墓羣	近世

\*No.は高知市道路地図による。

Fig.3 高知城跡及び周辺の遺跡

### 第Ⅲ章 平成17年度調査

#### 第1節 調査の方法

試掘調査は対象地内に7箇所の試掘坑を設定し、遺構検出と堆積状況の確認を行った。掘削は主に重機を用い、遺構の検出作業と遺構掘削は人力によった。また、遺構の密度が低い試掘坑については、近世の遺構検出面より下層の堆積状況を確認した。

本調査は対象地のうち西部の511m<sup>2</sup>を調査区としている。(Fig.5)

調査にあたっては、重機を用いて表土と搅乱層を除去し、その後、人力にて検出作業と遺構掘削を行った。検出された遺構については、土層観察を行うとともに土層断面図と平面図を作成し、写真撮影を行った。遺構の測量については、調査区の形状に合わせた任意座標を設定して調査区全体に4m×4mの方眼区画を設定し、それをもとに実測を行った。平面実測及び土層断面図については、20分の1を基本に適時任意の縮尺を用いた。水準については、高知市丸ノ内1-2-20に設置されている一等水準点より導いた。また、都市再生街区基本調査により設定された基準点を利用して多角測量を行い、調査対象地内にて座標を測定した。

なお、本調査では、標高2.0m前後のレベルにて近世中期から後期の遺構を検出した。下面の調査については、調査区南東部の一画にトレーナーを設定して、近世前期から中期の遺構検出と掘削を行い、その他の地点については上面遺構の調査終了後に埋め戻しを行った。



Fig.4 調査区風景



Fig.5 平成17年度調査区位置図及び試掘坑配置図

測点	X座標	Y座標	測点	X座標	Y座標
No.1	62092487	2651123	No.4	62072682	2655770
No.2	62097815	2675210	No.5	62077856	2679175
No.3	62112553	2646414	No.6	62125721	2701370

## 第2節 調査の成果

### 1. 試掘調査

試掘調査では、調査対象地の西部に試掘坑TP1・6、東部に試掘坑TP2～5・7を設定した。(Fig.5) 各試掘坑の堆積層と検出遺構、出土遺物の概要は以下の通りである。なお、TP2・6の土層については殆どが攪乱層であったため、ここでは図示していない。また、TP1にて検出したSK1・2・瓦溜1についても、本編にて詳細を述べることとする。

今回の調査地点を近世の絵図(Fig.2)に照合させると、調査対象地の東部は高知城の内堀となつており、試掘坑TP3・4・7がこれに該当する。このうちTP3・4では昭和20年の堀埋め戻しに伴う高知空襲時の瓦礫層と、堀西岸の石垣が検出されており、昭和20年当時の堀の西岸の位置を推定できた。またTP7では、同様の堀埋め戻しの瓦礫層と、堀下層の堆積層、堀底の位置などを確認した。

この他、TP5では近代の建物に伴うとみられる石列とコンクリート基礎を検出しておらず、当時の図面との照合から、旧営林局の建物に関わる施設と推定される。

#### TP1 (Fig.6)

調査対象地の北西部に設置した試掘坑である。TP1では、現表土下1.20m(標高2.00m)まで近代以降の整地層であるI-1・I-2層があり、その直下にて近世の遺物包含層であるII層:灰黄褐色シルト層を検出した。II層の下面では、標高1.0～1.3mでIII層:にぶい黄褐色シルト層を検出し、以下、IV層:灰黄褐色シルト層、V層:灰色シルト層、VI・VII層:灰色粘土層が堆積する。近世の遺構検出面はII層の上面から中位にかけてであり、ここより江戸後期の瓦溜1・SK1・2を検出している。

#### TP2

調査対象地の北西部に設置した試掘坑である。TP2では近代建物の基礎とそれに伴う搅乱層が深く及んでおり、近世の遺物包含層であるII層は残存しない。搅乱層の下面ではIII・IV層が堆積するが、遺構、遺物ともに確認できていない。

#### TP3 (Fig.7・9)

調査対象地の北東部に設置した試掘坑である。現代の整地層であるI層は、現表土下0.60m(標高2.50m)まであり、その下面にて、堀の1層にあたる瓦礫層が検出されている。堀1層は、昭和20年に高知城の内堀が埋められた際の埋土にあたり、焼土の他、炭化した木材、焼けて変色した瓦片、煉瓦、当時の生活用具等、高知空襲当時の遺物を多量に含んでいる。

TP3の西端では、堀の西岸に設けられた石垣の一部を検出した。石垣は東側を正面としており、4段の石積み部分までを検出しているが、石垣全体の構造と深さについては未確認である。また、石垣背面の土層についても未確認であるため、石垣が近世の堀西岸とどのような位置関係にあるのかについては明らかにできていない。石は砂岩が主体で、これにチャートが少量含まれており、何れも粗く面取りを施している。石垣は近代以降に一部が崩落したとみられ、部分的にセメントや漆喰状の橙色土で固め補修されている。

出土遺物としては、堀1層から近世及び近現代の瓦片、煉瓦、建物の部材、その他現代の遺物が出土している。遺物の殆どは被熱によって変質しており、瓦片には橙色から褐色に変色したものが

多く含まれる。

図示したものは8～13である。8～13は瓦で、8は軒丸瓦、12は軒棟瓦、9・10は軒棟瓦又は軒平瓦、11は棟瓦又は平瓦、13は不明である。このうち、11は角枠内「布源」銘印をもち布師田（高知県高知市布師田）産、12は「□田村□」銘印をもち田村（高知県南国市田村）産、13は上面に型による陽刻の「久禮田本家ケイ吉」銘をもち久礼田（高知県南国市久礼田）の製品とみられる。

#### TP4 (Fig.7)

調査対象地の南東部に設置した試掘坑である。堆積状況はTP3と同様であり、現代の整地層（I層）の下にTP3と同様の現代の瓦礫層（堀1層）が堆積する。また、試掘坑西端において堀の石垣を検出している。

石垣の石は大きさ、形態とも不揃いであり、石材は砂岩が主体を占め、チャートが少量含まれる。また、石垣は近代以降に崩落後の修復が行われたとみられ、部分的にセメントで補強し、板材で土止めを施している。

#### TP5 (Fig.6・8)

調査対象地の東部に設置した試掘坑である。現代の整地層（I-1・I-2層）の直下では、旧営林局の建物に伴うとみられる近現代の石列（石列1・2）と、コンクリート製の基礎を検出しており、基礎の上面は標高2.90mにあたる。また、基礎の下面には近代の搅乱層が堆積し、搅乱層の直下でII層：灰黄褐色シルト層を検出している。

遺物はII層から土師質土器小皿、陶器甕（3）、搅乱層から染付中碗（1）、青磁香炉（2）、土師質土器焼烙（4）が出土している。1は肥前産の染付中碗、2は肥前産の青磁香炉である。3は備前の甕で、15世紀（間壁編年IV B期）に比定される。焼縮めで、肩部外面に自然釉が掛かる。4は焼烙で、双耳をもち、体部外面に掻き上げ痕を残す。関西産17世紀第2四半期～17世紀末の製品である。

#### TP6 (Fig.8)

調査対象地の北西部に設置した試掘坑である。現代の整地層の下面に近代の搅乱層があり、近世の遺物包含層であるII層は大部分が搅乱されている。搅乱層の直下ではIII層：灰黄褐色シルト層を検出している。

遺物は、II層から青花皿（5）、瓦（6・7）が出土している。5は中国景德鎮窯系の青花皿で、高台内に放射状の鉢痕が残る。6は軒丸瓦で巴文、7は軒棟瓦で中心飾りは丁字文である。

#### TP7 (Fig.7・9・10)

調査対象地の東部に設置した試掘坑であり、内堀の深さを確認するために現表土下4.30mの深さまで掘削を行った。

堀の埋土1層は瓦礫を多く含む暗赤褐色シルト層で、現表土下0.60m以下で検出されており、標高0.22m～2.50mの間に堆積する。堀2層にあたるオリーブ黒色シルト層は、標高-0.75m～0.22mの間に堆積し、木の葉などの植物遺体を多く含んでいる。堀3層はオリーブ黒色砂層で、標高-1.00m～-0.75mの間に堆積し、木片を多く含んでいる。また堀3層の直下には、地山とみられる青灰色シルト層が堆積している。埋土の状況からみて、2層と3層は堀が機能した際の堀底の堆積層にあたると考えられ、1層上面から堀床面までの深さは3.5m前後になると推定される。

遺物は、堀2層から現代を中心とする遺物と瓦片が出土している。出土遺物の多くは被熱し変質しており、焼けて歪んだ児童用の自転車、溶解したガラス片など、昭和20年の高知空襲で被災した建物の部材や多様な生活用具が出土している。

図示したものは14～29である。14～29は近現代及び近世の瓦片で、14は棟篠り瓦、15は軒桟瓦、18・29は棟瓦、19～28は棟瓦又は平瓦、16は鬼瓦とみられるもの、17は不明である。このうち15は「アキ□」、18は「ア□」、19・20は「アキ兼」、21は「アキ中川□」、23は「アキ久万」銘印をもち安芸（高知県安芸市）産。24は角棒内「中山林」銘印をもち中山田（高知県香南市野市町中山田）産。17は「布源」銘印をもち布師田（高知県高知市布師田）の製品とみられる。この他、22は「中川寅□□」、25は角棒内「□□□合」、26は角棒内「大山平」、29は角棒内「山□」銘印をもつ。また27・28も銘印をもつ。

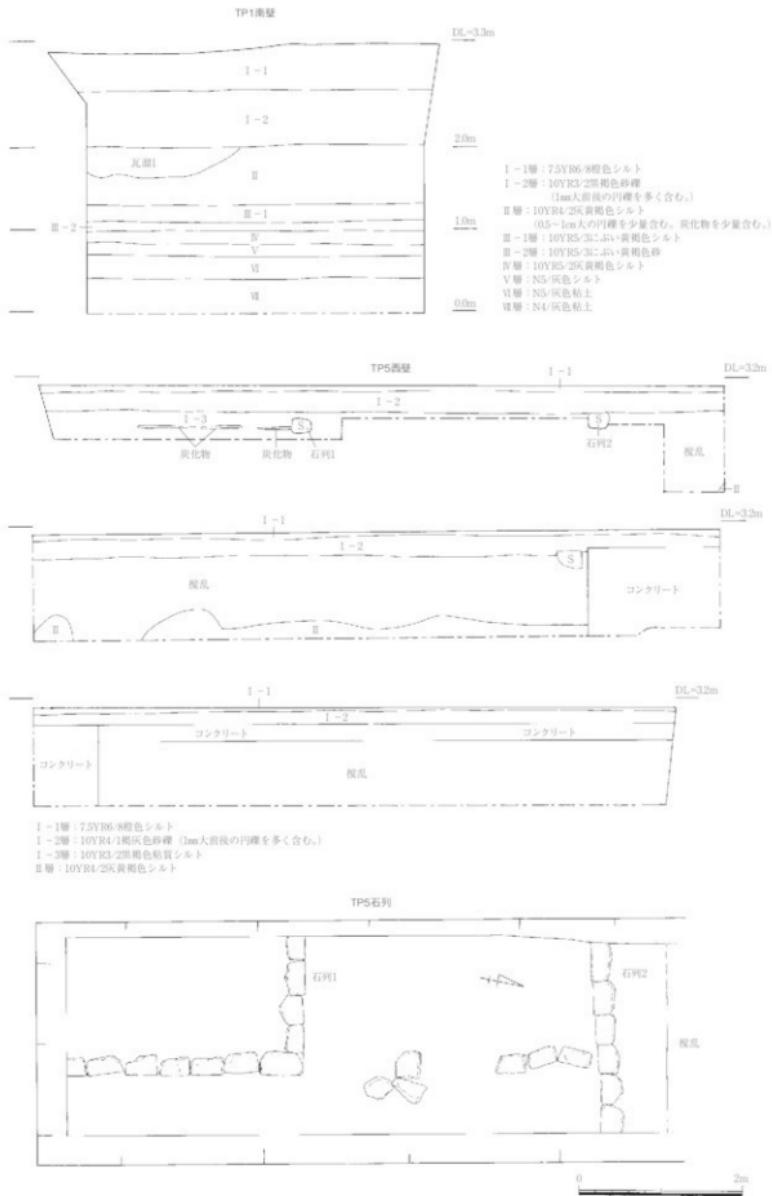


Fig.6 TP1・5セクション図・TP5石列出土状況図

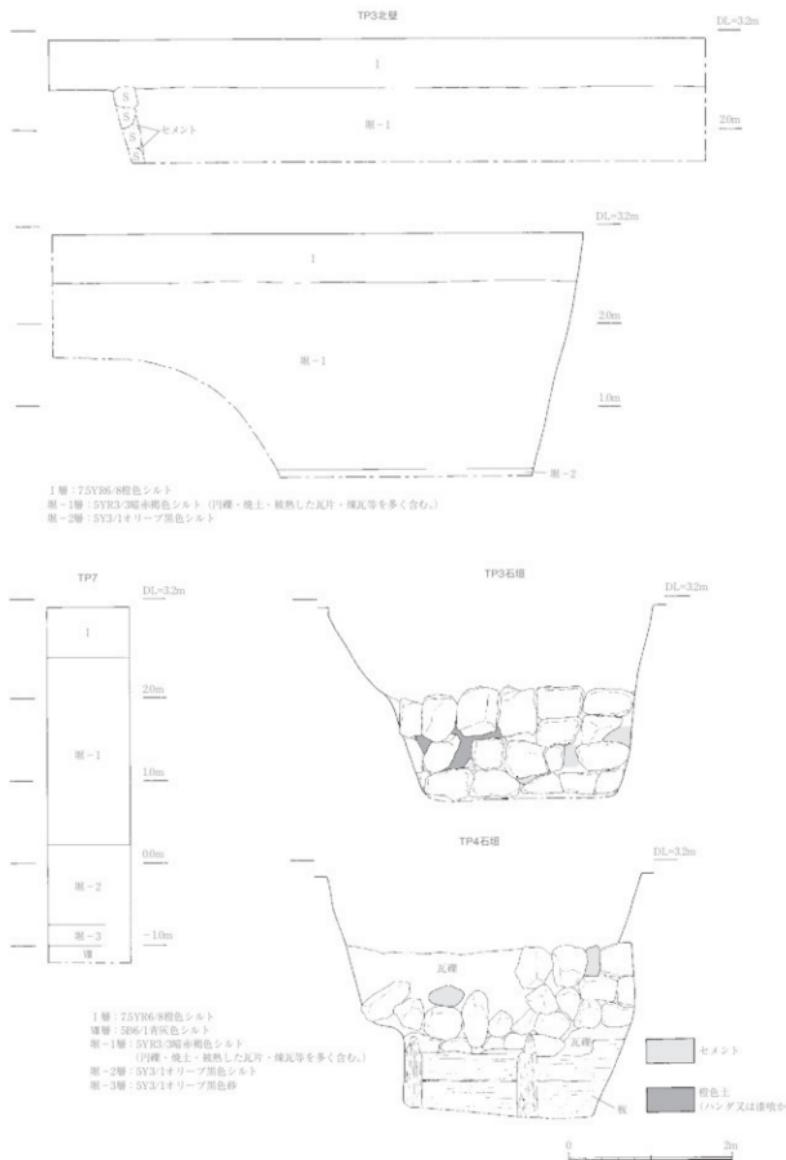


Fig.7 TP3 セクション図・TP7土層柱状図・TP3・4石垣検出状況図

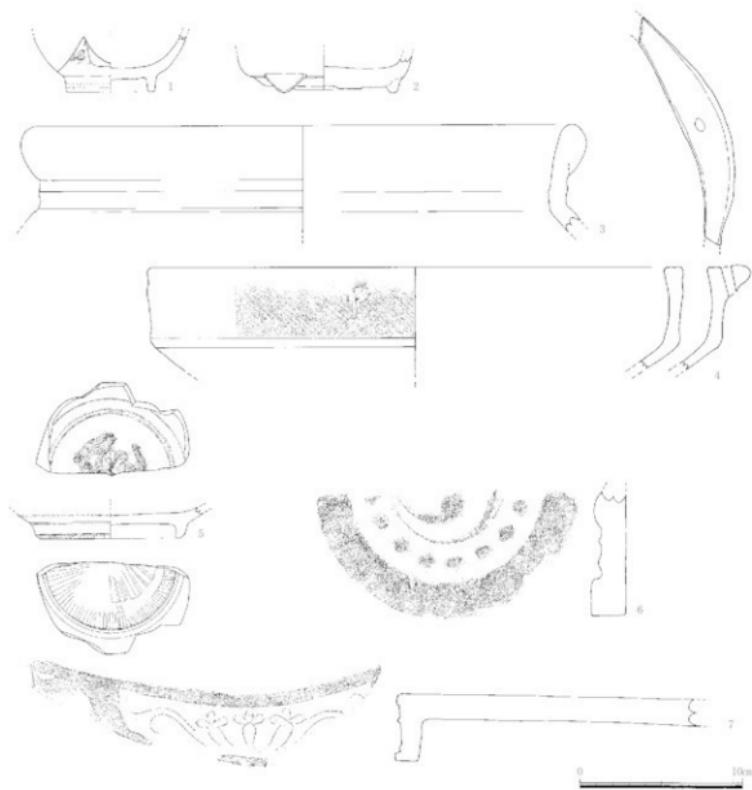


Fig.8 TP5・6出土遺物実測図 (TP5:1~4、TP6:5~7)

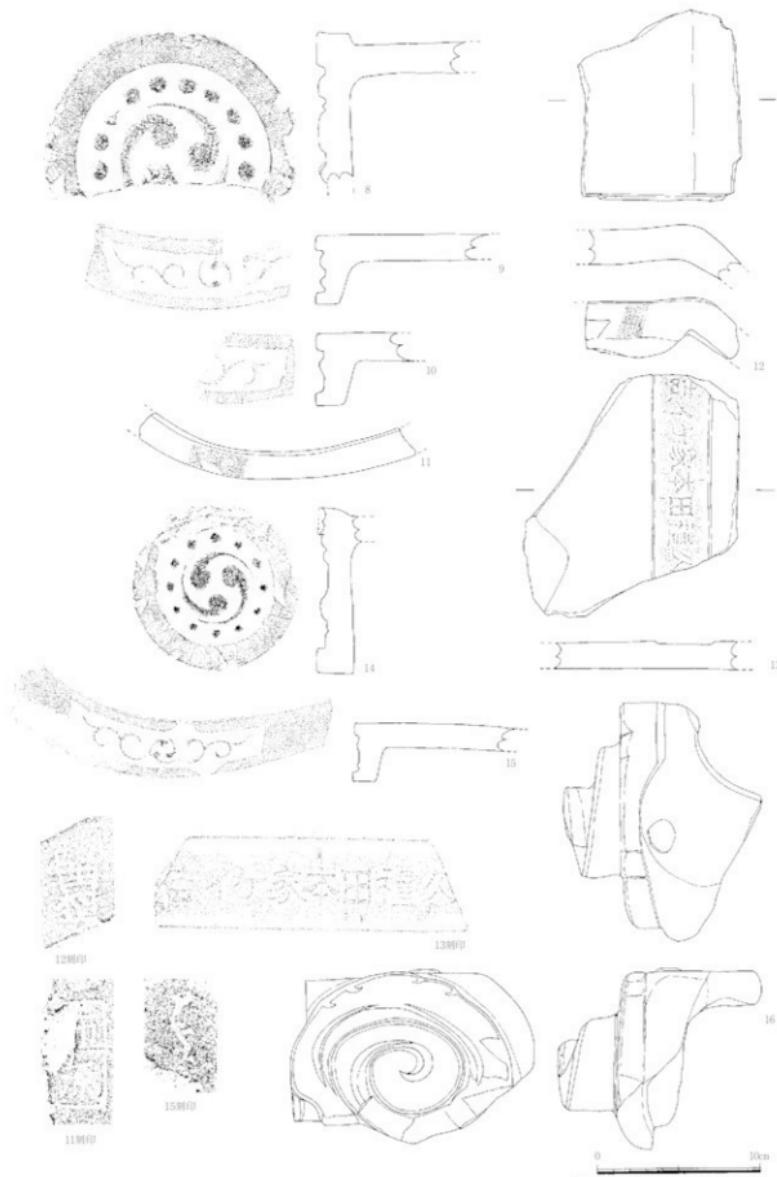


Fig.9 TP3・7出土遺物実測図(1)

(TP3:8~13、TP7:14~16)

(11~12・15刷印は実寸、13刷印は25-L/2倍)

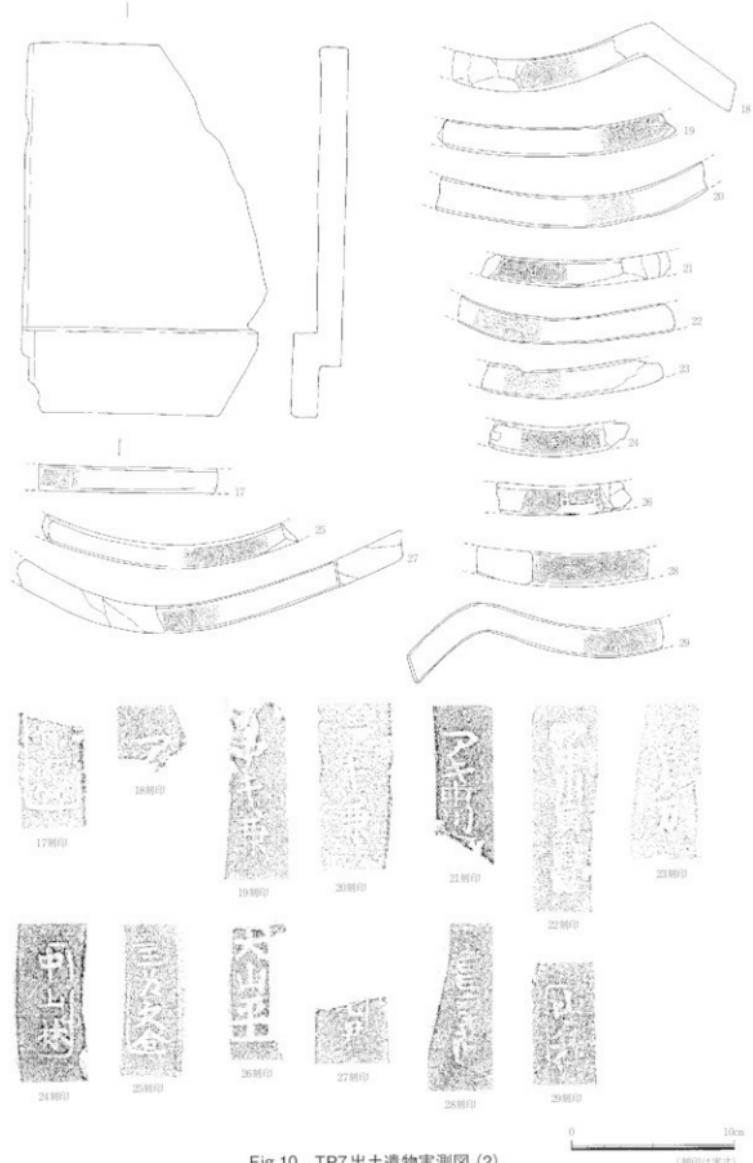


Fig.10 TP7出土遺物実測図 (2)

## 2. 基本層序

基本層序は調査区北壁にて観察を行った。基本層序の内容は次の通りである。(Fig.11)

I - 1層：橙色シルト

I - 2層：黒褐色砂礫（1cm大前後の円礫を多く含む。）

II層：灰黄褐色シルト（0.5～1cm大の円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）

III層：にぶい黄褐色シルト（炭化物を少量含む。）

また、III層以下の堆積状況については、これに近い地点で観察した試掘調査TP1のセクション土層を用いて補足した。試掘調査TP1北壁にて観察したIII層以下の堆積層は次の通りである。(Fig.6)

III - 1層：にぶい黄褐色シルト

III - 2層：にぶい黄褐色砂

IV層：灰黄褐色シルト

V層：灰色シルト

VI・VII層：灰色粘土

I - 1層は現代の整地層で、旧営林局に伴うコンクリート基礎の面より上位に堆積する。I - 2層は、近現代の整地層で、旧営林局のコンクリート基礎より下位に堆積するものである。

II層は近世の遺物包含層にあたる。本調査区では近代以降の搅乱が深く及んでいるため、II層の大部分は上面が削平され、部分的な検出にとどまる。また、近世の遺構はII層を切り込んで掘削されている。

III層はほぼ無遺物で、近世以前の堆積層とみられる。また、IV～VII層も出土遺物は確認できていない。

これによると、旧営林局建物が存在した頃の地表面は標高3.0m前後の高さにあり、建物の移転後に現地表面（標高3.3m）まで整地が行われたとみられる。近世の遺物包含層であるII層は標高2.0m以下で検出されており、近世後期の遺構検出面は標高20m前後にあたるが、近代以降の搅乱が深部まで及んでいるため、当時の生活面の高さについては不明である。なお、調査区南壁での堆積状況によると、標高2.1mが近世後期の土坑SK16の遺構検出面となっている。

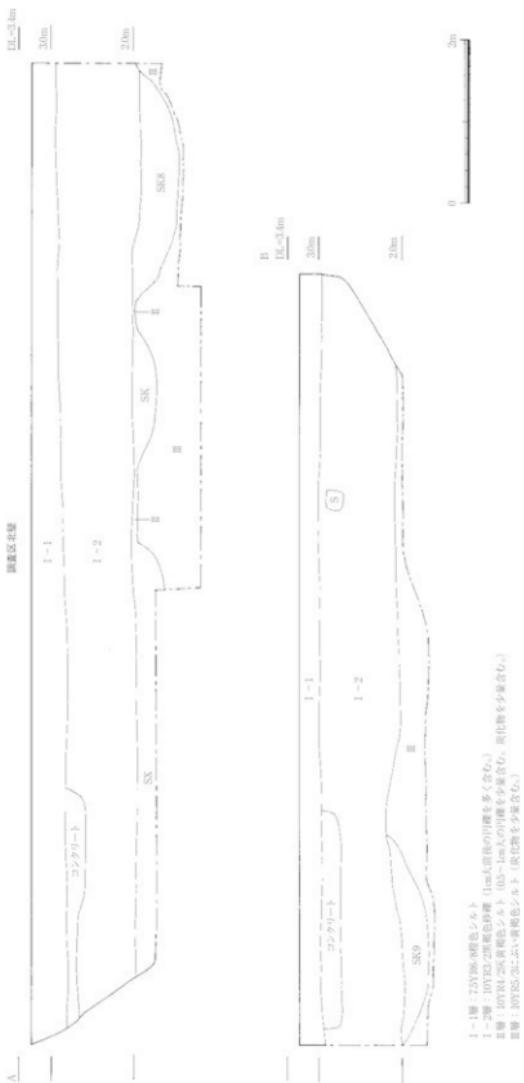


Fig.11 平成 17 年度調査区北壁セクション図

### 3. 遺構と遺物

平成17年度調査区では、近世の土坑17基、瓦溜り1箇所、遺物集中4箇所を検出した。

本調査区では近代以降の整地と搅乱が深い部分まで及んでいるため、検出遺構は上面が削平され浅くなったものが多いが、標高2.0m前後の面にて、SK1～12・16・17、瓦溜1、遺物集中1～4を検出している。また、下層確認の目的で調査区の南東隅に設定したトレンチでは、標高1.4m前後の面にて、SK13～15を検出している。

これらのうちSK6～12は19世紀前半に比定される土坑群で、調査区中央部一帯に分布している。SK6～12間では出土遺物片の接合関係が認められており、これら一群の土坑への遺物廃棄が同時期に行われたことが窺われる。また、18世紀前葉に比定されるSK3・4については、埋土中に炭化物や焼土ブロック、硬化した焼土塊が含まれ、二次焼熱の痕跡をもつ遺物が出土していること等から、火災との関連性が窺われるものである。

Tab.1 平成17年度調査土坑一覧表

遺構名	形態	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	切り合い関係・前後関係・出土遺物の接合関係	性格	廃絶年代
SK1	楕円形	皿状	1.60	0.78	21	SK2・瓦溜1を切る。SK2・瓦溜1と遺物接合あり。		19世紀前半～中葉
SK2	楕円形か	皿状	東西 確認長 1.20	南北長 0.92	32	SK1・瓦溜1に切られる。SK1・瓦溜1と遺物接合あり。		19世紀前半～中葉
SK3	不整形	皿状	3.48	2.86	20		火災関連	17世紀末
SK4	不整形か	不整形	南北長 3.40	東西 残存長 2.76	42	SK10に切られる。	火災関連	17世紀末
SK5	不整形	皿状	0.96	0.64	13	SK17と切り合う。		19世紀前半～中葉
SK6	不整形	皿状	3.78	2.94	18	SK7・12と遺物接合あり。		19世紀前半
SK7	不整形	皿状	4.03	2.80	23	SK6・8・12と遺物接合あり。		19世紀前半
SK8	不明	皿状	東西長 2.88	南北 確認長 1.10	58	SK7・9と遺物接合あり。		19世紀前半
SK9	不明	皿状	東西長 2.60	南北 確認長 0.96	50	SK8と遺物接合あり。		19世紀前半
SK10	不整形	不整形	5.60	4.02	26	SK4・16を切る。SK11と切り合う。SK14・15の上面で検出。SK11・12と遺物接合あり。		19世紀前半
SK11	不明	不明	東西 残存長 2.94	南北 確認長 1.80	23	SK16を切る。SK10と切り合う。SK10と遺物接合あり。		19世紀前半
SK12	不整形	不整形	7.50	4.70	26	SK13の上面で検出。SK6・7・10と遺物接合あり。		19世紀前半
SK13	楕円形	U字形	3.10	1.63	40	SK12の下面で検出。		17世紀第4四半期
SK14	楕円形か	皿状	南北 残存長 1.16	東西長 0.82	9	SK15と切り合う。SK10の下面で検出。		17世紀末以前
SK15	不整形	U字形	1.76	1.00	36	SK14と切り合う。SK4・10の下面で検出。		17世紀末以前
SK16	不明	不明	東西 残存長 3.64	南北 確認長 0.54	80	SK10・11に切られる。		不明
SK17	楕円形か	皿状	東西 残存長 0.62	南北長 0.38	6	SK5と切り合う。		不明

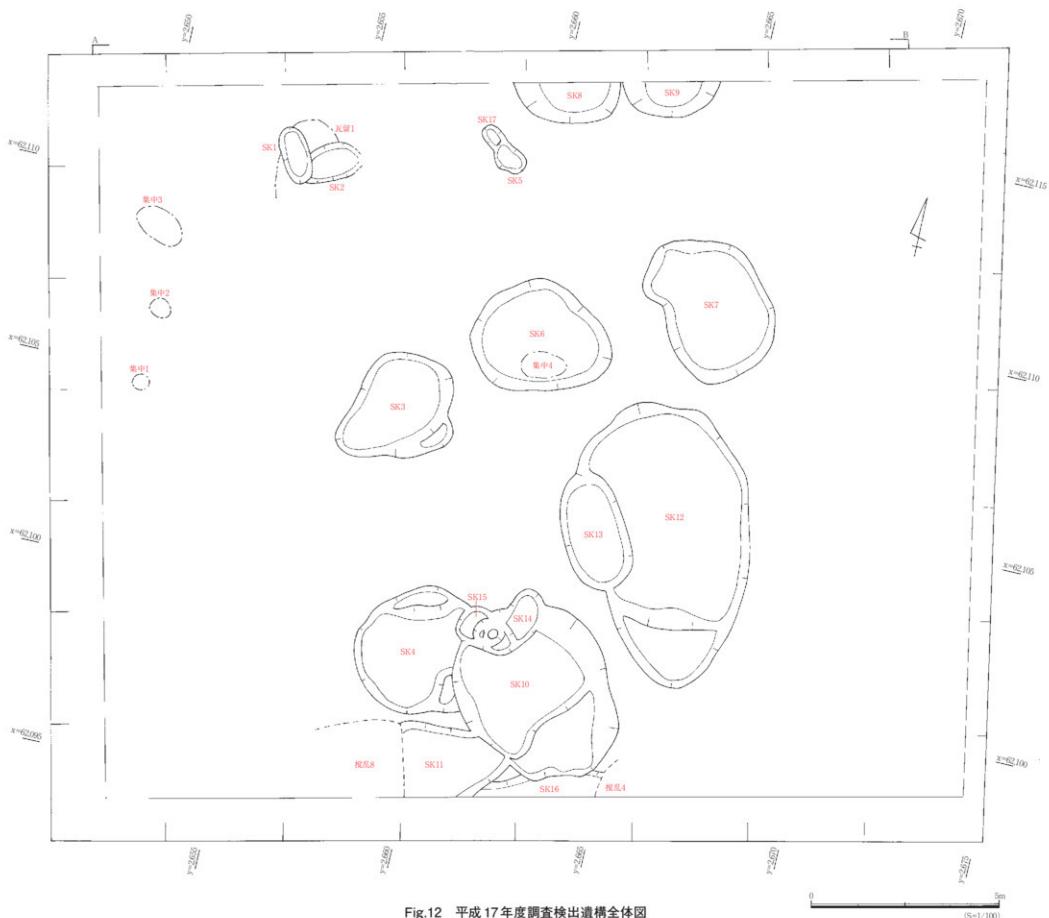


Fig.12 平成 17 年度調査検出遺構全体図

## (1) 土坑

### SK1 (Fig.13)

調査区南部に位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸1.60m、短軸0.78m、深さ21cmを測る。断面形は皿状で、埋土は暗褐色粘質シルトである。他遺構との切り合い関係では、SK2・瓦溜1を切るが、両者とは出土遺物の接合関係があり、同時期に機能したことが推定される。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗2点・蓋物蓋1点、陶器中碗1点、及び瓦片多数である。

図示したものは30～33である。30・31・33は染付で、肥前産又は肥前系。30は広東形中碗で、外面に蝙蝠と寿字文を描く。31は広東形中碗で、外面文様は草花文か。33は蓋物の蓋で、山水文を描く。32は陶器で、鉄釉碗である。

SK1は19世紀前半～中葉に比定される。

### SK2 (Fig.14～16)

調査区南部に位置する。平面形は梢円形とみられ、東西確認長120m、南北長0.92m、深さ32cmを測る。断面形は皿状である。埋土は暗褐色粘質シルトで、最下層には炭化物を多く含む。他遺構との切り合い関係では、SK1・瓦溜1に切られるが、両者とは出土遺物の接合関係があり、同時期に機能したことが推定される。

出土遺物は磁器染付中碗・小皿又は五寸皿・碗蓋・蓋物、陶胎染付小皿、白磁紅皿、陶器中碗・中皿・碗又は蓋物・鍋・瓶・灯明受皿、土師質土器小皿・白土器小皿、窯道具、及び瓦片である。

図示したものは34～59である。34～41・43は磁器、42は陶胎染付で、42が瀬戸・美濃産、その他は肥前産である。34～42は染付。34・35は中碗で、35は高台内に「大明年製」銘を描く。38・39・41は小皿。41は肥前波佐見の見込み蛇ノ目釉剥ぎの小皿で、内面に草花文と五弁花文を描く。40は五寸皿か。37は端反形碗の蓋で、34と組になる。36は蓋物で、窓に龍を描く。42は太白手の陶胎染付小皿で、内面に半菊文と草花文、五弁花文を描く。43は白磁の菊花形紅皿である。

44～55は陶器。44は尾戸窯の碗又は蓋物で、型による陽刻文様で龍を表す。45～47は尾戸窯の

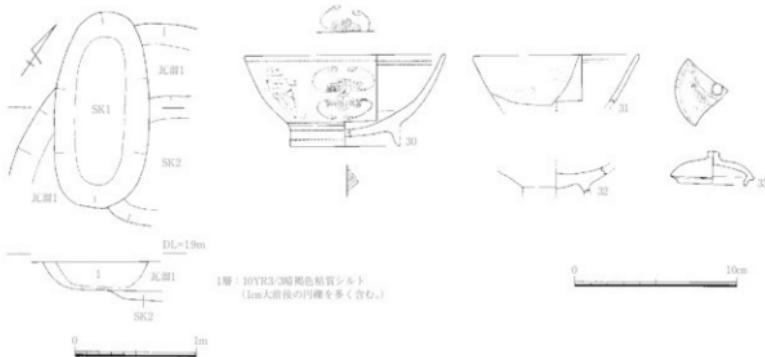


Fig.13 SK1平面図・セクション図・出土遺物実測図

灰釉碗。45は白土と鉄錆で梅文を描くもので、花弁は白土、花芯は鉄錆で描き分ける。46は鉄錆で宝文を描き、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。47は光沢の強い透明の釉を施し、御本が入る。48は灰釉碗。高台施釉で、釉は焼成不良気味で灰白色を帯び、御本が入る。49は肥前産の京焼風陶器碗で、高台内に円圈状の段と印刻による「清水」銘をもつ。50は瀬戸・美濃産の馬の目皿で、蛇ノ目高台をもつ。内底には砂目痕を認める。51～53は灯明受皿。51は京都・信楽系の灰釉灯明受皿で、内面に柳目を施す。53は台付きの灯明受皿で、鉄釉を施し、外底に回転糸切り痕が残る。54は焼締めの瓶。55は能茶山窯又は尾戸窯の鉄釉鍋である。

56は窯道具で、匣。近隣に所在する尾戸窯からもたらされた可能性をもつ。

57～59は土師質土器。57は丸形の焜炉で、外底に墨書を認める。58は尾戸窯の白土器小皿で、内底に型による陽刻の松竹梅鶴亀文を施す。59は小皿で、外底に回転糸切り痕が残る。

SK2は19世紀前半～中葉に比定される。

### SK3 (Fig14・17)

調査区中央部に位置する。平面形は不整形を呈し、検出規模は長軸3.48m、短軸2.86m、深さ20cmを測る。断面形は皿状であるが、床面は平坦でなく、東部にテラス状の高まりをもつ。埋土は1層が暗赤褐色シルト、2層がにぶい黄褐色シルトであり、1層には焼土粒と硬化した焼土塊、炭化物が多く含まれる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗1点・小碗1点・小杯1点・小皿又は五寸皿1点・瓶1点・壺1点・段重1点・白磁鉢1点・青磁小皿又は五寸皿1点・陶器擂鉢3点・壺1点・壺又は壺2

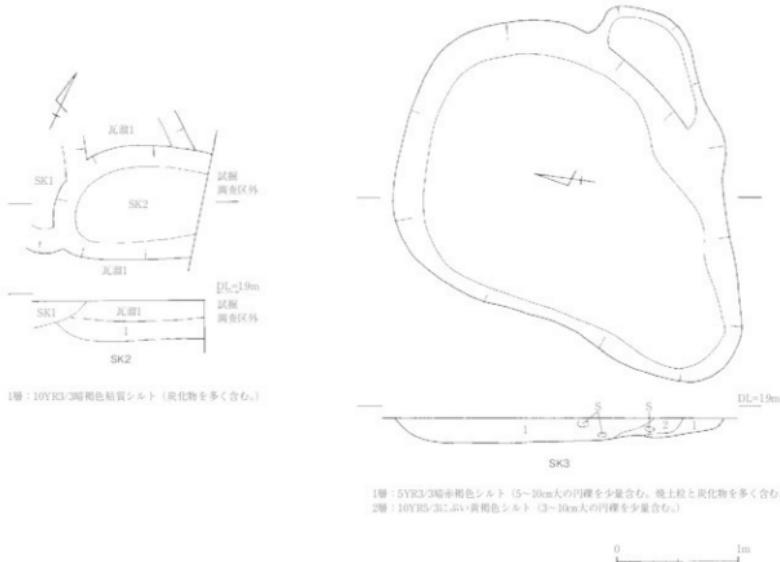


Fig.14 SK2・3平面図・セクション図

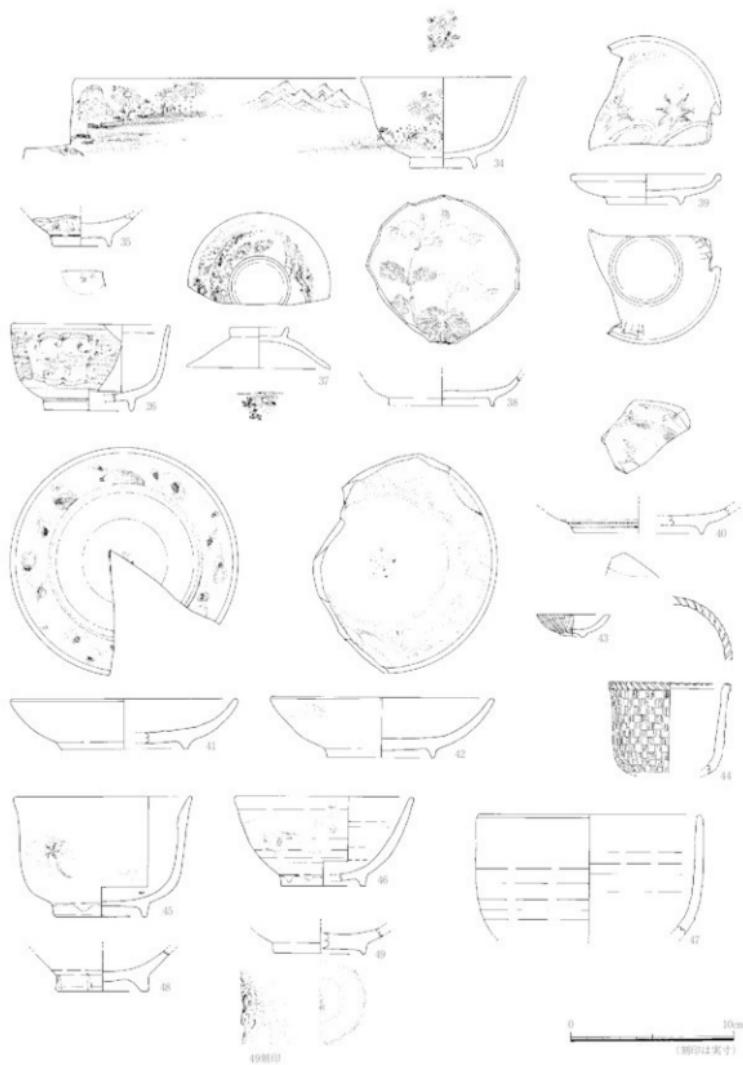


Fig.15 SK2出土遺物実測図(1)

点・蓋1点、土師質土器小皿20点であり、この他、陶磁器の体部片29点と瓦片多数が出土している。これらの遺物には二次被熱により変質した陶磁器や土師質土器片が多く含まれる。

図示したものは60～76である。このうち65・70～76が被熱し変質している。

60～65は磁器で、何れも肥前産。60・61・63～65は染付。60は小碗で、植物を描く。61は小杯で、宝文を描く。63は碗で、内面に海藻と貝、高台内に「□□年□」銘を描く。64は鉢で、外面に草花文を描く。内面には焼上がり著しく付着しており文様は不明である。65は瓶類である。62は白磁の鉢で、輪花形とみられる口縁部に円形の透かしを施す。

66～71は陶器。66・67は備前の描鉢。68は備前の壺で、口縁部外面に強いロクロ目が残る。69は

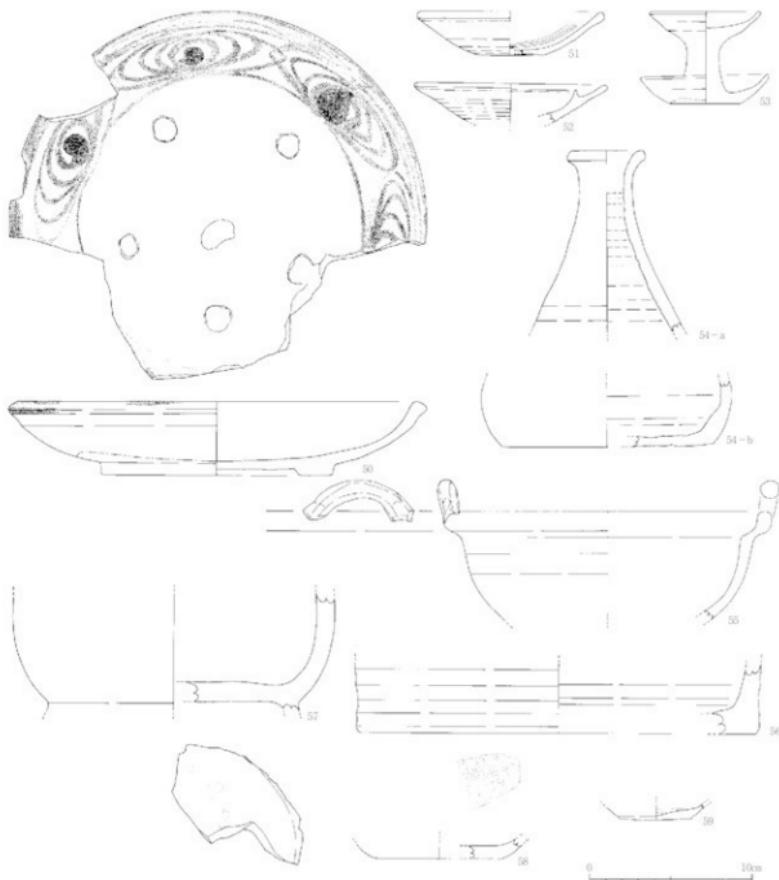


Fig.16 SK2出土遺物実測図 (2)

備前の壺又は甕の体部片である。70は壺又は甕で、二次被熱により釉は変質する。71は焼締めの蓋である。

72～76は土師質土器。何れも小皿で、72は口径10cm、73～76は口径11～12cm前後の法量をもつ。72～75は外底に回転糸切り痕を残す。

SK3は17世紀末に比定され、埋土や出土遺物の状態からみて、火災に伴う廃棄土坑と考えられる。

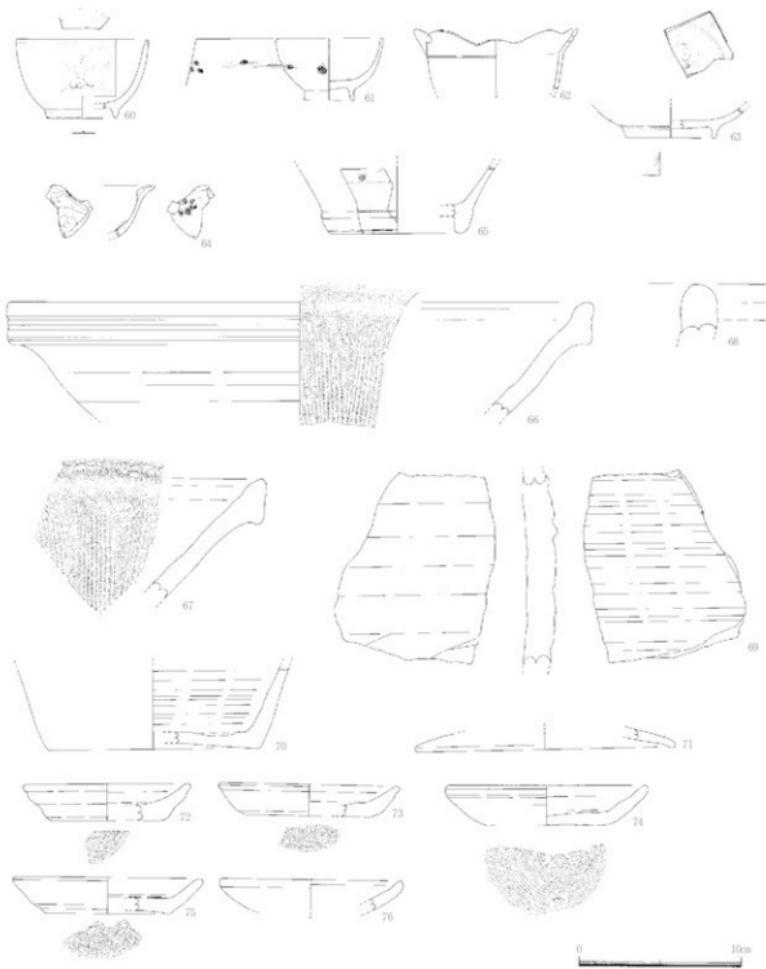


Fig.17 SK3出土遺物実測図

### SK4 (Fig.18~24)

調査区南部に位置する土坑で、SK10に切られている。東部が削平され全体の規模は不明であるが、平面形は不整形とみられ、検出規模は南北長3.40m、東西残存長2.76m、深さ42cmを測る。断面形は不整形で、床は平坦でなく部分的に掘り込みがあり、東部と北部にテラス状の高まりをもつ。埋土は1-1層が赤褐色シルト、1-2層・2層が暗赤褐色シルトで、ともに焼土粒と硬化した焼土塊、炭化物を多く含んでいる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付壺7点・壺蓋10点、陶胎染付中碗1点、青磁壺1点・壺蓋2点・蓋物1点、白磁鉢1点・瓶1点・壺8点・壺蓋6点、白磁又は染付瓶1点、青花碗1点・皿1点、陶器碗2点・小皿1点・壺3点・甕6点・壺又は甕3点、土師質土器中皿6点・小皿239点・鉢12点・土鍾1点、鉄釘1点、寛永通宝1点、及び瓦片多数である。

図示したものは77～160である。このうち、81～98・100・102・103・105～107・113～116は二次被熱によって釉が変質し、130・131・133～145・147・148・150・151は硬化、瓦156・158～160は変色する。

80～103は磁器、77は陶胎染付で、何れも肥前産。77は陶胎染付の中碗で、白化粧の後、呉須で山水文を描く。81～83・91～97・100～103は染付で、81・82・91・100～103が壺、92～97が壺蓋、

83が瓶である。80・85・86・88～90・98・99は白磁で、80は蓋付の鉢、85・86・88・90は壺、98・99は壺蓋、89は瓶である。84は青磁の壺、87は蓋物である。

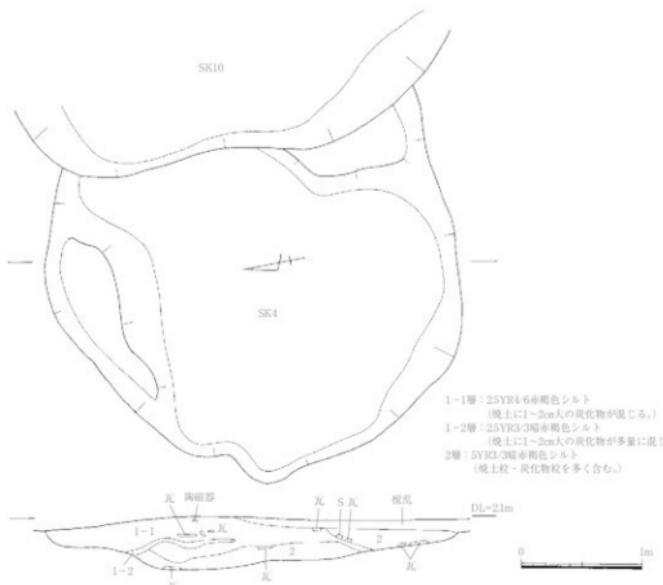


Fig.18 SK4平面図・セクション図

78・79は青花。78は中国景德鎮窯系の青花碗、79は青花皿である。

104～123は陶器。104は肥前産の唐津系灰釉陶器小皿で、口縁部は溝縁状を呈し、透明の釉を施す。105～107・113・114は壺。105は口縁部玉縁状の縁釉の壺であるが、釉は二次被熱により変質し黒色に発色する。106は肥前武雄の縁釉の壺で、外面に印花文を巡らせ、白化粧土刷毛目の後、灰釉と縁釉を施す。107は肥前武雄の二彩手の壺で、外面に花唐草文の浮文を施し、体部上位に耳を貼付する。釉は二次被熱により著しく変質するが、外面に縁釉、内面に鉄釉を施したものとみられる。113は外面に印刻による花卉文を施し、外面に縁釉、内面に鉄釉を施す。114は壺の体部片で、外面にヘラ彫りによる文様を描き、外面に白化粧土と縁釉、内面に灰釉を施す。108～111は肥前産の壺又は壺の底部及び体部片である。108・110は焼締めで、内外面に回転ナデを施す。109は鉄釉又は灰釉を施す。111は焼締めで、外面に凹線とヘラ描きによる文様を施す。112・115～123は壺。112は焼締めで、外面に多条の凹線と櫛描波状文を施す。内面に格子状のタタキ目が残る。115は肥前産の壺で体部上位に強いロクロ目を残す。被熱し釉は変質するが、鉄釉を施したものか。116は肥前産の鉄釉壺で、外面上位に多条の凹線を巡らせ、外面の一部と内面に格子状のタタキ目が残る。117～119は備前の大壺で、口縁部外面に凹線、内面に強いロクロ目が残る。120・121は備前の大壺の底部で、外底に凹凸が残る。122・123は備前の壺の体部片で、外面に窯印とみられるヘラ彫りを認める。

124～150・152は土師質土器。124～139は小皿である。124～128は尾戸窯の小皿で、口径10～12cmの法量をもち、何れも橙色系の胎土をもつ。このうち、125・126・128は体部内外面と外底に丁寧なナデを施すものである。また、124は内面周縁のみに回転ナデ、その他の部分にナデを施し、127は外面上半と内面に回転ナデ、外面下位に回転ケズリ後ナデ、外底にナデを施す。129～139は外底回転糸切りの小皿で、129～131が口径9～10cm、132～139が口径11～12cmの法量をもつ。140～145は中皿で、140～144は口径16～19cm前後、145は口径21cmの法量をもつ。140は内外面に丁寧なヨコナデ、外底と内底に不定方向のナデを施すもので、調整痕等から尾戸窯産の可能性をもつ。141・142は口縁部内外面回転ナデで、以下は内外面ケズリ、143・144は外面上半と口縁部内面回転ナデで、以下は内外面にケズリを施す。145は外面上半と内面の全面が回転ナデで、外面下位にケズリを施す。底部の残存する141は外底にケズリ、143・145は外底に回転糸切り痕を認める。146～151は鉢で、尾戸窯産の可能性をもつ。146～148は外面上半と内面に回転ナデ、外面下半に回転ケズリ後回転ナデ、外底にナデを施す。149は内外面と外底に丁寧なナデを施し、体部中央をユビオサエして窯ませる。150は内外面回転ナデで、体部をユビオサエによって窯ませる。152は土錐である。

151は土師質土器又は焼締め陶器の鉢で、口縁部を変形させる。

153は寛永通宝。154は鉄釘で、断面四角形。体部は使用により曲がる。155～160は瓦で、155は軒丸瓦、156・157は丸瓦、158～160は棟瓦又は平瓦である。このうち160は「○」印をもつ。

SK4は17世紀末に比定され、火災に伴う廃棄土坑と考えられる。

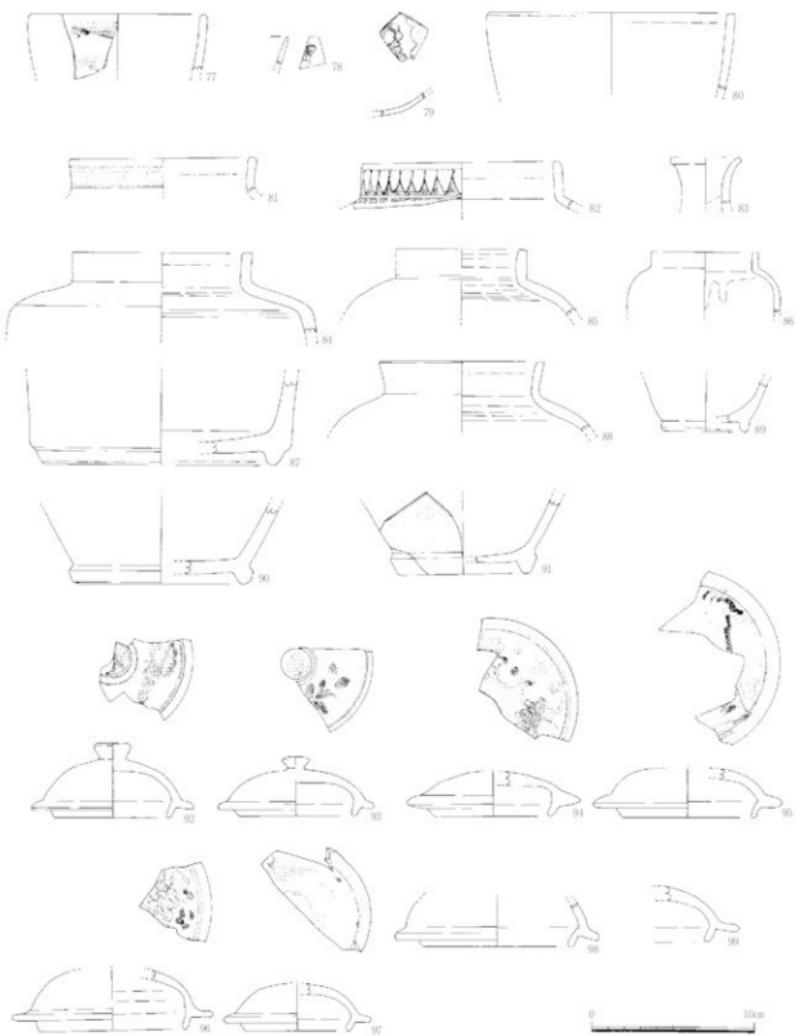


Fig.19 SK4出土遺物実測図(1)

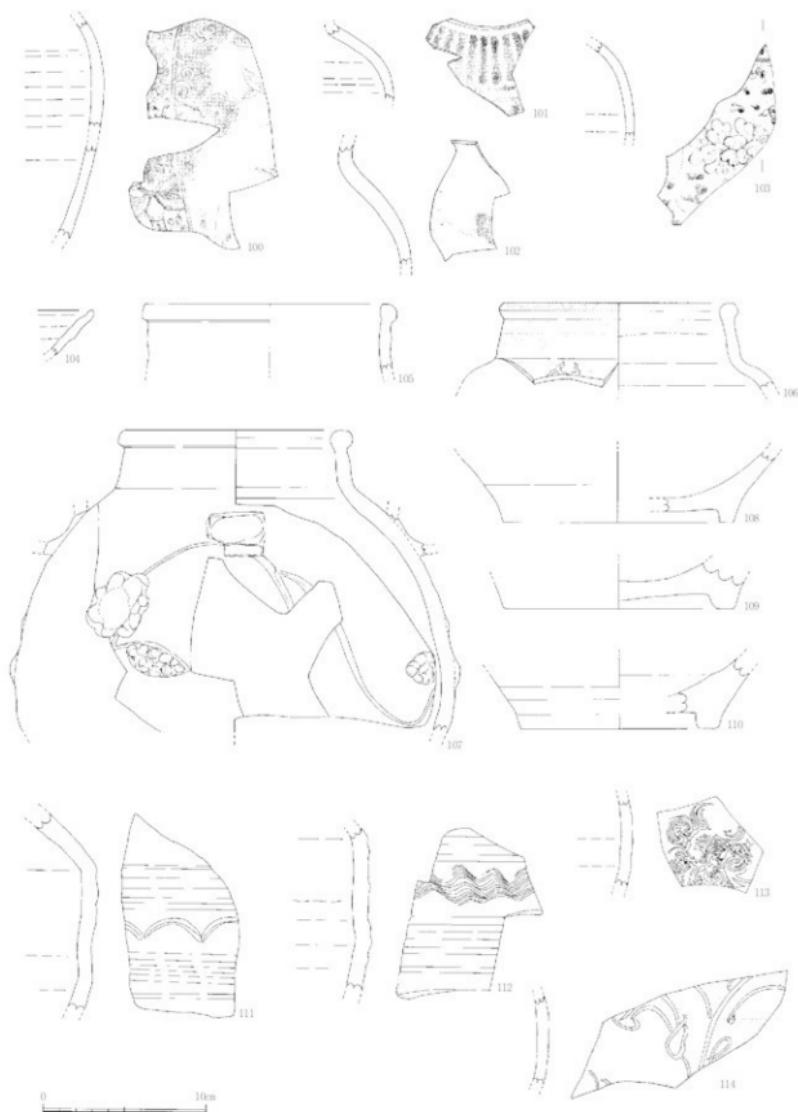


Fig.20 SK4出土遺物実測図 (2)



Fig.21 SK4出土遺物実測図 (3)

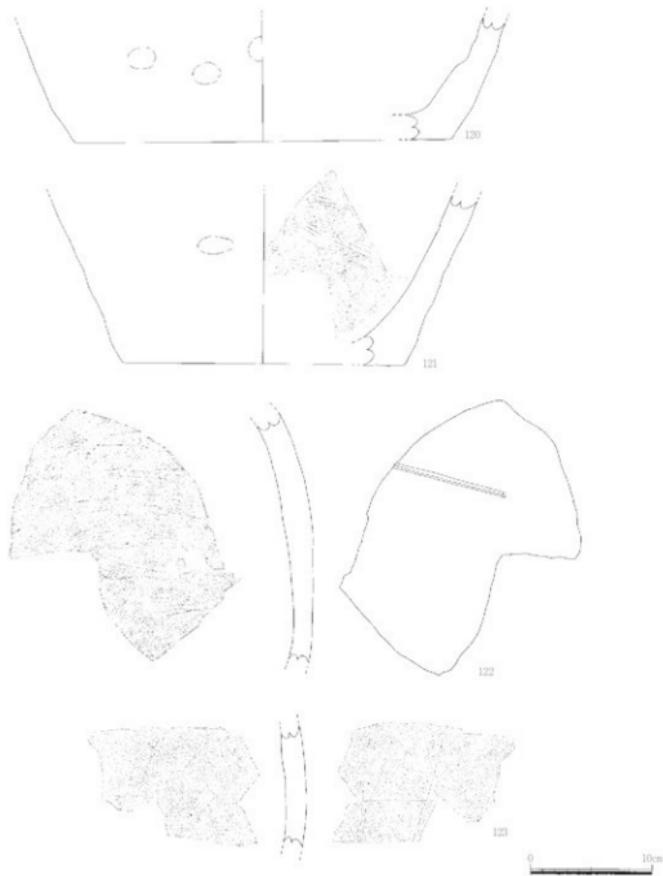


Fig.22 SK4 出土遺物実測図 (4)

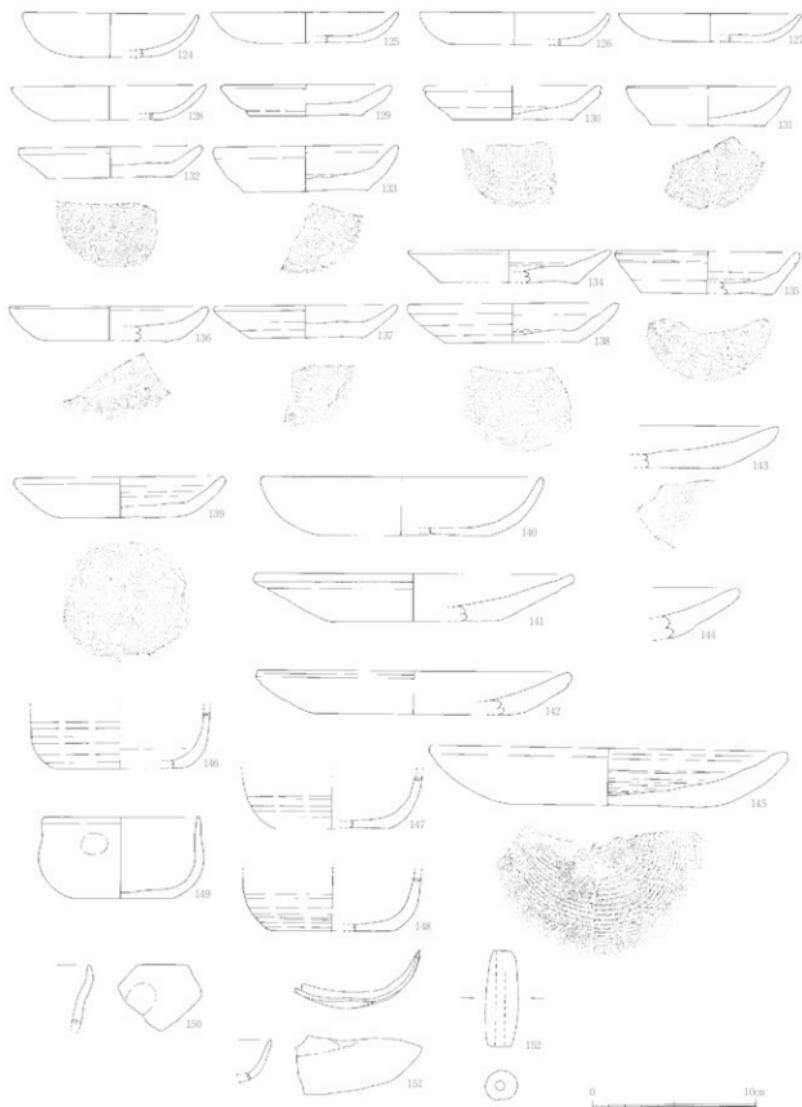


Fig.23 SK4出土遺物実測図 (5)

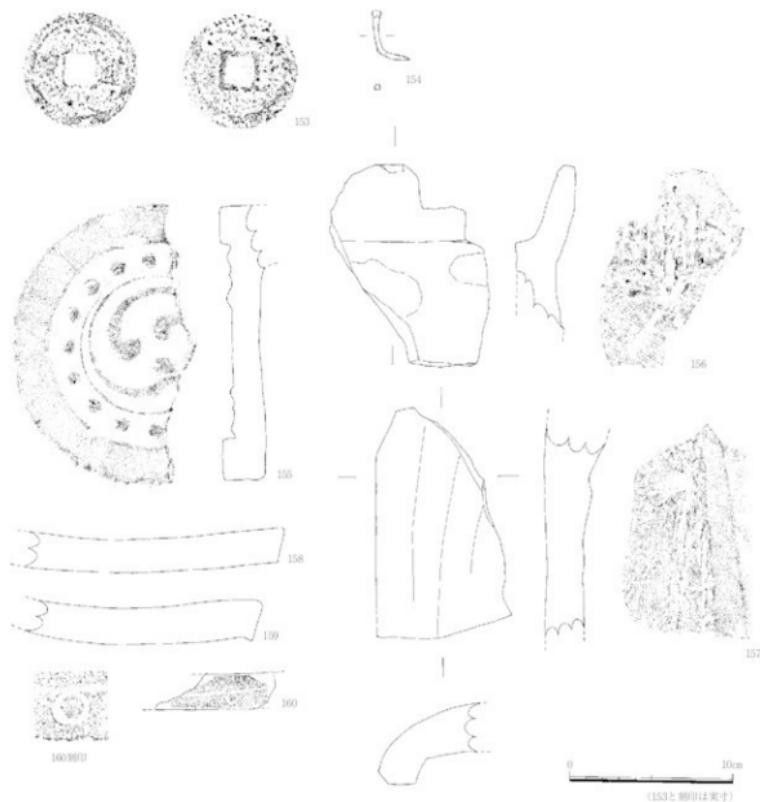


Fig.24 SK4出土遺物実測図 (6)

#### SK5 (Fig.25・26)

調査区北部に位置する。他遺構との切り合い関係では、SK17と切り合が埋土が同質で前後関係は不明である。平面形は不整形で、長軸0.96m、短軸0.64m、深さ13cmを測る。断面形は皿状で、埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、白磁紅皿1点、陶器中碗3点・小碗2点・小皿1点・急須1点・焜爐1点、土師質土器人形1点、施釉土器ひょうそく1点、及び鉄釘2点である。

図示したものは肥前産の白磁紅皿(169)である。

SK5は19世紀前半～中葉に比定される。

#### SK6 (Fig.25～29)

調査区中央部に位置する。平面形は不整形を呈し、長軸3.78m、短軸2.94m、深さ18cmを測る。

断面形は皿状である。埋土は1層が灰黄褐色粘質シルト、2層が褐灰色粗砂で、床面に堆積する2層内には炭化物が多く含まれる。また、他遺構との切り合い関係はないが、近接するSK7・12とは出土遺物の接合関係があり、両者が同時期に機能したことが推察できる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付大碗1点・中碗29点・小碗4点・小杯2点・小皿又は五寸皿2点・鉢3点・碗蓋4点・瓶2点・蓋物1点・蓋物蓋1点・白磁小碗1点・小杯2点・小皿2点・紅皿5点・陶器中碗6点・小碗2点・小皿1点・鉢2点・擂鉢5点・片口1点・鍋9点・土瓶4点・土瓶蓋5点・爛徳利4点・瓶1点・水注1点・花生か1点・壺1点・壺4点・蓋物1点・火鉢2点・灯明受皿6点・火入又は香炉4点・植木鉢1点・蓋1点・器種不明1点・窯道具5点・土師質土器中皿3点・小皿4点・培培6点・胡麻煎り2点・焼塙壺2点・焼塙壺蓋2点・焜爐4点・竈1点・人形2点・白土器小皿1点・瓦質土器培培1点・茶釜2点・火鉢1点・鉄釘10点、及び多量の瓦片である。

図示したものは161～214である。161～168・170～172は磁器で、何れも肥前産。161～167・170～172は染付。161は丸形の大碗で、外面に鶴と岩・波、見込みに松竹梅円形文、口縁部内面に四方櫻を描く。162は広東形中碗で、外面に兎と岩・草、見込みに寿字文を描く。163は平形小杯で、海浜風景文を描く。164は五寸皿で、蛇ノ目四形高台をもつ。165～167は広東形碗の蓋。170～172は小瓶である。168は白磁の紅皿である。

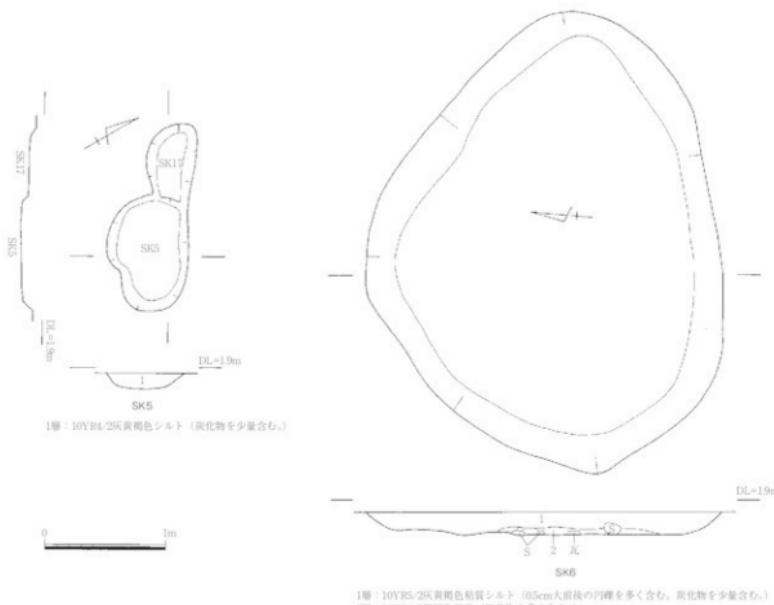


Fig.25 SK5・6平面図・セクション図・エレベーション図

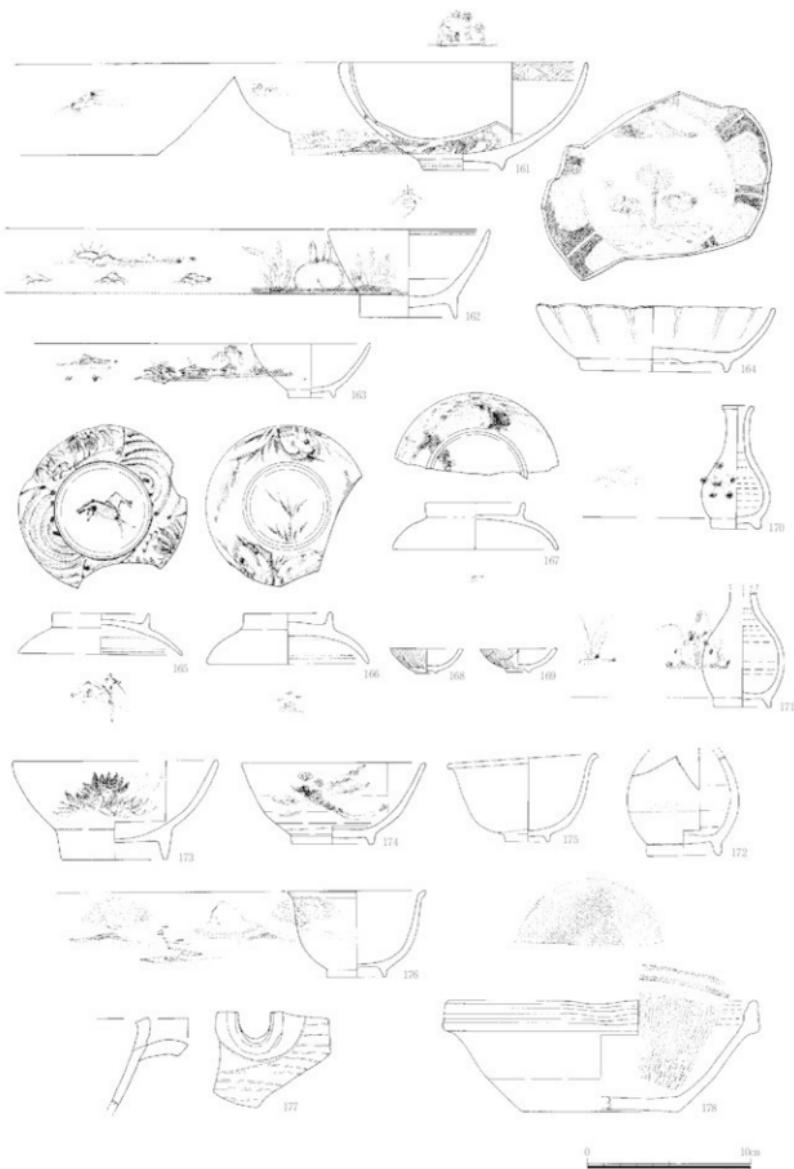


Fig.26 SK5・6出土遺物実測図(1)  
(SK5:169、SK6:161～168・170～178)

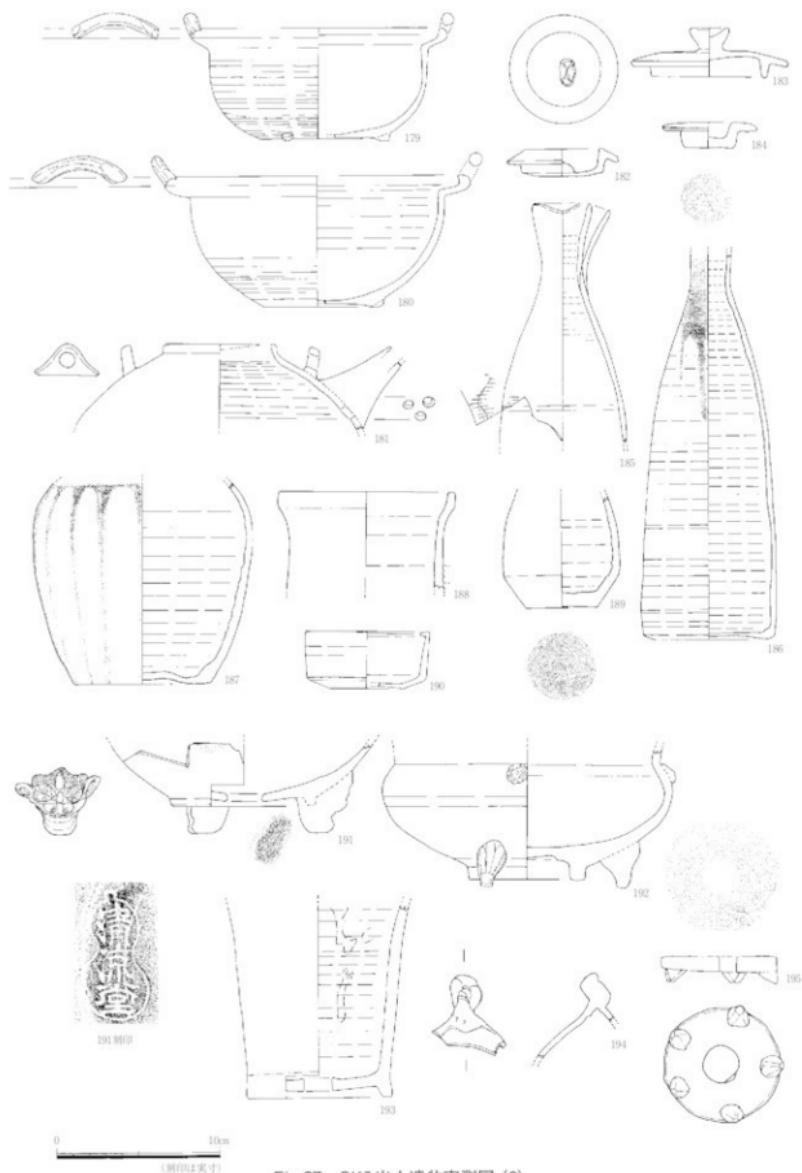


Fig.27 SK6出土遺物実測図 (2)



Fig.28 SK6出土遺物実測図(3)

173～194は陶器。173は尾戸窯の灰釉広東形中碗で、鉄錆で松文を描く。174は尾戸窯の灰釉丸形中碗で、鉄錆で蜻蛉を描く。175は京都・信楽系の灰釉端反形小碗で、光沢の強い透明の釉を施す。176は関西系の端反形小碗で、白土、緑釉、鉄錆で山水文と東屋を描く。内面は白化粧の後、透明の釉を施している。177は片口で、灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施す。178は堺産の捕鉢。179は灰釉の鍋で、灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施す。180は鉄釉の鍋で、灰褐色の釉を施す。181は灰釉の土瓶。182・183は鉄釉の土瓶蓋である。184は鉄釉の蓋で、灰褐色の胎土をもち、能茶山窯産の可能性をもつ。185・186は爛徳利。185は京都・信楽系の爛徳利で、鉄錆で樹木を描く。186は灰釉施釉の後、上位に緑釉を流し掛けする。187は灰釉の小甕で、外面に柳目を巡らせる。灰

オリーブ色を帯びる透明の釉を施し、上位に暗オリーブ色の釉を流し掛けする。188は尾戸窯の製品で、花生か。双耳をもつが剥離しており、形状は不明である。灰白色を帯びる半透明の釉を施している。189は鉄釉の小瓶で、外底回転糸切り。釉は褐色を呈し、外底の釉を拭き取る。190は京都・信楽系の灰釉蓋物で、端部無釉。灰白色を帯びる半透明の釉を施す。192は香炉で、輪高台の外側に三足を貼付し、体部に菊花形の浮文を貼付する。釉は焼成不良気味で白濁している。191・193は植木鉢。191は灰白色を帯びる透明の釉を施し、鉄絵を描く。底部中央に円孔を穿ち、獸面の三足を貼付する。外底に瓢箪枠内「清口堂」銘印をもつ。193は瀬戸・美濃産の桶形植木鉢で淡黄色を帶



Fig.29 SK6出土遺物実測図 (4)

びる光沢の強い透明の釉を施す。194は器種不明。茄子形で、摘みは手捏ねで成形する。内面施釉で、にぶい赤褐色の釉を施す。同様の製品が尾戸窯跡から出土しており、尾戸窯産の可能性をもつ。なお、尾戸窯出土資料では茄子形の体部の前方に梢円形の窓が設けられている。

195は窯道具で、ハマ。灰白色の胎土をもち、輪状の体部に円錐ピンを5個貼付しており、ピンの尖端は使用により欠損する。近隣に所在する尾戸窯からもたらされた可能性をもつ。

196・197・199・202～205は土師質土器。196は尾戸窯の白土器小皿で、内面に型押しによる陽刻の高砂文、内面周縁と外面にヨコナデ、外底に不定方向のナデを施す。197は関西産の焼塙壺で、外底にユビオサエとナデを施す。199は関西系の焰烙。202は胡麻煎りで、型作り上下貼り合わせによる。上面に型押しによる陽刻の「□摩敷」の文字が入る。203は関西産の竈で、体部外面上位に段を設け、ヘラ彫りによる列点文を巡らす。204・205は人形で、204は人物、205は俵の一部か。ともに型作り貼り合わせで、中空である。

198・200・201は瓦質土器。198は手付きの焰烙で、体部内外面回転ナデ。200は茶釜で、外面上半に型による囲線を巡らす。201は火鉢で、円形の三足を貼付する。外底に回転糸切り痕を残す。

206～214は瓦で、206は軒丸瓦、207～210は軒棟瓦、211は軒棟瓦又は軒平瓦、212～214は棟瓦又は平瓦である。206は三巴文軒丸瓦で、珠数12個。207は中心飾りが葛文、210は中心飾りが三巴文である。これらのうち、214は「アキ□」、209は「御瓦師」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）産、213は角枠内「徳□平」銘印をもち、徳王子（高知県香南市香我美町徳王子）産、207・212は小判枠内「中己」銘印をもち、中山田（高知県香南市野市町中山田）の製品である。

SK6は19世紀前半に比定される。

#### SK7 (Fig.30～38)

調査区中央部に位置する。平面形は不整形を呈し、長軸4.03m、短軸2.80m、深さ23cmを測る。断面形は皿状である。埋土は灰黄褐色粘質シルトで、床面には炭化物が堆積している。また、他遺構との切り合い関係はないが、接するSK6・8・12とは出土遺物の接合関係があり、同時期に機能したと推定される。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗40点・小碗6点・小杯14点・小皿又は五寸皿17点・鉢3点・猪口1点・碗蓋6点・瓶3点・蓋物6点・蓋物蓋5点・仏飯器1点・紅皿1点・合子1点・段重1点・陶胎染付中碗2点・白磁小杯1点・小皿1点・紅皿8点・合子1点・磁器色絵小碗1点・小杯1点・青磁火入又は香炉1点・陶器中碗32点・小碗6点・小杯7点・小皿1点・鉢2点・擂鉢3点・捏鉢3点・鍋13点・土瓶14点・土瓶蓋5点・急須1点・瓶4点・水注1点・甕6点・蓋物3点・火鉢6点・灯明受皿32点・ひょうそく1点・餌猪口1点・鳥の水入れ1点・器種不明3点・土師質土器中皿6点・小皿27点・白土器小皿1点・小鉢1点・焼塙壺22点・焼塙壺蓋15点・焰烙8点・焜炉12点・蓋1点・人形2点・ミニチュア1点・瓦質土器焰烙3点・焜炉1点・火鉢2点・窯道具3点・包丁1点・鉄釘7点・寛永通宝1点、及び多量の瓦片である。

図示したものは215～338である。215～222・224～243は磁器、223は陶胎染付で、220～223が瀬戸・美濃産、その他は肥前産又は肥前系である。215～218・220～231・235～241・243は染付。215・216は中碗である。215は広東形中碗で、菖蒲文を描き、216は広東形中碗で、外面に龍、高台

内に変形字を描く。218は浅半球形の小碗で、草花と太湖石を描く。220～222は端反形小碗で、220は花唐草文、221は鶴と雲、222は丸文を描く。224～228は小杯。224～226は丸形小杯で、224は松、225は鷺と葦、226は水と紅葉を描く。227は浅半球形小杯で、花と蝶を描き、228は平形小杯で、若松文を描く。229は紅皿である。230は小皿で、口縁部輪花形。内面に龍、高台内に変形字を描く。231は五寸皿で、蛇ノ目凹形高台をもつ。内面に三方割銀杏と蛸唐草文、外面に如意頭連続唐草文を描く。235は猪口。236は仏飯器で、植物と土坡を描く。238～240は碗蓋で、238・240は広東形碗の蓋である。243は腰張形の蓋物で、宝文を描く。241は蓋物の蓋である。237は髪油壺で、蛸唐草文を描く。223は太白手の広東形中碗で、外面に呉須と鉄錆による宝文、見込みに略化した五弁花文を描く。232・234・242は白磁。232は菊花形の小皿で、口錆。型打成形で、内面に型による菊弁を施す。234は菊花形の紅皿。型押成形で、外面に型による菊弁を施す。242は合子である。219・233は色絵。219は丸形小碗で、赤・緑・その他の上絵付で花卉文を描く。233は紅皿で、赤の上絵付で海老を描く。

244～290は陶器。244～248は尾戸窯の灰釉中碗である。244・245は丸形中碗、246は筒丸形中碗で、何れも高台無釉。246は灰黄色を帯びる半透明の釉を施し、高台内に渦状の鉋痕を残す。247は端反形中碗で、高台施釉。外面に梅花を描き、花弁は白土、花芯は鉄錆で描き分けている。249は京都・信楽系の色絵小碗で、緑の上絵付で筆文を描く。250・251は尾戸窯の灰釉鉢で、ともにロク口成形の後、口縁部の数箇所を内側へ折り込み輪花形に成形する。高台無釉で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。250は口縁部に灰オリーブ色の釉を重ね、251は口縁部の三方に褐色と青緑色に発色する釉を掛けている。252は堺産の擂鉢。253は鉄釉の鍋で、黄灰色の胎土をもち、能茶山窯産

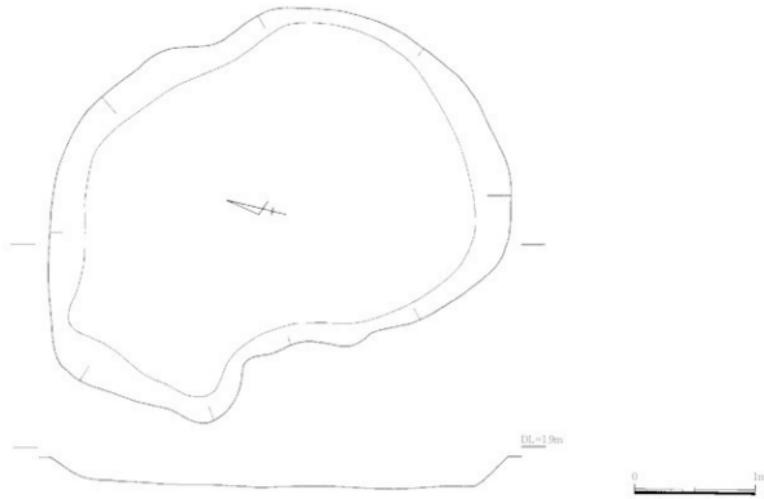


Fig.30 SK7平面図・エレベーション図

の可能性をもつ。254は急須。薄手の作りで、灰白色を帯びる透明の釉を施す。外面に鉄錆、白土、緑釉、青色の釉で花文を描く。255～261は土瓶である。255・258は鉄釉の土瓶で、算盤玉形の体部をもつ。257は灰釉の算盤玉形土瓶で、体部上半に多条の沈線を巡らせ、オリーブ灰色を帯びる透明の釉を施す。256は灰釉土瓶。259は鉄釉の丸形土瓶で、体部上半に強いロクロ目を施す。260は丸形の灰釉土瓶で、透明の釉を施す。白土、鉄錆、緑釉で建物と樹木等を描く。261は鉄釉土瓶で、釉は黒色に発色する。262～265は土瓶の蓋である。262は鉄釉の土瓶蓋、263～265は灰釉の土瓶蓋で、264は白土で文様を描く。266は灰釉の蓋物。267は水注類とみられ、オリーブ黄色の釉を施し、外底に墨書を認める。268は鉄釉の瓶。269は瓶類か。灰釉を施し、尾戸窯の製品とみられる。270は鉄釉の中瓶で、黒褐色の胎土をもち能茶山窯産の可能性をもつ。外面上位に多条の沈線を巡らせる。271～273は甕。271は能茶山窯の鉄釉甕で、肩部に多条の沈線を巡らせる。褐灰色の胎土をもち、釉は暗褐色に発色する。273は尾戸窯又は能茶山窯の甕で、灰白色の胎土に黒褐色の釉を施す。272は鉄釉の甕で、関西系か。274～282は灰釉の灯明受皿で、京都・信楽系。274～276は内面に菊花の浮文を貼付し、277～280は内面に櫛目を施す。276・278・279・281は口縁部外面にタール状の焦げが付着している。283は灰釉のひょうそくで、手捏ねによる把手を貼付する。284～287は火鉢。284・285は瀬戸・美濃産の緑釉火鉢で、外面に沈線と印刻による文様を施す。内面と外底に鉄錆を刷毛塗りする。286は灰釉火鉢で、外面に丸彫りで縱筋を施し、獸面の双耳を貼付する。灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施し、上位に青緑色の釉を流し掛けする。287は瀬戸・美濃産の灰釉火鉢で、外面に型による陽刻文様を配する。緑灰色の釉を部分的に流し掛けしている。288は器種不明。鉄釉を施し、尾戸窯又は能茶山窯産の可能性をもつ。289は餌猪口。手捏ねによる摘みを貼付し、灰釉を施す。外底に回転糸切り痕が残る。尾戸窯又は能茶山窯産の可能性をもつ。290は焼締めの陶器で、備前の製品か。

291・292は窯道具で、ハマである。輪状の体部に手捏ねによる円錐ピンを貼付しており、ピンの尖端は使用により欠損する。近隣に所在する尾戸窯からもたらされた可能性をもつ。

293～321・325～327は土師質土器。293～296は小皿である。293・294は口径6cm前後で、外底に回転糸切り痕を残す。295・296は尾戸窯の土師質土器小皿で、口径12～13cm、橙色系の胎土をもつ。295は内面周縁回転ナデ、内底ナデで、外面と外底に回転ケズリを施す。296は内面と外面上位回転ナデで、外面下位回転ケズリ、外底は回転ケズリの後ナデを施す。296は内面にタール状の焦げが付着する。297・298は中皿で、形態特徴や調整痕などからみてともに尾戸窯産とみられる。口径は16～17cmで、橙色系の胎土をもつ。297は内外面回転ナデ、外底ナデで、内底にロクロ目が残る。298は外面上位と内面は回転ナデで、外面下位と外底に回転ケズリを施す。内底に焦げがみられ、焙烙として使用したものか。299はミニチュアの碗で、型押成形。外面に陽刻の雷文帯を巡らせ、部分的に鉄錆を流し掛けする。300は蓋か。灰白色の胎土をもち、尾戸窯又は京都系の製品とみられる。311～316は焼塙壺、301～310は焼塙壺の蓋で、何れも関西産。312～316はたたら成形で、底部が残存する313～316は内面に凸凹、外底にユビコサエ痕が残る。311は内面ヨコナデで、外底にもナデを施す。301～309は天井部ナデで、内面に布目痕が残る。310は内面に圧痕とチヂレ目が残る。317～321は焙烙。317・321は関西産の焙烙で、胎土中に金雲母を含む。底部型作りで、外底に凹凸が

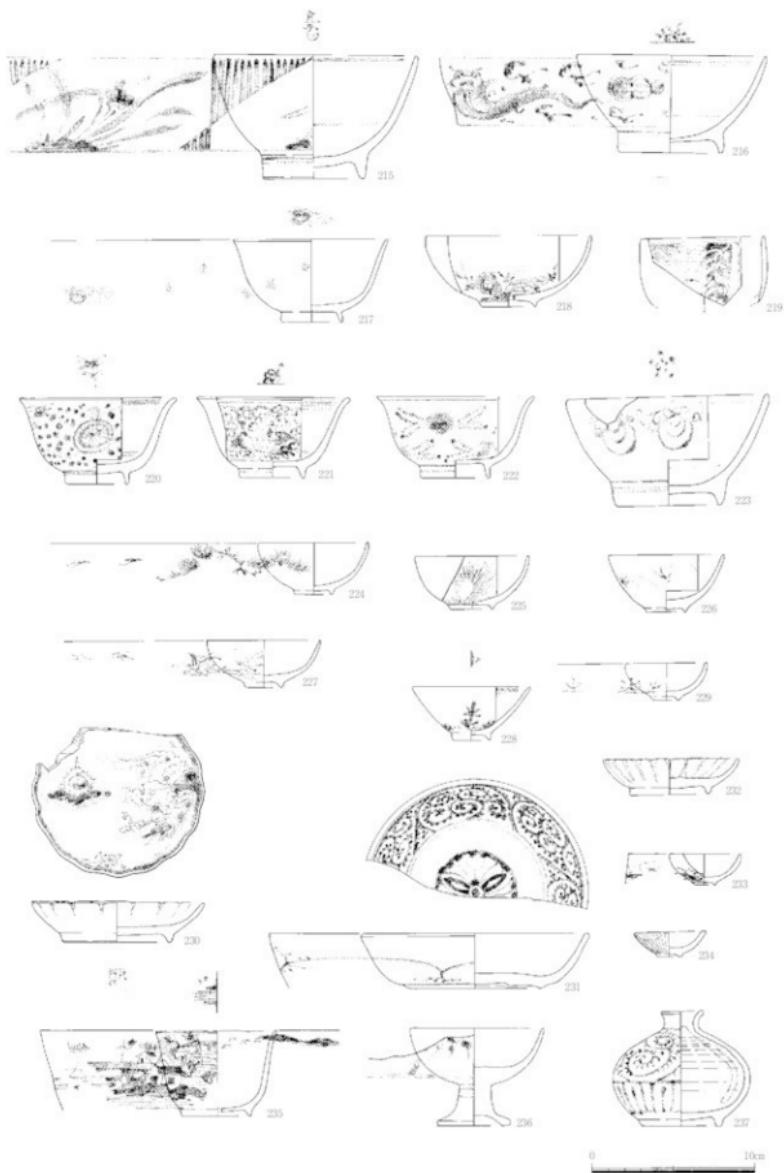


Fig.31 SK7出土遺物実測図 (1)

0 10cm

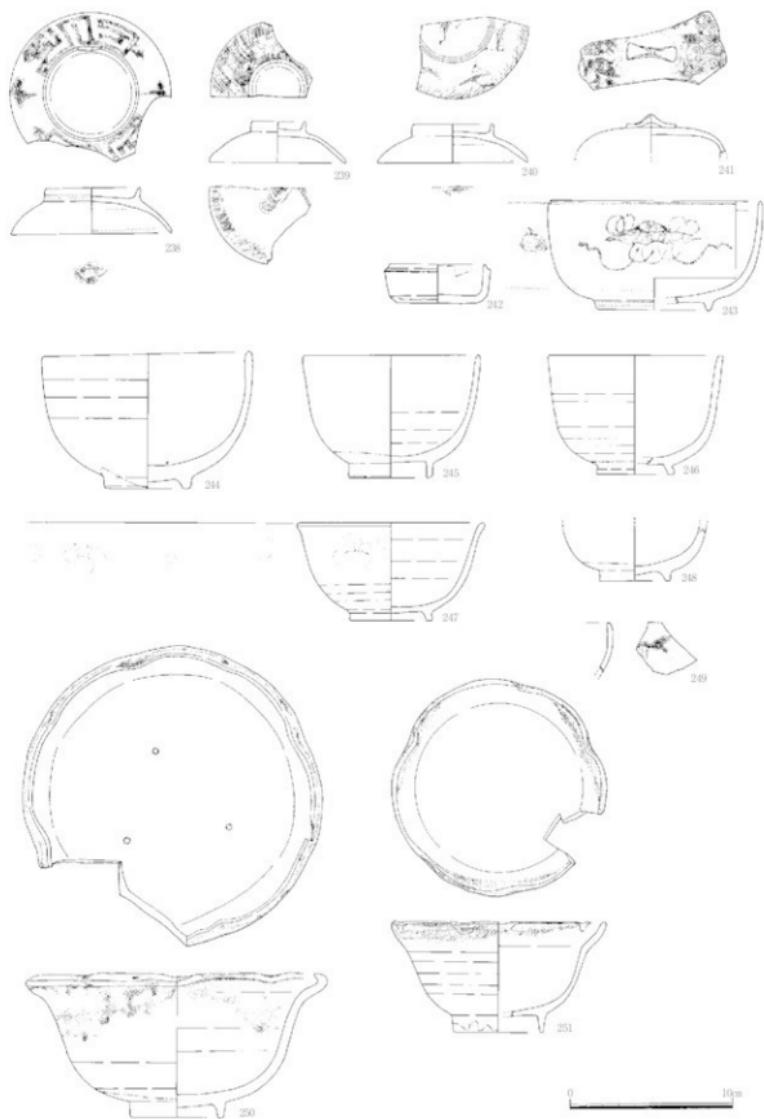


Fig.32 SK7出土遺物実測図(2)

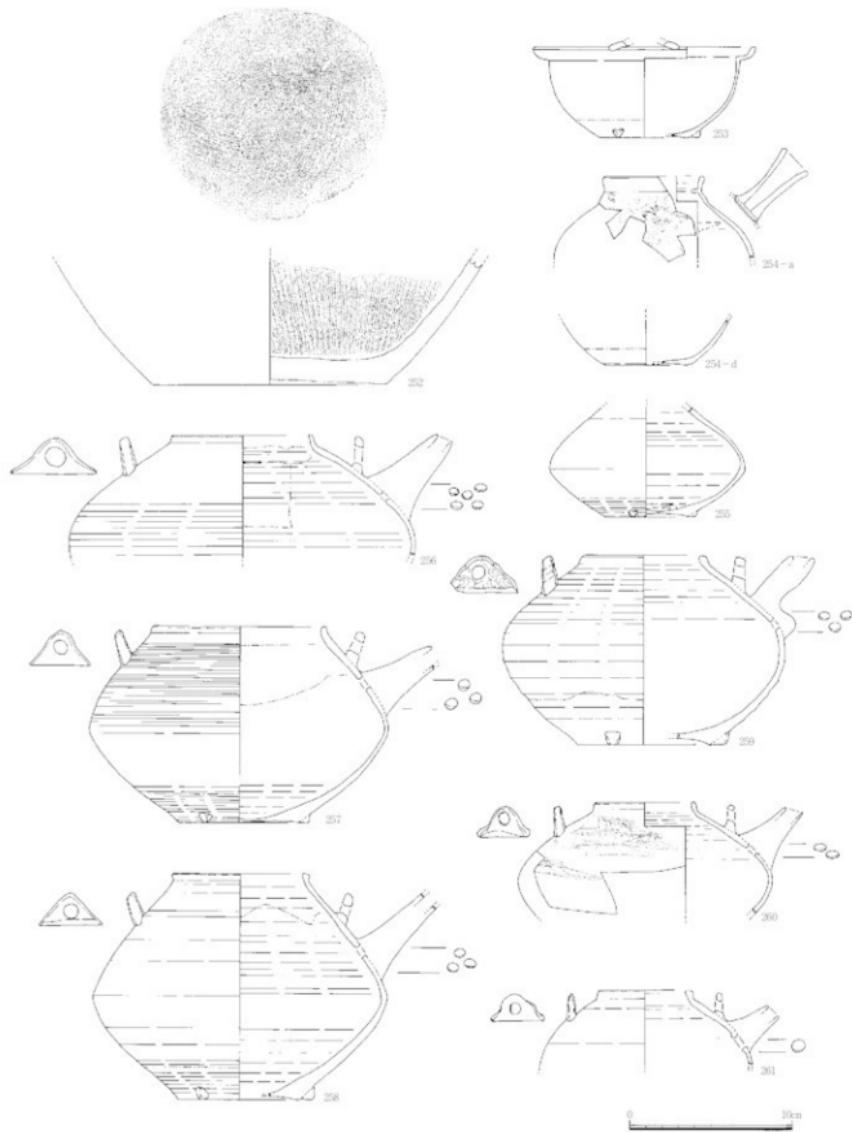


Fig.33 SK7出土遺物実測図 (3)

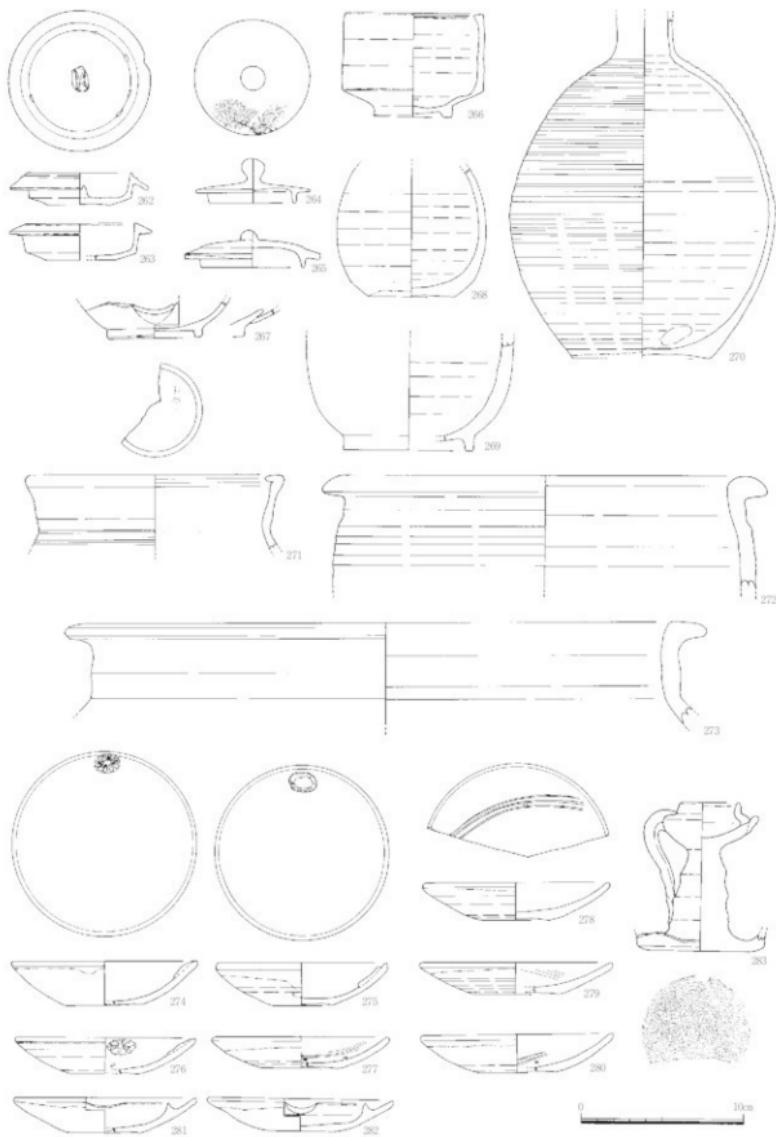


Fig.34 SK7出土遺物実測図(4)

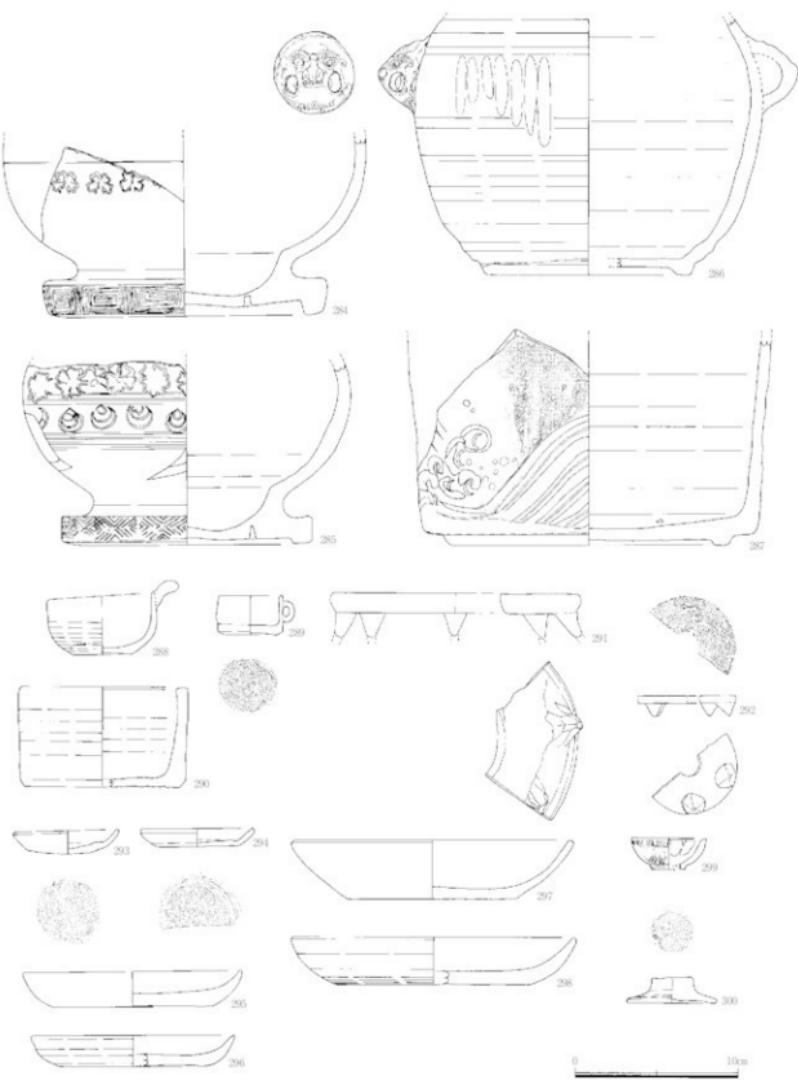


Fig.35 SK7出土遺物実測図 (5)

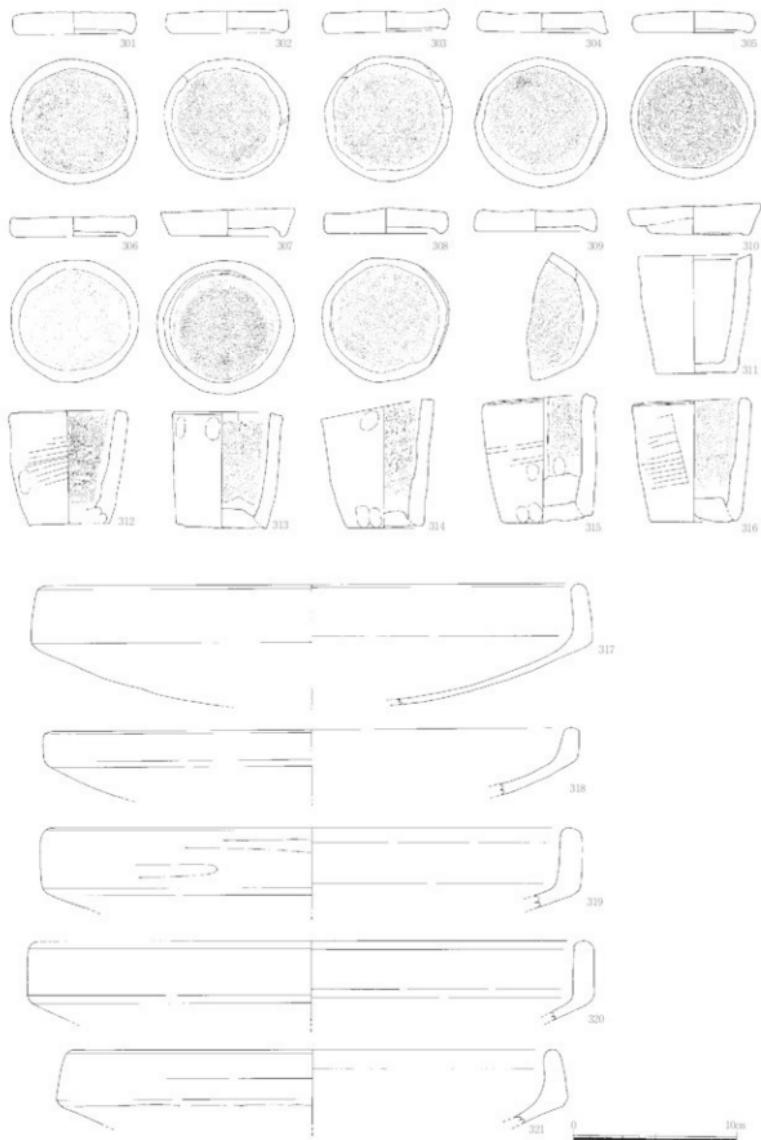


Fig.36 SK7出土遺物実測図(6)

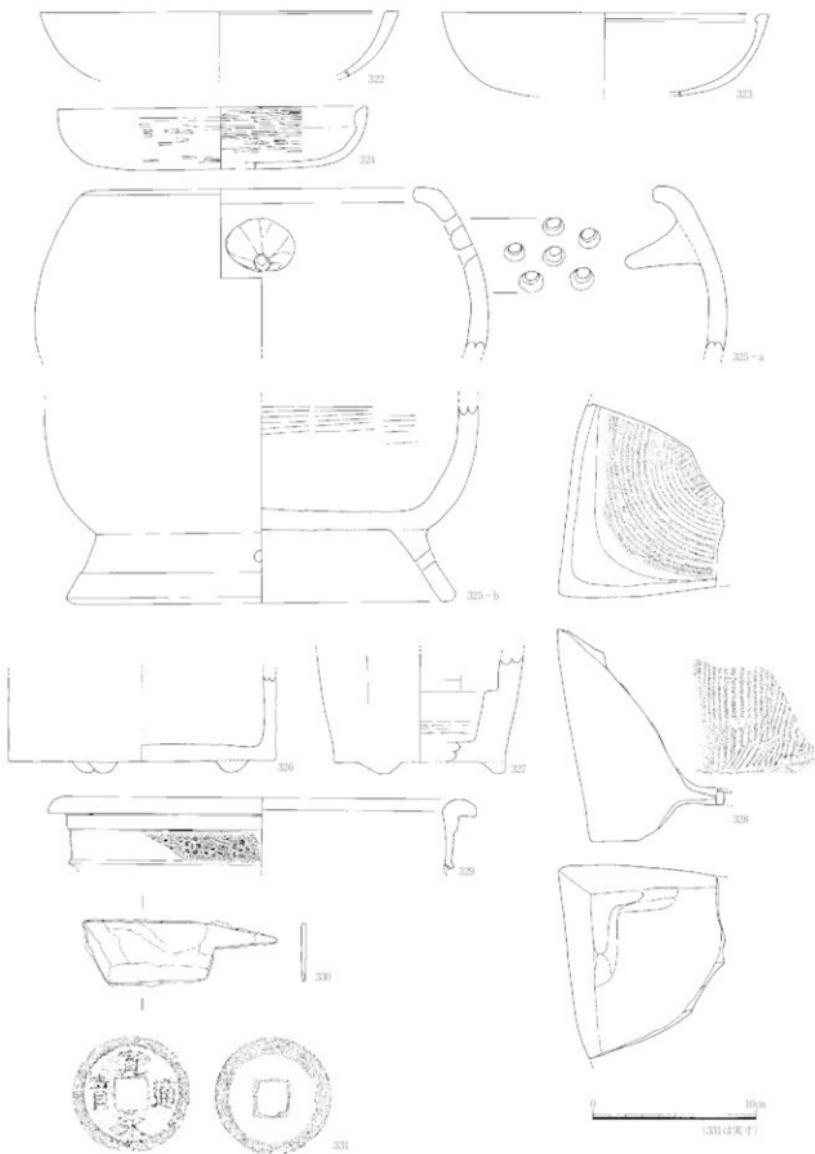


Fig.37 SK7出土遺物実測図 (7)

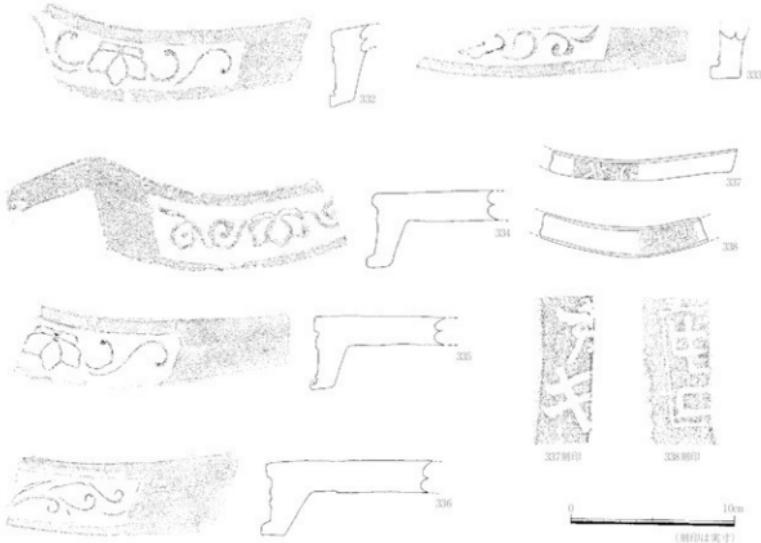


Fig.38 SK7出土遺物実測図 (8)

残る。318～320は関西産又は関西系の焰烙で、外底にナデを施す。325～327は焜炉。325は丸形の焜炉で、輪高台をもち、内面に手捏ねによる突起を貼付する。326は筒形の焜炉で、円形の三足を貼付する。327も筒形の焜炉で、内面下位に段をもつ。

322～324・328・329は瓦質土器。322～324は焰烙で、322・323は手付きのものとみられる。329は火鉢で、外面に型による陽刻の梅文を施す。328は箱形の焜炉で、外底の四隅に脚を貼付する。330は包丁。331は寛永通宝である。

332～338は瓦で、334は軒棧瓦、332・333・335・336は軒棧瓦又は軒平瓦、337・338は棧瓦又は平瓦である。332・334・335は中心飾りが薦文、333は花文である。このうち、337は「アキ」銘印をもち安芸（高知県安芸市）産、338は角枠内「中己」銘印をもち中山田（高知県香南市野市町中山田）の製品である。

SK7は19世紀前半に比定される。

#### SK8 (Fig.39～42)

調査区北部に位置する。北部が調査区外に出るために平面形態や全体の規模は不明であるが、東西長288m、南北確認長1.10m、深さ58cmを測る。断面形は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は1～1層・1～2層がにぶい黄褐色粘質シルト、2層と3層が褐灰色粘質シルトである。このうち3層には木片と木屑が多く含まれ、床面直上にも木片と木屑が厚く堆積する。また、他遺構との切り合い関係はないが、近接するSK7・9とは出土遺物の接合関係があり、両者が同時期に機能したと推定される。

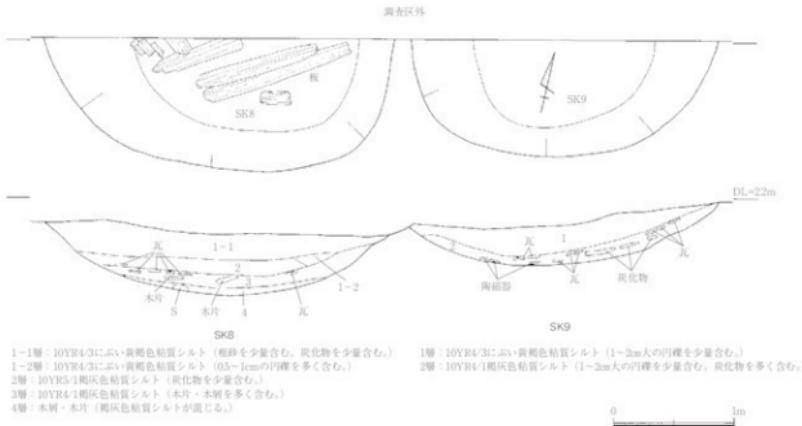


Fig.39 SK8・9平面図・セクション図・遺物出土状況図

出土遺物は染付大碗1点・中碗25点・小碗5点・小杯9点・中皿1点・小皿又は五寸皿17点・極小皿1点・鉢1点・碗蓋2点・蓋物5点・蓋物蓋1点・合子1点・瓶1点・白磁小碗1点・小杯1点・小皿又は五寸皿2点・紅皿6点・白磁又は染付瓶1点・磁器色絵小碗1点・陶器中碗13点・小碗2点・中皿1点・小皿4点・鉢4点・擂鉢3点・鍋4点・土瓶4点・土瓶蓋5点・瓶2点・水注1点・甕1点・蓋物2点・火鉢2点・灯明受皿12点・飼猪口1点・鳥の水入れ1点・水鉢1点・器種不明2点・土師質土器中皿4点・小皿3点・白土器小皿1点・焙烙1点・焼塙壺6点・焼塙壺蓋4点・焜炉6点・人形1点・瓦質土器茶釜2点・火鉢2点・器種不明1点・窯道具1点・鉄釘1点・棕櫚繩1点・及び瓦片多数である。

図示したものは339～390である。339～363は磁器で、342～346が瀬戸・美濃産又は瀬戸・美濃系、341が関西系、350が能茶山窯又は肥前系、その他は肥前産又は肥前系である。339～345・348・350～353・356・357～359は染付。339は大碗で、兎と草花を描く。340は広東形中碗で、草花と蝶を描く。341～345は端反形小碗で、342は圓線と蓮弁文を描き、341は外面に山水文と文字、内面に山水文を描く。348は小杯で、筆文を描く。350は能茶山窯又は肥前系の鉢で、蛇ノ目四形高台をもつ。山水文を描き、透明釉は貫入が入る。353は中皿で、内面に唐草文と松竹梅円形文、高台内に「□□年製」銘を描く。高台内にハリ支え痕が残る。351は丸形小皿で、見込み蛇ノ目釉剥ぎ。内面に花唐草文と、コンニャク印判による五弁花を描く。352は長方形の極小皿。糸切り細工で、長方形の高台を貼付する。内面に山水文を描く。356は碗の蓋である。357～359は蓋物で、357は宝文、358は桐文、359は銀杏を描き、何れも端部無釉である。346・349・354・355・361～363は白磁。346は端反形小碗で、蟹手による梅花文を施す。349は小杯。354は菊花形小皿で、口銷。型打成形で内外面に菊弁を施す。355は変形皿で、内面に型による陽刻の葡萄文が施される。外底に三足を貼付する。361～363は型押成形の菊花形紅皿である。360は白磁又は染付の瓶。347は色絵の丸形小皿で、赤・黒・その他の上絵付で、区画割りによる草花と亀甲文を描く。

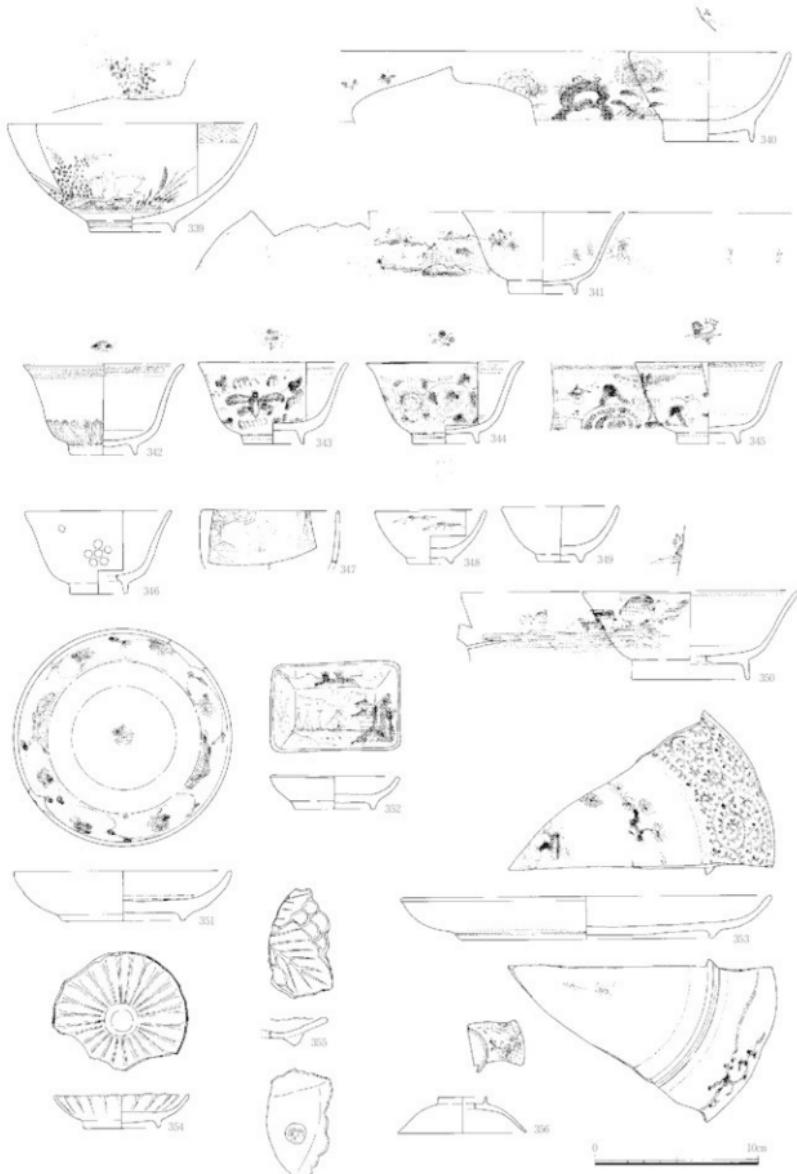


Fig.40 SK8出土遺物実測図(1)

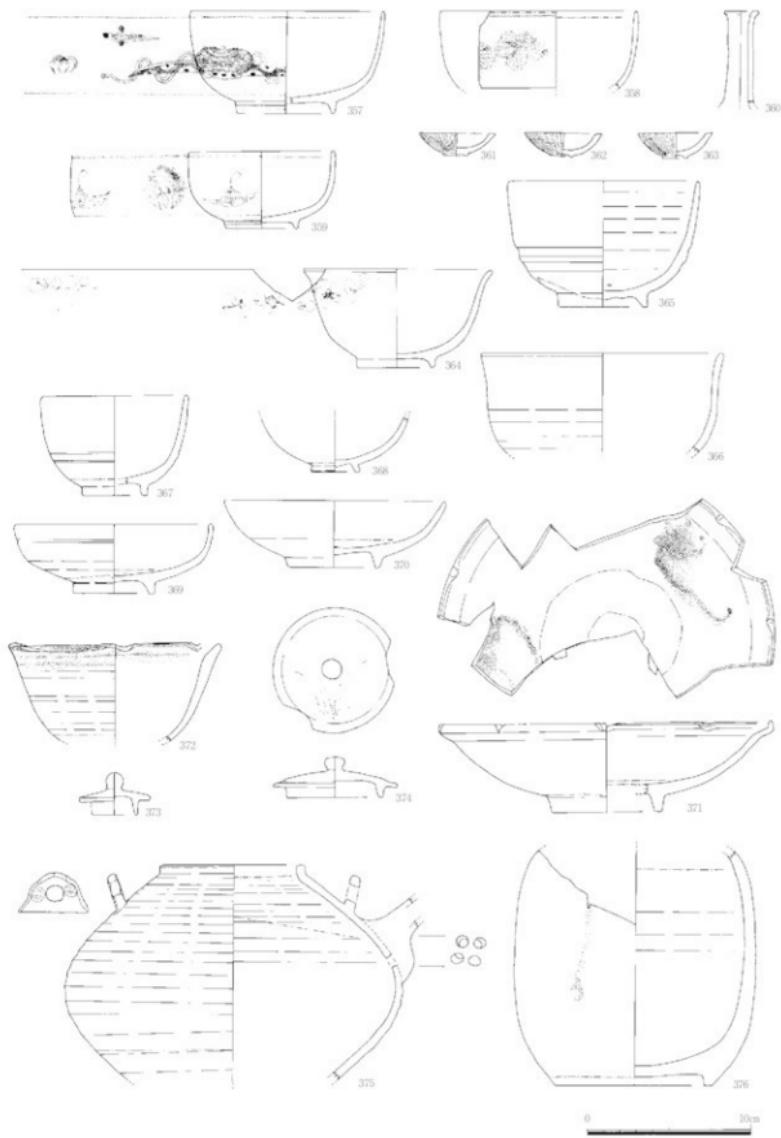


Fig.41 SK8出土遺物実測図 (2)

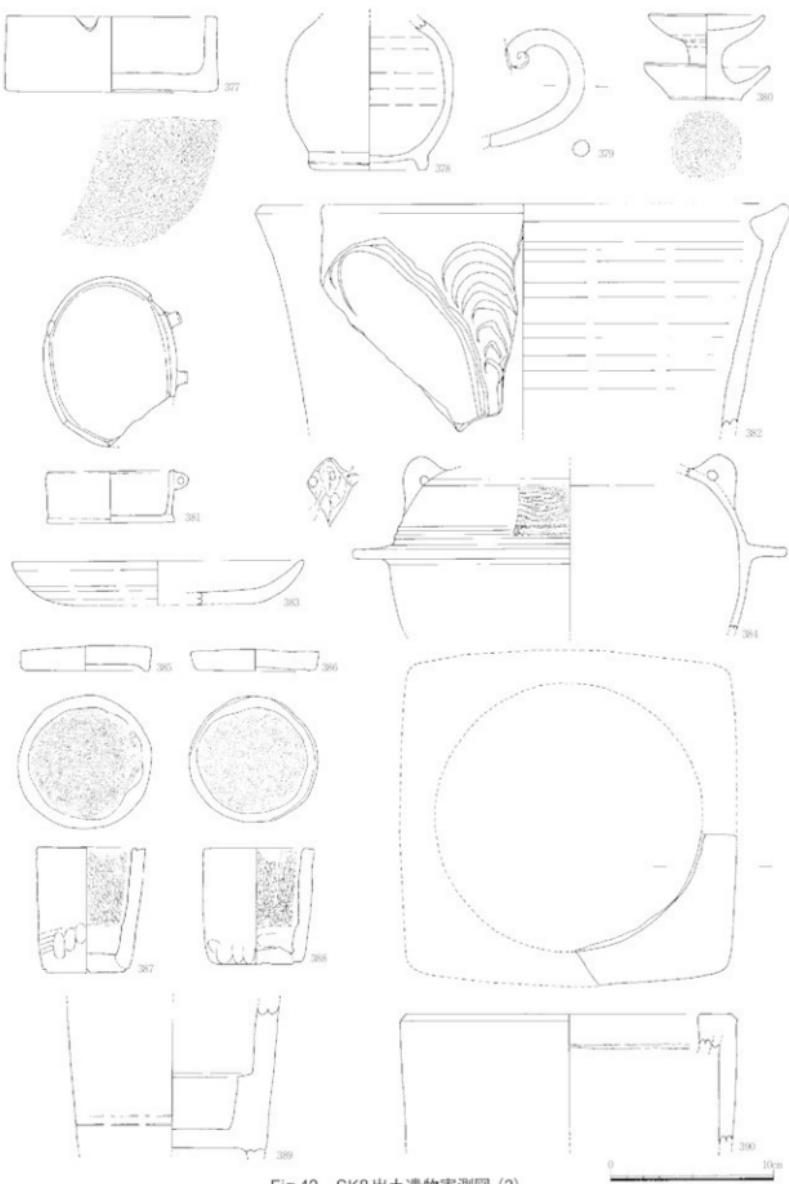


Fig.42 SK8出土遺物実測図(3)

364～376・378～382は陶器。364は尾戸窯の灰釉端反形中碗で、高台施釉。外面は鉄錆と白土で梅花を描く。365は尾戸窯の灰釉丸形中碗で、外面に2条の凹線を巡らせる。高台無釉で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。高台内に渦状の鉋痕が残る。367は尾戸窯の灰釉丸形小碗で、高台無釉。淡黄色を帯びる半透明の釉を施す。368は京都・信楽系の灰釉半球形小碗である。371は尾戸窯の灰釉中皿で、高台無釉。見込み蛇ノ目釉剥ぎの後、釉剥ぎ部分に白土を施す。光沢の強いオリーブ黄色の釉を施し、部分的に暗オリーブ色の釉を流し掛けする。369・370は小皿。369は尾戸窯又は能茶山窯の鉄釉小皿で、高台無釉。体部外面に1条の沈線を描く。見込み蛇ノ目釉剥ぎの後、釉剥ぎ部分に白土を施す。370は尾戸窯又は能茶山窯の灰釉丸形小皿で、高台施釉。見込み蛇ノ目釉剥ぎの後、釉剥ぎ部分に白土を施す。浅黄色を帯びる透明の釉を施す。366は尾戸窯の鉢で、灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施す。372は尾戸窯の鉢で、口縁部を内側に折り曲げて輪花形に変形させる。灰白色を帯びる半透明の釉を施し、口縁部にオリーブ褐色の釉を重ねる。375は鉄釉土瓶で、外面に多段の強いロクロ目を残す。373・374は土瓶蓋で、373は銅緑釉を施す。374は灰釉を施し、鉄錆で草文を描く。376・378は灰釉の瓶。376は灰黄褐色の胎土に白化粧と透明釉を施し、部分的に青緑色の釉を流し掛けする。378は黄灰色の胎土に白化粧を施し、透明の釉を重ねる。能茶山窯産の可能性をもつ。379は水注類とみられ、手捏ねによる把手を貼付する。尾戸窯の製品で、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。380は鉄釉の台付き灯明受皿で、能茶山窯産か。381は鳥の水入れ。灰釉を施し、外底周縁には白土を塗る。382は瀬戸・美濃産の灰釉水鉢で、外面にヘラ彫りによる陰刻文様を施す。377は窯道具で、匣である。

383・385～390は土師質土器。383は中皿で、外面下半と外底に回転ケズリとナデを施しており、尾戸窯産の可能性をもつ。387・388は関西産の焼塙壺。385・386は関西産の焼塙壺蓋で、ともに外面に布目痕が残る。389・390は焜炉。389は筒形の焜炉で、内面下位に段をもつ。390は箱形の焜炉で、内部施設をもつ。384は瓦質土器の茶釜で、外面上半に型による陽刻文様を巡らせる。

SK8は19世紀前半に比定される。

#### SK9 (Fig.39・43・44)

調査区北部に位置する。北部が調査区外に出るため、平面形態や全体の規模は不明であるが、東西長2.60m、南北確認長0.96m、深さ50cmを測る。断面形は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は1層がにぶい黄褐色粘質シルト、2層が褐灰色粘質シルトで、2層には炭化物が多く含まれる。また、近接するSK8とは出土遺物の接合関係があり、両者が同時期に機能したと推定される。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗11点・小碗2点・小杯4点・小皿9点・碗蓋2点・瓶1点・蓋物1点・蓋物蓋1点・白磁紅皿5点・磁器色絵小杯2点・陶器中碗8点・小碗1点・小杯3点・擂鉢1点・捏鉢1点・鍋6点・土瓶6点・土瓶蓋2点・甕1点・蓋物1点・火鉢2点・灯明受皿10点・餌猪口1点・植木鉢1点・ミニチュア1点・蓋1点・土師質土器中皿3点・小皿7点・焙烙1点・焜炉4点・鉄釘6点・硯1点、及び瓦片多数である。

図示したものは391～415である。391～399は磁器で、392が瀬戸・美濃産又は肥前産、その他は何れも肥前産である。391～396は染付。391は丸形小碗で、草花文を描く。392は端反形小碗で、山水文を描く。396は丸形小杯で、蝶を描き、394は碗蓋で、山水文を描く。395は蓋物で、大根を

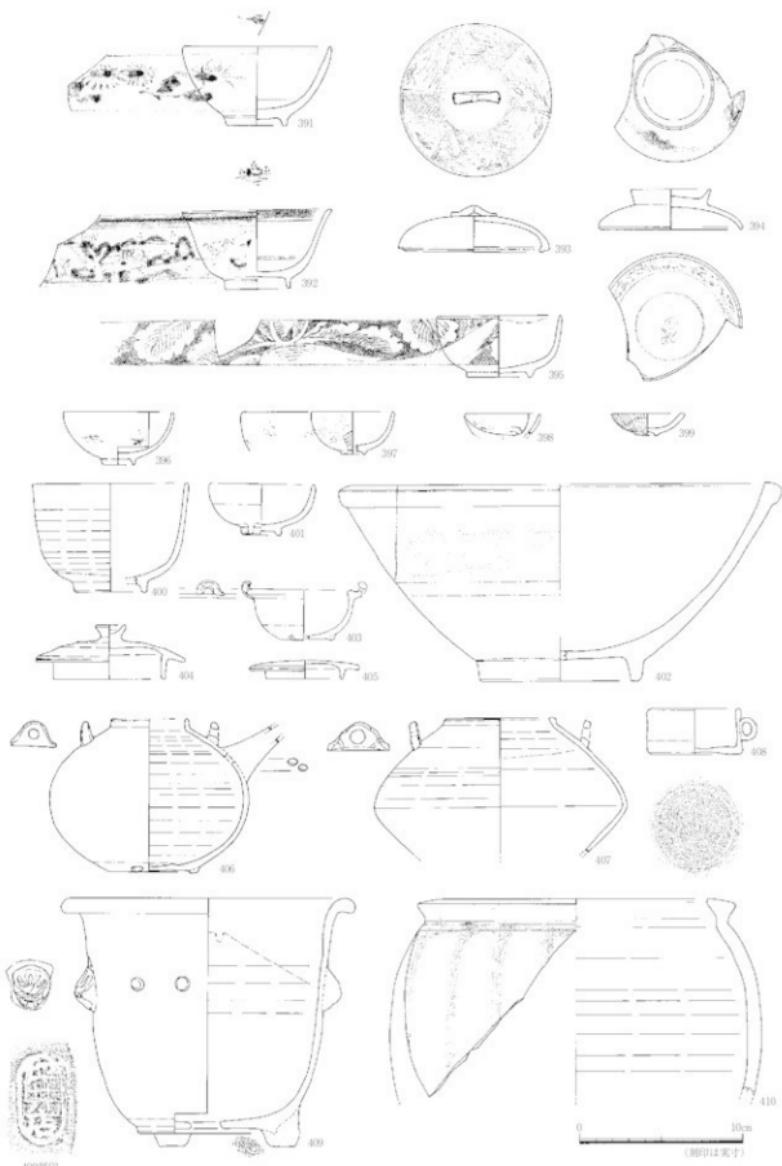


Fig.43 SK9出土遺物実測図 (1)

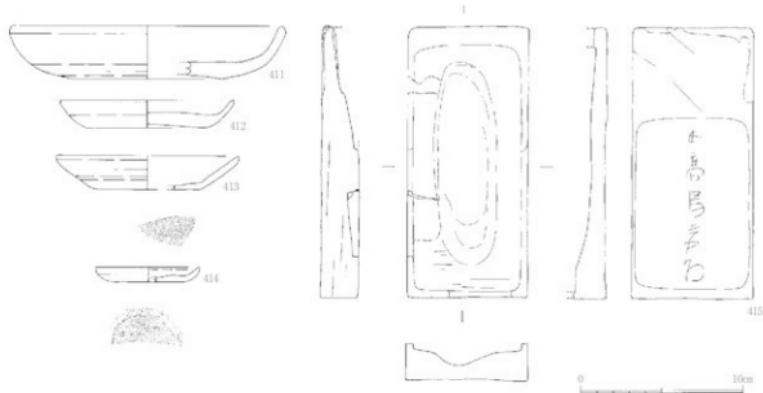


Fig.44 SK9出土遺物実測図 (2)

描き、393は蓋物の蓋で、区画間に七宝繋ぎ、網目、蝶と草を描く。397は色絵の小杯で、赤・黒・その他の上絵付で籠と草花を描く。398は色絵の小杯又は紅皿で、赤の上絵付による文様を施す。399は菊花形の白磁紅皿である。

400～410は陶器。400は尾戸窯の灰釉筒丸形小碗、401は京都・信楽系の灰釉丸形小杯である。402は肥前産の捏鉢で、外面の上位に白化粧土刷毛目、下位に鉄錆を刷毛塗り、内面下位に白化粧土を刷毛塗りし、灰釉を施す。405は京都・信楽系の灰釉蓋である。406は灰釉土瓶で、外面白化粧の後、透明の釉を施す。407は算盤玉形の鉄釉土瓶である。404は鉄釉土瓶の蓋で、暗褐色の釉を施す。410は丹波焼の甕で、外面に鉄釉、口縁端部から内面にかけてオリーブ褐色の釉を施す。肩部外面には黒褐色の釉を流し掛けする。408は灰釉の鰐口で、外底に回転糸切り痕を残す。403はミニチュアの鍋で、鉄釉を施す。409は植木鉢で、獸面の双耳と円形文を貼付する。底部に円孔を穿ち、三足を貼付する。釉は焼成不良で白濁している。高台内に小判枠内「□井店」銘印をもつ。

411～414は土師質土器。412～414は小皿で、414が口径6cm、412・413が口径10～11cmのものである。412は尾戸窯の小皿で、外面ヨコナデ、内面回転ナデ、外底にはケズリ後ナデを施す。413・414は内外回転ナデで、外底に回転糸切り痕が残る。413は内底にタール状の焦げが付着し、414は口縁部に灯芯油痕が残る。411は中皿で、外面下半と外底に回転ケズリを施す。内底には焦げが付着している。

415は石製品で、硯。粘板岩製で、硯背に窪みがある。むこう縁は欠損し、陸の中央部分は使用により大きく窪む。硯背の窪みの中に線書（「本高島□石」か）を認める。

SK9は19世紀前半に比定される。

#### SK10 (Fig.45～58)

調査区南部に位置する。平面形は不整形で、長軸5.60m、短軸4.02m、深さ26cmを測る。断面形は不整形で、床面は平坦でなく南部にテラス状の高まりをもつ。埋土は1層が炭化物層、2層がにぶい黄褐色粘質シルト層である。他遺構との切り合い関係では、SK4・16を切り、SK11と切り合う。

また、直接的な切り合はないが、SK10の下面にてSK14・15が検出されている。この他、近接するSK11・12とは出土遺物の接合関係があり、両者が同時期に機能したことが推定される。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付大碗3点・中碗63点・小碗31点・小杯18点・薄手酒杯2点・中皿1点・小皿又は五寸皿34点・鉢6点・猪口2点・碗蓋9点・瓶4点・蓋物10点・蓋物蓋7点・香炉1点・仏花瓶1点・紅皿1点・髪油壺1点・合子1点・段重1点・水滴1点・鳥の水入れ又は餌鉢1点・植木鉢1点・器種不明1点・色絵染付小碗1点・磁器色絵紅皿1点・白磁小碗1点・小皿7点・紅皿30点・白磁又は染付瓶1点・青花小皿1点・陶器中碗56点・小碗17点・小杯5点・大皿1点・中皿4点・小皿又は五寸皿9点・鉢2点・猪口1点・捕鉢7点・捏鉢3点・鍋21点・鍋蓋2点・土瓶19点・

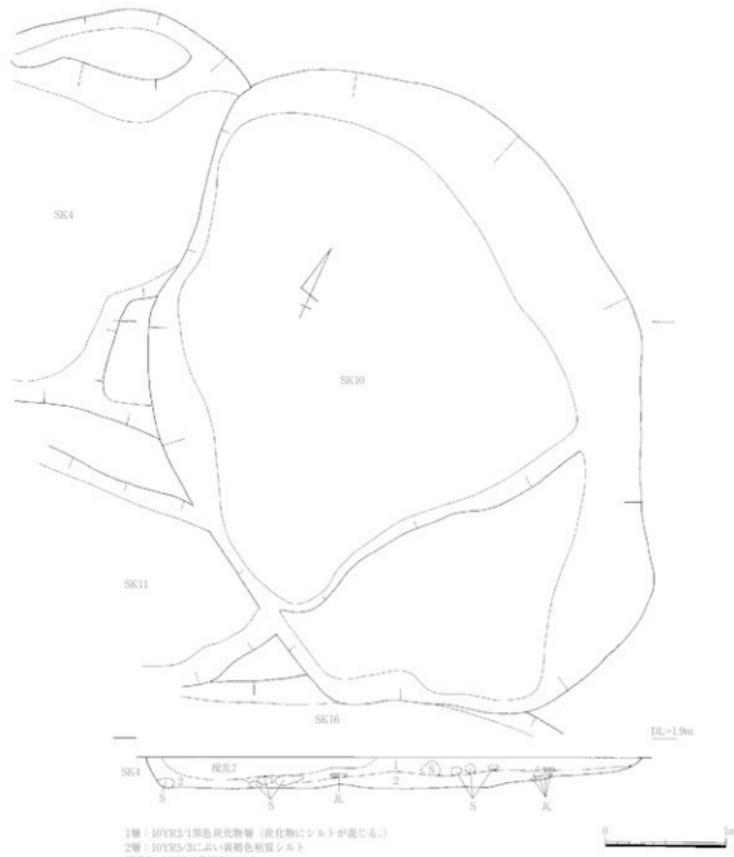


Fig.45 SK10平面図・セクション図

土瓶蓋12点・燭徳利1点・瓶3点・水注1点・壺2点・甕10点・蓋物3点・蓋物蓋2点・焜炉1点・火鉢10点・灯明受皿47点・香炉又は火入2点・柄杓1点・餌猪口2点・鳥の水入れ3点・植木鉢4点・水鉢2点・ミニチュア1点・器種不明3点・施釉土器小杯1点・小皿1点・土師質土器椀又は杯2点・中皿14点・小皿27点・白土器小皿2点・壺台1点・鍋1点・釜1点・焙烙2点・焼塙壺11点・焼塙壺蓋5点・焜炉18点・人形16点・ミニチュア2点・瓦質土器行平1点・茶釜2点・焙烙1点・火鉢2点・包丁1点・鉄釘3点・寛永通宝1点・器種不明のガラス製品1点・及び瓦片多数である。

図示したものは416～597である。416～442・444～470は磁器、443は青花で、424・425・428・419が瀬戸・美濃産又は瀬戸・美濃系、436が生産地不明、443が中国景德鎮窯系、その他は肥前産又は肥前系である。416～426・429～437・439・444～447・450～465・467～470は染付。416は丸形大碗で、机と筆・筆立てを描く。417は丸形中碗で、丸文と寿字文、418は広東形中碗で、曆手文を描く。419は太白手の広東形碗で、見込みにコンニャク印判による五弁花文を施す。420は端反形中碗で、梅文を描く。426・430は広東形小碗で、430は透明釉に貫入が入る。421～425・429は端反形小碗。431～435・437は小杯で、435は高台内に「□明□製」銘を描く。436は薄手酒杯で、高台内に「文政三年」の年号を描き、呉須は暗緑灰色に発色する。439は紅皿である。447は中皿で、内面に墨弾きによる松・梅・銀杏を配し、中央に松竹梅円形文を描く。高台内にハリ支え痕が残る。444～446は五寸皿で、ともに蛇目凹形高台をもつ。444・445は内面に蛸唐草文と松竹梅円形文、外面に如意頭連続唐草文を描き、444は高台内に角枠内渦「福」を描く。446は口縁部玉縁状で、内面に野菜文、外面に略化した連続唐草文を描く。450は口縁部輪花形の小皿で、口銷。451は小皿又は五寸皿。464は丸形の大鉢で、外面に雲と蓮弁文を描く。452～457は碗蓋で、455・456は広東形碗の蓋である。459～462は蓋物。458は蓋物の蓋で、458・459が組とみられる。463は段重。465は髮油壺。467は辯菴形の小瓶で蛸唐草文を描く。470は仏花瓶で、体部の数箇所に縱筋を施し、頭部に双耳を貼付する。外面には宝文と山水文を描いている。469は鳥の水入れ又は餌鉢で、輪状の摘みを貼付する。468は植木鉢で、底部に圓孔を穿つ。427は色絵染付の端反形小碗で、呉須と赤の上絵付で魚と海藻を描く。428は白磁の端反形小碗で、螢手による梅花文を施す。438は紅皿で、赤の上絵付で海老を描く。440～442は白磁の菊花形紅皿である。448・449は白磁の菊花形小皿で、口銷である。466は白磁又は染付の瓶。443は中国景德鎮窯系の青花小皿で、外面に牡丹唐草文、内面に魚と水草を描く。

471～543は陶器。471～476・483は尾戸窯の灰釉中碗、477～482は灰釉小碗で、474が高台施釉、その他は高台無釉である。このうち476・480は高台内に渦状の鉋痕、473・482は高台内に乱れた渦状の鉋痕が残る。483は灰釉端反形中碗で、灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施す。484・485も灰釉小碗で、尾戸窯産か。何れも高台無釉で、484は灰白色を帯びる半透明の釉を施し、口縁部に緑灰色の釉を重ねる。485は灰白色を帯びる光沢の強い透明の釉を施す。486は京都・信楽系の灰釉小杯である。487は尾戸窯の灰釉大皿で、内面に呉須で柳と鳥を描く。高台無釉で、オリーブ黄色を帯びる透明の釉を施し、呉須は灰オリーブ色に発色する。488は尾戸窯の灰釉中皿で高台施釉。オリーブ黄色を帯びる半透明の釉を施し、口縁部の三方に緑灰色の釉を重ね掛けする。489は五寸皿で、尾戸窯か。高台施釉で、灰釉を施し、口縁部の三方に緑灰色の釉を重ね掛けする。490は尾戸

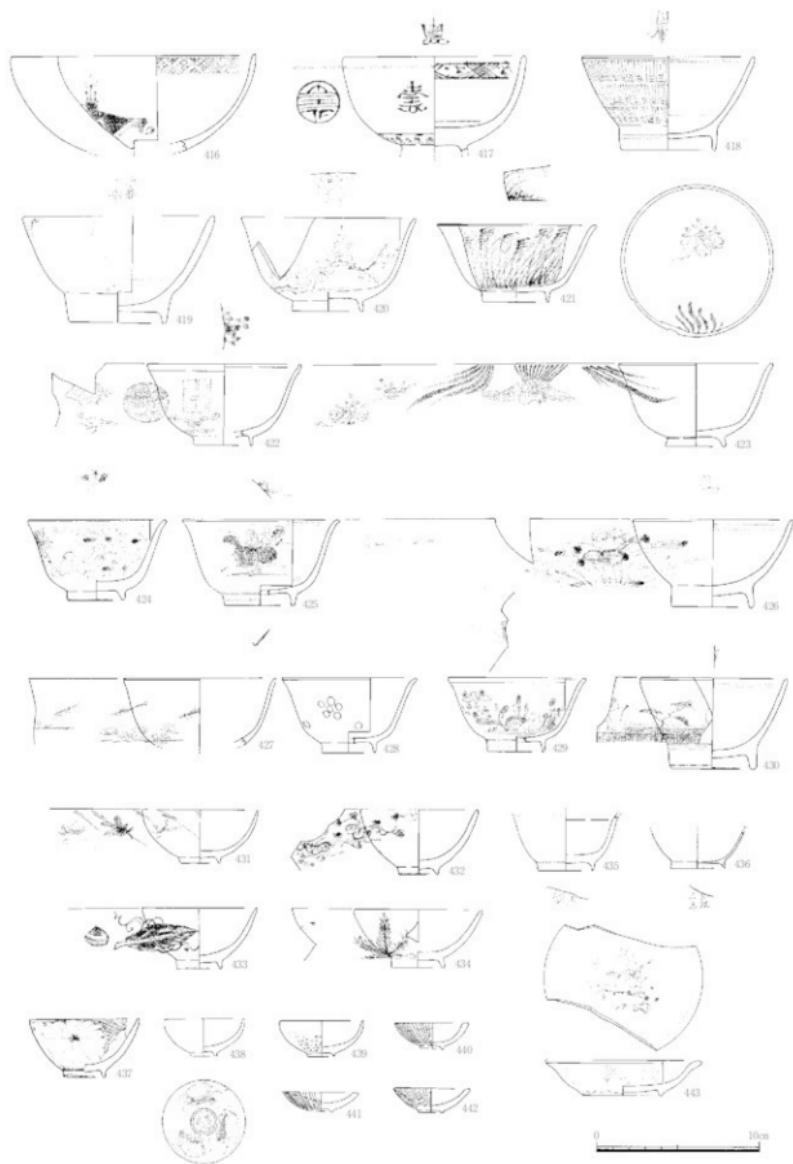


Fig.46 SK10出土遺物実測図 (1)

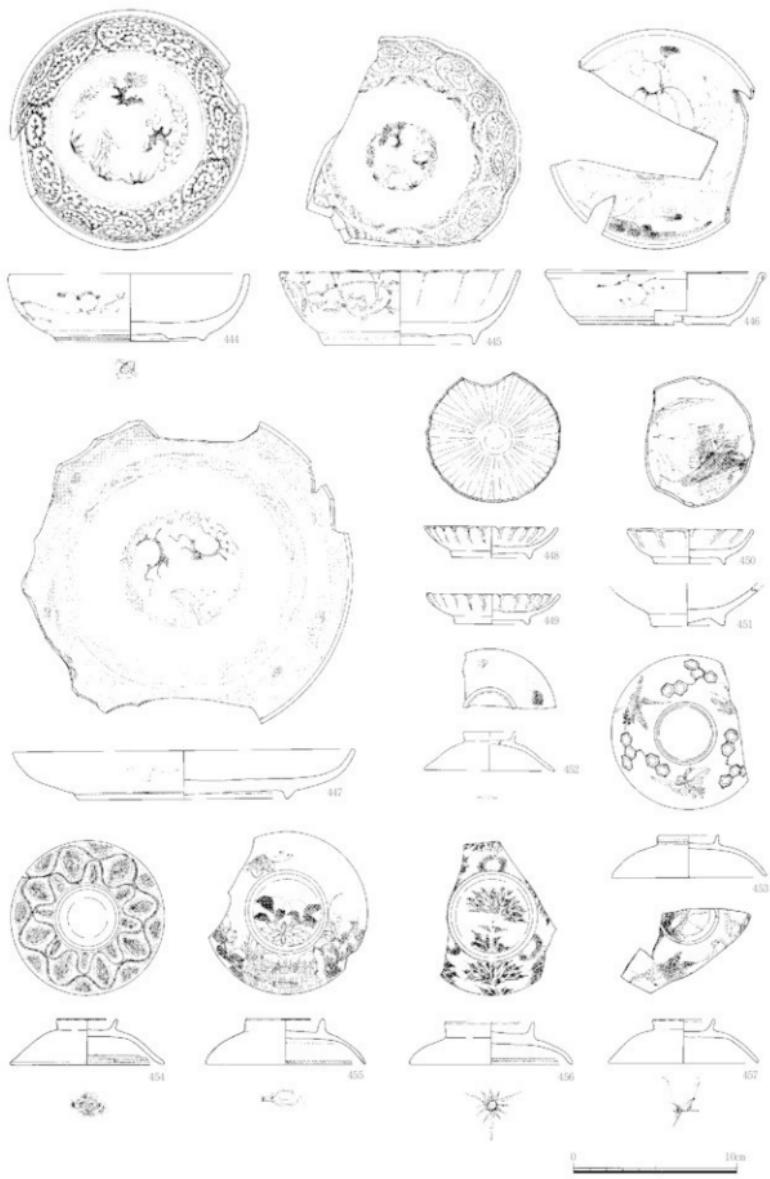


Fig.47 SK10出土遺物実測図 (2)

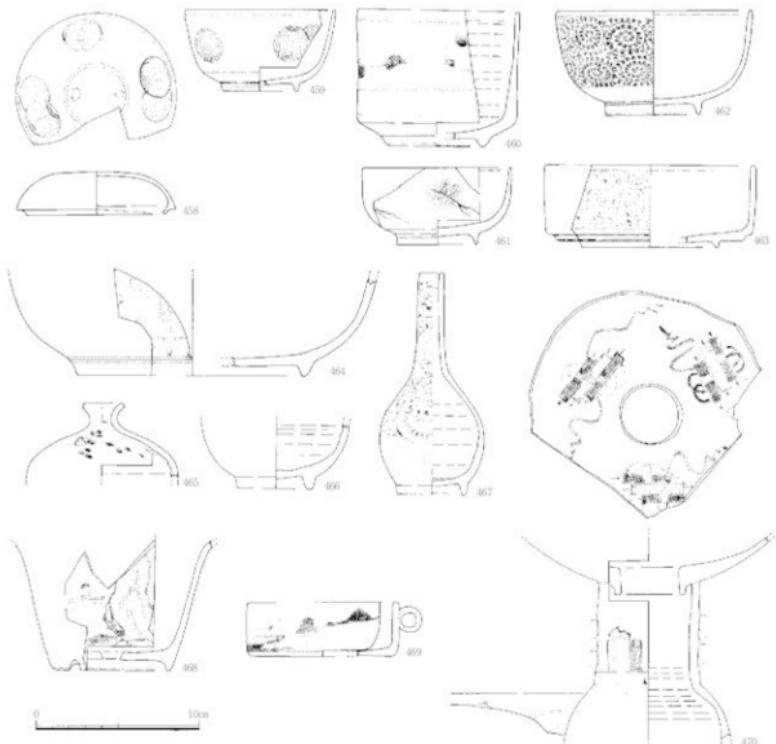


Fig.48 SK10出土遺物実測図 (3)

窯又は能茶山窯の灰釉小皿。見込み蛇ノ目釉剥ぎの後、釉剥ぎ部分に白土を施す。高台無釉で、光沢の強い黄褐色の釉を施す。491は尾戸窯又は能茶山窯の鉄釉小皿で、見込み蛇ノ目釉剥ぎ後、釉剥ぎ部分に白土を施す。高台無釉で、黒褐色の釉を施す。492～494は鉢。492は折湾形の鉢で、口縁部を内側に折り曲げて輪花形に変形させる。外面は白化粧の後、鉄錆と黄色の釉で梅花を描き、その他の部分は薄緑色の釉を重ねる。内面は透明の釉を施す。493は灰釉の鉢で、外面上位に別個体の口縁部片が溶着している。494は尾戸窯の灰釉鉢で、高台内に渦状の鉢痕が残る。496は尾戸窯の灰釉猪口。高台施釉で、鉄錆で格子文を描き、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。495・497・503は捏鉢。497は灰釉の捏鉢で、瀬戸・美濃産か。503は焼締めの捏鉢で、口縁部にオリーブ灰色の自然釉が掛かる。502は堺産の擂鉢である。498・499は鉄釉の鍋。500はミニチュアの鉄釉鍋である。501は灰釉の鍋蓋で、上位に多条の沈線を巡らせる。504～509は土瓶。504は灰釉の算盤玉形土瓶。505は鉄釉の算盤玉形土瓶。506・507は鉄釉土瓶で、外面に強いロクロ目が残る。508は鉄釉の算盤玉形土瓶で、体部外面と注口部に強いロクロ目が残る。509は鉄釉土瓶で、体部上位に多条

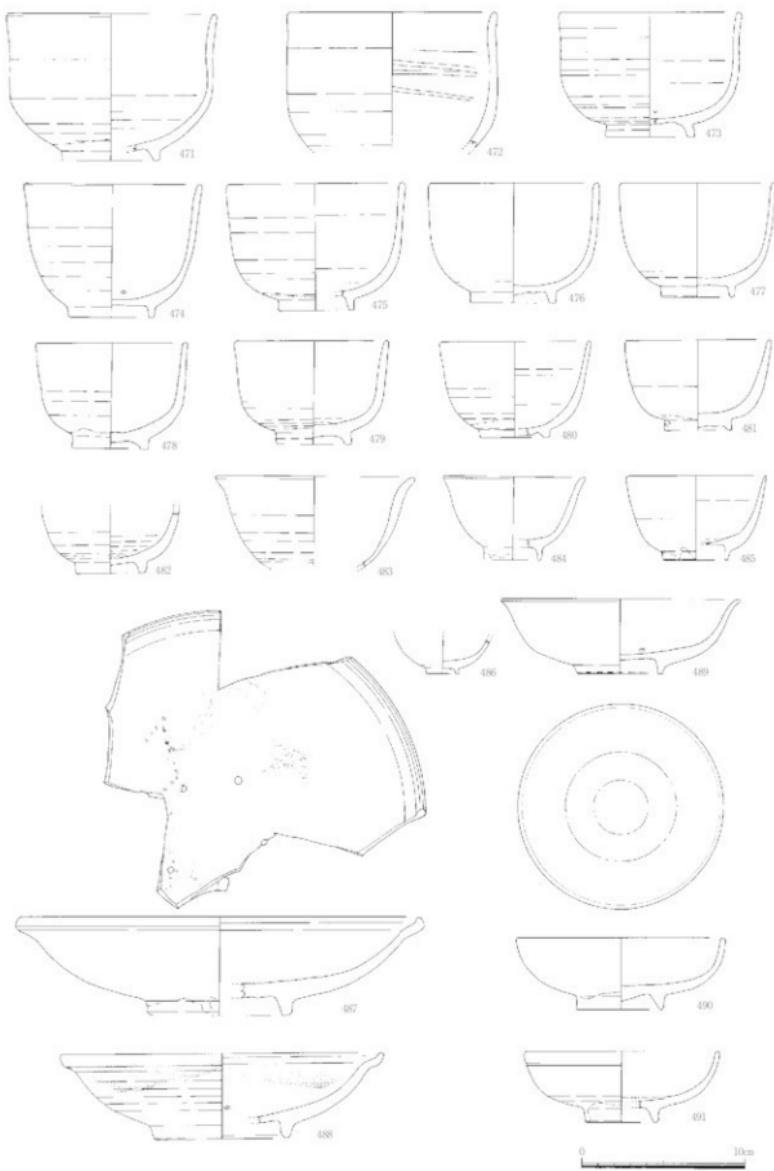


Fig.49 SK10出土遺物実測図(4)

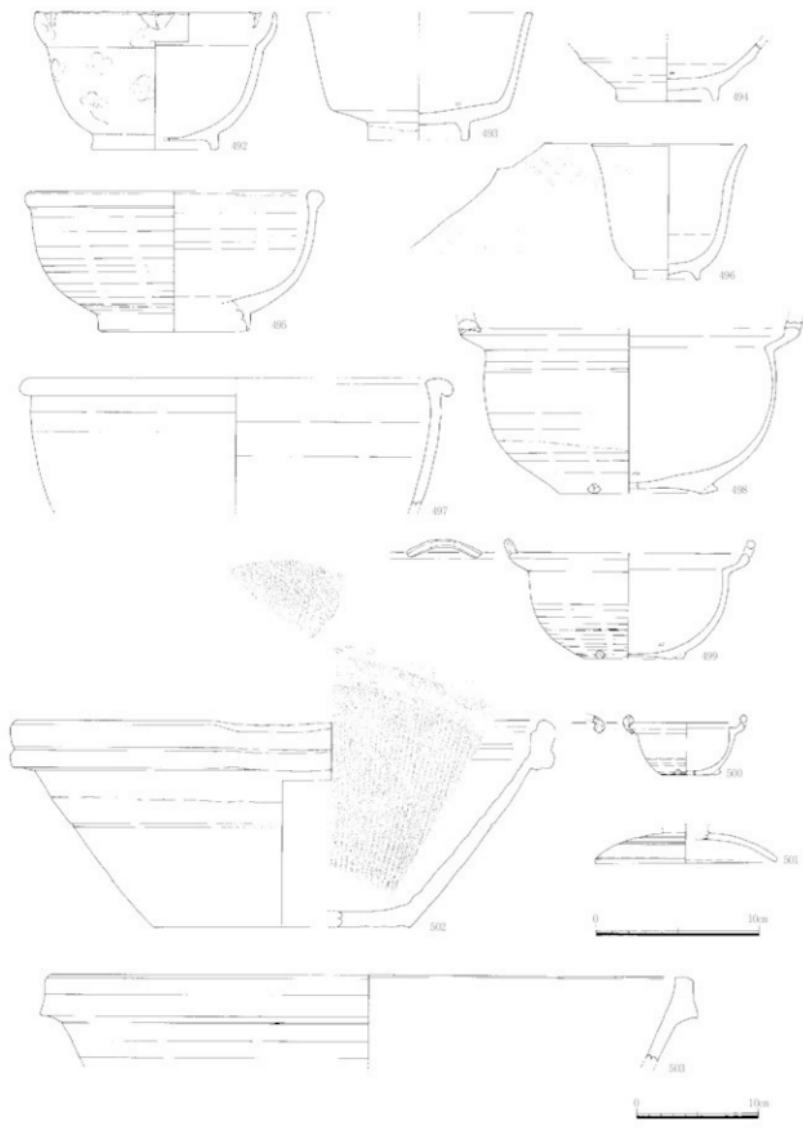


Fig.50 SK10出土遺物実測図 (5)

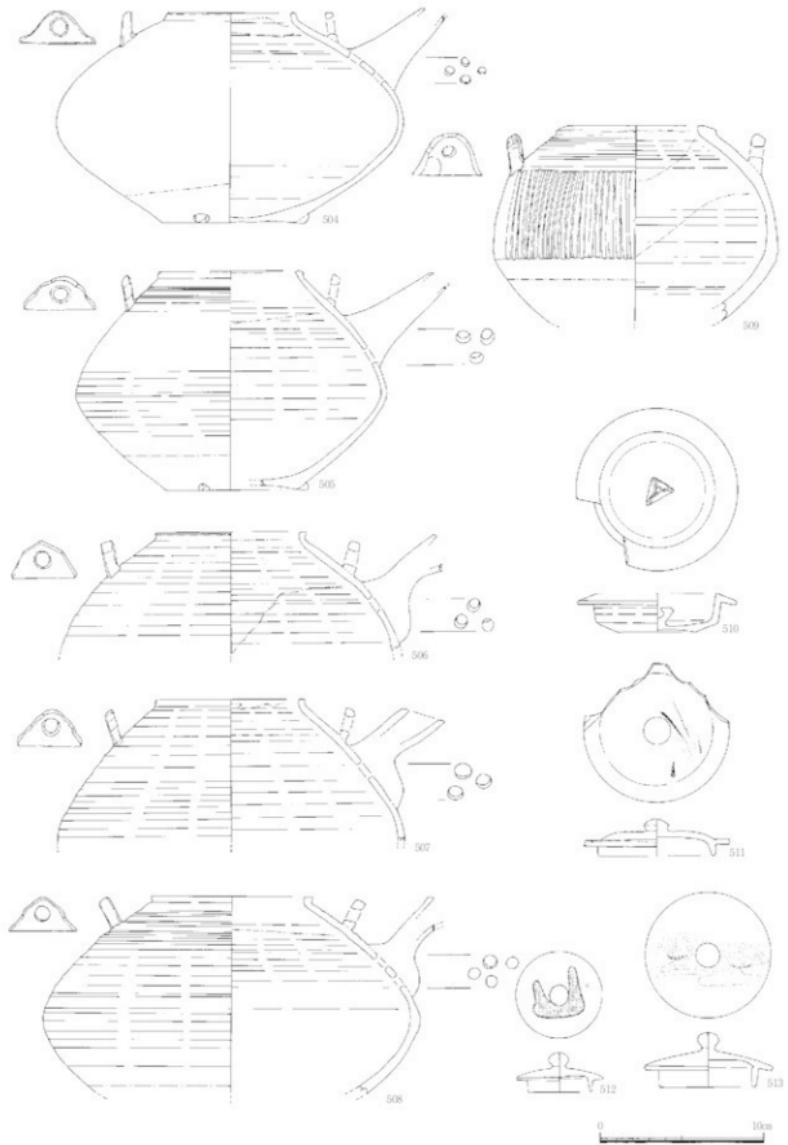


Fig.51 SK10出土遺物実測図 (6)

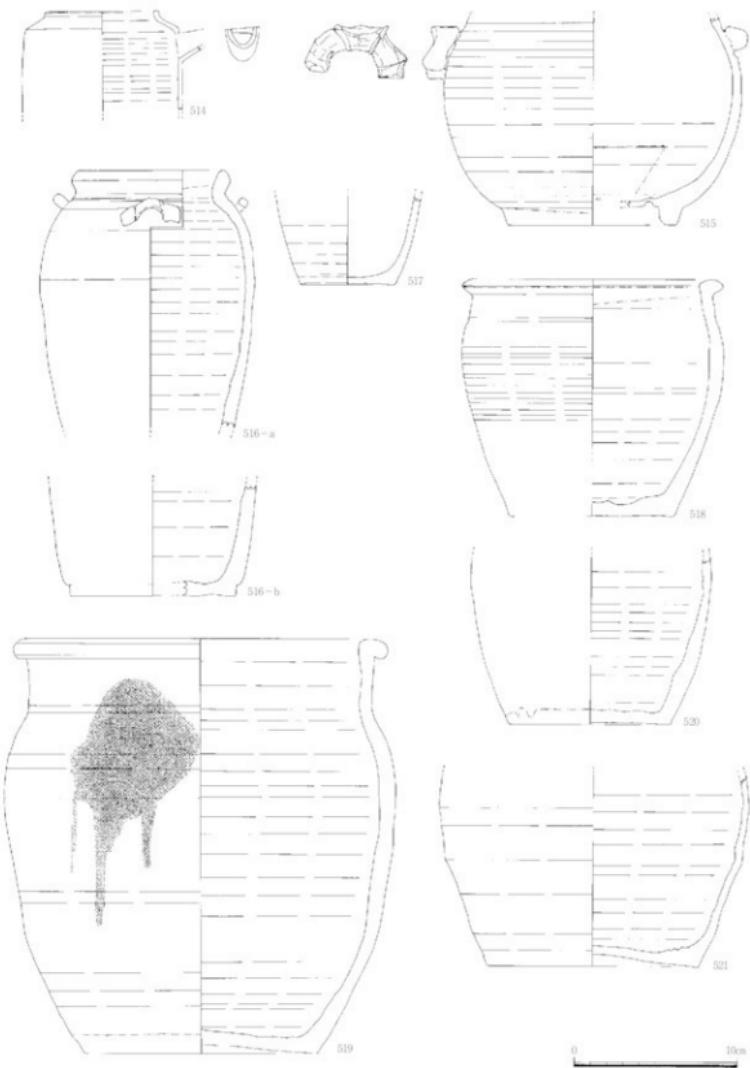


Fig.52 SK10出土遺物実測図 (7)

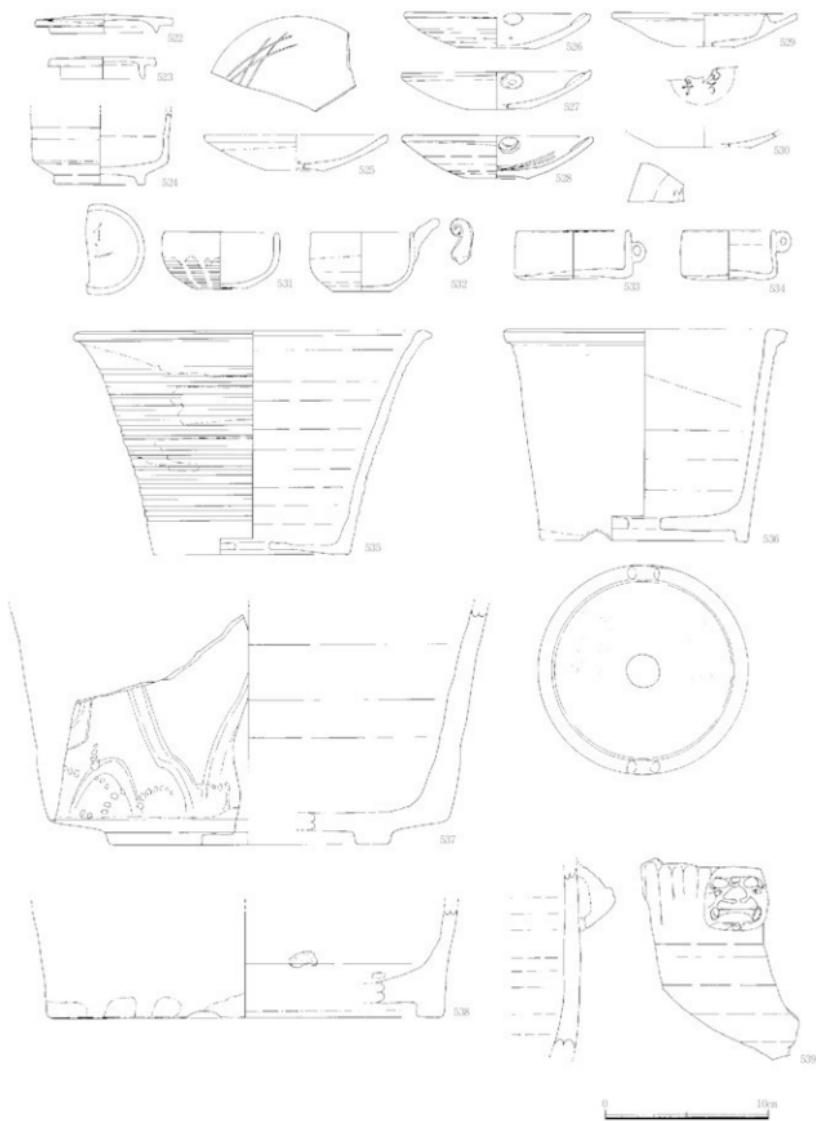


Fig.53 SK10出土遺物実測図 (8)

の沈線を巡らせ、中位に縦方向の沈線を施す。510～513は土瓶蓋。510は灰釉の土瓶蓋で、摘みは三方から内側に折り込んで変形させる。511は呉須で草文を描く。512は灰釉の土瓶蓋で、上面の一部に緑釉を流し掛けする。513は花木と土坡を描くもので、木は鉄錆、花は白土、土坡は白土と緑釉で描き分ける。514は水注。515は壺か。双耳を貼付し、黒褐色の釉を施す。516は灰釉の小壺。双耳を貼付し、淡黄色の釉を施す。517は尾戸窓の鉄釉瓶で、灰白色の胎土に褐色の釉を施す。518～521は壺。519・520は関西系の鉄釉蓋で、519は肩部に黒色の釉を流し掛けする。518は灰釉の壺。外面ににぶい黄褐色の釉、内面に錫釉を施す。522・523は京都・信楽系の灰釉蓋物蓋である。524は灰釉の蓋物で、外底に墨書を認める。525～529は京都・信楽系の灰釉灯明受皿。525は内面に交差する2条の櫛目を施す。526は内面に円形浮文、527は略化した菊花形の浮文を貼付する。528は円形浮文と櫛目を施すものである。529は外底に墨書を認める。530は鉄釉の灯明受皿で、にぶい黄橙

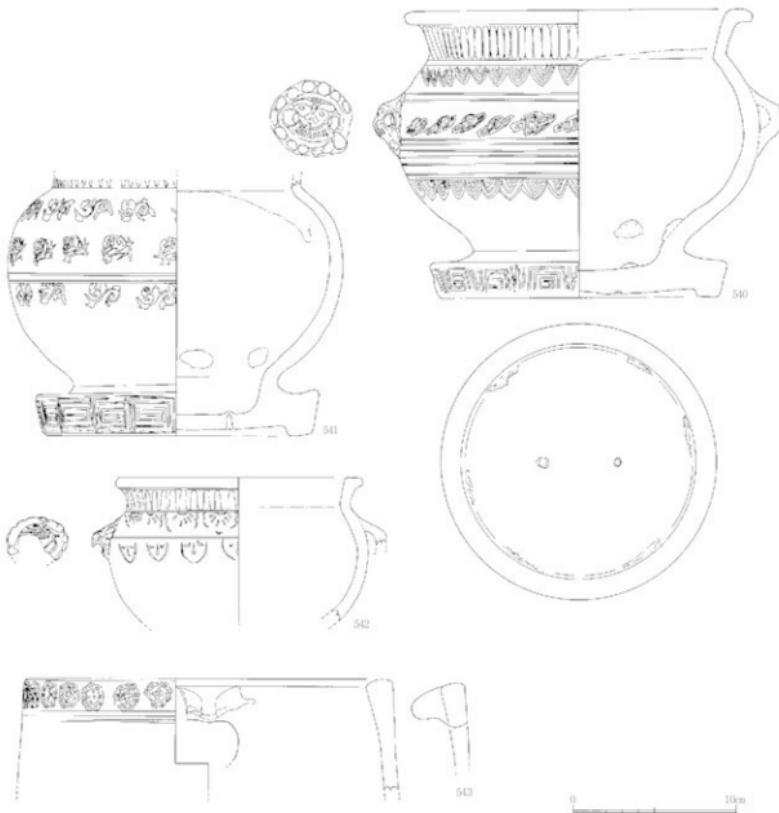


Fig.54 SK10出土遺物実測図 (9)

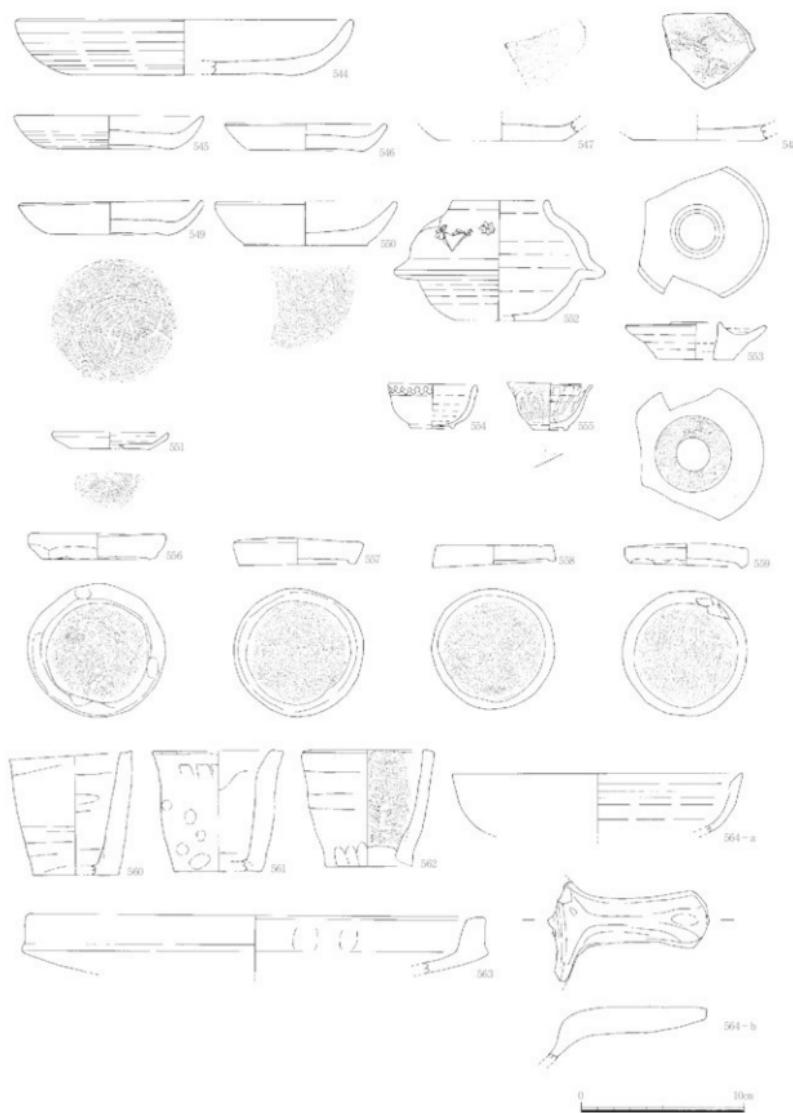


Fig.55 SK10出土遺物実測図 (10)

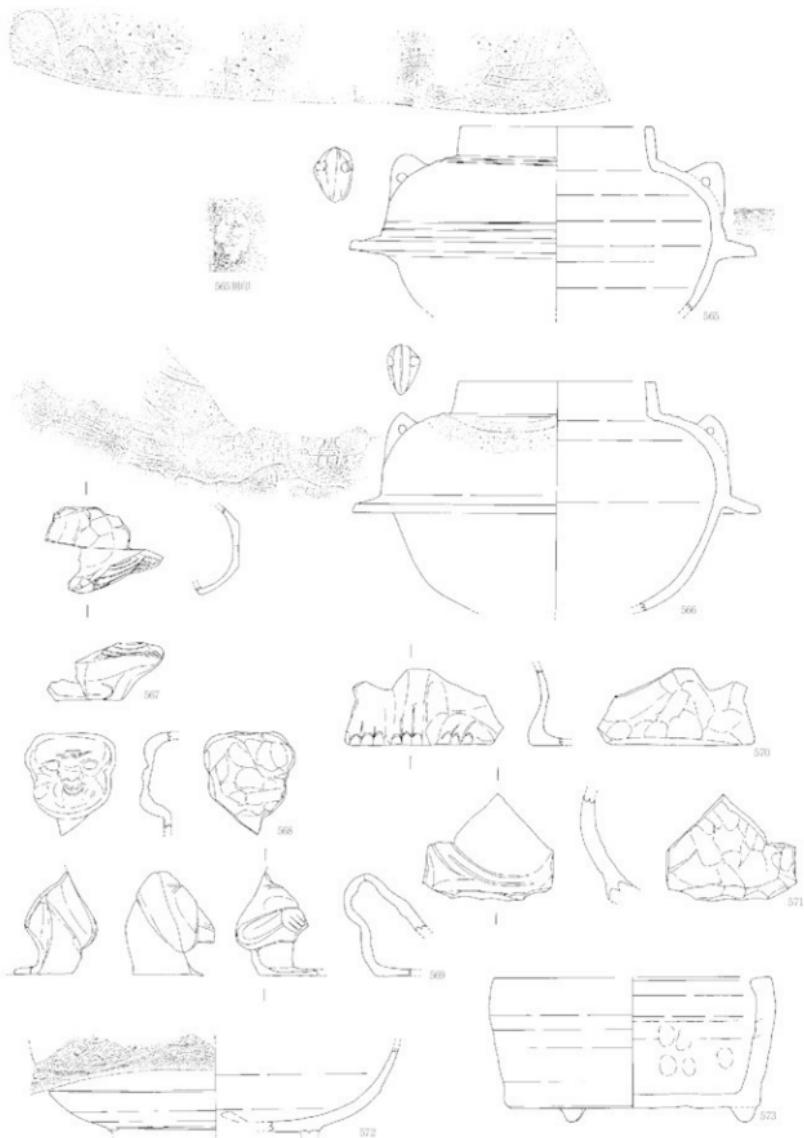


Fig.56 SK10出土遺物実測図(11)

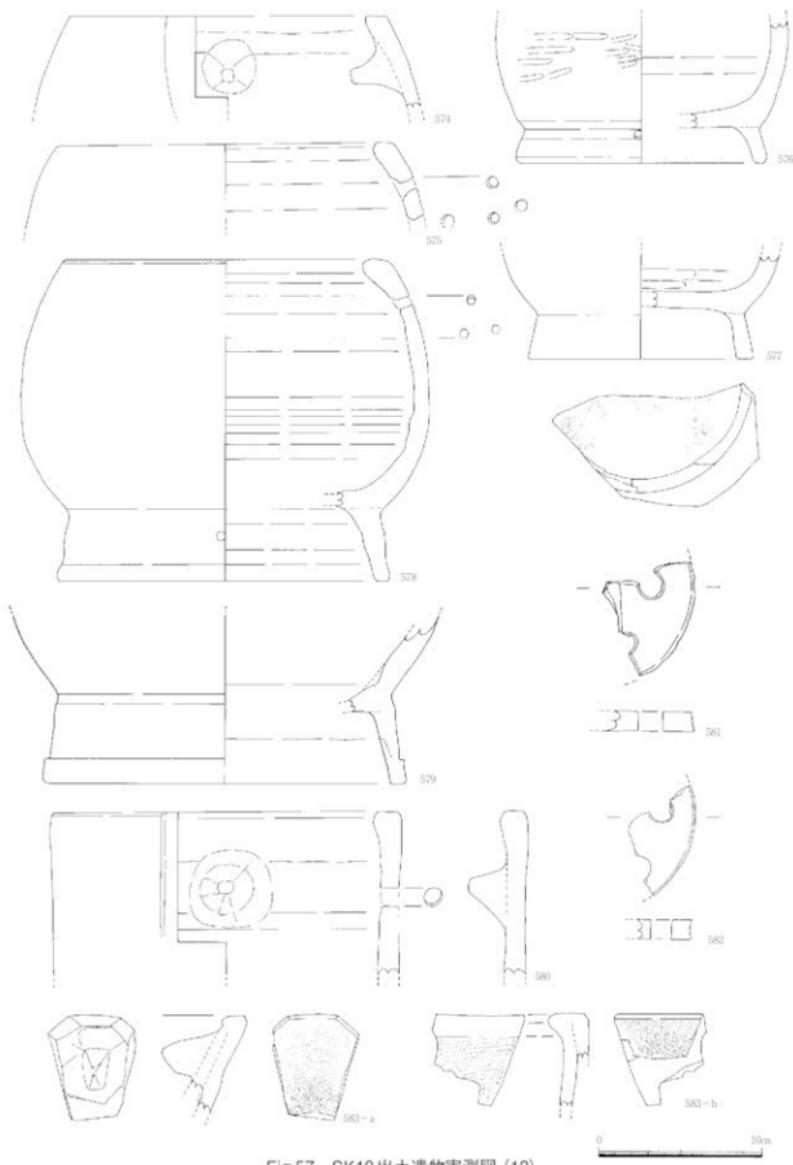


Fig.57 SK10出土遺物実測図 (12)

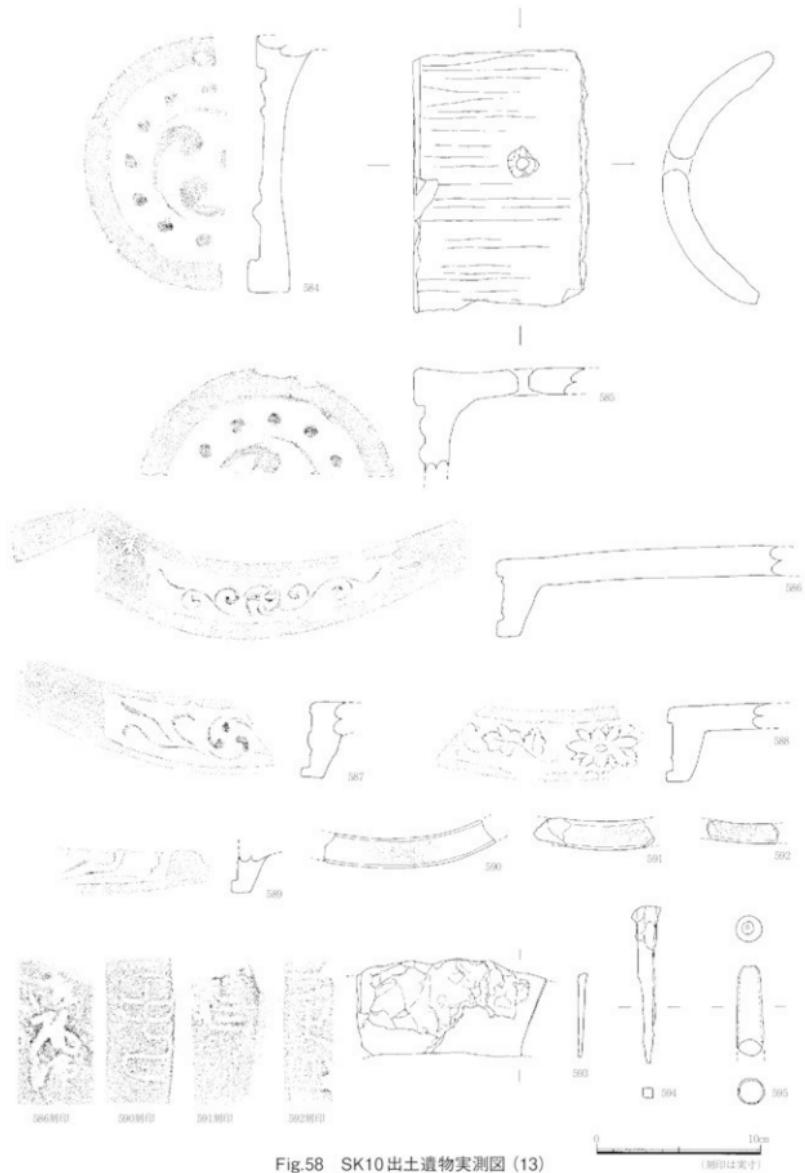


Fig.58 SK10出土遺物実測図 (13)

色の胎土に暗褐色の釉を施し、外底に墨書を認める。531・532は器種不明。532は手捏ねによる把手を貼付し、褐色の釉を施す。533・534は灰釉の餌猪口。535・536は植木鉢。535は焼締めの植木鉢で、外面に多条の沈線を巡らせ、黒褐色の釉を部分的に流し掛けする。536は鉄釉の植木鉢で、黒色の釉を施す。外底に墨書を認める。537は瀬戸・美濃産の灰釉水鉢で、片切彫りによる文様を施す。538～542は火鉢。538・540～542は瀬戸・美濃産の火鉢で、540～542は体部外面に印刻による文様と、丸彫りによる縞を巡らせる。何れも外面に緑色の釉を施し、内面に鉄錆を刷毛塗りする。540・542は獸面の双耳を認め、541は欠損する。539は外面上半に竈を配し、獸面の双耳を貼付するもので、釉は白湯する。543は瀬戸・美濃産の焜炉で、体部に窓をもち、内面上位に手捏ねによる突起を貼付する。外面に印花文と沈線を巡らせ、綠釉を施す。

544～554・556～563・567～571・574～582は土師質土器、555は施釉土器である。545～551は小皿で、545～550は口径10～11cm、551は口径7cmの法量をもつ。547・548は尾戸窯の白土器小皿で、胎土は灰白色を呈する。547は内底に型押しによる陽刻の寿字文を施し、内面周縁と外面に回転ナデ、外底に直線方向のナデを施す。548は内底に型押しによる陽刻の高砂文を施し、外底には不定方向のナデを施す。545・546は形態や調整痕から尾戸窯の製品とみられるもので、胎土はにぶい橙色を呈する。545はロクロ成形の後、内底にナデ、外面下半と外底に回転ケズリを施し、546はロクロ成形の後、内底にナデ、外底に回転ケズリを施す。549～551は内外面回転ナデで、外底に回転糸切り痕を残す。544は中皿で、形態や調整痕から尾戸窯の製品とみられる。外面下半と外底に回転ケズリ、内底には不定方向のナデを施す。553は盃台で、胎土は灰白色を呈し、外面に墨書を認める。552は京都系の釜で、胎土は灰白色を呈し、外面上位に印花文を巡らせる。563は関西系の焙烙である。560～562は焼塙壺、556～559は焼塙壺の蓋である。574～580は焜炉。574～579は丸形の焜炉で、574～576・578は関西産。577は外底に墨書を認める。580は筒形の焜炉で、前方に口縁部から切り込む窓をもち、内面に手捏ねによる突起を貼付する。外面に赤彩を施す。581・582は焜炉のさなである。567～571は人形で、567は鳥、568・569・571は人物、570は動物を表す。何れも中空で、568～571は型押成形前後貼り合わせ、567は型押成形左右貼り合わせによる。568～571は胎土が橙色～黄灰色、567は灰白色を呈する。554はミニチュアの碗で、胎土は灰白色を呈し、口縁部外面に型による陽刻文様を施す。555は施釉土器のミニチュアの碗で、外面下半に型による陽刻文様を施し、口縁部内外面に淡い緑色の低火度釉を施す。胎土は灰白色を呈し、高台内に墨書を認める。

564～566・572・573・583は瓦質土器。564は行平。565・566は茶釜で、外面上半に型による陽刻文様を巡らせる。565は鈎部の上面に銘印を認める。572・573は火鉢。572は外面ミガキで、体部中位に山水文とみられる陽刻文様を巡らす。573は三足を貼付する。583は筒形の焜炉で、内部施設をもち、内面の上位に手捏ねによる突起を貼付する。外面はミガキで、印花文を施す。

593は鉄製品で、包丁。594は鉄製の釘で、断面四角形。595は棒状のガラス製品である。

584～592は瓦で、584・585は軒丸瓦、586は軒棟瓦、587～589は軒棟瓦又は軒平瓦、590～592は棟瓦又は平瓦である。584・585は三巴文軒丸瓦で、珠数12個。586・587は中心飾りが三巴文、588は中心飾りが花文、589は丁字文である。このうち、586は「御瓦師」銘印をもち安芸（高知県安芸市）、590は小判杵内「中己」銘印をもち中山田（高知県香南市野市町中山田）の製品である。また、

591は角枠内「…□三」銘印、592は「三□□」銘印をもつ。

SK10は19世紀前半に比定される。

#### SK11 (Fig59・60)

調査区南部に位置する。西部が近代の攪乱を受け、南部も調査区外に出るため、平面形は不明であるが、東西残存長2.94m、南北確認長1.80m、深さ23cmを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質シルトで、床面直上に炭化物と木片が堆積する。他遺構との切り合い関係では、SK16を切っている。またSK10と切り合うが、埋土が同質のため、前後関係は不明である。この他、SK10とは出土遺物の接合関係があり、両者が同時期に機能したと推定できる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗4点・小杯7点・小皿又は五寸皿3点・鉢1点・碗蓋1点・瓶1点・蓋物3点・蓋物蓋2点・白磁紅皿2点・陶器中碗2点・小碗4点・小杯2点・小皿1点・鍋7点・土瓶6点・甕1点・蓋物1点・火鉢3点・灯明受皿7点・ひょうそく1点・植木鉢1点・ミニチュア2点・土師質土器中皿2点・小皿2点・鍋1点・焰烙2点・焼塩壺4点・焼塩壺蓋1点・火消し壺1点・火消し壺蓋1点・焜炉1点・人形1点・瓦質土器焰烙1点・焜炉2点・鉄釘4点・及び瓦片多数である。

図示したものは596～614である。596～601は磁器で、何れも肥前産。596～601は染付。596・597は丸形小碗で、菊花文と格子文を描く。600は広東形碗の蓋で、菖蒲と蝶を描く。598は蓋物、599は蓋物の蓋、601は練菫形の小瓶である。

602～607は陶器。602は尾戸窯の灰釉端反形中碗で、高台施釉。外面には白土と鉄錆で梅文を描く。603は尾戸窯の灰釉小碗、604は尾戸窯の灰釉小杯で、ともに高台無釉。605は手付皿台付のひょうそくで、黒色の釉を施す。606はミニチュアの鍋。607は瀬戸・美濃産の火鉢で、外面上半に緑釉、下半に鉄釉、内面に灰釉を施す。獸面の双耳を貼付し、外面上位に印刻による文様、下半に櫛描文を巡らせる。

608～612は土師質土器。612は鍋で、灰白色の胎土をもつ。体部外面にユビオサエを施す。611は関西系の焰烙。609は焼塩壺、608は焼塩壺の蓋で、ともに関西産。610は火消し壺の蓋で、内面に煤が付着する。

613・614は瓦質土器の焜炉で、613は内部施設を認める。

SK11は19世紀前半に比定される。

#### SK12 (Fig61～72)

調査区中央部に位置する。他遺構との直接的な切り合い関係はないが、SK12の下面でSK13が検出されている。平面形は不整形で、長軸7.50m、短軸4.70m、深さ26cmを測る。断面形は不整形で、床面は平坦でなく南部にテラス状の高まりをもつ。埋土は1層が灰黄褐色砂礫層、2層が灰黄褐色シルト、3～1層が褐灰色粘質シルト、3～2層が炭化物層で、3層内には炭化物、木片、木屑が多量に含まれる。この他、近接するSK6・7・10とは出土遺物の接合関係があり、同時期に機能したことが推定できる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗74点・小碗31点・小杯14点・薄手酒杯1点・小皿又は五寸皿35点・極小皿1点・鉢5点・猪口2点・碗蓋23点・瓶3点・蓋物5点・蓋物蓋11点・火入

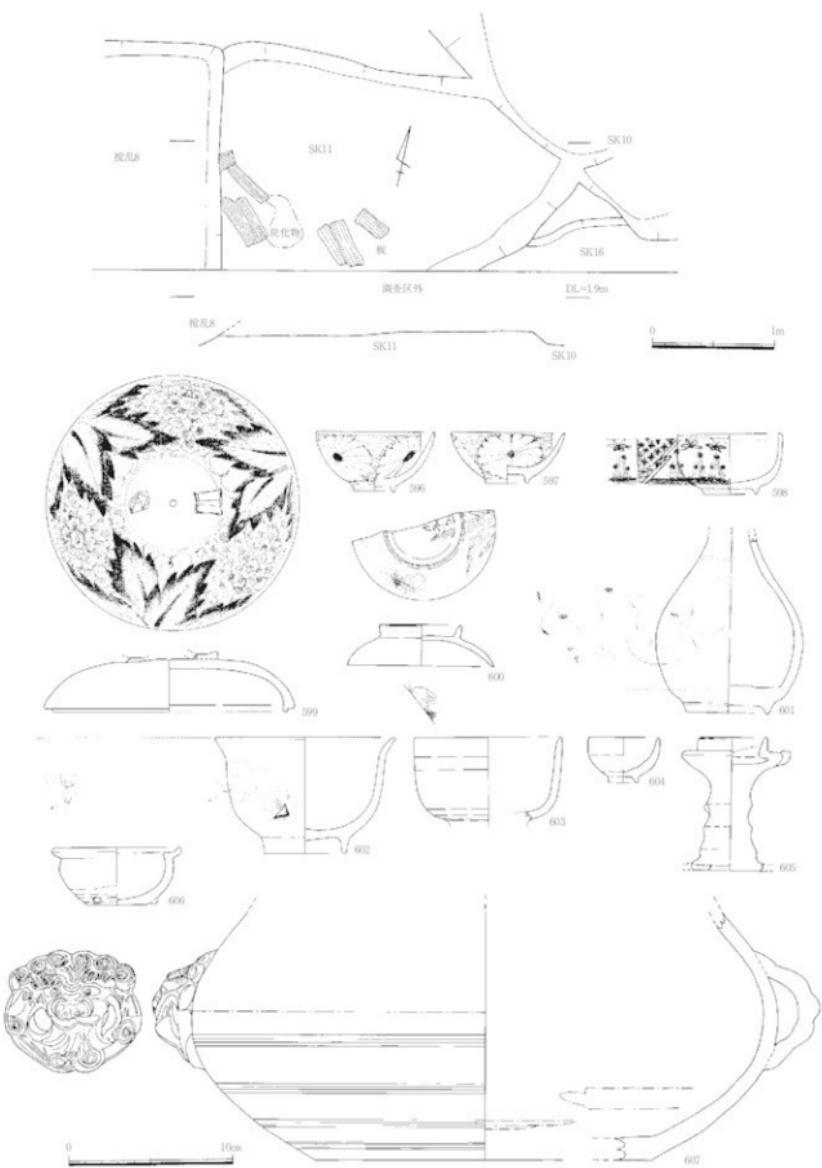


Fig.59 SK11平面図・エレベーション図・遺物出土状況図・出土遺物実測図(1)

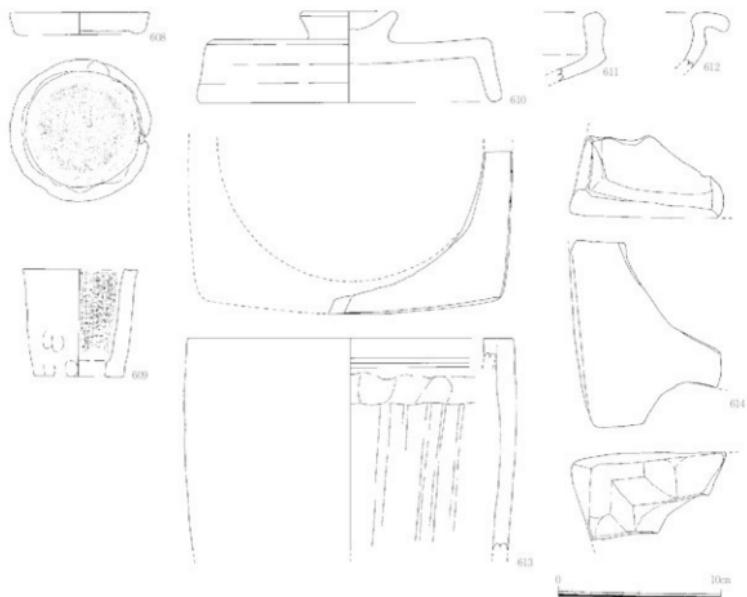


Fig.60 SK11出土遺物実測図 (2)

又は香炉1点、髪油壺2点、髪水入れ1点、合子1点、合子蓋1点、磁器色絵小杯2点、蓋物1点、紅皿1点、白磁小皿4点、紅皿35点、白磁又は染付瓶1点、陶器中碗70点、小碗16点、小杯1点、中皿2点、小皿7点、鉢1点、擂鉢14点、捏鉢8点、鍋21点、土瓶39点、土瓶蓋6点、爛徳利1点、瓶6点、水注4点、甕5点、蓋物8点、火鉢3点、灯明受皿39点、香炉又は火入3点、花生1点、灰吹き又は火入1点、鳥の水入れ5点、植木鉢3点、水鉢1点、ミニチュア1点、器種不明3点、陶器色絵小碗1点、軟質施釉陶器小皿1点、土師質土器碗又は杯6点、中皿15点、小皿43点、白土器小皿4点、鍋1点、熔塔5点、水注1点、焼塙壺24点、焼塙壺蓋19点、焜炉20点、人形13点、型1点、蓋1点、瓦質土器熔塔2点、土瓶1点、茶釜4点、火鉢4点、焜炉1点、施釉土器水注1点、ミニチュア1点、未製品4点、煙管1点、包丁1点、鉄釘4点、器種不明鉄製品1点、ガラス製品3点、寛永通宝1点、木製品、及び瓦片多数である。

図示したものは615～758である。615～644は磁器で、618は瀬戸・美濃産、その他は肥前産又は肥前系である。615～639・643・644は染付。615～618は中碗である。615・616は広東形中碗で、615は鶴と松、616は菱文を描く。617・618は罐反形中碗で、617は寿字文、618は花唐草文と帶線を描く。619～624は小碗。624は筒形の小碗で、見込みにコンニャク印判による五弁花文を施す。625・626は薄手酒杯である。625は撥状に開く高台をもち、高台内に「文政三年」年号を描く。吳須は暗オリーブ灰色に発色している。626も撥状に開く高台をもち、銘の有無は不明であるが、同タ

イブのものとみられる。627は浅半球形の小杯である。628は小皿で、蛇目凹形高台をもつ。629は五寸皿で、蛇目凹形高台。内面に山水文、高台内に「成化年製」銘を描く。630は長方形の極小皿で貼付高台。内面に山水文を描く。631・632は鉢。631は口縁部輪花形で、外面に芙蓉手による文様、内面に蝶子文と植物を描く。632は外面が窓に山水文、口縁部内面には墨書きによる雷文帯を巡らせる。633～635は碗の蓋。633は広東形碗の蓋で、歴手文を描く。634は大根と鼠を描いている。638は蓋物、636は蓋物の蓋、639は合子、637は合子の蓋である。643は鬚水入れ。梢円形で、



Fig.61 SK12平面図・セクション図・遺物出土状況図

雀文を描く。呉須は淡い青色で滲み、透明釉は粗い貫入が入る。644は火入又は香炉で、蛇ノ目四形高台。内面無釉で、内面に灰白色の砂が付着する。640は色絵の紅皿で、赤の上絵付による海老文を描く。641は白磁の菊花形紅皿。642は白磁又は染付の瓶である。

645～688は陶器。645・648・653～655は尾戸窯の灰釉中碗、649～652は尾戸窯の灰釉小碗で、何れも高台無釉である。このうち645・646・649・651・652は高台内に渦状の鉢痕を残し、647・653は高台内に乱れた渦状の鉢痕が残る。656は京都・信楽系の半球形色絵小碗で、外面に赤・黄・緑の上絵付による文様を施す。657は京都・信楽系の灰釉端反形小碗。658は灰釉端反形小碗で、内外面に鉄錆で文字を描く。659は京都・信楽系の灰釉小杯である。660は尾戸窯の灰釉丸形小皿で、見込み蛇ノ目釉剥ぎ。胎土は灰白色を呈し、灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。661は能茶山窯の鉄釉丸形小皿で、見込み蛇ノ目釉剥ぎ。胎土はにぶい黄橙色を呈し、黒褐色の釉を施す。663は灰釉の鉢で、灰白色を帯びる透明の釉を施す。662は堺産の擂鉢で、内底に櫛目を施す。665は鉄釉の鍋で、外面下半に単位の粗い回転ケズリ痕を残す。外面下半無釉で黒褐色の釉を施す。外底に「田の」銘印をもち、田野（高知県安芸郡田野町）産の可能性をもつ。664は鉄釉の鍋で、胎土は灰白色を呈し、褐色の釉を施す。能茶山窯又は尾戸窯産の可能性をもつ。667・668は鉄釉の算盤玉形土瓶、666は鉄釉の土瓶蓋である。669～672は水注。669は後手形の水注で、外面は白化粧土と透明の釉を施す。外面に鉄絵を描く。670は後手形の水注で、外面に白化粧土と透明の釉を施し、口縁部から線釉を流し掛けする。671は灰釉の水注で、呉須で柳と東屋を描く。673は灰釉の爛滌利。674は灰釉瓶である。675は鉄釉の壺で、肩部に多条の凹線を巡らせ、部分的に黒色の釉を流し掛けする。676は尾戸窯の製品で、桶形の花生か。柄は切り出しと貼付により、体部外面はヘラ描きで板や紐を表現する。灰白色を帯びる透明の釉を施す。677は尾戸窯の灰釉花生である。内面施釉で、透明の釉を施し、口縁部に暗オリーブ色の釉を流し掛けする。682・683は京都・信楽系の灰釉蓋物、678は蓋物の蓋で、683は高台内に墨書を認める。679・680は京都・信楽系の灰釉灯明受皿で、679は菊花形の浮文を貼付し、680は内面に2条の櫛目を施す。679は口縁部外面にタール状の煤が付着する。686は灰吹き又は火入で、外面は白化粧土の後透明の釉を施し、口縁部外面に線釉を流し掛けする。口縁端部に敲打痕が残る。688は尾戸窯の鳥の水入れで、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。687は瀬戸・美濃産の灰釉植木鉢。灰白色を帯びる光沢の強い透明の釉を施す。681はミニチュアの鍋で、暗褐色の釉を施す。684・685は器種不明。684は尾戸窯又は京都系の製品で、内面施釉。灰白色を帯びる半透明の釉を施す。685は黄褐色を帯びる半透明の釉を施す。689・690は素焼きで、碗の未製品か。近隣に所在する尾戸窯からもたらされた可能性をもつ。

691～720・730～734・736～741・745は土師質土器。691・692は椀で、尾戸窯産の可能性をもつ。691は外面下半と外底に回転ケズリ、692は外面下半に回転ケズリ、外底に回転ケズリ後ナデを施す。ともに下位に焼成後円孔を穿ち、691は口縁部内外面に、692は内面に煤が付着する。693～702は小皿で、701・702が口径6～8cm前後、693～700が10～13cm前後の法量をもつ。693・694は尾戸窯の白土器小皿。693は内面に型押しによる陽刻の松竹梅鶴亀文、694は寿字文を施し、693は外面下半と外底に回転ケズリ後ナデ、694は外面に回転ナデ、外底に不定方向のナデを施す。695～700は尾戸窯の小皿で、695・696は外面下半と外底に回転ケズリ、697～699は外面下半と外底に回転ケ

ズリ後ナデ、700は外面に回転ナデ、外底に回転ケズリ後ナデを施す。701・702は外底に回転糸切り痕が残る。703～706は尾戸窓の中皿で、外面下半と外底に回転ケズリ後ナデ、内底にナデを施す。704～706は内底に焦げが付着し、焰烙として使用された可能性がある。707は関西系の焰烙である。708は白色系の胎土をもつもので、鍋か。713～718は関西産の焼塙壺、709～712は焼塙壺の蓋である。719は京都系の水注、720は蓋で、ともに白色系の胎土をもつ。730～734・736は焜炉。730～733は丸形の焜炉で、730・733は体部前方に窓を認める。730・731は関西産で、内面上位に手捏ねによる突起を貼付する。732は在地系の可能性をもつもので、型作りによる突起を貼付する。733は外底に墨書を認める。734は箱形の焜炉で、窓の形状は不明。内部施設をもち、内面上位に手捏ねによる突起を貼付する。外面に扇状の双耳を貼付する。736は筒形の焜炉で、体部前方に底部から切り込む窓をもつ。内面下位には断面三角形のさな受けを貼付する。737～740は人形で、737は人物、738は魚、739は亀を表す。何れも型押成形貼り合わせにより、中空。内面にユビオサエとナデを施す。741は型。745は円盤状の土器製品である。

725～729・735は瓦質土器。727は土瓶で、外底に型による三足と銘をもつ。725・726は茶釜で、外面上半に型による陽刻文様を巡らせる。ともに鈎部に丸枠内「吉」銘印をもつ。728・729は火鉢。735は箱形の焜炉で、内部施設をもつ。外面に炭素吸着を施し、内面はハケ調整である。関西産で、小判枠の銘印をもつ。

721・722は施釉土器。721はミニチュアの水注で、型押成形上下貼り合わせにより、把手と注口は貼付する。外面に型による陽刻文様を施す。にぶい橙色の胎土に、緑色の低火度釉を施す。722はミニチュアの碗で、外面に型による蓮弁文を巡らせ、灰白色の胎土に緑色の低火度釉を施す。高台内に墨書を認める。723は軟質施釉陶器の小皿で、内面に型による陽刻の鶴文が施される。灰白色の胎土をもち、内面に緑色と黄色の低火度釉、外面に透明の釉を薄く施す。724も軟質施釉陶器の小皿。内面は型による陽刻の蝶文で、薄緑色の低火度釉と鉄錆を施す。

744は鉄製品で、器種不明。尖端部を欠損しており、頭部に円孔を穿つ。742・743はガラス製品で、器種不明。742は白色を帯びる半透明のガラスで、平坦な底部をもつ。743は棒状で、断面は梢円形を呈する。白色を帯びる半透明のガラスで、表面に灰白色の顔料を施す。

746～750は木製品。746は桶又は曲物の底板で、片側を欠損するが、残存部分は一枚板を円形に削り出している。747は曲物の蓋で、残存部分は一枚板を円形に削り出している。棒状の摘みは差し込みによる。748～750は用途不明の板状製品。748は尖端部を薄く削り出しており、釘穴とみられる径0.3cmの円孔を穿つ。749は釘穴とみられる径0.2cmの円孔を数箇所に穿つ。750は断面長方形で、尖端部は薄く削り出す。径0.3cmの円孔を穿つ。

751～758は瓦で、751～753・756は軒棟瓦、754・755は軒棟瓦又は軒平瓦、758は棟瓦、757は棟瓦又は平瓦である。中心飾りは751が三巴文、752～754が萬文である。このうち、756は「アキ」、757は「アキ□」銘印、758は「御瓦師」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）産。751も「御瓦師」とみられる銘印をもち、安芸産の可能性をもつ。752・753は小判枠内「中己」銘印をもち、中山田（高知県香南市野市町中山田）の製品である。

SK12は19世紀前半に比定される。

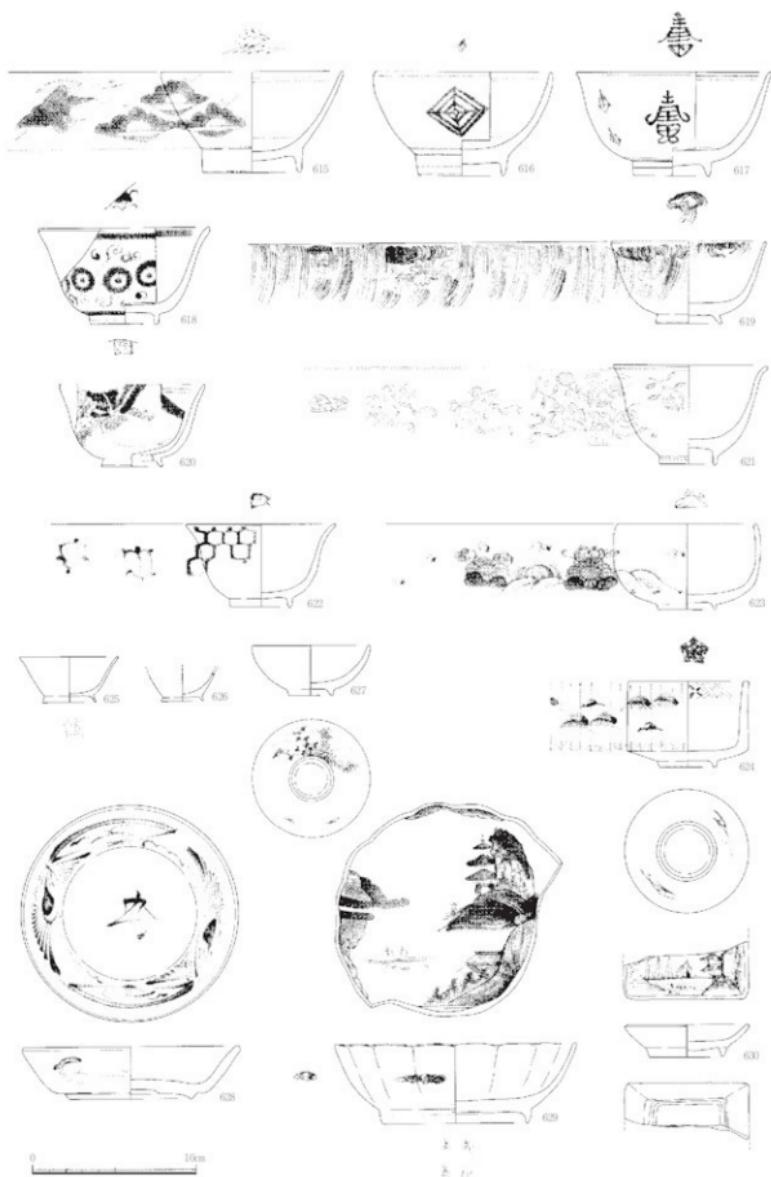


Fig.62 SK12出土遺物実測図 (1)

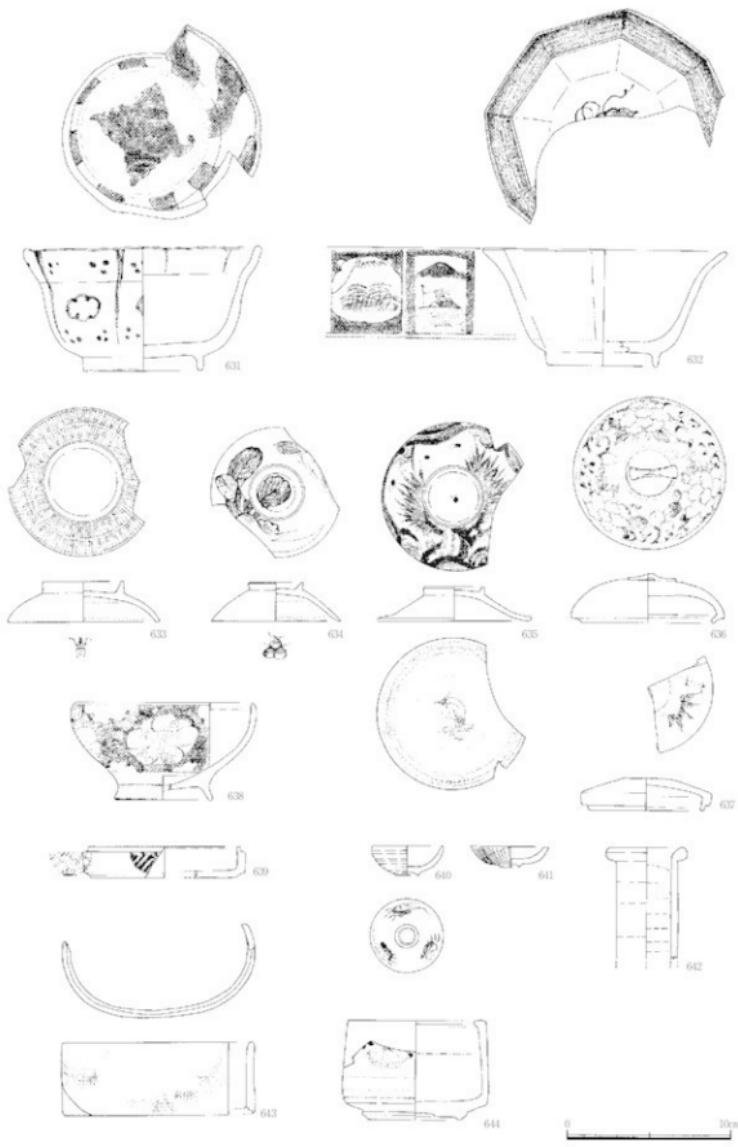


Fig.63 SK12出土遺物実測図 (2)

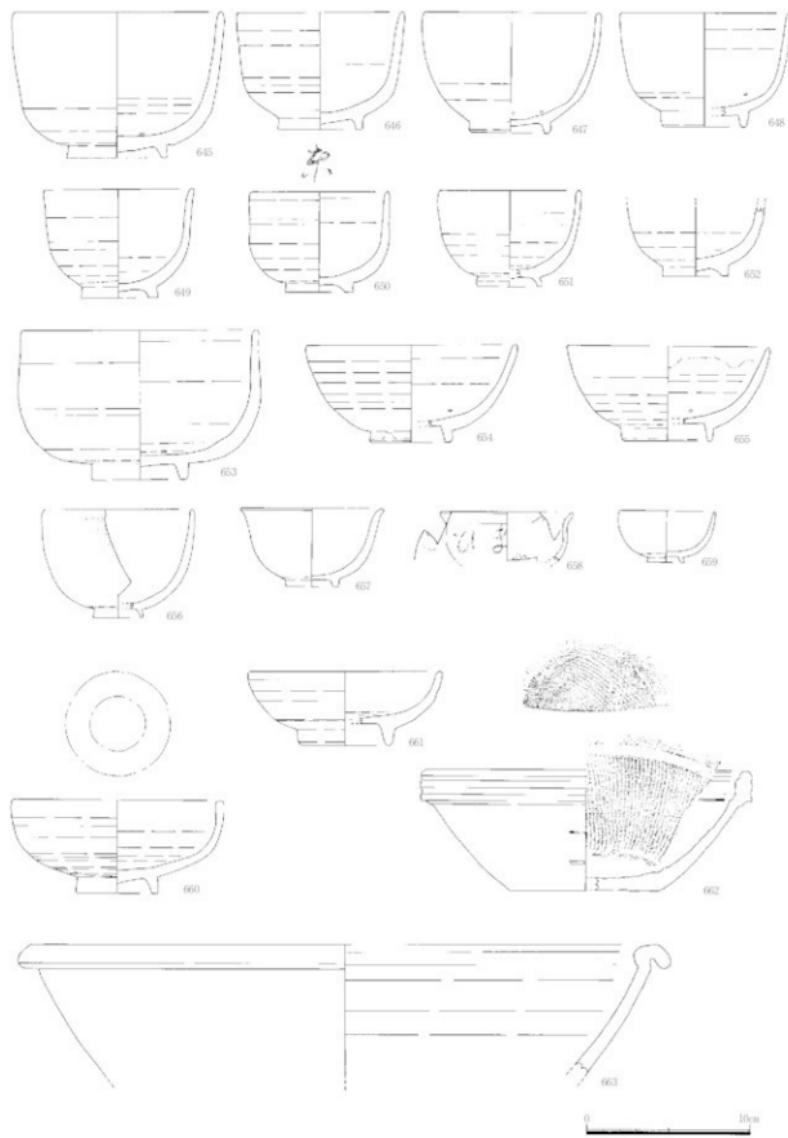


Fig.64 SK12出土遺物実測図 (3)

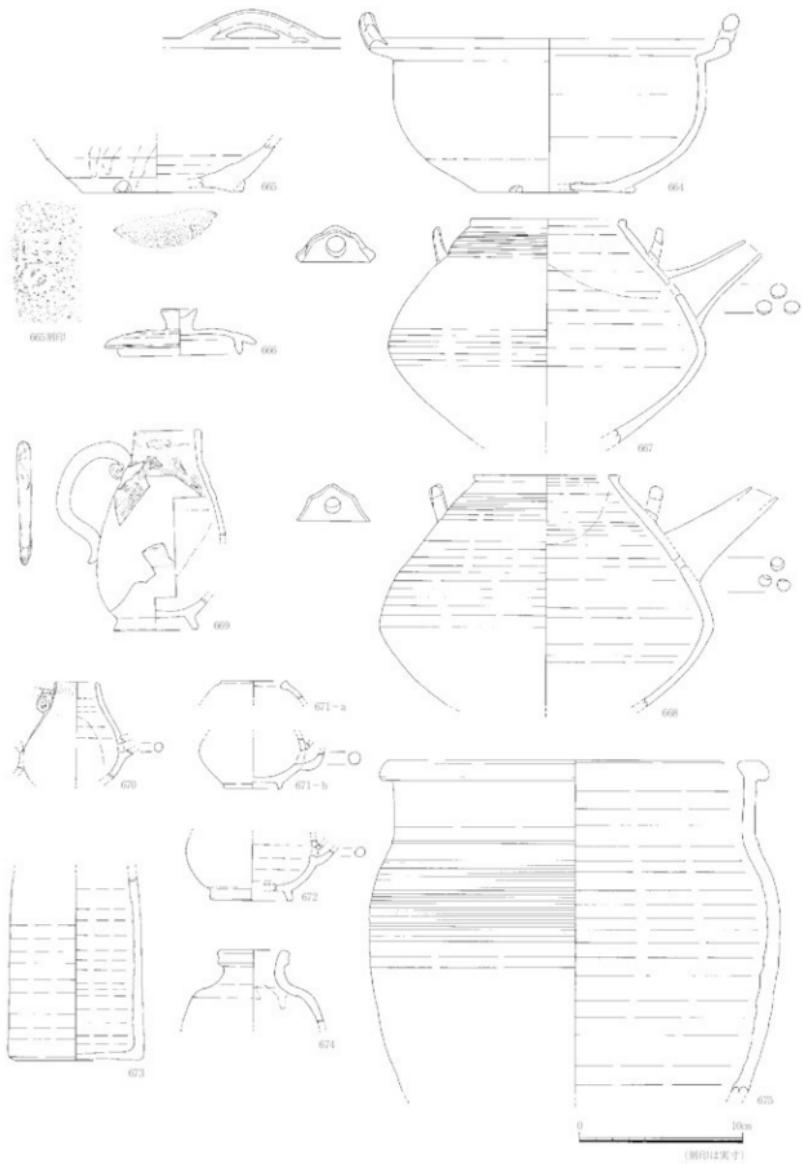


Fig.65 SK12出土遺物実測図(4)

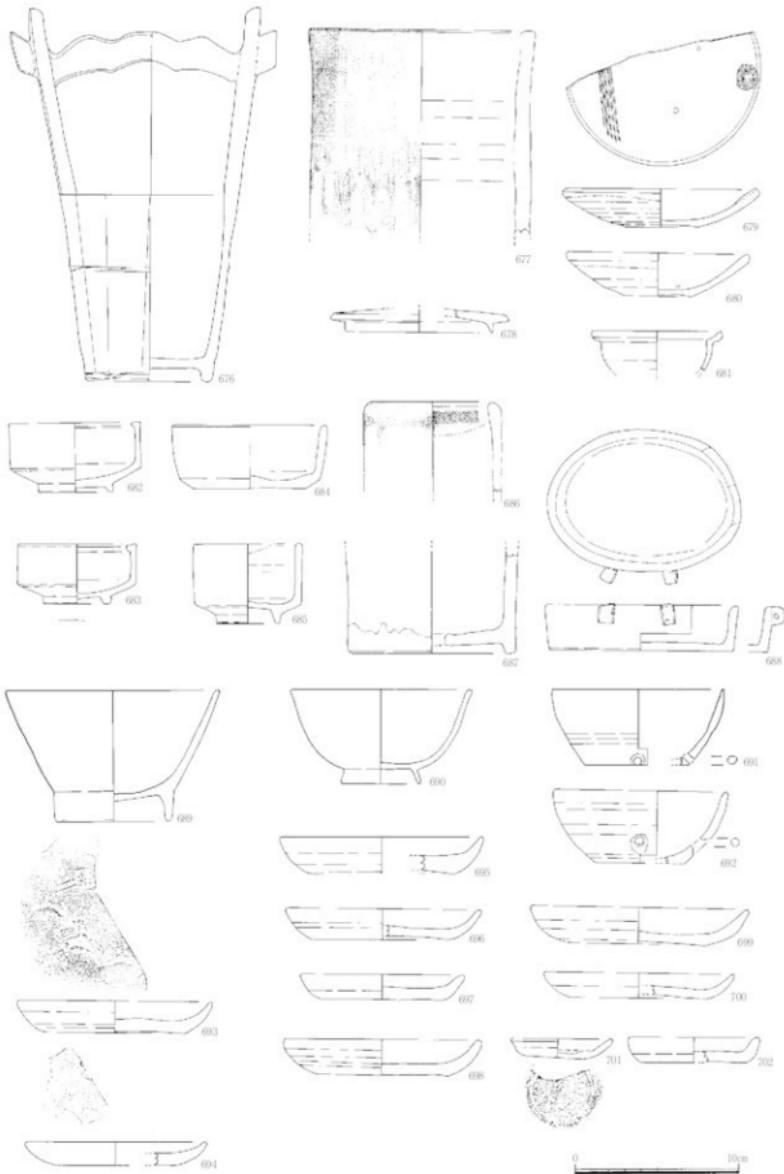


Fig.66 SK12出土遺物実測図 (5)

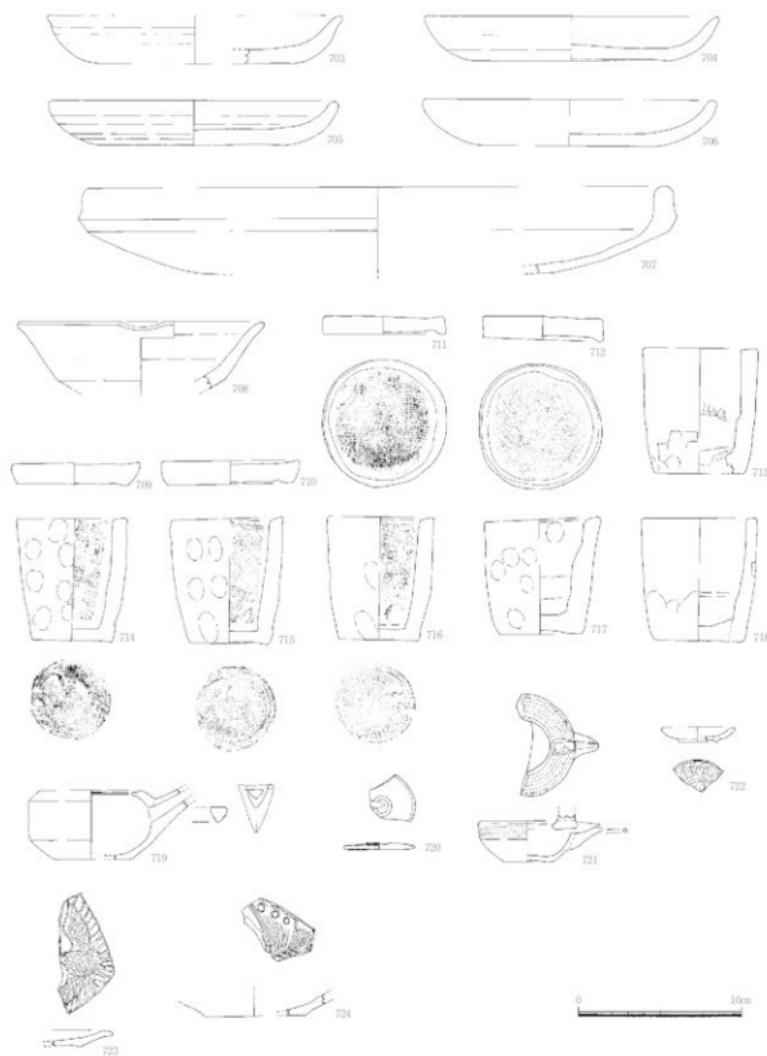


Fig.67 SK12出土遺物実測図(6)

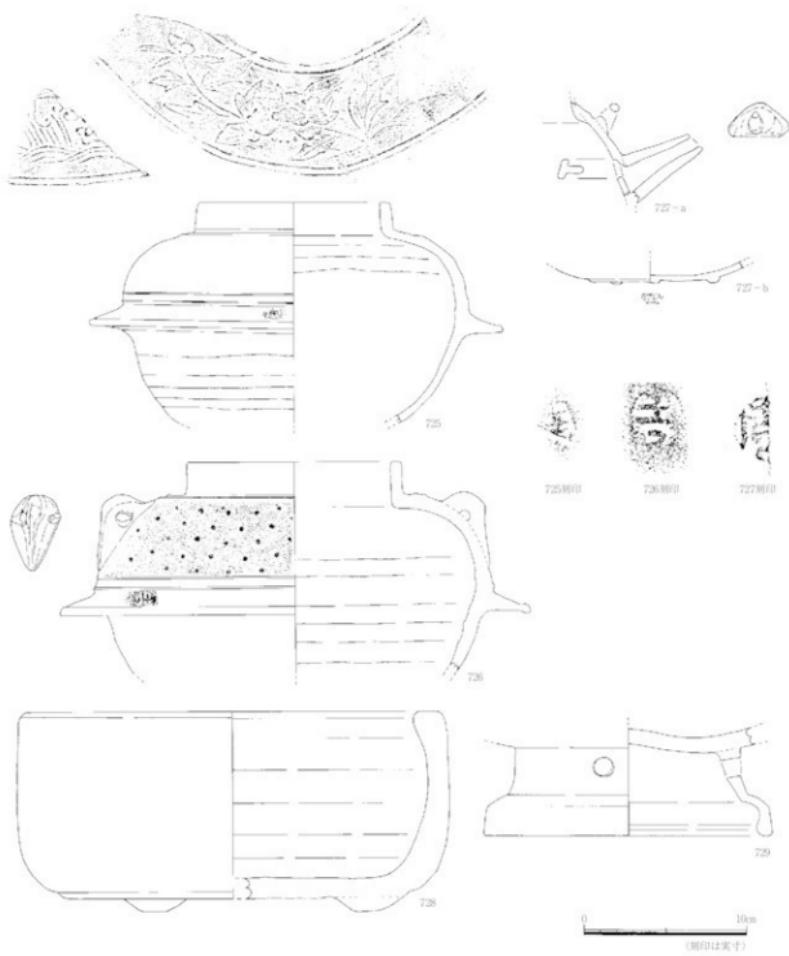
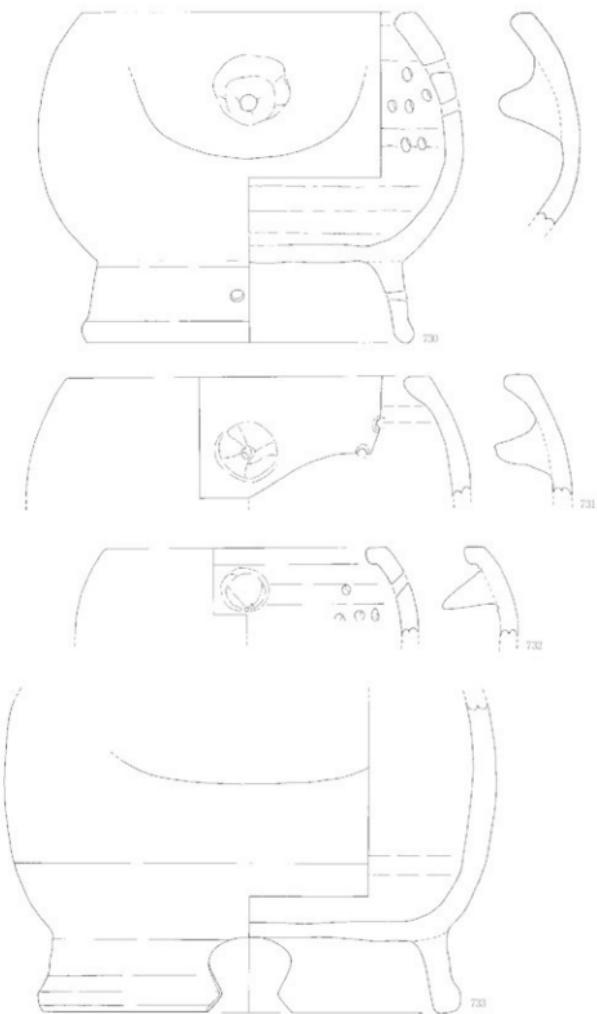


Fig.68 SK12出土遺物実測図 (7)



0 10cm

Fig.69 SK12出土遺物実測図 (8)

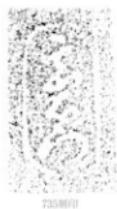
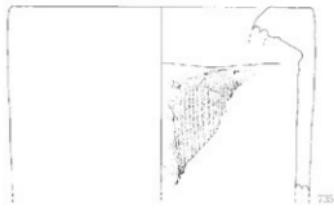
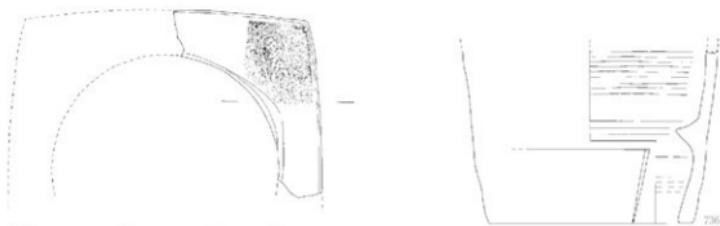
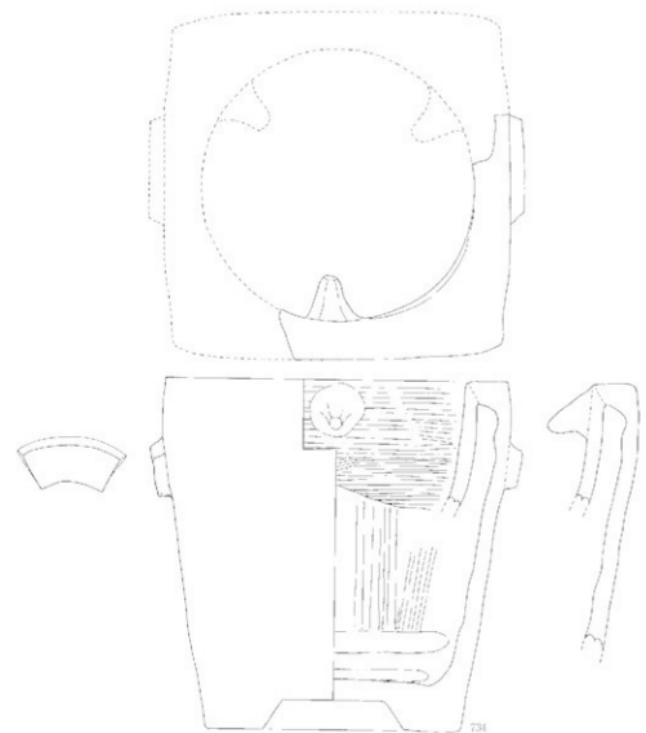


Fig.70 SK12出土遺物実測図(9)

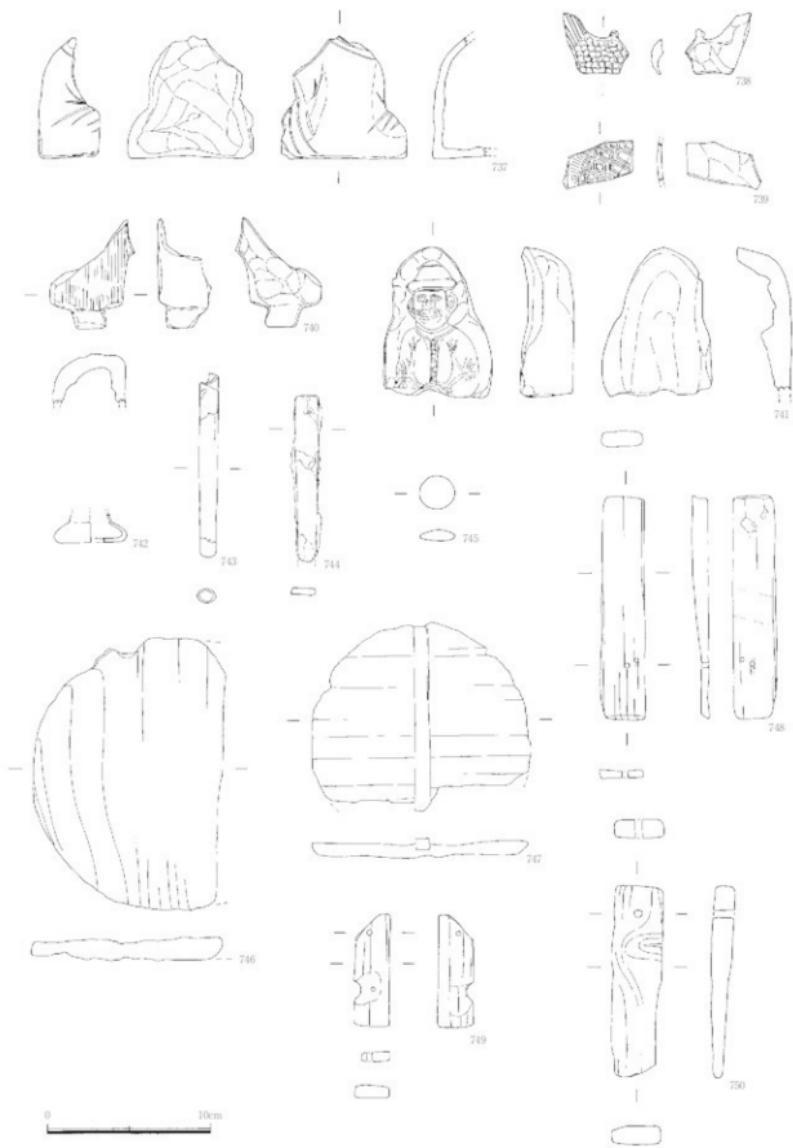


Fig.71 SK12出土遺物実測図(10)



Fig.72 SK12出土遺物実測図 (11)

### SK13 (Fig.73~77)

調査区中央部の下層面にて検出された土坑で、SK12の下面にて確認した。平面形は楕円形を呈し、長軸3.10m、短軸1.63m、深さ40cmを測る。断面形はU字形である。埋土は1~1層が灰黄褐色粘質シルト、1~2層が灰色シルト、2~1層と2~2層が黒褐色粘質シルトで、2層内には木片と木屑を多く含む。最下層の3層は木屑と木片の堆積層である。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗2点・中皿1点、染付又は白磁の瓶1点・器種不明1点、青花碗4点・小皿1点、陶器中碗2点・小碗1点・小皿10点・向付1点・瓶1点・壺1点、土師質土器小皿28点・小皿又は椀1点、煙管1点、包丁1点、碁石1点、及び木製品と木片、瓦片約70点である。

図示したものは759~807である。759~760・764・765は磁器で、何れも肥前産。759~760は染付、764・765は染付又は白磁である。759・760は初期伊万里の碗。764は器種不明、765は瓶である。761・762は中国景德鎮窯系の青花碗。761は古染付で、外面に網目文を描く。763は青花皿である。

766~776は陶器。766は京焼で、灰釉を施し、鉄錆による草花文を描く。767は肥前産の碗で、黒褐色の素地に白化粧土刷毛目を施す。768は尾戸窯の灰釉端反形小碗である。769~773は小皿で、何れも肥前産。769・770は唐津系灰釉陶器の小皿で、口縁部は溝縁状を呈する。769はオリーブ灰色の釉を施し、内底に砂目痕が残る。771は胎土は黄灰色を呈し、内面に白化粧土刷毛目を施す。内底に砂目痕が残る。772は灰釉の小皿で、灰オリーブ色の釉を施す。773も灰釉小皿で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。内底と疊付に砂目痕が残る。774は織部焼の向付で、内面に鉄錆と白土で扇文を描き、部分的に緑釉を施す。776は鉄釉の瓶で、暗赤褐色の釉を施す。775は鉄釉の壺。外面ナデ、内面タタキ後ナデで、内面に円團状のタタキ目が一部残る。内面施釉で、黒褐色の釉を施す。

777~781は土師質土器。777~780は小皿で、何れも径9~11cm前後の法量をもつ。内外面回転ナデで、底部が残存する777・778・780は外底にナデを施す。781は小皿又は椀の底部で、内外面回転ナデ、外面下位にケズリ、外底は回転糸切りの後ケズリを施す。

782~800は木製品。782は漆椀で、外面に黒漆、内面に赤漆を施す。783は黒漆の匙で、刃り貫きによる。把手の根元に刃り込みを認める。784は籠状製品で、片側部分を欠損する。柄の部分は厚く、尖端部は削り出しによって薄くなる。785は用途不明の棒状製品で、断面は長方形。786~792は棒状の製品で、箸とみられる。何れも側面に面取りを施しており、786~788・792は断面四角形、その他は不整形で、787・788・790・791は面取りによって尖端部が窄まる。793は桶の側板か。下部は内側が削られ薄くなる。794は桶又は曲物の底板か。数枚の板を組み合わせたもの的一部とみられ、接合部の数箇所に釘穴が残る。795~797は連歛下駄の歛の部分で、795・796は逆台形。何れも歛の接地面が使用によって摩耗する。798は摺状製品で、栓か。断面は円形で、側面を面取りしており、尖端部は窄まる。799は用途不明の板状製品で、径0.3cmの円孔を等間隔で数箇所に穿つ。800は棒状製品で、断面長方形。尖端部を薄く削り出し、先端部の2箇所に円孔が残る。

802は銅製の煙管。803は鉄製の包丁。801は碁石とみられる。

804~807は瓦。804~806は桐紋の棟飾り瓦である。粗製の作りで、表面は粗く灰色に発色する。807は鬼瓦の一部を砥石に転用したものか。

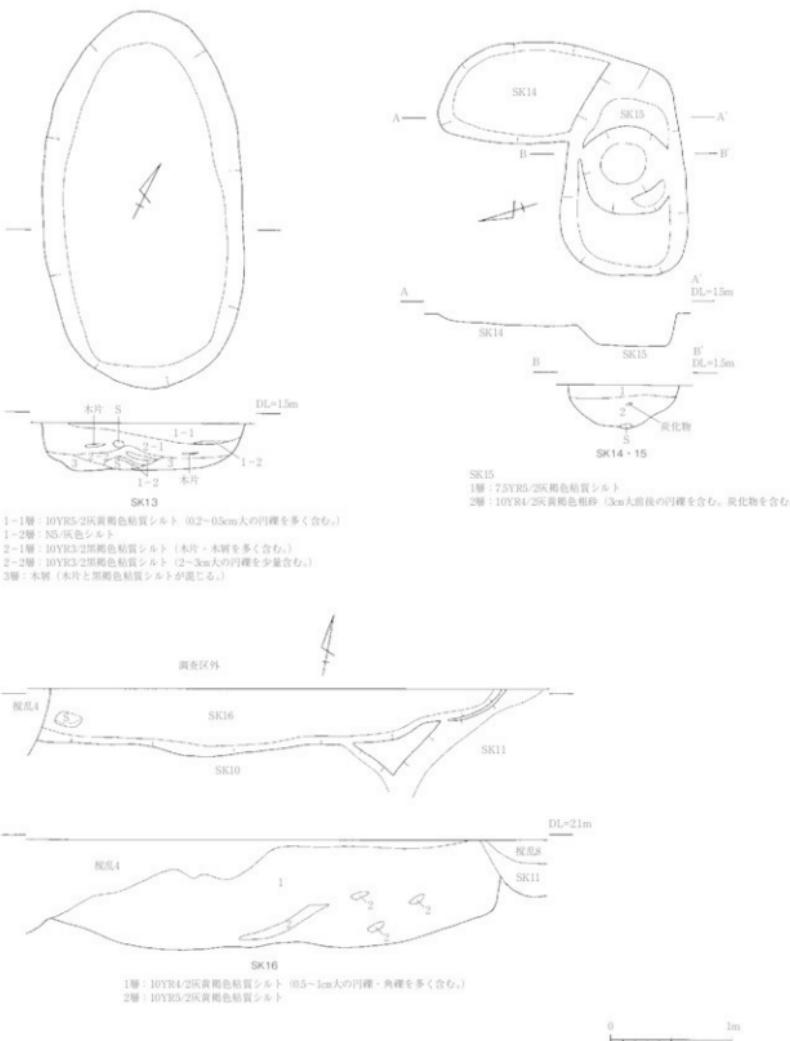


Fig.73 SK13～16平面図・セクション図・エレベーション図

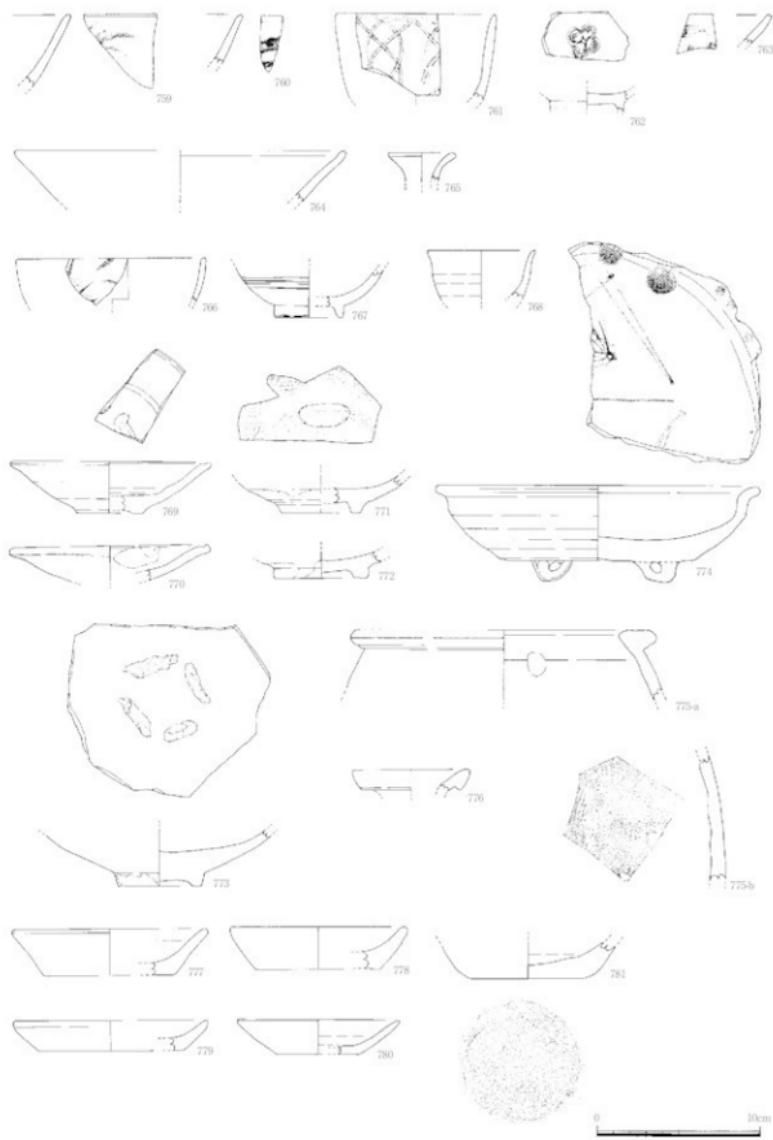


Fig.74 SK13出土遺物実測図(1)

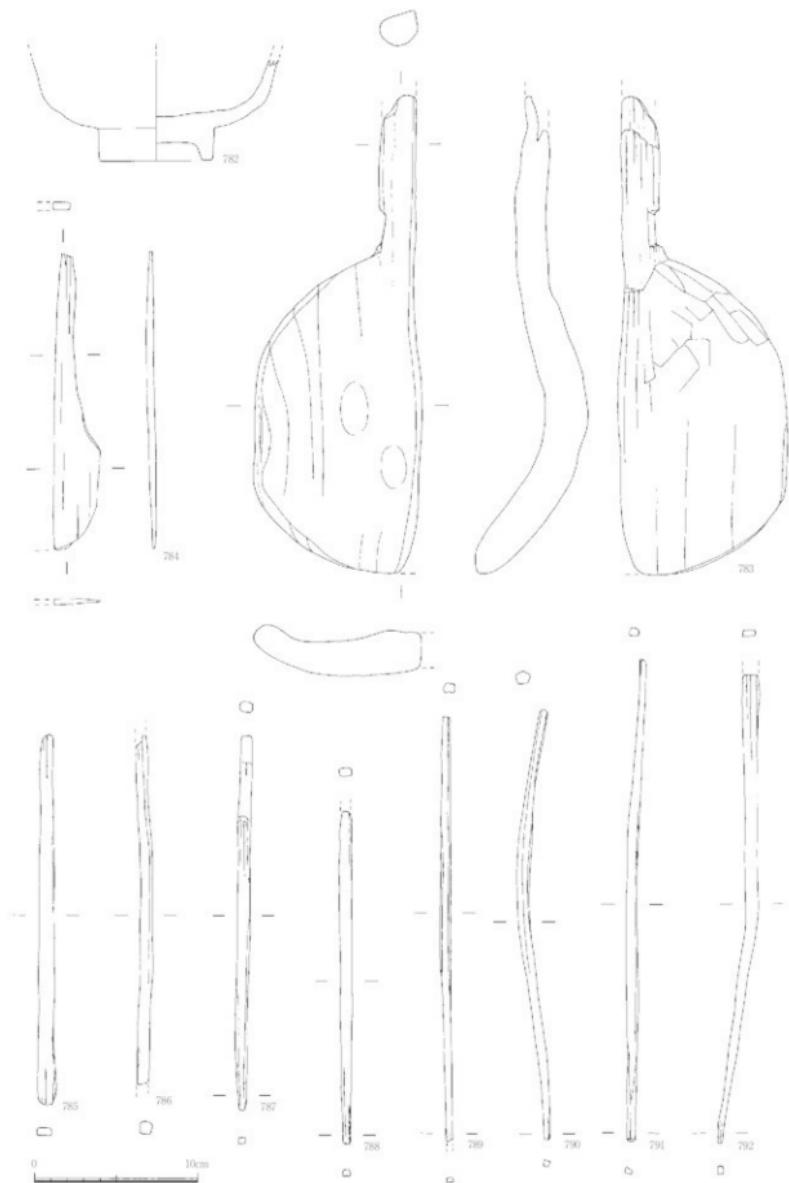


Fig.75 SK13出土遺物実測図 (2)

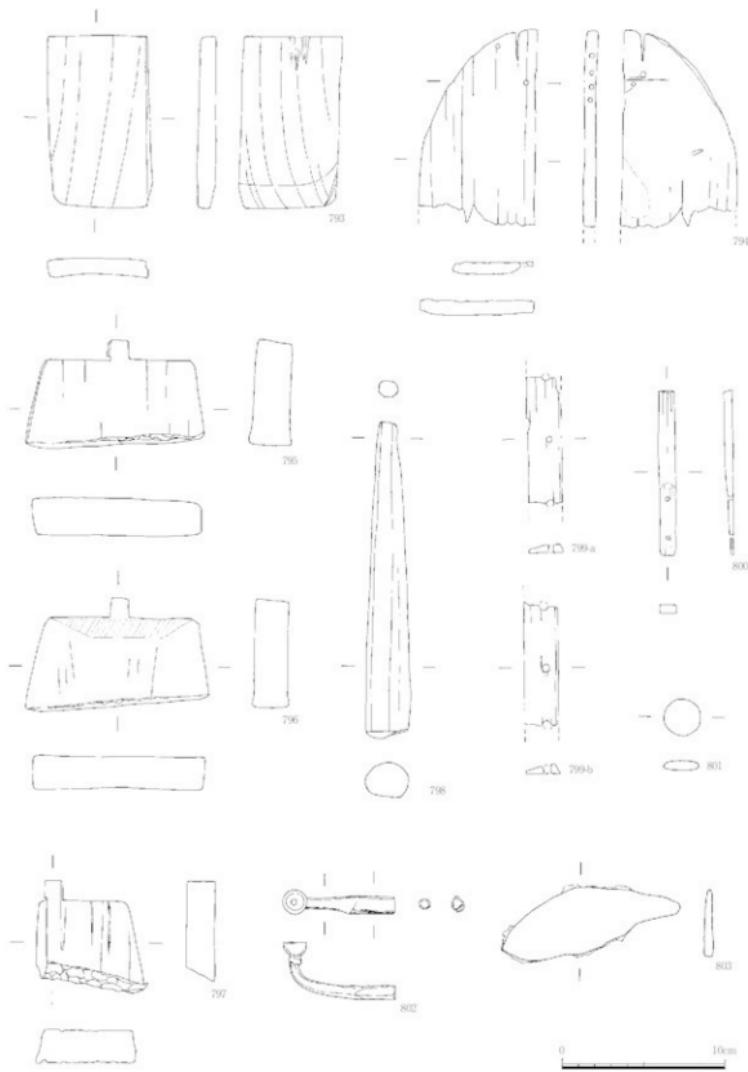


Fig.76 SK13出土遺物実測図 (3)

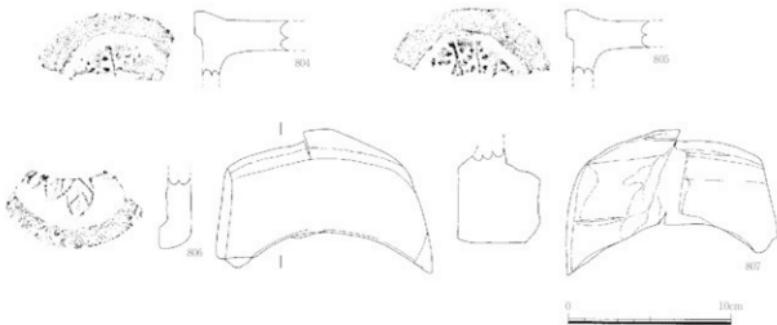


Fig.77 SK13出土遺物実測図 (4)

SK13は17世紀第4四半期に比定される。

#### SK14 (Fig.73)

調査区南部の下層面にて検出された土坑で、SK10の下面にて確認した。SK15と切り合うが、埋土が同質のため、前後関係は不明である。平面形は楕円形とみられ、南北残存長1.16m、東西長0.82m、深さ9cmを測る。断面形は皿状で、埋土は灰褐色粘質シルトである。

出土遺物は、土師質土器小皿1点であるが、検出状況その他からみて、SK14は17世紀末以前に比定される。

#### SK15 (Fig.73・78)

調査区南部の下層面にて検出された土坑で、SK4・10の下面にて確認した。SK14と切り合うが、埋土が同質のため、前後関係は不明である。平面形は不整形で、長軸1.76m、短軸1.00m、深さ36cmを測る。断面形はU字形で、埋土は1層が灰褐色粘質シルト、2層が灰黄褐色粗砂である。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付壺蓋2点、白磁又は染付壺蓋1点、土師質土器鉢又は碗1点・小皿2点、及び瓦片である。

図示したものは808～811である。このうち、808～810は二次被熱を受け変質する。808・809は染付の壺蓋、810は白磁又は染付の壺蓋で、何れも肥前産。811は土師質土器の鉢又は碗で、外面下位と外底に回転ケズリ後ナデを施す。

検出状況及び出土遺物の内容からみて、SK15は17世紀末以前に比定される。

#### SK16 (Fig.73・78)

調査区南部に位置する土坑で、SK10・11に切られている。東部が搅乱を受け、南部は調査区外に出るため、平面形態と規模は不明であるが、東西残存長3.64m、南北確認長0.54m、深さ80cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。

出土遺物は染付皿・猪口、土師質土器小皿、及び瓦片である。

図示したものは812～817である。812・813は染付で、何れも肥前産。812は猪口。813は変形形の皿で、貼付高台。内面に柳を描く。814～817は土師質土器の小皿で、径10～11cm前後の法量を

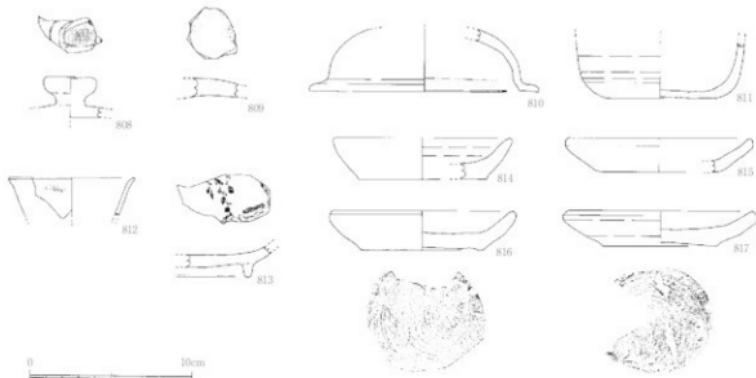


Fig.78 SK15・16出土遺物実測図 (SK15: 808～811、SK16: 812～817)

もつ。ともに内外面回転ナデで、底部の残存する814・816・817は外底に回転糸切り痕を残す。

#### SK17 (Fig.25)

調査区北部に位置する。SK5とは切り合うが、埋土が同質で前後関係は不明である。平面形は橢円形とみられ、東西残存長0.62m、南北長0.38m、深さ6cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は確認できていない。

## (2) 瓦溜り・遺物集中

瓦溜1と集中1～4は最上面の標高2.0m前後に広がる遺物集中である。ここでは多くの遺物が得られた瓦溜1・集中1・4について触れておく。

#### 瓦溜1 (Fig.79・80)

調査区南部に位置する瓦溜りで、SK1・2の上面に広がっている。SK1・2とは出土遺物の接合関係があり、これらの遺物が同時期に廃棄されたことが推定される。

出土遺物は磁器染付中碗・小碗・小皿又は五寸皿・鉢・水滴・青花中皿・陶器中碗・擂鉢・火鉢・灯明受皿・土師質土器小皿・焜炉・瓦質土器火鉢、及び多量の瓦片である。

図示したものは818～837である。818～823は磁器で、何れも肥前産。818～823は染付。818は広東形中碗で、松と草花を描く。819は簡丸形の小碗で、宝文を描く。820は丸形小皿で、見込み蛇ノ目釉剥ぎ。格子文を描き、具須は暗オリーブ色に発色する。821は八角形の鉢で、窓に鳳凰と龍を描く。口縁部内面には墨書きによる雷文帯を描く。822は端反形の鉢で、口縁部は玉縁状を呈する。823は箱形の水滴で、型押成形底部貼り合わせによる。上面に型による陽刻の菊花文を配し、外底には布目痕が残る。824は中国景德鎮窯系の青花中皿で、高台内に放射状の鉢痕が残る。

825～830は陶器。825は灰釉中碗で、尾戸窯又は能茶山窯産の可能性をもつ。灰黄色の胎土に灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施す。828は堺の擂鉢、829・830は備前の擂鉢である。827は瀬戸・美濃産の火鉢で、体部は六角形を呈する。外面に型による陽刻文様を施し、獸面の双耳を貼付

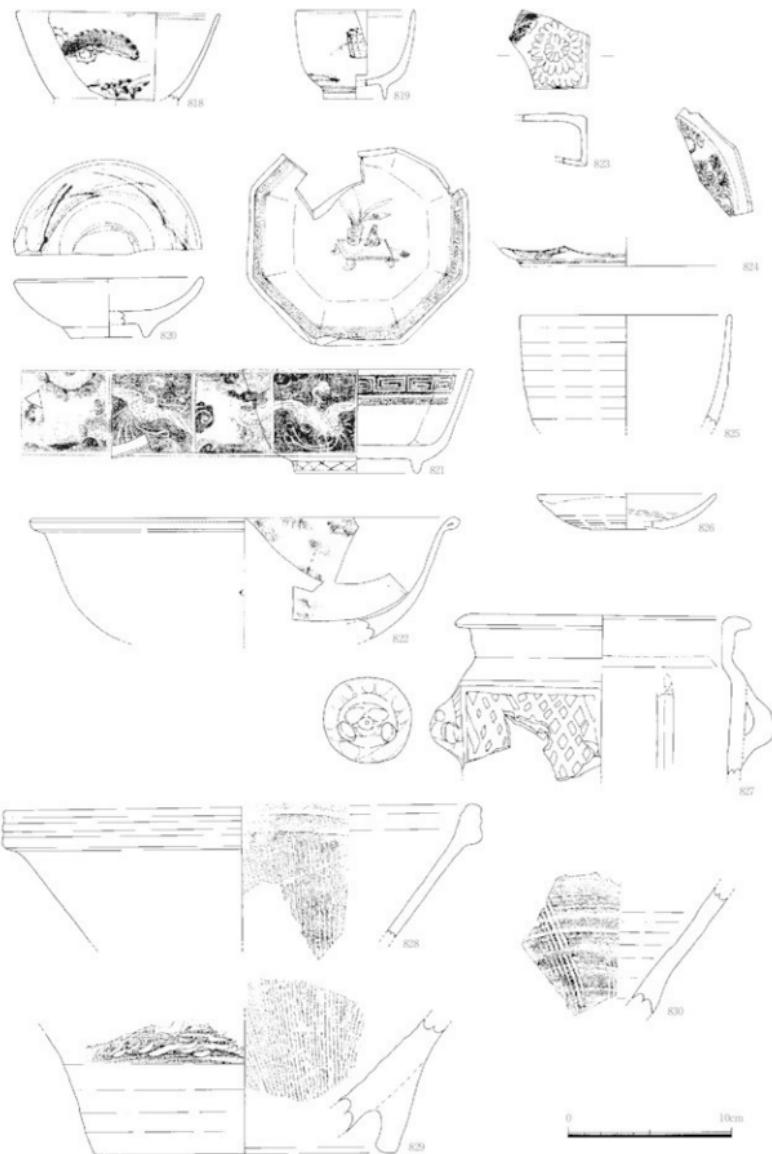


Fig.79 瓦溜1出土遺物実測図 (1)

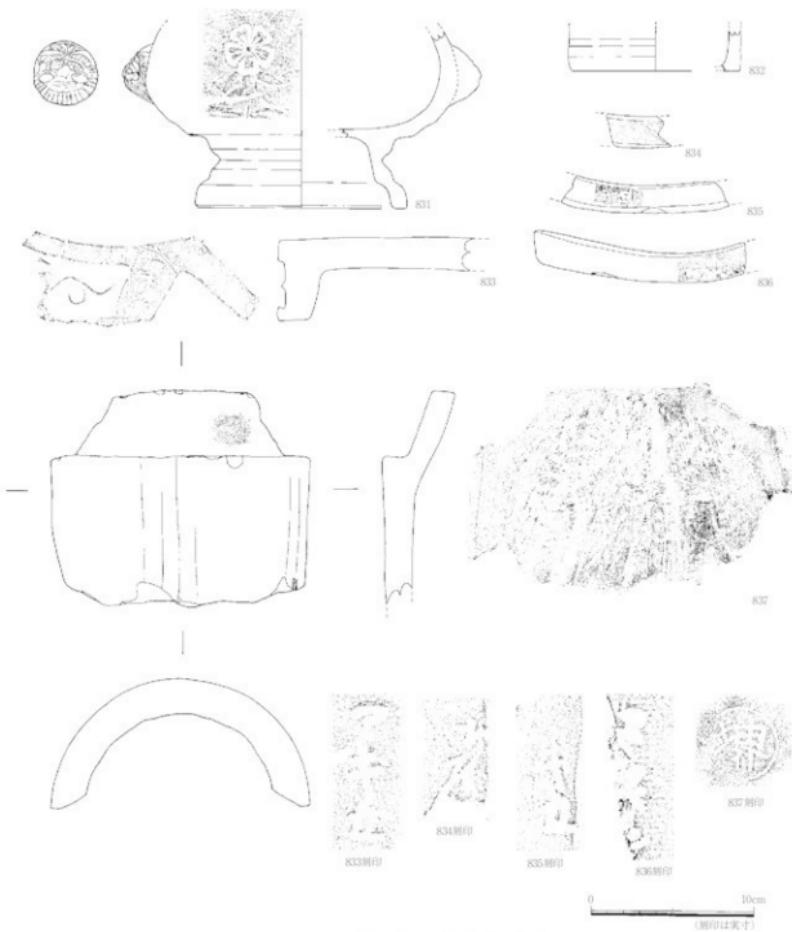


Fig.80 瓦溜1出土遺物実測図(2)

する。灰釉を施し、外面の一部に水色の釉を流し掛けする。内面には鉄錆を刷毛塗りする。826は京都・信楽系の灰釉灯明受皿で、内面に櫛目を施す。

832は土師質土器の焜炉か。831は瓦質土器の火鉢で、外面に印花文を施し、獣面の双耳を貼付する。833～837は瓦で、837は丸瓦、833は軒棟瓦、834～836は棟瓦又は平瓦である。このうち837は丸枠内「坤」銘印をもち、堺(大阪府堺市)産。833は「アキ□」、835は「□キ□」銘印をもち、安芸(高知県安芸市)の製品である。また、834も「御瓦□」銘印をもち、安芸(高知県安芸市)産の可能性をもつ。また、836も銘印をもつ。

瓦溜1は19世紀前半～中葉に比定される。

#### 集中1 (Fig81)

調査区西部にて検出された遺物集中である。

出土遺物は染付中碗・小碗・小杯・小皿・碗蓋・磁器色絵中碗、陶器中碗・擂鉢・鍋・土瓶・壺・器種不明、土師質土器小皿・椀、及び瓦片である。

図示したものは838～841である。838は肥前産の染付小皿で、蛇ノ目凹形高台をもつ。839は肥前産又は肥前系の染付碗蓋である。840は肥前産の色絵中碗で、赤・黄・その他の上絵付による文様を施す。841は土師質土器椀で、灰白色の胎土をもち尾戸窯産の可能性をもつ。外面下半と外底に回転ケズリ後ナデを施す。

#### 集中4 (Fig81)

調査区中央部に位置する遺物集中で、SK6の上面で検出している。

出土遺物は染付中碗・小杯・小皿・鉢・碗蓋・合子蓋・白磁紅皿・陶器碗・鉢・擂鉢・鍋・壺・灯明受皿・土師質土器小皿・焼塙壺、及び瓦片である。

図示したものは842～845である。842は肥前産の染付丸形小皿、843は肥前産の染付合子蓋。844は尾戸窯の灰釉鉢で、外面に鉄鋸で山水文を描く。845は鉄釉小壺で、暗赤褐色の釉を施す。内底に灰白色的砂目痕を残す。

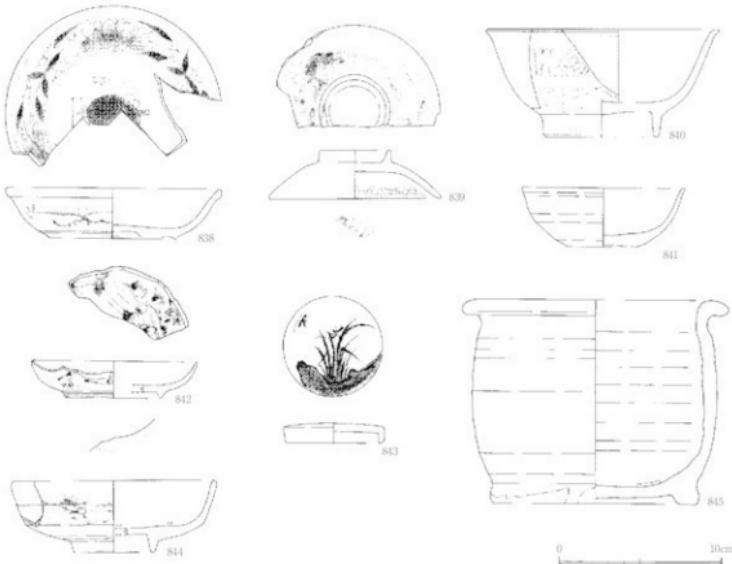


Fig.81 集中1・4出土遺物実測図  
(集中1:838～841、集中4:842～845)

### (3) 包含層出土遺物・その他の遺物

#### Ⅱ層出土遺物 (Fig.82)

包含層Ⅱ層からは近世の遺物が出土している。

図示したものは846～854である。846～850は磁器である。846～848・850は染付。846は能茶山窯の広東形中碗で、高台内に「茶」銘をもつ。847は能茶山窯の端反形中碗で、角枠内「茶山」銘をもつ。848は肥前産の小瓶で、端反棘葷形の神酒徳利である。850は肥前産で、器種不明。外面に花文と渦を描いており、火入、火鉢、植木鉢などか。849は肥前産の色絵染付鉢。陽刻型打成形で、脚は削り出しによる。外面には呉須と赤・金の上絵付で花卉文と窓・魚文を描き、内面と見込みには陽刻による葉状の文様と、赤の上絵付による四方襷、菊花と花卉を描いた帶線を施す。高台内に銘をもつ。

851・852・854は陶器。851は尾戸窯の灰釉広東形中碗で、高台施釉。外面に白土と鉄錆で梅文を描く。852は尾戸窯の灰釉中碗で、光沢の強い透明の釉を施す。854は鉄釉の水注で、黒色の釉を施す。853は尾戸窯の白土器小皿で、内面に型押しによる陽刻の寿字文をもつ。外面下半と外底に回転ケズリを施す。

#### I層・搅乱層出土遺物 (Fig.83・84)

近現代の整地層であるI層、及び搅乱層からも近世の遺物が出土している。

図示したものは855～876である。855～860は肥前産又は肥前系の染付。855は小皿で、草花文を描き、肥前産17世紀前半。856・857は碗蓋で、856は外面に蓮弁文と山水文、雷文帯を描き、857は梅と鶯、草花を描く。858は合子又は段重の蓋である。859はうがい茶碗か。860は染付壺で、外面の数箇所に縦筋を施し、山水文を描く。861は中国景德鎮窯系の青花小杯で、高台内に「大明」銘をもつ。862は中国漳州窯系の青花小皿で、基筒底。外面に唐草文、内面に略化した不明文様を描く。高台内無釉で、呉須は暗緑灰色を呈する。

863～869は陶器。863・864は尾戸窯の灰釉中碗で、高台無釉。865は尾戸窯の灰釉腰張形中碗で、高台施釉。光沢の強い透明の釉を施す。866は尾戸窯又は関西系の灰釉端反形中碗で、高台施釉。外面に白土と鉄錆で梅文を描く。867は珉平焼の皿で、内面に型による陰刻の龍を施し、鮮やかな緑色の釉を施す。868は器種不明の灰釉の陶器で、外面に白土と鉄錆による唐草文と花文を施す。尾戸窯産の可能性をもつ。869は尾戸窯の植木鉢。底部中央に円孔を穿ち、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。870は窯道具で、ハマ。上面と下面に回転糸切り痕が残り、三足のピンは剥離する。角枠内「陳」銘印をもつ。

871・872は土師質土器。871は人形で、動物を表す。型押成形前後貼り合わせで中空。内面にユビオサエとユビナデ痕が残る。872は関西産の焰烙である。

873～876は瓦で、875は丸瓦、873・874は軒棟瓦、876は棟瓦又は平瓦である。これらのうち、875は「安喜」、874は角枠内「安芸友」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）産。873は小判枠内「中己」銘印をもち、中山田（高知県香南市野市町中山田）の製品である。また876も角枠内「□□」銘印をもつ。

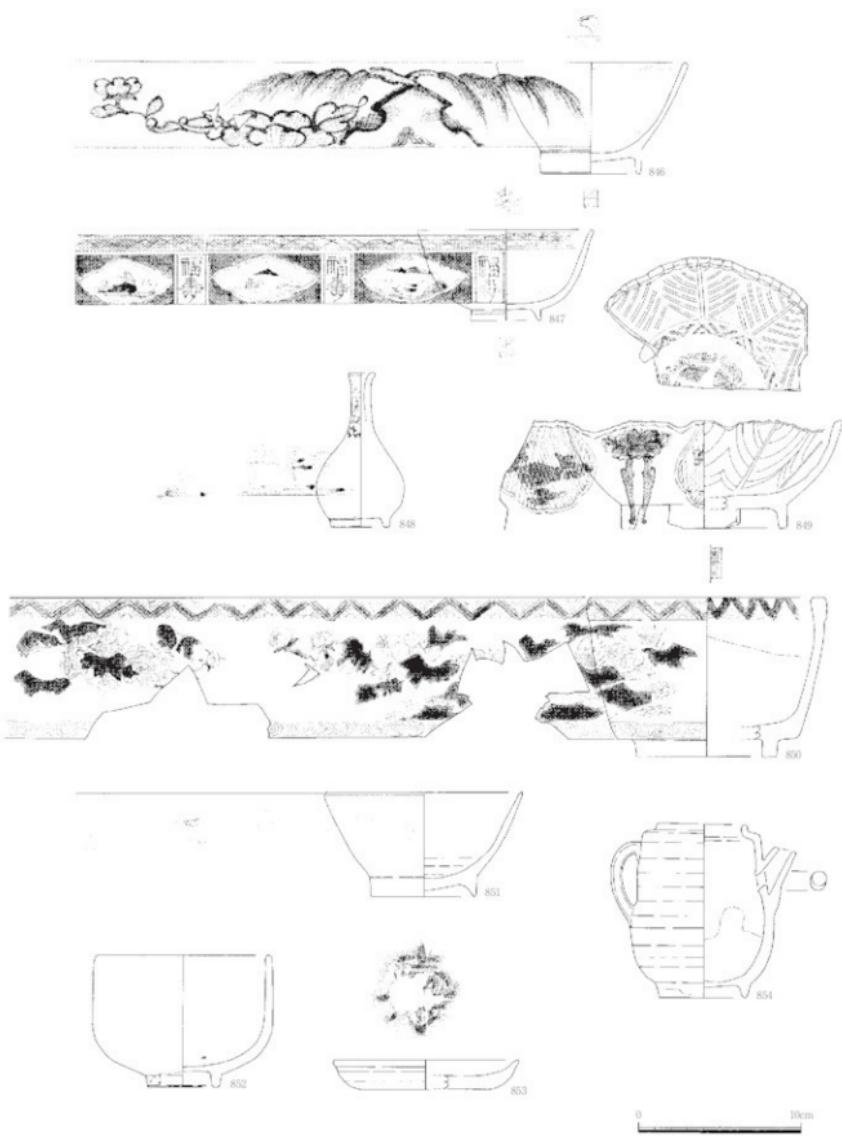


Fig.82 II層出土遺物実測図

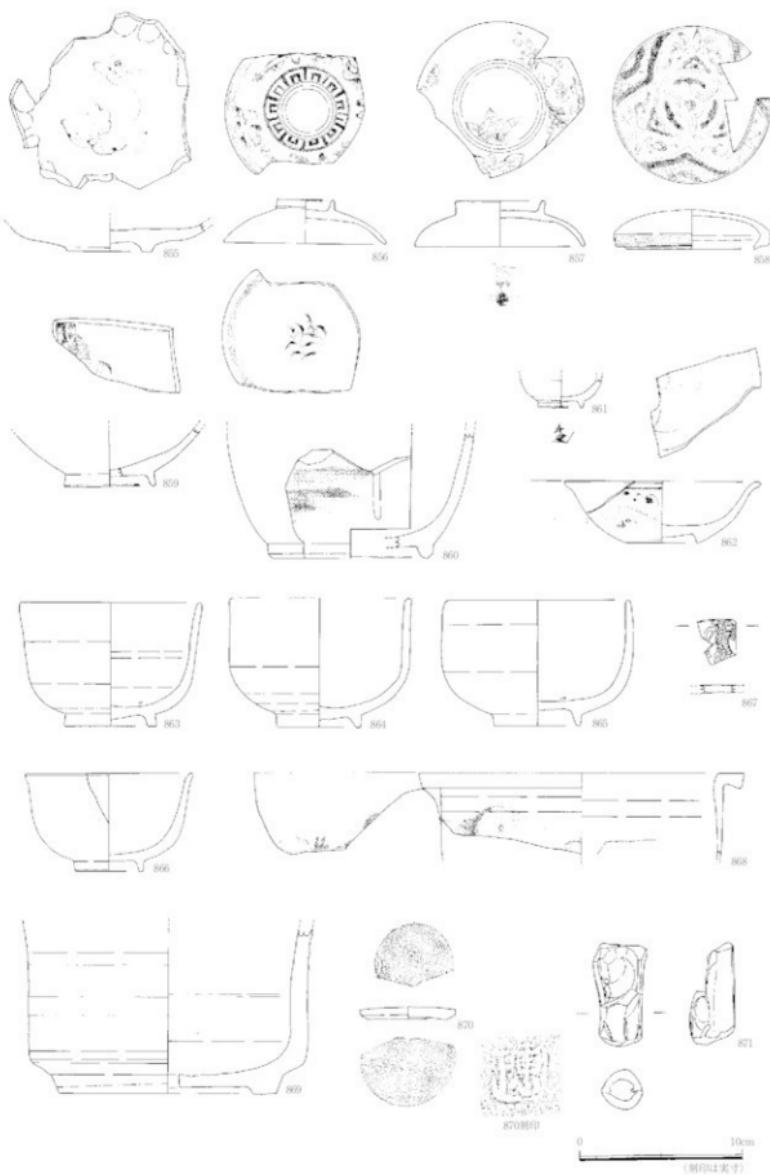


Fig.83 I層・攪乱層出土遺物実測図(1)

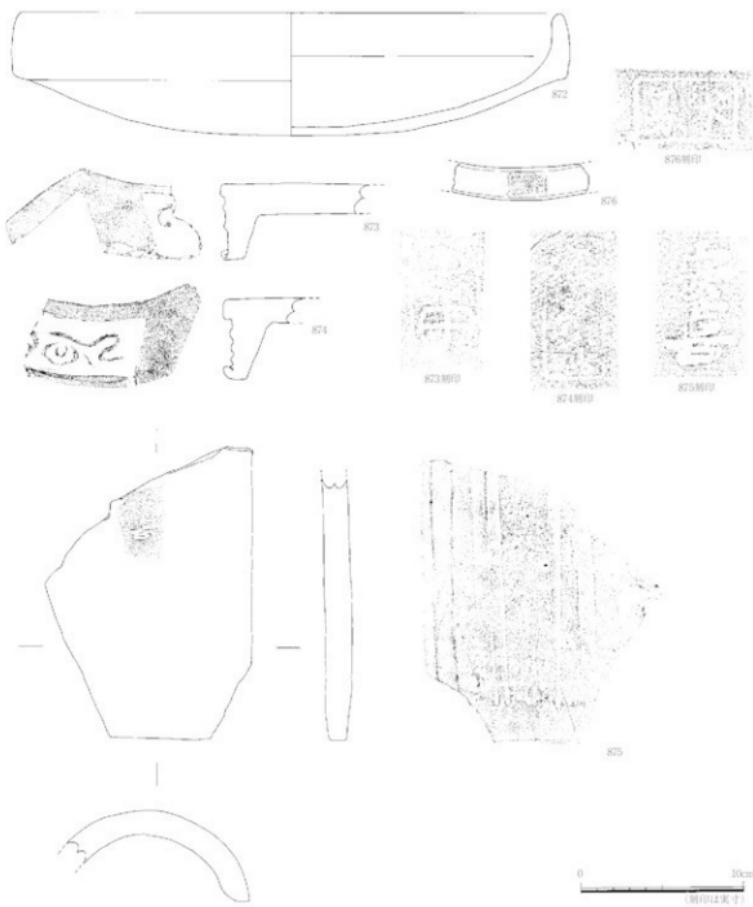


Fig.84 I層・搅乱層出土遺物実測図(2)

Tab.2 遺物觀察表（陶磁器・土器）

回収番号	出土地点	種類	器種形態	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・生産年代・器・使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
1	TP5 複花	磁器 染付	中碗	—	—	54	—	外) 明緑灰10GY8/1 断) 灰白1N8/	外) 不明 高台外) 二重圓錐	透明釉は明緑灰色を帯びる。	肥前産
2	TP5 複花	青磁	香炉	—	—	92	—	外) オリーブ灰10Y5/2 断) 灰白10Y7/1	青磁釉	内面と外底中央無釉。三足を貼付。	肥前産
3	TP5 包含層 II層	陶器	甕	33.4	—	—	—	外) にない赤褐 5YR4/3 断) にない赤褐 25YR5/3	焼締め	口縁部内外面回転ナデ。体部内面イタナデ。肩部外面に自然釉。	備前 西國 17世紀後半N'W期 15世紀
4	TP5 複花	土器質 土器	焰燈	32.6	—	—	—	内) 金雲母を 含む。 外) 黄5Y5R6/4	胎土中に金雲母を含む。	反対をもつ。外面抜き上げ、内面回転ナデ。口縁端部と口縁部外側ヨコナデ。	関西産 17世紀第2回手 刷～17世紀末 外側に焦げ。
5	TP6 包含層 II層	青花	皿	—	—	8.6	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白1N8/	内) 不明・瀬源	高台内に放射状の鉢底。高台内無釉。	中国 豊徳窯系
30	SK1・ SK2 下層	磁器 染付	中碗 広東形	12.4	5.6	6.8	—	外) 明緑灰10GY8/1 断) 白	外) 幅幅・寿・開 高台外) 二重圓錐 口内) 二重圓錐 見込み) 幅幅・開 高内) 变形字款	外) 幅幅・寿・開 高台外) 二重圓錐 口内) 二重圓錐 見込み) 幅幅・開 高内) 变形字款	肥前産 1780～1860年代
31	SK1	磁器 染付	中碗 広東形	10.2	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 草花文か 口内) 二重圓錐	外) 草花文か 口内) 二重圓錐	肥前産又は肥前 系 1780～1860年代
32	SK1	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 黒10YR2/1 断) 灰白25Y7/1	鉄釉	高台内無釉。黒色の釉。	
33	SK1	磁器 染付	蓋物蓋 笠部錫	5.1	20	かえり 錫 42	ぬみ錫 0.7	外) 灰白N8/1 断) 白	外) 山水文	かえり無釉。	肥前産
34	SK2	磁器 染付	中碗 端反形	10.2	5.6	4.1	—	外) 白 断) 白	外) 人物・草花・ 水 見込み) 草花	外) 人物・草花・ 水 見込み) 草花	肥前産 1820～1860年代
35	SK2	磁器 染付	中碗	—	—	3.6	—	外) 白 断) 白	外) 不明 高台外) 二重圓錐 高台内) 「大明年 製」 圓錐	外) 不明 高台外) 二重圓錐 高台内) 「大明年 製」 圓錐	肥前産 17世紀後半～18 世紀前半
36	SK2 上層	磁器 染付	蓋物 楕張形	9.6	5.3	5.4	—	外) 白 断) 白	外) 雷文・意に龍 高台外) 二重圓錐	口縁端部無釉。	肥前産
37	SK2 下層	磁器 染付	笠部錫	8.8	25	—	ぬみ錫 3.6	外) 白 断) 白	外) 草花・木 内) 草花	端反形純の蓋。	肥前産 1820～1860年代
38	SK2 下層	磁器 染付	小皿	—	—	6.5	—	外) 白 断) 白	内) 草花文		肥前産
39	SK2 下層	磁器 染付	小皿 丸形	8.8	1.8	4.6	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白10Y8/1	外) 不明・圓錐 内) 紅葉・水	口縁部玉筋状。	肥前産
40	SK2	磁器 染付	五寸盤 か	—	—	8.0	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 不明・圓錐 内) 松・植物 高台内) 圓錐		肥前産
41	SK2 上層	磁器 染付	小皿 丸形	13.8	3.0	7.8	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	内) 草花文・五瓣 花・二重圓錐	見込み蛇ノ目細刺さ。	肥前 滅代化 18世紀～19世紀 初期
42	SK2	陶器 染付	小皿 丸形	13.6	3.7	6.6	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5Y8/1	外) 壁化した不明 文様 内) 半身像・草花 文・五瓣花	太白手。	廻戸・美濃
43	SK2 下層	白磁	紅里 菊花形	4.5	1.5	1.4	—	外) 白 断) 白	内) 型による菊弁	手切り細工。貼付高台。	肥前産
44	SK2	陶器	碗又は 蓋物	7.4	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	外) 型による菊弁 文様・龍 灰釉	柄は透明で細かい貫入が入る。	尾戸窯
45	SK2	陶器	中碗 楕張形	10.8	7.4	5.6	—	外) 線灰10YR6/1 断) 灰白125Y7/1	外) 白土と鐵精に による梅文 灰釉	柄は白土、花芯は鐵精で描き分けた。高台無釉。内底に目皿。	尾戸窯
46	SK2 下層	陶器	中碗 丸形	10.8	5.5	5.2	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白10YR7/1	外) 鉄錆による宝 文	内外面クロカ目。高台無釉。灰白色を帯びる手透明の釉。	尾戸窯
47	SK2	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白125Y7/1 断) 灰白125Y7/1	灰釉	内外面クロカ目。光沢の強い透明の釉。御本が入る。	尾戸窯
48	SK2	陶器	中碗	—	—	5.6	—	外) 灰白25Y7/1 断) 3.5×橙5YR7/4	灰釉	高台無釉。釉は焼成不良気味で灰白色を帯びる。御本が入る。	

Tab.3 遺物觀察表(陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地點	種類	器種 形	法量(cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴(成形・調整・種調他)	備考(生産地・ 生産年代・鉢・ 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
49	SK2	陶器	中碗	—	—	56	—	外) 淡黄25Y7/3 断) 灰白25Y8/2	灰釉	京焼風陶器。高台内に円窓状の段あり。高台無釉。浅黄色を帯びる半透明の釉で入人がある。	肥前 17世紀後半 高台内に「清水」路筋あり。
50	SK2	陶器	中皿	21.4	4.5	14.2	—	外) 灰白25Y8/1 断) 灰白25Y8/1	灰釉	馬の目皿。口縁・鉢ノ目高台。高台無釉。内底に妙目。	相川・美濃 19世紀
51	SK2 下層	陶器	灯明 受皿	11.2	27	38	—	外) 淡黄25Y7/2 断) 灰白25Y8/1	内) 鑽目 灰釉	外面無釉。灰黄色を帯びる半透明の釉で入人がある。	京都・信楽系
52	SK2 下層	陶器	灯明 受皿	11.8	—	—	80	外) 淡黄25Y7/2 断) 灰白25Y7/1	灰釉	外面と受部無釉。外面下半と外底回転ケズリ。	外面に保。
53	SK2	陶器	灯明 受皿 舟付き	6.6	57	44	—	外) 黒褐75Y3/2 断) 灰白10YR7/1	铁釉	外底回転系切り。黒褐色の釉。	
54	SK2 下層	陶器	瓶 壺 反瓣 垂形	4.4	—	13.0	—	外) にぶい赤褐 5YR4/3 断) にぶい橙25YR6/4	燒締め	内面に強いクロロ目。外面下半ケズリ。外底ナデ。	
55	SK2 下層	陶器	瓶	19.5	—	—	—	外) にぶい赤褐 5YR4/3 断) 明褐 75YR7/2	铁釉	にぶい赤褐色の釉。	能登山窯又は尾 戸窯
56	SK2 下層	窯道具	匣	—	—	24.4	—	外) にぶい橙 75YR6/4 断) にぶい黄褐 10YR7/3	素焼き	内外面に強いクロロ目。	
57	SK2 下層	土師質 土器	侃炉 丸形	—	—	—	19.8	橙7YR7/6		体部外不定方向のナデ。内面ヨコナデ、外底ナデ。高台接合部付近回転ナデ。	外底に墨書き。
58	SK2	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	7.6	—	灰白25Y8/1	内) 陽刻による松竹梅鶴文	内底型押しによる陽刻文様。内面周縁と外面ヨコナデ。外底ナデ。	尾戸窯
59	SK2	土師質 土器	小皿	—	—	4.5	—	にぶい橙75YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転系切り。内面クロロ目。	
60	SK3 上層	磁器 染付	小碗 丸形	8.0	4.9	4.2	—	外) 明褐灰75GY8/1 断) 白	外) 植物・二重圓 鏡 高台外) 二重圓鏡 口縁内) 圓鏡 見込み) 不明・二 重圓鏡	透明釉は青色を帯び白濁する。	肥前窯 1650~1660年代
61	SK3 上層・ 下層	磁器 染付	小杯 丸形	6.6	3.8	3.0	—	外) 白 断) 白	外) 暗化した文様	外似は暗青灰色。蓋付に粗糲が付着。	肥前窯 17世紀後半
62	SK3	白磁	鉢	10.0	—	—	—	外) 白 断) 白		口縁部梅花形か。口縁部に円形の透かしあり。	肥前窓 有田 1670~1690年代
63	SK3 上層	磁器 染付	中碗	—	—	5.4	—	外) 白 断) 白	外) 圓鏡 高台外) 二重圓鏡 内) 海藻・貝・二 重圓鏡 高台内) 「□口年 □」		肥前 有田 1660~1670年代
64	SK3	磁器 染付	段重	13.1	6.0	9.6	—	外) 灰白N8/ 断) 灰白N8/	外) 唐草文・蓮弁 文 高台外) 圓鏡	内面施釉。端部無釉。外領は暗青灰色。	肥前窯
65	SK3	磁器 染付	瓶頸	—	—	8.2	—	外) 淡黄5GY8/1 断) 白	外) 不明・圓鏡 高台外) 二重圓鏡		肥前窓 二次被熱により釉は変質。
66	SK3 上層	陶器	搖鉢	35.4	—	—	—	外) 侃褐75YR5/2 断) 侃褐75YR5/1	燒締め	口縁部外側に凹窓。体部外面回転ナデ。内面回転ナデ後機目。	隋 17世紀後半~18 世紀前半
67	SK3 上層	陶器	搖鉢	約 36.8	—	—	—	外) にぶい赤褐 5YR4/4 断) 明赤褐75YR5/6	燒締め	口縁部外側に凹窓。体部外面回転ナデ。内面回転ナデ後機目。	隋 17世紀後半
68	SK3 上層・ 下層	陶器	甕	—	—	—	—	外) 侃灰5YR4/1 断) にぶい赤褐 25YR4/3	燒締め	口縁部外側に強いクロロ目。内面回転ナデ。	隋前
69	SK3 上層・ 下層	陶器	甕又は 甕	—	—	—	—	外) 侃褐75YR4/1 断) にぶい赤褐 5YR5/4	燒締め	外側に強いクロロ目。内面上半回転ナデ。下半斜方向のイタナデ。外側に自然釉。	隋前
70	SK3 上層	陶器	甕又は 甕	—	—	13.0	—	外) 灰白75Y7/1 断) 灰白N8/	変質した灰白色の 釉	内面に強いクロロ目。内面無釉。	二次被熱により 釉は変質。
71	SK3 上層	陶器	蓋	笠部付 16.0	—	—	—	外) 灰75YR4/1 断) 灰75YR4/1	燒締め		二次被熱

Tab.4 遺物観察表(陶磁器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器種 器形	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・ 生産年代・器・ 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
72	SK3 上層 下層	土師質 土器	小皿	10.3	2.3	6.8	—	に赤い橙5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転系切り。	
73	SK3 上層 下層	土師質 土器	小皿	11.0	1.9	7.7	—	に赤い橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転系切り。内面ロクロ目。	
74	SK3 上層	土師質 土器	小皿	12.0	2.5	7.3	—	橙7.5YR6/6		内外面回転ナデ。外底回転系切り。内面ロクロ目。	
75	SK3 上層 下層	土師質 土器	小皿	11.4	2.2	7.5	—	外) 黄褐色10YR5/2 断) に赤い橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転系切り。内面ロクロ目。	
76	SK3 上層	土師質 土器	小皿	12.3	—	—	—	橙7.5YR6/6		内外面回転ナデ。	
77	SK4 上層	陶胎染付 腰膨張	中碗	10.6	—	—	—	外) 黄7.5Y6/1 断) 黄7.5Y6/1	外) 山水文 白化粧土、透明釉	外縁は暗青灰色。	
78	SK4	青花	碗	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 不明 (口縁内) 腹壁	中国 景德鎮窯系	
79	SK4	青花	皿	—	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	内) 不明	中国 景德鎮窯系	
80	SK4 上層	白磁	鉢	15.0	—	—	—	外) 白 断) 白	白磁釉	外縁に数条の沈澱を認める。内面施釉。口縁端部と口縁部内面無釉。	
81	SK4	磁器 染付	壺	11.4	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 蒲萄文・二重 内) 施釉	肥前 有田 1660～1690年代 二次被熱により 釉は変質。	
82	SK4	磁器 染付	壺	12.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 蒲萄文・二重 内) 施釉	肥前 有田 1660～1690年代 二次被熱により 釉は変質。	
83	SK4 上層	磁器 染付	瓶	4.0	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白		体部内面無釉。	
84	SK4 下層	青磁	壺	11.0	—	—	—	外) 明緑灰10GY8/4 断) 白	青磁釉	体部内面ロクロ目。内面施釉。口縁端部と口縁部内面無釉。	
85	SK4 下層	白磁	壺	8.0	—	—	—	外) 灰白7.5Y8/1 断) 白	白磁釉	内面ロクロ目。内面施釉。口縁端部内面無釉。	
86	SK4	白磁	壺	6.4	—	—	—	外) 灰白10Y8/1 断) 白	白磁釉	内面無釉。	
87	SK4	青磁	蓋物	—	—	14.0	—	外) 明緑灰7.5GY7/1 断) 黄白N8/	青磁釉	内面施釉。	
88	SK4	白磁	壺	10.0	—	—	—	外) 灰白N8/ 断) 白	白磁釉	体部内面ロクロ目。内面施釉。口縁端部と口縁部内面無釉。	
89	SK4 上層	白磁	瓶	—	—	5.0	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	白磁釉	内面施釉。	
90	SK4	白磁	壺	—	—	10.2	—	外) 白 断) 白	白磁釉	内面施釉。	
91	SK4	磁器 染付	壺	—	—	8.0	—	外) 白 断) 白	外) 不明・二重 内) 施釉	肥前 有田 17世紀後半 二次被熱により 釉は変質。	
92	SK4	磁器 染付	壺蓋	笠部縁	9.8	4.6	かえり 縁 7.0	構み縁 2.2	外) 白 断) 白	外) 草花文・二重 内) 施釉。かえり無釉。	肥前 有田 1660～1690年代 二次被熱により 釉は変質。

Tab.5 遺物觀察表(陶磁器・土器)

國版 番号	出土 地點	種類	器種 形	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調他)	備考(生産地・ 生産年代・鉢・ 使用状態)	
				口径	器高	底径					
93	SK4 下層	磁器 染付	壺蓋	笠部伴 9.4	36	かえり 径 7.0	横み径 18	外)灰白NR/ 内)灰白NR/	外)草花文・二重 振線	肥前 有田 1660～1690年代 二次質熱により 釉は変質し、燒 土が残る。	
94	SK4 下層	磁器 染付	壺蓋	笠部伴 10.6	—	かえり 径 7.0	—	外)白 内)白	外)花唐草文・二 重振線	肥前 有田 1630～1650年代 二次質熱により 釉は変質し、燒 土が残る。	
95	SK4 下層	磁器 染付	壺蓋	笠部伴 11.6	—	かえり 径 8.2	—	外)白 内)白	外)山水文・二重 振線	肥前 有田 1660～1690年代 二次質熱により 釉は変質。	
96	SK4 上層	磁器 染付	壺蓋	笠部伴 12.4	—	かえり 径 9.0	—	外)白 内)白	外)花唐草文・二 重振線	肥前 有田 1660～1690年代 二次質熱により 釉は変質。	
97	SK4	磁器 染付	壺蓋	笠部伴 9.0	—	かえり 径 6.4	—	外)白 内)白	外)山水文・二重 振線	肥前 有田 1660～1690年代 二次質熱により 釉は変質し、燒 土が残る。	
98	SK4	白磁	壺蓋	笠部伴 12.4	—	かえり 径 9.0	—	外)白 内)白	白磁釉	肥前 有田 17世紀後半 二次質熱により 釉は変質。	
99	SK4 上層	白磁	壺蓋	—	—	—	—	外)灰白5GY8/1 内)白	白磁釉	肥前 有田 17世紀後半	
100	SK4	磁器 染付	壺	—	—	—	—	外)灰白5GY8/1 内)灰白NR/	外)墨・植物	肥前 有田 1660～1680年代 二次質熱により 釉は変質。	
101	SK4 下層	磁器 染付	壺	—	—	—	—	外)白 内)白	外)蓮弁文・山水 文	肥前 有田 1660～1690年代	
102	SK4	磁器 染付	壺	—	—	—	—	外)灰白5GY8/1 内)灰白NR/	外)草花文	肥前 有田 17世紀後半 二次質熱により 釉は変質し、燒 土が残る。	
103	SK4	磁器 染付	壺	—	—	—	—	外)灰白5GY8/1 内)灰白NR/	外)牡丹唐草文	肥前 有田 1660～1690年代 二次質熱により 釉は変質。	
104	SK4 下層	陶器	小皿	—	—	—	—	外)灰黃褐色10YR6/2 内)灰黃褐色10YR6/2	唐津系灰釉陶器。口縁部薄緑状。 内外面ロクロ目。外墨下無釉。 透明の釉。	肥前 津浦 1610～1630年代	
105	SK4 上層	陶器	壺	15.0	—	—	—	釉)25Y2/1 外)灰白25Y7/1 内)褐灰10YR4/1	口縁部墨綠状。口縁部内面施釉。 変質した黒色の釉。	肥前 武雄 17世紀第2・3四 季期 二次質熱により 釉は変質。	
106	SK4 上層	陶器	壺	14.0	—	—	—	外)綠 内)褐灰75YR4/1	外)白化粧土・綠 釉・印花文 内)灰	肥前 武雄 17世紀第2・3四 季期 二次質熱により 釉は変質。	
107	SK4 上層・ 下層	陶器	壺	13.5	—	—	27.0	外)灰褐色75YR4/1 内)黑10YR2/1 内)褐灰10YR4/1	外)花唐草文の浮 文を貼付 外墨綠釉。内面鐵 釉か	肥前 武雄 17世紀中頃 二次質熱により 釉は変質。	
108	SK4 下層	陶器	壺又は 甕	—	—	14.0	—	外)褐灰10YR4/1 内)褐灰10YR5/1	鐵詰め	外外面回転ナデ。	肥前 產
109	SK4	陶器	壺又は 甕	—	—	14.1	—	外)黑褐色10YR3/1 内)褐灰10YR5/1	鐵釉又は灰釉	肥前 產	
110	SK4	陶器	壺又は 甕	—	—	12.0	—	外)灰褐色75YR4/2 内)褐灰10YR6/1	鐵詰め	外外面回転ナデ。	肥前 產
111	SK4 上層	陶器	壺又は 甕	—	—	—	—	外)灰褐色75YR4/2 内)褐灰75YR4/1	外)門扉・ヘラ描 きによる文様 鐵詰め	肥前 產	
112	SK4 下層	陶器	壺	—	—	—	—	外)黒褐色75YR3/2 内)黄灰25Y4/1	外)多条の門扉 鐵詰波状文 鐵詰め	内面に格子状のタタキ目後転子 字。	肥前 產 17世紀中葉～末

Tab.6 遺物觀察表(陶磁器・土器)

団版 番号	出土 地点	種類	器種 形形	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・ 生産年代・器 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
113	SK4	陶器	壺	—	—	—	外) 細 内) 黒10YR2/1 断) 帽灰10YR4/1	外) 印刷による花 卉文・砂槌 内) 鉄袖	外面緩やかなロクロ目。内面回転 ナデ。	肥前 武雄 17世紀第2-3四 半期 二次被熱により 袖は変質。	
114	SK4 上層	陶器	壺	—	—	—	外) 被熱し変色 内) 黒褐10YR3/1 断) 帽灰10YR4/1	外) 白化粧土・砂 槌・ヘラ彫りによ る草花文 内) 灰袖	二重手か。外面白クロ目。内面回 転ナデ。	肥前 武雄 17世紀第2-3四 半期 二次被熱により 袖は変質。	
115	SK4 下層	陶器	壺	25.3	—	—	外) 黒褐10YR3/2 断) 帽灰10YR4/1	鉄袖か	体部上位に強いロクロ目。内面口 クロ目。	肥前 17世紀中葉~末 二次被熱により 袖は変質。	
116	SK4 上層・ 下層	陶器	壺	32.0	—	—	40.0	外) 黒褐75YR3/1 断) 帽灰75YR4/1	鉄袖	外面部上位に多条の凹縞、体部格 子状のタタキ・ナデ。内面格子状 のタタキ・ユビオサエ。	肥前 17世紀中葉~末 二次被熱により 袖は変質。
117	SK4 下層	陶器	大甕	47.6	—	—	外) 帽灰5YR4/1 断) 帽灰5YR4/1	焼締め	口縁部外側に凹縞、内面白クロ 目。体部外面ナデ、内面横方向 のイタナデ。	肥前	
118	SK4	陶器	大甕	57.0	—	—	外) 帽灰5YR4/1 断) にい・赤褐 25YR4/4	焼締め	口縁部外面に凹縞。内外面白クロ 目。	肥前	
119	SK4	陶器	大甕	50.6	—	—	外) 帽灰5YR4/2 断) 帽灰5YR4/2	焼締め	口縁部外面に凹縞。内外面白クロ 目。外面に自然輪。	肥前	
120	SK4	陶器	大甕	—	—	30.8	外) 帽灰5YR4/2 断) 帽赤褐5YR3/3	焼締め	体部外面イタナデ、内面ナデ。外 底に凹凸。	肥前	
121	SK4	陶器	大甕	—	—	22.8	外) 帽灰5YR4/2 断) にい・赤褐 5YR4/4	焼締め	体部内外面イタナデ。外底に凹 凸。	肥前	
122	SK4 上層	陶器	甕	—	—	—	外) 帽灰5YR4/1 断) 帽灰75YH5/1	焼締め	体部内外面ヨコナデ。	肥前 外面にヘラ彫り による窓印。	
123	SK4 下層	陶器	甕	—	—	—	外) 帽赤2.5YR3/1 断) にい・赤褐 25YR4/3	焼締め	内外面イタナデ。	肥前 外面にヘラ彫り による窓印。	
124	SK4 上層	土師質 土器	小甕	10.6	27	48	外) にい・橙75YR6/4 断) にい・黄澄 10YR7/3	外底と外底ナデ。内面周縁回転 ナデ。内底不定方向のナデ。	尾羽窯		
125	SK4 下層	土師質 土器	小甕	11.6	20	64	—	にい・橙75YR6/4	外底ヨコナデ。外底不定方向のナ デ。内面周縁ヨコナデ、内底ナ デ。	尾羽窯	
126	SK4	土師質 土器	小甕	11.4	20	78	—	外) にい・橙75YR6/4 断) にい・橙75YR7/3	外底と外底不定方向のナデ。内 面ヨコナデ。内底ナデ。	尾羽窯	
127	SK4	土師質 土器	小甕	11.2	18	62	外) にい・橙75YR7/3 断) にい・橙75YR7/3	外面上半回転ナデ、下位回転ケ リ後ナデ。外底ナデ。内面回転ナ デ。	尾羽窯		
128	SK4 下層	土師質 土器	小甕	12.0	21	73	外) 橙75YR6/6 断) 淡黄澄75YR6/6	内外面ナデ。外底ナデ。	尾羽窯		
129	SK4 下層	土師質 土器	小甕	10.2	19	70	—	灰黃褐10YR6/2	内外面回転ナデ。外底回転系切 り。		
130	SK4 上層	土師質 土器	小甕	10.6	21	74	—	にい・橙75YR6/4	内外面回転ナデ。内底クロ目。 外底回転系切。	二次被熱により 硬化。	
131	SK4 上層	土師質 土器	小甕	9.8	24	7.0	—	にい・橙75YR6/4	内外面回転ナデ。外底回転系切 り。	二次被熱により 硬化。	
132	SK4	土師質 土器	小甕	11.2	19	7.6	外) 橙75YR6/6 断) 橙75YR7/6	内外面回転ナデ。内底に溝状の ロクロ目。外底回転系切。	二次被熱により 硬化。		
133	SK4 上層	土師質 土器	小甕	11.2	28	7.6	外) にい・黄澄 10YR6/4 断) 橙75YR7/4	内外面回転ナデ。内底に強いロ クロ目。外底回転系切。	二次被熱により 硬化。		
134	SK4	土師質 土器	小甕	12.4	20	8.3	—	にい・橙75YR6/4	内外面回転ナデ。内底に強いロ クロ目。外底回転系切。	二次被熱により 硬化。	
135	SK4 上層	土師質 土器	小甕	11.2	26	7.9	—	にい・橙75YR6/4	内外面回転ナデ。内底ロクロ目。 外底回転系切。	二次被熱により 硬化。	
136	SK4	土師質 土器	小甕	12.0	21	7.5	外) にい・橙75YR7/4 断) 橙5YR6/6	内外面回転ナデ。内底に溝状の ロクロ目。外底回転系切。	二次被熱により 硬化。		
137	SK4	土師質 土器	小甕	11.0	20	6.9	—	橙5YR6/6	内外面回転ナデ。内底回転系切 り。	二次被熱により 硬化。	
138	SK4	土師質 土器	小甕	12.8	24	8.0	—	にい・橙75YR6/4	内外面回転ナデ。内底に溝状の ロクロ目。外底回転系切。	二次被熱により 硬化。	

Tab.7 遺物觀察表(陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地點	種類	器種 器形	法量(cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴(成形・調整・施調他)	備考(生産地・年代・鉱・使用状態)
				口径	器高	底径				
139	SK4	土師質 土器	小皿	12.6	25	8.0	—	外: 淡5YR6-6 内: 淡5YR7-6		内外面回転ナデ。内面クロロ目。 外底回転あ切り。
140	SK4	土師質 土器	中皿	17.2	36	10.0	—	外: にぶい橙7.5YR7-4 内: 浅黄橙7.5YR8-4		内外面ヨコナデ。外底と内底不定 方向のナデ。
141	SK4 下層	土師質 土器	中皿	19.2	29	10.0	—	にぶい黄橙10YR6-3		口縁部内外面回転ナデ。外面と 外底不定方向のケズリ。内面ケズ リ。
142	SK4	土師質 土器	中皿	19.0	26	11.8	—	にぶい橙7.5YR6-4		口縁部内外面回転ナデ。内外面 ケズリ。
143	SK4 下層	土師質 土器	中皿	約16.8	26	—	—	にぶい橙7.5YR6-4		外面上半回転ナデ、下位ケズリ。 外底回転あ切り。口縁部内面回 転ナデ、内面ケズリ。
144	SK4 下層	土師質 土器	中皿	約16.0	—	—	—	にぶい橙7.5YR6-4		外面上半回転ナデ、下位ケズリ。 口縁部内面回転ナデ、内面ケズ リ。
145	SK4 下層	土師質 土器	中皿	21.8	35	12.0	—	外: にぶい橙7.5YR6-4 内: 浅黄橙7.5YR8-4		外面上半回転ナデ、下位ケズリ。 外底回転あ切り。内面回転ナデ。
146	SK4 下層	土師質 土器	鉢	—	—	8.0	—	外: にぶい黄橙 10YR6-3 内: にぶい黄橙 10YR7-2		外面上半回転ナデ、下位回転ケ ズリ後回転ナデ。外底ナデ。内面回 転ナデ。
147	SK4 上層	土師質 土器	鉢	—	—	7.0	—	にぶい橙7.5YR6-4		外面上半回転ナデ、下面下半回 転ケズリ後回転ナデ。外底ナデ。内面回 転ナデ。
148	SK4	土師質 土器	鉢	—	—	7.4	—	にぶい橙7.5YR7-4		外面上半回転ナデ、外面下半回 転ケズリ後回転ナデ。外底ナデ。 内面回転ナデ。
149	SK4 下層	土師質 土器	鉢	9.7	5.0	6.3	—	にぶい黄橙10YR7-3		体部中央をユビオサエし窪ませ る。外底リコナデ、外底ナデ。内 面ヨコナデ、内底ナデ。
150	SK4	土師質 土器	鉢	—	—	—	—	外: にぶい黄橙 10YR7-3 内: にぶい黄橙 10YR7-2		内外面回転ナデ。体部にユビオサ エによる窪み。
151	SK4 上層	土師質 土器又 は陶器	鉢	—	—	—	—	外: にぶい赤褐 5YR5-3 内: にぶい橙SYR7-4		内外面回転ナデ。口縁部をユビオ サエし変形させる。
152	SK4 上層	土師質 土器	土鉢	全長 5.9	全厚 1.8	全幅 2.0	重量 232g	外: にぶい橙7.5YR2-4 内: にぶい橙7.5YR7-3		外面部。円孔径0.6cm。
161	SK6- SK7	磁器 染付	大碗 丸形	15.1	6.6	4.8	—	外: 灰白5GY8-1 内: 白		外) 岩・波・鶴 高台外) 二重團綱 口縁内) 四方摩 見込み) 松竹梅円 形文・二重團綱
162	SK6	磁器 染付	中碗 広口形	10.0	5.4	6.0	—	外: 灰白N8/ 内: 白		外) 草・岩 口縁内) 二重團綱 見込み) 寿・團綱
163	SK6	磁器 染付	小杯 平形	7.3	3.3	2.8	—	外: 灰白2.5GY8-1 内: 白		外) 海浜風景文
164	SK6	磁器 染付	五寸皿	14.6	4.0	8.9	—	外: 灰白2.5GY8-1 内: 白		肥前産 18世紀 後半～ 1860年代
165	SK6	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.0	2.5	—	摘み径 6.0	外: 白 内: 白		口縁部梅花形。蛇ノ目四形高台。 内) 運舟文・植物
166	SK6	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.9	3.1	—	摘み径 5.4	外: 灰白2.5GY8-1 内: 白		外) 植物・鳥 内) 摘み内・鳥 内) 鳥・團綱・二 重團綱
167	SK6	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.2	2.9	—	摘み径 6.0	外: 白 内: 白		外) 鶴・草 内) 波に鳥・團綱・ 二重團綱
168	SK6	白磁	紅黒 菊花形	4.4	1.5	1.3	—	外: 白 内: 白		外) 型による菊花 押捏成型。外面下半無釉。
169	SK5	白磁	小瓶 扇形	4.7	1.5	1.5	—	外: 白 内: 白		肥前産 1780～1860年代
170	SK6 下層	磁器 染付	小瓶 扇形	1.8	7.6	3.0	4.2	外: 灰白2.5GY8-1 内: 白		内面クロロ目。内面無釉。具留12 暗緑灰色。

Tab.8 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回 数 番 号	出土 地 点	種類	器種 形	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・ 生産年代・器 使用痕跡)
				口径	器高	底径				
171	SK6 上層	磁器 染付	小瓶 辣匙形	—	—	34	50	外) 灰白25GY8/1 断) 灰白N8/ 内) 染付	外) 松・草 内) 面クロ口。内面無釉。	肥前窯
172	SK6	磁器 染付	小瓶	—	—	44	68	外) 灰白25GY8/1 断) 白	外) 草文・面觀 内) 高台外) 漆黒	内面クロ口。内面無釉。器付に 灰白色の粗糲な付着。
173	SK6	陶器	中瓶 広東形	12.4	61	64	—	外) 灰白75Y7/1 断) 灰白5V7/1	外) 鉄錆による松 内) 鉄錆	高台施錆。灰白色を帯びる半透 明の釉で細かい貫入がある。
174	SK6・ SK12	陶器	中瓶 丸形	11.2	50	50	—	外) 灰白5V7/2 断) 灰白5V8/1	外) 鉄錆による鶴 内) 鉄錆	内面に濃淡の面覗。高台無釉。 灰オーラー色を帯びる半透明の 灰釉。
175	SK6	陶器	小瓶 壺反形	9.2	54	27	—	外) 灰白5V7/2 断) 灰白5V8/1	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる光沢 の強い透明の釉。
176	SK6 下層	陶器	小瓶 壺反形	8.3	53	36	—	外) 明暦灰75YR7/1 内) 灰白25Y8/1 断) にぶい桜75YR7/4 内) 白化粧土・灰釉	外) 白土・鉄錆・ 緑釉による山水 文・束口 内) 白化粧土・灰釉	高台施錆。
177	SK6	陶器	片口	—	—	—	—	外) 灰オーラー5Y6/2 断) 灰白75Y7/1	灰釉	灰オーラー色を帯びる光沢の強 い半透明の釉。
178	SK6	陶器	擂鉢	18.6	68	96	—	外) 灰赤25YR5/2 断) 灰赤25YR4/1	燒結め	内面に鶴目。内底に不定方向の3 条の鶴目。口縁部に内面凹縫、口 縁部に外側鶴目後付捺ナメ。体部 外面回転ケズリ。外底に凹凸。
179	SK6	陶器	鍋	15.0	69	69	—	外) 灰オーラー 75Y6/2 断) 灰白75Y7/1	灰釉	横状の双耳を貼付。三足を貼付。 外底下位無釉。灰オーラー色を 帯びる半透明の釉。
180	SK6	陶器	鍋 丸形	18.0	80	66	—	外) 灰褐5YR4/2 断) にぶい桜5YR7/4	灰釉	横状の双耳を貼付。三足を貼付。 外底下位無釉。灰褐色の釉。
181	SK6	陶器	土瓶	6.8	—	—	—	外) 灰10Y7/1 断) 灰白5V7/1	灰釉	内面に多段のロクロ口。内面無 釉。オーラー色を帯びる半透 明の釉。
182	SK6	陶器	土瓶蓋 笠部絆	笠部絆 67	17	30	拂み径 10	外) にぶい赤褐 5YR4/3 断) 不明	拂みを貼付。内外面回転ケズリ。 外底回転ケズリ。外面無釉。にぶ い褐色の釉。	
183	SK6	陶器	土瓶蓋 笠部絆	笠部絆 96	30	かえり 径 69	拂み径 22	外) 灰褐5YR4/2 断) 淡褐5YR8/4	灰釉	内面とかえり無釉。灰褐色の釉。
184	SK6 下層	陶器	蓋	笠部絆 59	1.6	30	—	外) 灰褐75YR4/2 断) 灰褐5YR5/2	灰釉	内面回転ナメ。外底回転系切 り。外底無釉。灰褐色の釉。
185	SK6	陶器	調色剤	34× 47	—	—	—	外) 灰白5V7/2 断) 灰白5Y8/1	外) 鉄錆による樹 木 内) 灰釉	内面ロクロ口。内面無釉。
186	SK6	陶器	調色剤	—	—	7.0	82	外) 灰白25Y8/2・綠 断) 灰白25Y8/1	灰釉・緑色の釉を 流し掛け	内面強いロクロ口。外底回転によ る樹木目。内面無釉。外底の釉は 拭き取る。灰オーラー色を帯び る光沢の強い透明の釉。
187	SK6	陶器	小甕	—	—	84	135	外) 灰オーラー 75Y6/2 断) 灰赤10YR6/1	灰釉・暗オーラー 灰色の釉を流し掛け	耳耳は剥離。内面ロクロ口。灰白 色を帯びる半透明の釉で部分的 に白化。
188	SK6	陶器	花生か	10.8	—	—	—	外) 灰白5V7/1 断) 灰白25Y7/1	灰釉	尾口窯
189	SK6	陶器	小瓶	—	—	43	70	外) 灰褐5YR4/2 断) 灰白N7/	眞輪	内面ロクロ口。外底回転あり。 内面無釉。外底の釉は拭き取る。 褐色の釉。
190	SK6	陶器	蓋物	7.6	3.5	44	—	外) 灰白5V8/2 断) 灰白5V8/2	灰釉	内面無釉。端部無釉。灰白色を 帯びる半透明の釉で細かい貫入 がある。
191	SK6	陶器	植木鉢	—	—	8.7	—	外) 灰白5V7/2 断) 灰白5V7/1	外) 鉄錆 内) 灰釉	黙面の三足を貼付。底部に径2.1 cmの円孔。外底と内面無釉。
192	SK6	陶器	香炉	—	—	6.8	17.8	外) 灰白75Y8/1 断) 灰白5V7/1	白濁した釉	体部に菊花形の浮文を貼付。輪 高台の外側に三足を貼付。高台 施錆。端部無釉。釉は焼成不良 気味で白濁。
193	SK6	陶器	植木鉢 植形	—	—	8.8	—	外) 淡黄5Y8/3 断) 灰白5V8/1	灰釉	底部に径1.8cmの円孔。内面ロ クロ口。高台内にアリ後付ナメ。 内面と底部無釉。淡黄色を帯びる光 沢の強い透明の釉。
194	SK6	陶器	不明	—	—	—	—	外) にぶい赤褐 5YR4/4 断) 灰白N7/	荀子形 灰釉	内面ロクロ口。拂みは手捏ねで成 形。内面施釉。

Tab.9 遺物觀察表（陶磁器・土器）

団版 番号	出土 地點	種類	器種 形態	法量 (cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・被施他)	備考 (生産地・ 生産年代・鉢・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径				
195	SK6	窯道具	ハマ	径 2.1	厚さ 0.9	孔徑 2.3	—	灰白25Y8/2	素焼き	輪状の体部に5個の円錐ピンを貼付。側面ナデ。上面に回転系切り痕。
196	SK6	土師質 土器	白土器 小皿	11.0	18	7.2	—	灰白25Y8/1	内) 葉刻による高 脚文	内底型押しによる麗削文様。内 面周縁と外側ヨコナデ。外底不定 方向のナデ。
197	SK6	土師質 土器	燒塗器	6.8	7.5	6.0	—	橙5Y8E/6	胎土中に金葉母を 含む。	外面ユビオサエ・ナデ、内面ナデ、 外底ユビオサエ・ナデ。
198	SK6	瓦質 土器	焼塗手 付き	18.6	—	—	—	外) 喰灰N3/ 内) 喰灰N3/ 断) 喰灰N3/7-1	把手を貼付。体部内外面回転ナ デ。	
199	SK6	土師質 土器	焼塗	33.6	—	—	—	内) 喰灰7.5YR7/4	口縁部内外面回転ナデ。内底ナ デ。外底に粗糾が多く付着。	開西系
200	SK6	瓦質 土器	蒸釜	—	—	—	—	鉢部(外) 内) 喰灰5Y7/1 断) 喰灰N3/ 内) 喰灰N3/7-1	外表面による麗削。体部内面回 転ナデ。	
201	SK6	瓦質 土器	火鉢	—	—	14.0	—	外) 喰灰N3/ 内) 喰灰5Y7/1	外面クロロ目。外底到底系切り。 四角の三足を貼付。	
202	SK6	土師質 土器	胡麻 煎り	—	—	—	—	内) 喰灰7.5YR7/4 〔中空〕	型作り上下貼り合わせ。内面ユ ビオサエ・ナデ。	
203	SK6	土師質 土器	甌	38.5	—	—	—	内) 喰灰7.5YR6/4	口縁部内外面回転ナデ。体部外 面ヨコナデ、内面ナデ。外面上位 に段と列穴文。	開西系
204	SK6	土師質 土器	人形	—	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4	人物	型作り貼り合わせ。中空。 内面ユビオサエ・ナデ。
205	SK6	土師質 土器	人形	—	—	—	—	にぶい黄澄10YR7/2	陶か	型作り貼り合わせ。中空。内面 ユビオサエ・ナデ。外面上にキラ 粉。
215	SK7 床	磁器 染付	中碗 広東形	12.4	7.7	6.2	—	外) 喰白25GY8/1 内) 白	外) 茄薄 高台外) 二重團練 口縁内) 團練 見込み) 明美・團練	肥前產 1780～1860年代
216	SK7	磁器 染付	中碗 広東形	11.6	6.0	6.4	—	外) 白 内) 白	外) 龍・雲・家珠 高台外) 二重團練 口縁内) 二重團練 見込み) 火焰宝 珠・團練 高台内) 変形字 匙・團練	肥前產 1780～1860年代
217	SK7	磁器 染付	小碗 端反形	9.4	5.1	3.8	—	外) 白 内) 白	外) 龜・文字 見込み) 龜	肥前產 19世紀
218	SK7	磁器 染付	小碗 浅半球形	10.0	4.4	3.4	—	外) 白 内) 白	外) 草花・太潤石	肥前產
219	SK7	磁器 色絵	小碗 丸形	7.6	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 赤・緑・その 他の上絵付による 花卉	肥前產
220	SK7	磁器 染付	小碗 端反形	9.6	5.3	3.8	—	外) 白 内) 白	外) 花唐草文 高台外) 團練 口縁内) 團練・團 練 見込み) 草花・二 重團練	關口・美濃 1800～1860年代
221	SK7	磁器 染付	小碗 端反形	9.2	4.9	4.0	—	外) 明緋灰10GY8/1 内) 白	外) 鶴・雲 高台外) 二重團練 口縁内) 带練・團 練 見込み) 草花・二 重團練	關口・美濃 1800～1860年代
222	SK7	磁器 染付	小碗 端反形	9.6	5.0	4.2	—	外) 白 内) 白	外) 丸文・團練 高台外) 二重團練	關口・美濃 1800～1860年代
223	SK7	陶胎染 付	中碗 広東形	12.2	6.7	6.5	—	外) 喰白25GY8/1 内) 喰白25Y8/1	外) 肋頭と铁頭に よる宝珠 高台外) 團練 口縁内) 團練 見込み) 略化した 五弁化・團練	太白手。 關口・美濃
224	SK7	磁器 染付	小杯 丸形	6.8	3.2	2.3	—	外) 白 内) 白	外) 松	
225	SK7	磁器 染付	小杯 丸形	6.9	3.3	2.6	—	外) 白 内) 白	外) 鶴・雀	肥前產
226	SK7・ SK8	磁器 染付	小杯 丸形	7.0	3.5	2.4	—	外) 白 内) 白	外) 水・紅葉	肥前產

Tab.10 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器種 形態	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・生産年代・器・使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
227	SK7	磁器 染付	小杯 浅半球形	7.0	29	23	—	外) 白 断) 白	外) 花・蝶	肥前產	
228	SK7	磁器 染付	小杯 平底	7.2	33	24	—	外) 白 断) 白	外) 若松 (口縁内) 不明 見込み) 若松	肥前產	
229	SK7	磁器 染付	紅皿	5.0	13	15	—	外) 灰白5Y8/1 断) 不明	外) 若松	透明釉は焼成不良で白渙。	肥前產
230	SK7	磁器 染付	小皿	10.3	25	6.5	—	外) 灰白10Y8/1 断) 白	内) 龍・雲・宝珠 (高台内) 宝形字	口縁部輪花形。	肥前產
231	SK7	磁器 染付	五寸瓶 底広	13.6	34	82	—	外) 白 断) 白	外) 如意頭蓮瓣唐草文 内) 姫唐草文・三 方割頭舌	純ノ目凹形高台。	肥前產
232	SK7 床	白磁	小皿 菊花形	8.2	22	5.0	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白N8/	内) 型による菊弁 口縁	型打成形。	肥前產
233	SK7	磁器 色絵	紅皿	4.2	19	13	—	外) 白 断) 白	外) 赤の上繪付に 見る赤毫		肥前產
234	SK7 床	白磁	紅皿 菊花形	4.5	15	15	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押成形。外面下半無釉。	肥前產 1780~1860年代
235	SK7	磁器 染付	猪口 端反形	7.4	53	42	—	外) 白 断) 白	外) 山水文・建物 (口縁内) 山水文 見込み) 東屋		肥前產
236	SK7	磁器 染付	仏壇瓶	8.2	60	44	—	外) 白 断) 白	外) 植物・土拔 高台外) 二重團襪		肥前產
237	SK7	磁器 染付	梨油壺	2.5	7.2	4.9	8.4	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 姫唐草文		肥前產 1780~1860年代
238	SK7	磁器 染付	碗蓋	笠部絆 99	28	—	拂み絆 58	外) 白 断) 白	外) 姜・不明 内) 二重團襪・團 紋・姜	廣東形碗の蓋。	肥前產
239	SK7	磁器 染付	碗蓋	笠部絆 8.4	25	—	拂み絆 34	外) 白 断) 白	外) 姜・兩 内) 两		肥前產
240	SK7	磁器 染付	碗蓋	笠部絆 9.2	24	—	拂み絆 50	外) 白 断) 白	外) 草・不明 内) 團襪 見込み) 不明	廣東形碗の蓋。	肥前產
241	SK7	磁器 染付	蓋物蓋	—	—	—	拂み絆 32	外) 白 断) 白	外) 不明	拂みを貼付。内面施釉。	肥前產
242	SK7	白磁	合子	5.7	24	5.2	—	外) 白 断) 白	透明釉	内面施釉。外底とかえり無釉。	肥前產
243	SK7	磁器 染付	蓋物 模張形	12.8	6.7	7.0	—	外) 白 断) 白	外) 宝文 (高台外) 二重團襪	口縁部内面と底部無釉。	肥前產又は肥前系
244	SK7・ SK12	陶器	中碗 丸形	12.7	8.4	5.3	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白25Y7/1	灰釉	内面クロ口。高台内を直線的に削り出す。高台無釉。灰オーラー ブ色を帯びる半透明の釉で粗い 質入が入る。目痕あり。	尾羽窓
245	SK7	陶器	中碗 丸形	10.7	7.5	5.1	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白10YR7/1	灰釉	内面クロ口。高台内を直線。高台 内を鋸歯的に削り出す。高台無 釉。灰オーラー色を帯びる半透 明の釉。	尾羽窓
246	SK7	陶器	中碗 筒丸形	10.8	7.3	4.8	—	外) 灰黄25Y7/2 断) 灰白25Y8/2	灰釉	外底に緩やかなロクロ口。高台内 に溝状の施釉。高台無釉。	尾羽窓
247	SK7	陶器	中碗 端反形	11.4	6.0	5.0	—	外) 灰黄25Y7/2 断) 灰白25Y7/1	外) 白土と鉄錆が 混在する梅化 灰釉	花芯は白土。花芯は鉄錆で描き 分けた。内面に緩やかなロクロ 口。高台無釉。灰黄色を帯びる 半透明の釉で細かい質入が入る。	尾羽窓
248	SK7	陶器	中碗	—	—	4.3	—	外) 灰白15Y7/2 断) 灰白25Y8/2	灰釉	高台無釉。	尾羽窓
249	SK7	陶器 色絵	小碗	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	外) 緑の上繪付に 見る從文 灰釉	透明の釉。	京都・信楽系
250	SK7・ SK12	陶器	鉢	17.1	8.9	5.7	—	外) 灰白10YR7/1 断) 灰白25Y7/1	灰釉・灰オーラー ブ色の釉	口縁端部を折り込み輪花形に成 形。高台無釉。灰白色を帯びる 半透明の釉。口縁部に灰オーラー ブ色の釉。日痕3足。	尾羽窓
251	SK7	陶器	鉢	13.0	6.8	5.6	—	外) 灰白15Y7/2 断) 灰白15Y8/1	灰釉	口縁部の数箇所を内側に折り曲 げ輪花形に変形させる。口縁部の 三方に褐色と青緑色に発色する 釉を掛けた。高台無釉。	尾羽窓

Tab.11 遺物觀察表(陶磁器・土器)

國版 番号	出土 地點	種類	器種 形	法量(cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴(成形・調整・補調他)	備考(生産地、 生産年代、鉢、 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
252	SK7	陶器	櫛鉢	—	—	14.2	—	外) にぶい赤褐 25YR4/4 断) にぶい赤褐 25YR4/4	燒結め	体部内面磨目。外面回転けずり、 ナデ。内底に不定方向の3条の擦 目。外底に凹凸。	
253	SK7	陶器	鍋	13.5	56	54	—	外) 黄褐7.5YR3/3 断) 黄灰25Y6/1	鉄釉	外面下位無釉。三足を貼付。	鹿島山窯か
254	SK6・ SK7	陶器	急須	6.0	—	5.0	—	外) 淡黄7.5YV3/3 断) 底白25Y8/2	外) 白土・鉄跡・ 緑釉・青色の釉に よる花文 灰釉	薄手。内面施釉。灰白色を帯び る透明の釉。文様の輪郭は扒抜 で描き。花弁を白土で塗り分け る。	
255	SK7・ SK8	陶器	土瓶 算盤玉 形	—	—	5.0	12.0	外) 黒褐10YR3/2 断) 褐灰10YR6/1	鉄釉	内面と外面下位無釉。三足を貼付。	
256	SK7	陶器	土瓶	8.7	—	—	21.3	外) オリーブ黄5Y6/3 断) 底黄25Y7/2	灰釉	口縁端部無釉。内面部的に施 釉。	
257	SK7	陶器	土瓶 算盤玉 形	10.8	12.0	7.4	18.4	外) 底オリーブ 7.5Y6/2 断) 底白25Y7/1	外) 上半に多条の 沈涙 灰釉	口縁端部と内面無釉。外面下位 無釉。オリーブ灰色を帯びる透 明の釉。三足を貼付。	
258	SK7	陶器	土瓶 算盤玉 形	8.4	13.9	7.5	18.2	外) 褐褐7.5YR3/4 断) 底N6/	鉄釉	口縁端部と内面上位無釉。外面 下位無釉。三足を貼付。	鹿島山窯か
259	SK7	陶器	土瓶 丸形	7.6	11.5	8.2	17.4	外) 褐7.5YR4/3 断) 浅黄褐10YR8/3	鉄釉	外面上部に強いクロ口目。内面施 釉。三足を貼付。	
								外) 白土・鉄跡・ 緑釉による建物・ 樹木・土被 灰釉	口縁端部と内面上位無釉。内面 施釉。透明の釉。		
260	SK7	陶器	土瓶 丸形	6.2	—	—	15.7	外) にぶい7.5YR6/4 断) にぶい7.5YR6/4	鉄釉	口縁端部と内面無釉。黒色の釉。	
261	SK7	陶器	土瓶	5.8	—	—	13.0	外) 黒N2/ 断) 底5Y6/1	鉄釉	口縁端部と内面無釉。黒色の釉。	
262	SK7	陶器	土瓶蓋 笠部伴	8.4	2.0	3.7	—	外) 周7.5YR4/3 断) にぶい7.5YR6/4	鉄釉	外面無釉。黒褐色の釉。	
263	SK7	陶器	土瓶蓋	笠部伴 6.8	2.2	4.2	—	外) 底10Y6/1 断) 底白N7/	灰釉	外面無釉。灰オリーブ色を帯び る透明の釉。	
264	SK7	陶器	土瓶蓋	笠部伴 7.0	2.8	かえり 径 5.3	—	外) にぶい7.5YR6/4 断) 浅黄褐7.5YR8/4	外) 白土による文 様 灰釉	内面とかえり無釉。	
265	SK7	陶器	土瓶蓋	笠部伴 8.4	2.3	かえり 径 6.4	—	外) 底25Y8/2 断) 底白25Y8/2	灰釉	内面とかえり無釉。灰白色を帯 びる透明の釉。	
266	SK7	陶器	蓋物	8.4	6.4	4.8	—	外) 底白10Y8/1 断) 底白N8/	灰釉	端部と外面下位無釉。灰白色を 帯びる半透明の釉。内底に目痕3 足。	
267	SK7	陶器	水注類	—	—	5.6	—	外) オリーブ黄5Y6/3 断) 底白5Y7/	灰釉	内面施釉。高台内無釉。オリーブ 色の釉。	外底に墨書き。
268	SK7	陶器	瓶	—	—	5.3	9.2	外) にぶい赤褐 5YR4/3 断) 底白25Y7/1	鉄釉	平底、内面と外底無釉。褐色の 釉。外底の一部に白土と粗糾が 付着。	尻戸重又は能奈 山窯。
269	SK7	陶器	瓶類か	—	—	8.0	—	外) 底白N8/ 断) 底白7.5Y7/	灰釉	高台施釉。内面の一部無釉。	尻戸窯。
270	SK7	陶器	中瓶	—	—	8.4	16.3	外) 黒褐7.5YR3/2 断) 黑褐7.5YR3/2	鉄釉	外面上位に多条の沈涙。内面無 釉。黒褐色の釉。	鹿島山窯か
271	SK7	陶器	壺	15.6	—	—	—	外) 褐褐7.5YR3/3 断) 褐灰10YR6/1	外) 沈涙 鉄釉	肩部に多条の沈涙。暗褐色の釉。	鹿島山窯
272	SK7	陶器	壺	24.0	—	—	—	外) にぶい赤褐 5YR4/4 断) 底白25Y8/1	鉄釉	上位に強いクロ口目。	関西系か
273	SK7	陶器	壺	31.6	—	—	—	外) 黑褐色10YR3/1 断) 底白25Y7/1	鉄釉	黒褐色の釉。	尻戸重又は能奈 山窯
274	SK7 床	陶器	灯明 受皿	11.4	2.7	4.8	—	外) 黄7.5Y7/2 断) 底白25Y8/1	内) 菊花の浮文 灰釉	内面に菊花の浮文を貼付。外面 下半と外底回転けずり。外面無 釉。灰黄色を帯びる半透明の釉 で貫入がある。	京都・信楽系
275	SK7 床	陶器	灯明 受皿	10.4	2.6	3.8	—	外) 黄7.5Y7/2 断) 底白25Y8/1	内) 菊花の浮文 灰釉	内面に菊花の浮文を貼付。外面 下半と外底回転けずり。外面無 釉。灰黄色を帯びる半透明の釉 で貫入がある。	京都・信楽系
276	SK7 床	陶器	灯明 受皿	11.0	2.2	4.0	—	外) 黄5Y7/2 断) 底白25Y8/1	内) 菊花の浮文 灰釉	内面に菊花の浮文を貼付。外面 無釉。内底に目痕。	京都・信楽系 口縁部 外面に タール状の焦げ跡。

Tab.12 遺物觀察表(陶磁器・土器)

団版 番号	出土 地点	種類	器種 形	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・ 生産年代・器 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
277	SK7	陶器	灯明 受皿	10.6	1.9	4.8	—	外) 黄灰25Y7/2 断) 灰白25Y8/1	内) 摂目 灰釉	外面下半と外底回転ケズり。外面 無釉。灰白色を帯びる透明の釉 で貫入が入る。内底に目痕。	京都・信楽系
278	SK7 床	陶器	灯明 受皿	11.2	2.3	4.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	内) 摂目 灰釉	外面下半と外底回転ケズり。外面 無釉。灰白色を帯びる透明の釉 で貫入が入る。内底に目痕。	京都・信楽系 口縁部外面上に タール状の焦げ。
279	SK7	陶器	灯明 受皿	11.6	1.9	5.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	内) 摂目 灰釉	外面下半と外底回転ケズり。外面 無釉。灰白色を帯びる光沢の強 い透明の釉で貫入がある。	京都・信楽系 口縁部外面上に タール状の焦げ。
280	SK7	陶器	灯明 受皿	11.6	2.3	4.6	受部径 7.8	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y8/1	内) 摂目 灰釉	外面下半と外底回転ケズり。外面 無釉。灰白色を帯びる透明の釉 で貫入が入る。内底に目痕。	京都・信楽系
281	SK7	陶器	灯明 受皿	11.2	2.1	4.4	—	外) 黄灰25Y7/2 断) 灰白25Y8/1	灰釉	外面無釉。	京都・信楽系 口縁部外面上に タール状の焦げ。
282	SK7	陶器	灯明 受皿	11.2	2.0	4.2	受部径 8.0	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	灰釉	外面下半回転ケズリ後手子。外底 回転ケズり。外面と受部無釉。灰 白色を帯びる半透明の釉で貫入 が入る。	京都・信楽系
283	SK7	陶器	ひょう そく 手付皿 台付	3.6	9.1	6.4	—	外) 灰5Y5/1 断) にい赤褐 5YR5/4	灰釉	手捏ねによる把手を貼付。外底 回転系切り。	
284	SK7	陶器	火鉢	—	—	16.8	22.3	外) 緑 断) 灰白5Y8/1	外) 沈線・印刷による花文・富貴 紋様・清韻	外底の2箇所に貫通しない穿孔。 緑の釉、内面と外底に鉄錆を 刷毛垂り。	瀬戸・美濃
285	SK7	陶器	火鉢	—	—	15.4	20.1	外) 緑 断) 灰白5Y8/1	外) 沈線・印刷による花文・家宝 四方摩・清韻・清韻	外底の2箇所に貫通しない穿孔。 緑の釉、内面と外底に鉄錆を 刷毛垂り、内底の5箇所に灰白色 の穿孔孔。	瀬戸・美濃
286	SK7	陶器	火鉢	—	—	12.6	21.4	外) 灰オーラ25Y6/2 断) 灰白25Y7/1	外) 丸形による穿孔 筋肋	裏面の双耳を貼付。内外面クロ ロ目。前面無釉。灰オーラ色を 帯びる透明の釉。上辺に青緑色 の釉を流し掛け。	
287	SK7	陶器	火鉢	—	—	17.3	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	外) 型による陽刻 文様の波 灰釉・綠色の釉	裏面は灰白色を帯びる透明の釉。 綠灰色の釉を部分的に流し掛け。 内底に目痕5足。	瀬戸・美濃
288	SK7	陶器	不明	6.5	4.5	3.5	—	外) 緑7.5YR4/3 断) 灰白25Y7/1	灰釉	外面下位無釉。	尾戸窯又は能茶 山窯か
289	SK7	陶器	鍋猪口	3.8	2.4	3.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/2	灰釉	手捏ねによる摘みを貼付。外底 回転系切り。	尾戸窯又は能茶 山窯か
290	SK7	陶器	不明	10.4	6.2	9.6	—	外) 灰7.5YR4/2 断) 橙7.5YR6/6	燒絞め	内外面クロ目。外底に凹凸。	備前か
291	SK7	窓道具	ハマ 径 15.2	厚さ 2.6	孔径 5.4	—	外) 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y7/1	輪状。手捏ねによる円錐ビンを 貼付。上面回転系切り。下面ナ ダ。	尾戸窯か ビンの先端は使 用により欠損す る。		
292	SK7	窓道具	JVQ	径 6.0	厚 5.2	孔径 1.5	—	外) 淡黄25Y8/3 断) 淡黄25Y8/3	輪状。手捏ねによる円錐ビンを 貼付。上面と下面回転系切り。	尾戸窯か ビンの先端は使 用により欠損す る。	
293	SK7	土師質 土器	小皿	6.3	1.5	4.0	—	にい・黄5YR6/4		内外面回転ナダ。外底回転系切 り。	内面に櫻。
294	SK7	土師質 土器	小皿	6.8	1.1	4.8	—	外) 橙7.5YR6/6 断) 橙7.5YR6/6		内外面回転ナダ。外底回転系切 り。	
295	SK7	土師質 土器	小皿	13.3	2.2	9.8	—	にい・黄7.5YR7/3		内面周縁回転ナダ。内底ナダ。外 面と外底回転ケズり。	尾戸窯
296	SK7	土師質 土器	小皿	12.6	1.9	8.8	—	外) にい・黄橙 10YR7/2 断) にい・黄橙 10YR7/2		内面回転ナダ。外面上位回転ナ ダ。下位回転ケズリ。外底回転ケ ズリ後直纏方向のナダ。	尾戸窯 内面にタール状 の焦げ。
297	SK7 床	土師質 土器	中皿	16.7	3.6	10.3	—	にい・黄橙10YR7/3		内外面回転ナダ。外面上位回転ナ ダ。下位回転ケズリ。外底ナダ。内底 やかなクロ目。	尾戸窯
298	SK7	土師質 土器	中皿	17.4	2.9	11.6	—	外) 橙5YR6/6 断) にい・橙5YR6/3		内面回転ナダ。外面上位回転ナ ダ。下位回転ケズリ。外底回転ケ ズリ。	内面に焦げ。始 器として使用。
299	SK7	土師質 土器	ミニチュ ア碗	4.5	1.9	2.0	—	外) 灰白25Y8/2 断) 灰白25Y8/2	口縁外) 型による 墨書き 鉄錆	堅物成形。内面ユビオサエ。部分 的に鉄錆を流し掛け。	
300	SK7	土師質 土器	蓋か 白色系	笠部径 5.5	1.6	—	天井部 径2.5	外) 灰白25Y8/1 断) 灰白25Y8/1	白色系の胎土	内外面回転ナダ。天井部回転系 切り。	尾戸窯又は京都 系

Tab.13 遺物觀察表（陶磁器・土器）

國版 番号	出土 地點	種類	器種 器形	法量 (cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴 (成形・調整・施調他)	備考 (生産地、 生産年代、鉢、 使用状態)	
				口径	器高	底径					
301	SK7	土師質 土器	燒塗壺 蓋	径 7.5	13	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	胎土中に金芸母を含む。	天井部ナデ、内面布目。	関西産
302	SK7	土師質 土器	燒塗壺 蓋	径 7.5	14	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	胎土中に金芸母を含む。	天井部ナデ、内面布目。	関西産
303	SK7 床	土師質 土器	燒塗壺 蓋	径 7.6	12	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	胎土中に金芸母を含む。	天井部ナデ、内面布目。	関西産
304	SK7	土師質 土器	燒塗壺 蓋	径 7.5	12	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	胎土中に金芸母を含む。	天井部ナデ、内面布目。	関西産
305	SK7 床	土師質 土器	燒塗壺 蓋	径 7.4	10	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	胎土中に金芸母を含む。	天井部ナデ、内面布目。	関西産
306	SK7 床	土師質 土器	燒塗壺 蓋	径 7.7	12	—	—	にぶい橙7.5YR6/3	胎土中に金芸母を含む。	天井部ナデ、内面布目。	関西産
307	SK7	土師質 土器	燒塗壺 蓋	径 8.3	16	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	胎土中に金芸母を含む。	天井部ナデ、内面布目。	関西産
308	SK7	土師質 土器	燒塗壺 蓋	径 7.6	15	—	—	にぶい橙7.5YR7/3	胎土中に金芸母を含む。	天井部ナデ、板による放射状の压痕、内面布目。	関西産
309	SK7 床	土師質 土器	燒塗壺 蓋	径 7.4	12	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	胎土中に金芸母を含む。	天井部ナデ、内面布目。	関西産
310	SK7	土師質 土器	燒塗壺 蓋	径 8.0	17	—	—	橙5YR6/6	胎土中に金芸母を含む。	天井部ナデ、内面压痕とチヂ目。	関西産
311	SK7	土師質 土器	燒塗壺	6.9	73	49	—	外: 橙5YR6/6 内: 橙5YR6/6	胎土中に金芸母を含む。	外面ユビオサエ・ココナデ、内面ユビオサエ・外底チヂ目。	関西産
312	SK7 床	土師質 土器	燒塗壺	7.0	70	50	—	にぶい橙7.5YR6/4	胎土中に金芸母を含む。	たたら成形、内面に段、外面ユビオサエ・ナデ、内面に凹凸。	関西産
313	SK7 床	土師質 土器	燒塗壺	6.7	72	55	—	にぶい橙7.5YR6/4	胎土中に金芸母を含む。	たたら成形、内面に縱方向の私接合痕、外面ユビオサエ・ナデ、内面に凹凸、外底ユビオサエ・ナデ。	関西産
314	SK7	土師質 土器	燒塗壺	7.0	7.5	47	—	にぶい黄橙10YR7/3	胎土中に金芸母を含む。	たたら成形、内面に縱方向の私接合痕、外面ユビオサエ・ナデ、内面に凹凸、外底強いユビオサエ。	関西産
315	SK7 床	土師質 土器	燒塗壺	7.0	7.6	54	—	にぶい橙7.5YR6/4	胎土中に金芸母を含む。	たたら成形、内面に縱方向の私接合痕、外面ユビオサエ・ナデ、内面に凹凸、外底ユビオサエ。	関西産
316	SK7 床	土師質 土器	燒塗壺	7.3	7.6	53	—	にぶい橙7.5YR6/4	胎土中に金芸母を含む。	たたら成形、内面に縱方向の私接合痕、外面ナデ、内面に凹凸、外底強いユビオサエ。	関西産
317	SK7	土師質 土器	焰壺	327	—	—	—	外: にぶい黄橙 10YR6/3 内: にぶい黄橙 10YR6/3	胎土中に金芸母を含む。	内外面回転ナデ、外底に凹凸、内面に焦げ、外底に煤。	関西産又は関西系、内面に焦げ、外底に煤。
318	SK7	土師質 土器	焰壺	320	—	—	—	外: にぶい橙7.5YR7/4 内: にぶい橙7.5YR7/3		内外面回転ナデ、外底型作り後ナデ。	関西産又は関西系、内面に焦げ、外底に煤。
319	SK7	土師質 土器	焰壺	320	—	—	—	外: にぶい黄橙 10YR7/3 内: にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ、外底型作り後ナデ。	関西産又は関西系、内面に焦げ、外底に煤。
320	SK7	土師質 土器	焰壺	340	—	—	—	外: にぶい橙7.5YR7/3 内: にぶい橙7.5YR7/3		内外面回転ナデ、外底型作り後ナデ。	関西産又は関西系、内面に焦げ、外底に煤。
321	SK7	土師質 土器	焰壺	254	—	—	—	外: にぶい黄橙 10YR6/3 内: にぶい黄橙 10YR7/3	胎土中に金芸母を含む。	内外面回転ナデ、外底に凹凸。	関西産、内面に焦げ、外底に煤。
322	SK7	瓦質 土器	焰壺	220	—	—	—	外: 灰NS/ 断: 灰白25Y7/1		手付きか、内面回転ナデ、外底型作り後ナデ、一部にチヂ目が残る。	内面に焦げ、外底に煤。
323	SK7	瓦質 土器	焰壺	200	—	—	—	外: 灰白25Y7/1 - 黄 灰25Y5/1 断: 灰白25Y7/1		手付きか、内面回転ナデ、外底型作り後ナデ、外底ナデ。	内面に焦げ、外底に煤。
324	SK7	瓦質 土器	焰壺	20.0	38	126	—	外: 黑5Y2/1 断: 灰N4		内外面ミギキ。	外底に焦げ。
325	SK7 - SK12	土師質 土器	模印 丸形	19.0	—	23.0	27.9	外: 橙7.5YR7/6 断: 灰N4		外面ナデ、外底ナデ。内面に手押ねによる突起を貼付。輪状の高台を貼付。	

Tab.14 遺物觀察表(陶器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・軸調性)	備考(生産地・生産年代・諸使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
326	SK7	土師質土器	壺型 筒形	—	—	162	—	外) 棕7.5YR6/6 断) 棕7.5YR6/6	外面部と外底に凹凸。内面回転ナデ。外底に円錐の三星を貼付。		
327	SK7	土師質土器	壺型 筒形	—	—	104	—	外) 朱4V-黄橙 10YR7/3 断) 朱4V-棕7.5YR6/4	内面下位に段、外底に三足を貼付。内外面ヨコナデ。外底ヘラ切り。		
328	SK7	瓦質土器	壺型 箱形	—	—	—	—	外) 黄灰25Y4/1 断) 白灰25Y7/1	たらら成形。外面部ナデ、内面ハケ。外底の四隅に脚を貼付。		
329	SK7	瓦質土器	火鉢	23.6	—	—	—	外) 姫灰N3/ 断) 朱黄褐10YR6-2	壁による遮削の梅文	外面部ミガキ。内面ヨコハケ。	
330	SK8	磁器染付	大碗 丸形	15.2	6.7	5.2	—	外) 白 断) 白	外) 兜・草花 高台外) 二重團襪 口内) 四方摩 見込み) 草花	肥前產	
340	SK8	磁器染付	中碗 広東形	9.8	5.5	5.4	—	外) 黄白5GY8/1 断) 白	外) 草花・太潤石・ 帶・團襪 口内) 二重團襪 見込み) 略化した 文様・團襪	乳頭は暗青灰色。	肥前系
341	SK8	磁器染付	小碗 端反形	10.0	5.1	4.2	—	外) 白 断) 白	外) 山水文・文字 内) 山水文	胎土は透明感をもつ。	関西系
342	SK8	磁器染付	小碗 端反形	9.8	5.6	4.1	—	外) 白 断) 白	外) 帯涙・進弁文 高台外) 團襪 口内) 帶涙 見込み) 花文・團襪	胎土は透明感をもつ。	瀬戸・美濃 1800~1860年代
343	SK8	磁器染付	小碗 端反形	9.2	5.0	3.7	—	外) 白 断) 白	外) 蟻虫・唐草・ 二重團襪 高台外) 二重團襪 口内) 带涙 見込み) 草花・二 重團襪	胎土は透明感をもつ。	瀬戸・美濃 1800~1860年代
344	SK8	磁器染付	小碗 端反形	9.6	5.0	4.1	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 花吻草文 高台外) 二重團襪 口内) 带涙 見込み) 草花・二 重團襪 高台内) 变形宇	胎土は透明感をもつ。	瀬戸・美濃 1800~1860年代
345	SK8	磁器染付	小碗 端反形	9.0	5.0	3.8	—	外) 白 断) 白	外) 山水文 高台外) 二重團襪 口内) 带涙 見込み) 岩波・ 二重團襪	胎土は透明感をもつ。	瀬戸・美濃 1800~1860年代
346	SK8	白磁	小碗 端反形	9.0	5.1	3.5	—	外) 白 断) 白	外) 葵手による梅 花	胎土は透明感をもつ。	瀬戸・美濃系
347	SK8	磁器色絵	小碗 丸形	8.4	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 赤・黒・その 他の上絵付による 凹凸彫り・草花・ 蟲甲		肥前產
348	SK8	磁器染付	小杯	6.8	3.3	2.8	—	外) 黄白25Y8/1 断) 白	外) 葵文	乳頭は暗緑灰色。	肥前產
349	SK8	白磁	小杯	7.2	3.5	2.9	—	外) 白 断) 白	葵付に粗糸が付着。		肥前產
350	SK8	磁器染付	鉢器 反形	13.2	5.4	7.2	—	外) 黄白10Y8/1 断) 白	外) 山水文 口内) 二重團襪 見込み) 不明	蛇ノ目凹形高台。透明釉は貫入 施茶山窯又是肥前系	
351	SK8	磁器染付	小皿 丸形	13.3	3.1	7.5	—	外) 白 断) 白	内) 唐草文・糸 舟花	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。コンニャク 印判による五弁花。乳頭は暗緑 灰色。	肥前產
352	SK8	磁器染付	盤 長方形	7.6× 5.3	2.1	5.0× 3.0	—	外) 白 断) 白	内) 山水文	高切り織工。長方形の高台を貼 付。	肥前產
353	SK8	磁器染付	中皿 丸形	22.6	2.6	15.4	—	外) 白 断) 白	外) 如意連続長唐 草文 内) 唐草文・松竹 梅円形文 高台内) □□年 製・團襪	口縁部輪花形。高台内にハリ支 え底。	肥前產
354	SK8	白磁	小皿 菊花形	8.3	2.0	4.7	—	外) 黄白10R/ 断) 黄白10B/	口縁	型打成形。内外面に菊瓣。	
355	SK8	白磁	皿 変形形	—	1.7	—	—	外) 白 断) 白	内) 型による蘭瓣 の菊瓣文	三足を貼付。焼成不良で釉は白	肥前產
356	SK8	磁器染付	碗蓋	7.8	2.2	—	—	外) 白 断) 白	外) 草花・岩 舟手		肥前產

Tab.15 遺物觀察表(陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量(cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴(成形・調整・施調他)	備考(生産地・ 生産年代・鉢・ 使用状態)	
				口径	器高	底径					
357	SK8	磁器 蓋付	蓋物 腰張形	11.8	6.3	6.0	—	外) 白 施) 白	外) 宝文 高台外) 二重圓錐	端部と口縁部内面無釉。乳頭は肥前産	
358	SK8	磁器 蓋付	蓋物	12.0	—	—	—	外) 底白NBS/ 施) 底白NBS/	外) 茶	端部と口縁部内面無釉。乳頭は肥前産	
359	SK8	磁器 蓋付	蓋物	8.8	4.8	4.4	—	外) 白 施) 白	外) 銀杏・圓錐 高台外) 二重圓錐	端部と口縁部内面無釉。肥前産	
360	SK8	白磁又 は染付	瓶	2.0	—	—	—	外) 白 施) 白		肥前産	
361	SK8	白磁	紅皿	4.6	1.4	1.4	—	外) 白 施) 白	外) 型による菊瓣	壓押成形。外面無釉。肥前産	
362	SK8	白磁	紅皿	4.7	1.6	1.4	—	外) 白 施) 白	外) 型による菊瓣	壓押成形。外面下半無釉。 肥前産 1780~1860年代	
363	SK8	白磁	紅皿	4.6	1.6	1.4	—	外) 白 施) 白	外) 型による菊瓣	壓押成形。外面無釉。肥前産	
364	SK8	陶器	中碗 堆反形	11.5	6.1	4.8	—	外) 浅黄25Y7/3 施) 底白25Y8/2	外) 白土と鉄錆に よる梅花 灰釉	高台施釉。尾戸窯	
365	SK8	陶器	中碗 丸形	11.6	7.7	5.4	—	外) 底白5Y7/2 施) 底白5Y7/1	外) 2条の凹線 灰釉	高台内に溝状の施釉。高台無釉。 底白色を帯びる半透明の釉。目 張あり。尾戸窯	
366	SK8	陶器	大碗	14.8	—	—	—	外) 底白オリーブ5Y6/2 施) 底白5Y7/1	灰釉	底オリーブ色を帯びる半透明の 釉。尾戸窯	
367	SK8	陶器	小碗 丸形	8.8	6.1	4.0	—	外) 底白25Y8/2 施) 底白25Y8/1	灰釉	高台無釉。淡黄色を帯びる半透 明の釉。尾戸窯	
368	SK8	陶器	小碗 半球形	—	—	2.9	—	外) 底白オリーブ5Y6/2 施) 底白5Y8/1	灰釉	高台内便巾状。高台無釉。底オ リーブ色を帯びる半透明の釉。 京船・信楽系	
369	SK8	陶器	小皿 丸形	11.8	4.2	5.0	—	外) 暗褐7.5YR3/3 施) 黄青25Y6/1	灰釉	外面に1条の沈刷。見込み糸ノ目 施剥ぎ後白土を施す。高台無釉。 高台内は分離的に削り出す。 尾戸窯又は能茶 山窯	
370	SK8	陶器	小皿 丸形	13.4	4.6	5.6	—	外) 底白5Y7/2 施) 底白5Y8/1	灰釉	見込み糸ノ目施剥ぎ後白土を施 す。高台施釉。淡黄色を帯びる 透明の釉。尾戸窯又は能茶 山窯	
371	SK8・ SK9	陶器	中皿	20.3	5.5	6.8	—	外) オリーブ黄5Y6/3 施) 黄青25Y7/2	灰釉	見込み糸ノ目施剥ぎ後白土を施 す。高台無釉。光沢の強いオ リーブ黄色の釉。底オリーブ色 の釉を部分的に流しきけ。尾 戸窯	
372	SK8	陶器	鉢	12.6	—	—	—	外) 底白5Y7/2 施) 底白5Y7/1	灰釉	口縁部を内側に折り曲げて輪花 形に変形させる。外面クロ口。 口縁部にオリーブ褐色の釉を掛け 分ける。尾戸窯	
373	SK8	陶器	土瓶蓋	笠部径 4.4	2.6	かえり 径 2.8	かえり 径 1.1	挿み径 1.1	外) 緑灰10GY5/1 施) にふい根7.5YR7/3	銅錆釉	かえりと内面無釉。
374	SK8	陶器	土瓶蓋	笠部径 7.6	2.4	かえり 径 5.9	かえり 径 1.3	挿み径 1.3	外) にふい黄 施) 10YR6/4 施) 浅黄橙7.5YR8/4	灰錆釉による草 文	内面とかえり無釉。底白色を帯 びる透明の釉。
375	SK8	陶器	土瓶 丸形	8.9	—	—	20.9	外) 暗褐7.5YR3/3 施) にふい根7.5YR7/4	灰釉	外面上に多少の強いクロ口。口縁 端部と内面下手無釉。暗褐色の 釉。	
376	SK8	陶器	瓶	—	—	9.7	14.8	外) 底白25Y7/1 施) 黄青褐10YR6/2	白化粧土・灰釉 青緑色の釉	内面と外底無釉。白化粧の後透 明の釉を施釉。青緑色の釉を部 分的に流し掛け。	
377	SK8	煮道具	匣	13.0	4.6	13.0	—	外) 底黄25Y7/2 施) 底白25Y7/1		口縁部に半円形の抉り。内外面 回転ナット。外底回転ナット。	
378	SK8・ SK9	陶器	瓶	—	—	7.0	10.2	外) 底7.5Y6/1 施) 黄青5Y4/1	白化粧土・灰釉	内面クロ口。内面無釉。高台施 釉。	
379	SK8	陶器	水注類 か	—	—	—	—	外) 底白オリーブ5Y6/2 施) 底白5Y7/1	灰釉	手捏ねによる把手を貼付。底オ リーブ色を帯びる透明の釉。尾 戸窯	
380	SK8	陶器	灯明受 皿 台付	7.2	5.2	4.4	—	外) 黒褐7.5YR3/2 施) にふい根7.5YR7/3	灰釉	外底回転ナット切り。	
381	SK8・ SK9	陶器	鳥の水 入れ	不明 ×7.2	3.2	10.7× 7.8	—	外) 底白オリーブ 7.5Y6/2 施) 底白5Y7/1	灰釉	たらら成形。椭円形。2箇所に挿 みを貼付け。外底ナダ。外底回転 に白土を施す。	
382	SK8	陶器	水鉢	32.2	—	—	—	外) 浅黄5Y7/3 施) 底白5Y8/1	外) ヘラ彫りによ る陰刻文様 灰釉	内面に強いクロ口。内面施釉。 浅黄色を帯びる透明の釉。瀬戸・美濃	
383	SK8	土瓶質 土器	中皿	17.8	2.7	11.4	—	外) にふい根7.5YR7/3 施) にふい根7.5YR7/3		内面と口縁部外側に軋ナット。外 面下半と外底回転ナット切り。尾 戸窯	
384	SK8	瓦質 土器	基盤	26.7	—	—	22.4	外) 黒N2/ 施) 底白25Y8/1	外面ミガキ、内面回転ナット。 外面上半に型による湯刷文様。	外面上半に強い 焦げ。	

Tab.16 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器種 器形	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・軸調性)	備考(生産地・生産年代・器・使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
385	SK8	土師質土器	焼塗蓋 蓋	径76	12	—	—	外)に赤い焼7.5YR5/4 内)に赤い焼7.5YR5/4 断)に赤い焼7.5YR5/4	胎土中に金芸母を 含む。	大斧部ナデ、内面布目。 内面ナデ。	関西産
386	SK8	土師質土器	焼塗蓋 蓋	径76	12	—	—	外)に赤い焼7.5YR5/4 内)に赤い焼7.5YR5/4 断)に赤い焼7.5YR5/4	胎土中に金芸母を 含む。	大斧部ナデ、内面布目。 内面ナデ。	関西産
387	SK8	土師質土器	焼塗蓋 蓋	66	78	52	—	外)に赤い焼7.5YR6/4 内)に赤い焼7.5YR6/4 断)に赤い焼7.5YR6/4	胎土中に金芸母を 含む。	外側ナデ、ビビオサエ。内面布目。 外底に強いビビオサエ。	関西産
388	SK8	土師質土器	焼塗蓋 蓋	67	72	54	—	外)に赤い焼7.5YR6/4 内)に赤い焼7.5YR6/4 断)に赤い焼7.5YR6/4	胎土中に金芸母を 含む。	外側ナデ、底部輪に連續したユビ サエ。内面布目。底部接合痕が 明確に残る。	関西産
389	SK8	土師質土器	燒灰筒形	—	—	114	—	外)に赤い黄橙 10YR7/3 断)に赤い黄橙5YR6/4	—	内面下位に段、外底に三足を貼付。 内外面ナデ。外底ナデ。	
390	SK8	土師質土器	燒灰筒形	20.0	—	—	20.6	外)に赤い黄橙 10YR7/3 断)に赤い黄橙 10YR7/3	—	外側ナデ。内部施設をもつ。窓の看無は不明。	
391	SK9	磁器 染付	小碗 丸形	9.0	4.9	3.7	—	外)灰白25GY8/1 断)灰白NS/8	外)草花文・團羅 高台外)團羅 見込み	内頸は暗青灰色。器付に粗糲が 付着。	肥前産
392	SK9	磁器 染付	小碗 端反形	9.2	4.8	4.0	—	外)白 断)白	外)山水文・帶羅 口縁内)帶羅 見込み	岩波、二重團羅	繩文・美濃又は肥前
393	SK9	磁器 染付	蓋物蓋 蓋	笠部径 9.3	28	かえり 縫合 8.2	—	外)白 断)白	外)区画間に七宝 翠苔・網口文・翠 と繩	模様の描きを貼付。内面施釉。 かえり無地。	肥前産
394	SK9	磁器 染付	碗蓋 蓋	笠部径 8.8	2.5	—	—	外)白 断)白	外)山水文 内)帶に宝珠と 雲・鶯・團羅	—	肥前産
395	SK9	磁器 染付	蓋物 腰張型	7.5	3.8	4.0	—	外)白 断)白	外)大根	内面施釉。端部と口縁部内面無 地。	肥前産
396	SK9	磁器 染付	小杯 丸形	6.6	3.2	2.0	—	外)白 断)白	外)椎	—	肥前産
397	SK9	磁器 色絵	小杯 丸形	5.1	2.6	1.3	—	外)白 断)白	外)赤・黒・その 他の上絵付による 墨と草花	—	肥前産
398	SK9	磁器 色絵	小杯 紅皿	4.6	—	—	—	外)白 断)白	外)赤の上絵付に よる文様	—	肥前産
399	SK9	白磁	紅皿 菊花形	4.5	1.4	1.4	—	外)白 断)白	外)型による荷物	型押成形。外底無釉。	肥前産 1780~1860年代
400	SK9	陶器	小碗 筒丸形	9.6	6.7	4.5	—	外)灰オーリーブ5Y6/2 断)灰白5Y7/1	灰釉	高台無釉。灰オーリーブ色を帯び る半透明の釉。	尾羽窯
401	SK9	陶器	小杯 丸形	6.3	3.2	2.3	—	外)灰白5Y7/1 断)灰白5Y7/1	灰釉	灰白色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系
402	SK9	陶器	捏鉢	25.2	12.1	10.0	—	外)暗褐色10YR3/3 断)に赤い焼7.5YR7/3	外)白化粧土刷毛 内)灰釉、鉄錆 内)白化粧土	端部無釉。外面上位に白化粧土 刷毛目、下位に鉄錆を刷毛毛振り。 内面下位に白化粧土刷毛毛振り。 内面に灰褐色の粗糲が輪状に付着。	肥前産
403	SK9	陶器	ミニチュ ア鍋	6.8	3.1	2.7	—	外)褐7.5YR4/3 断)黄灰25Y6/1	外)褐	三星を貼付。外底下位無釉。褐色の釉。	
404	SK9	陶器	土瓶蓋 蓋	笠部径 9.3	3.3	かえり 縫合 6.8	—	外)褐7.5YR4/3 断)E4v-褐7.5YR7/3	鉄釉	内面とかえり無釉。暗褐色の釉。	
405	SK9	陶器	蓋	笠部径 6.7	1.1	かえり 縫合 4.7	—	外)淡黃25Y8/3 断)灰白25Y8/2	灰釉	内面とかえり無釉。淡黄色を帯 びる透明の釉。	京都・信楽系
406	SK9	陶器	土瓶 丸形	4.6	9.4	5.0	12.3	外)灰白5Y8/1 断)白25Y7/1	白化粧土・灰釉	内面施釉。端部と口縁部内面無 地。外面上位は白化粧土の後、透明の 釉を施す。	金属製の把手が残存。
407	SK9	陶器	土瓶 算盤玉 形	6.0	—	—	15.5	外)黑褐10YR3/2 断)黄灰25Y6/1	鉄釉	黒褐色の釉。	
408	SK9	陶器	刮猪口	5.7	2.8	5.7	—	外)灰白5Y7/2 断)灰白5Y8/2	灰釉	手捏ねによる把手を貼付。外底 回転有り。把手下位無釉。灰 オーリーブ色を帯びる透明の釉。	
409	SK9	陶器	植木鉢 端反形	17.0	15.2	8.5	—	外)灰白25Y7/1 断)白25Y7/1 10YR7/3	白面した釉	歓面の双耳と円形文を貼付。三 足を貼付。底部に直径1.9cmの円 孔。焼成不良で把手は白濁し剥離 する。	高台内に小判枠 内「□井店」銘印。

Tab.17 遺物觀察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種形	法量(cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴(成形・調整・施調他)	備考(生産地・生産年代・鉢・使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
410	SK9	陶器	甕	16.2	—	—	23.0	外)灰褐色75YR4/2 内)オリーブ褐 25Y4/3 底)黄灰25Y6/1	外)铁釉 内)灰釉	口縁端部から内面にオリーブ褐色の釉。肩部に黒褐色の釉を施し剥け。	丹波
411	SK9	土師質土器	中壺	16.6	3.2	9.4	—	外)に赤い橙75YR6/4 内)に赤い橙75YR6/4	—	内面と外面上位回転ナデ。外面下半と外底回転ケズ。	内底に焦げ。
412	SK9	土師質土器	小壺	10.6	1.7	7.4	—	外)に赤い橙75YR2/4 内)に赤い橙75YR2/4	—	外面ヨコナデ、内面回転ナデ。外底ケズ!後直線方向のナギ。	尾山窯
413	SK9	土師質土器	小壺	11.3	2.1	6.8	—	外)に赤い橙75YR2/3 内)に赤い橙75YR2/3	—	内外面回転ナデ。外底回転系切月げ。	内面にタール状の油垢。
414	SK9	土師質土器	小壺	6.4	0.9	4.3	—	外)橙75YR7/6 内)橙75YR7/6	—	内外面回転ナデ。外底回転系切り。	口縁部に灯芯油垢。
416	SK10	磁器 染付	大碗 丸形	15.0	—	—	—	外)白 内)白	机 口縁内)四方摩見込み)擦痕	—	肥前窯
417	SK10	磁器 染付	中碗 丸形	11.2	—	—	—	外)灰白5GY8/T 内)白	外)丸文・方・雷 輪・擦痕 内)四方摩見込み)変形字	外底は暗オリーブ灰色。	肥前窯
418	SK10	磁器 染付	中碗 広東形	10.6	5.7	5.8	—	外)灰白NS/ 断)灰白NS/	外)高台外)二重團練 口縁内)二重團練 見込み)文字・團練	—	肥前窯 1780~1810年代
419	SK10	陶胎染付	中碗 広東形	11.5	6.5	5.8	—	外)灰白5YB8/2 内)灰白5YB8/1	外)櫻子文 高台外)團練 口縁内)團練 見込み)團練・コ ンニャック印判によ る五弁花纹	太手白。透明釉は買入が入る。	尾山・美濃窯 1780~1860年代
420	SK10 下層	磁器 染付	中碗 端反形	10.7	5.8	4.3	—	外)白 内)白	外)梅 見込み)梅	—	肥前窯
421	SK10	磁器 染付	小碗 端反形	9.9	4.7	4.2	—	外)白 内)白	外)青 見込み)薄	—	肥前窯
422	SK10 下層	磁器 染付	小碗 端反形	9.4	5.0	3.6	—	外)白 内)白	外)丸文・鳥・花 卉	肥前窯又は肥前系	
423	SK10 下層	磁器 染付	小碗 端反形	9.3	5.1	3.6	—	外)白 内)白	外)桜・楓風 内)楓風の尾 見込み)楓	透明釉は買入が入る。	肥前窯
424	SK10	磁器 染付	小碗 端反形	8.4	4.9	3.5	—	外)明緋灰75GY8/1 内)白	外)花唐草文・團 練 高台外)二重團練 見込み)花文	胎土は透明感をもつ。	尾山・美濃 1800~1860年代
425	SK10	磁器 染付	小碗 端反形	9.6	5.3	4.3	—	外)白 内)白	外)草花・團練 高台外)二重團練 口縁内)二重團練 見込み)岩波・二 重團練	—	尾山・美濃 1800~1860年代
426	SK10	磁器 染付	小碗 広東形	9.8	5.3	5.0	—	外)灰白5GY8/1 内)灰白NS/	外)草花・雁・團 練 口縁内)二重團練 見込み)不明・團 練	—	肥前窯又は肥前系
427	SK10	磁器 色絵染付	小碗 端反形	9.4	—	—	—	外)白 内)白	外)貝殻と赤の上 絵付による魚・海 藻文	—	肥前窯
428	SK10・ SK11	白磁	小碗 端反形	8.2	4.7	3.3	—	外)白 内)白	外)獣手による梅花	透明釉は青色を帯びる。	尾山・美濃系
429	SK10	磁器 染付	小碗 端反形	8.4	4.5	3.4	—	外)白 内)白	外)岩・植物・二 重團練 高台外)二重團練 口縁内)二重團練 見込み)草花・二 重團練	透明釉は白濁する。	肥前窯
430	SK10	磁器 染付	小碗 広東形	8.8	5.6	5.0	—	外)灰白10YR8/1 内)白	外)松・船・舟 高台外)二重團練 口縁内)二重團練 見込み)水に岩 か・團練	透明釉は買入が入る。	肥前系
431	SK10	磁器 染付	小杯 丸形	7.0	3.3	2.3	—	外)白 内)白	外)水・紅葉	—	肥前窯

Tab.18 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回版 番号	出土 地点	種類	器種 形態	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・ 生産年代・器・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径				
432	SK10	磁器 染付	小杯	72	4.0	24	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 萎草	肥前產
433	SK10	磁器 染付	小杯	71	3.7	28	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 家文(黒葉・ 文珠)	具組は暗青灰色。
434	SK10・ SK12	磁器 染付	小杯・ 平形	78	3.6	32	—	外) 白 断) 白	外) 若松・梅	肥前產
435	SK10	磁器 染付	小杯	—	—	34	—	外) 白 断) 白	外) 圖圓 (高台外) 二重圖圓 (高台内) 「□明口 翼」	二次被燒により釉は変質。
436	SK10	磁器 染付	薄手酒 杯	—	—	33	—	外) 白 断) 白	高台内) 「文政三 季」	手。具組は暗緑灰色に發色。
437	SK10	磁器 染付	小杯・ 平形	68	3.6	25	—	外) 灰白10Y8/1 断) 白	外) 菊花・網目による地埋め	肥前產
438	SK10	磁器 色々	紅葉 丸形	49	2.3	16	—	外) 白 断) 白	外) 赤の上絵付に ある海老	肥前產
439	SK10	磁器 染付	紅葉 丸形	51	2.2	17	—	外) 白 断) 白	外) 草花文	肥前產
440	SK10	白磁	紅葉 菊花形	45	1.6	14	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押成形。外面下半無釉。 1780～1860年代
441	SK10	白磁	紅葉 菊花形	46	1.3	15	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押成形。外面下半無釉。 1780～1860年代
442	SK10 下層	白磁	紅葉 菊花形	47	1.5	15	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押成形。外面無釉。 肥前產
443	SK10 下層	青花	小皿 端反形	96	2.2	48	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白N8/	外) 牡丹唐草 内) 魚と本草・團 紋	中国 景德鎮窯系
444	SK10	磁器 染付	五寸皿 丸形	148	4.1	90	—	外) 白 断) 白	外) 意加須連長唐 草文 (高台外) 二重圖圓 内) 剛唐草文・松 竹梅円形文 (高台内) 角仲内滿 「福」	外) 目凹形高台。 肥前產 18世紀後半
445	SK10	磁器 染付	五寸皿	148	4.5	93	—	外) 白 断) 白	外) 意加須連長唐 草文 (高台外) 帯縫に○ △ 内) 剛唐草文・帶 に花文・松竹梅円 形文 (高台内) 「成化年 製」	口縫部輪花形。蛇ノ目凹形高台。 肥前產
446	SK10	磁器 染付	五寸皿	132	3.3	92	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 暗化した連綿 唐草文 内) 芥葉文	口縫部玉線状。蛇ノ目凹形高台。 肥前產
447	SK10	磁器 染付	中皿 丸形	208	3.0	128	—	外) 灰白75Y8/1 断) 白	外) 連続唐草文・ 團紋 内) 松竹梅円形文 ・墨彈きによる 松・梅・鶴	高台内ハリ支え痕。 肥前產
448	SK10 下層	白磁	小皿 菊花形	8.2	1.9	4.9	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白10Y8/1	口縫	型打成形。内外面に菊弁。 肥前產又は肥前系
449	SK10	白磁	小皿 菊花形	82	1.9	4.6	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白10Y8/1	口縫	型打成形。内外面に菊弁。 肥前產又は肥前系
450	SK10 下層	磁器 染付	小皿	7.8	2.1	4.4	—	外) 灰白N8/ 断) 白	内) 山水文 口縫	型打成形。口縫部輪花形。具組 は暗緑灰色に發色。 肥前產又は肥前系
451	SK10	磁器 染付	皿	—	—	4.5	—	外) 灰白N8/ 断) 灰白N8/	外) 二重圖圓 内) 二重圖圓	成不良で釉は白濁。 肥前產又は肥前系
452	SK10	磁器 染付	碗蓋	笠部径 8.0	2.4	—	拂み径 32	外) 白 断) 白	外) 亀・「春」その他の文字 内) 亀か	肥前產
453	SK10 下層・ SK12	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.4	2.6	—	拂み径 37	外) 白 断) 白	外) 亀甲蟹ぎ・鶴 描き外) 二重圖圓	肥前產
454	SK10 下層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.4	2.8	—	拂み径 38	外) 白 断) 白	外) 網目・雲 描き外) 二重圖圓 内) 雷文草・雲	肥前產
455	SK10	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.8	2.8	—	拂み径 48	外) 芥・草花・櫻 内) 波紋・團紋 口縫	外) 弧形碗の蓋。 肥前產又は肥前系	

Tab.19 遺物觀察表(陶磁器・土器)

國版 番号	出土 地點	種類	器種 器形	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調他)	備考(生産地、 生産年代、鉢、 使用範囲)	
				口径	器高	底径					
456	SK10	磁器 蓋付	碗蓋	笠部径 10.0	26	—	描み目 54	外) 白 内) 灰白	外) 草花文 内) 灰白文珠・團 襯・二重團襯	広葉形碗の蓋。透明釉は無い質 人が入る。	肥前產又は肥前 系
457	SK10	磁器 蓋付	碗蓋	笠部径 9.2	27	—	描み目 38	外) 白 内) 灰	外) 灰 内) 灰		肥前產
458	SK10	磁器 蓋付	蓋物蓋	笠部径 9.6	—	かえり 径 8.6	—	外) 白 内) 灰	外) 丸文・團襯・ 内) 二重團襯	内面施釉。かえり無釉。	肥前產 458・459組か
459	SK10	磁器 蓋付	蓋物 腰形	9.0	50	47	—	外) 白 内) 灰	外) 丸文・團襯・ 高台外) 二重團襯	内面施釉。端部無釉。	肥前產 458・459組か
460	SK10	磁器 蓋付	蓋物 半圓形	10.0	84	57	—	外) 底白5GY8/1 灰白NS/	外) 草花文・團襯・ 高台外) 二重團襯 内) 团襯	内面施釉。端部と口縁部内面無 釉。	肥前產
461	SK10	磁器 蓋付	蓋物 腰形	9.0	48	48	—	外) 白 内) 灰	外) 松文・團襯・ 高台外) 二重團襯	内面施釉。口縁部内面と端部無 釉。	肥前產
462	SK10	磁器 蓋付	蓋物 腰形	11.9	64	56	—	外) 白 内) 灰	外) 胡唐草文 内) 团襯	内面施釉。口縁部内面と端部無 釉。透明釉は質人が入る。	肥前產
463	SK10	磁器 蓋付	段重	12.8	50	84	—	外) 白 内) 灰	外) 唐草文	腰部凹凹り。腰部無釉。口縁 部内面と端部無釉。	肥前產
464	SK10	磁器 蓋付	大鉢 丸形	—	—	140	—	外) 白 内) 灰	外) 雲龍文 内) 团襯		肥前產
465	SK10・ SK12 下層	磁器 蓋付	髮油壺	23	—	—	93	外) 白 内) 灰	外) 梅文	内面クロ目。内面無釉。	肥前產
466	SK10	白磁 又は 染付	瓶	—	—	46	—	外) 白 内) 灰		内面クロ目。内面無釉。	肥前產
467	SK10	磁器 蓋付	小瓶 辣匙形	1.5	13.6	64	42	外) 底白NS/ 灰白NS/	外) 胡唐草文	内面無釉。燒成不良で釉は白匂。 19世紀前半～中 葉	肥前產 19世紀前半～中 葉
468	SK10	磁器 蓋付	植木鉢 扇形	—	—	7.2	—	外) 白 内) 灰	外) 山水文	底部に円孔。内面下半無釉。	肥前產
469	SK10 上層	磁器 蓋付	鳥の木 人形又 は蟹体	9.2	33	8.6	—	外) 白 内) 灰	外) 山水文	輪状の描みを貼付。外底無釉。	
470	SK10 F層・ SK11	磁器 蓋付	仏瓶	—	—	—	—	外) 白 内) 灰	外) 宝文・山水文	口縁部を貼付。体部の数箇所に 織目。面部に耳耳を貼付。	肥前產
471	SK10 下層	陶器	中碗 扇形	12.5	9.0	6.0	—	外) 底白25Y7/1 灰白25Y7/1	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透 明の釉。	尾戸窯
472	SK10 上層	陶器	中碗 腰形	12.6	—	—	—	外) オリーブ黃5Y6/3 内) 底白25Y7/1	灰釉	オリーブ黄色を帯びる半透明 の釉。	尾戸窯
473	SK10 上層	陶器	中碗 腰形	11.0	7.7	5.4	—	外) 底白5Y7/1 灰白5Y7/1	灰釉	高台内に乱れた墨状の斑痕。高 台無釉。灰白色を帯びる半透明 の釉。脚本が入る。目底3足。	尾戸窯
474	SK10 下層	陶器	中碗 筒丸形	11.0	8.2	5.2	—	外) オリーブ黃5Y6/3 内) 底白25Y7/1	灰釉	高台施釉。オリーブ黄色を帯び る半透明の釉。内底に目底3足。	尾戸窯
475	SK10 下層	陶器	中碗 腰形	10.6	7.7	4.6	—	外) 底白5Y7/1 灰白5Y7/1	灰釉	高台無釉。釉は焼成不良気味 白匂。	尾戸窯
476	SK10 上層	陶器	中碗 筒丸形	10.2	7.4	5.2	—	外) 底白5Y7/2 灰白25Y8/2	灰釉	高台内に装飾的な墨状の斑痕。 高台無釉。浅黄色を帯びる半透 明の釉。	尾戸窯
477	SK10 下層	陶器	小碗 筒丸形	9.4	7.0	4.4	—	外) 浅黄25Y7/3 内) 底白25Y7/3	灰釉	高台無釉。焼成不良気味で釉は 白匂。	尾戸窯
478	SK10 下層・ SK12 下層	陶器	小碗 筒丸形	9.2	6.6	4.6	—	外) 底白25Y7/1 灰黄25Y7/2	灰釉	高台内兜巾状。高台無釉。灰白 色を帯びる半透明の釉。脚本が 入る。	尾戸窯
479	SK10 下層	陶器	小碗 筒丸形	9.4	6.4	4.5	—	外) 底白5Y7/1・に赤 い25Y8/3 内) 底白5Y7/1・に赤 い25Y8/3	灰釉	高台内兜巾状。高台無釉。灰白 色を帯びる半透明の釉。脚本が 入る。	尾戸窯
480	SK10 下層	陶器	小碗 丸形	9.3	5.9	4.2	—	外) 底白5Y7/2 内) 底白25Y7/1	灰釉	高台内に墨状の斑痕。高台無 釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
481	SK10 下層	陶器	小碗	8.8	5.6	4.1	—	外) 底白25Y7/1 内) 底白5Y7/1	灰釉	高台内に墨状の斑痕。高台無 釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
482	SK10 下層	陶器	小碗	—	—	4.2	—	外) 底黄25Y7/2 内) 底白25Y7/3	灰釉	内面クロ目。高台内に乱れた墨 状の斑痕。高台無釉。灰白色を 帯びる半透明の釉。	尾戸窯
483	SK10 上層・ 下層	陶器	中碗 扇形	12.2	—	—	—	外) 底白5Y7/2 内) 底白5Y7/1	灰釉	底オリーブ色を帯びる半透明 の釉。	尾戸窯

Tab.20 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器種 形態	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・生産年代・器・使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
484	SK10 上層	陶器	小碗 端反形	86	51	35	—	外) 扇白17SY7/1 断) 扇白25Y7/1	灰釉・緑灰色の釉	高台無釉。口縁部に緑灰色の釉。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窓か
485	SK10 上層	陶器	小碗 丸形	85	52	40	—	外) 扇白15Y7/2 断) 扇白25Y8/1	灰釉	高台内平底。高台無釉。灰白色を帯びる光沢の強い透明の釉。	尾戸窓か
486	SK10 下層	陶器	小杯	—	—	20	—	外) 扇白5Y7/2 断) 扇白25Y8/1	灰釉	高台内平底。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	京都・信楽系
487	SK10 下層・ SK12 下層	陶器	大皿	244	60	84	—	外) オリーブ黄5Y6/3 断) オリーブ黄25Y7/2	内) 黄斑による 輪、鳥 灰釉	高台内に渋状の痕跡。高台無釉。オリーブ黄色を帯びる透明の釉。只見足は灰オリーブ色に発色。日祇4足。	尾戸窓
488	SK10 上層・ 下層	陶器	中皿	194	52	84	—	外) 扇白5Y7/2 断) 扇白25Y7/1	灰釉・緑灰色の釉	高台無釉。オリーブ黄色を帯びる半透明の釉。口縁部の三方に緑灰色の釉。日祇4足。	尾戸窓
489	SK10 下層	陶器	五寸盤 端反形	146	46	52	—	外) 扇白5Y7/1 断) 扇白25Y7/1	灰釉・緑灰色の釉	口縁部の三方に緑灰色の釉を掛ける。高台無釉。日祇4足。	尾戸窓か
490	SK10 下層	陶器	小皿 丸形	126	44	53	—	外) 黄褐25Y5/4 断) ぶい桜7.5YR7/3	灰釉	見込み蛇ノ目釉調ぎ斑白土を施す。高台内兜形状。高台無釉。光沢の強い黄褐色の釉。	尾戸窓又は能茶山 山窯
491	SK10 上層	陶器	小皿 丸形	118	44	46	—	外) 黒褐10YR3/2 断) ぶい桜7.5YR5/3	灰釉	外縁上位に沈羅。見込み蛇ノ目釉調ぎ斑白土を施す。高台無釉。黒褐色の釉。	尾戸窓又は能茶山 山窯
492	SK10 下層	陶器	鉢 折沿形	148	85	78	—	外) 扇白10YR8/2 花文 内) ぶい赤褐 5YR5/4 断) ぶい赤褐 5YR5/4	外) 鉄銷による梅 花文 内) 背青色・黄 色の釉 内) 透明の釉 口縫	口縫部を内側に折り曲げて梅花形に変形させる。外面白化粧後、鉄銷で梅花を描き黄褐色の釉を施す。周囲は薄緑の釉による地め。高台無釉。	外面上位に則体 の口縫部分が 沿着。
493	SK10 上層・ SK12 下層	陶器	鉢	138	78	62	—	外) ぶい黄25Y6/4 断) ぶい黄25Y7/2	灰釉	高台無釉。光沢が強いにぶい黄 色の釉。日祇4足。	
494	SK10 上層	陶器	鉢	—	—	62	—	外) 扇白15Y7/2 断) 扇白25Y7/1	灰釉	外面上に強いクロ口目。高台内に渋状の痕跡。灰白色を帯びる半透明の釉。日祇4足。	尾戸窓
495	SK10 下層	陶器	捏鉢	17.0	86	92	—	外) 扇白5Y7/2 断) 扇白25Y8/2	灰釉	内外面クロ口目。口縫端部無釉。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	
496	SK10 上層	陶器	捏口	9.4	83	43	—	外) 扇白5Y7/2 断) 扇白25Y7/1	外) 鉄銷による榜 字文 内) 灰釉	高台内兜形状。高台無釉。鉄銷はオリーブ黄色。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	尾戸窓
497	SK10 上層	陶器	捏鉢	240	—	—	—	外) 浅黄5Y7/3 断) 浅黄5Y8/2	灰釉	内外面やかなクロ口目。浅黄色を帯びる光沢の強い透明の釉。外縁無釉。	細口・美濃か
498	SK10	陶器	鍋	190	10.1	86	—	外) 嵌褐7.5YR3/3 断) 嵌白10YR7/1	鉄釉	三足を貼付。外縁下半無釉。暗褐色の釉。日祇5足。	
499	SK10 上層	陶器	鍋	140	6.5	53	—	外) ぶい赤褐 5YR4/4 断) 浅黄褐10YR8/3- 堀切10YR6/1	鉄釉	三足を貼付。外縁下半無釉。に ぶい赤褐色の釉。	
500	SK10 下層	陶器	ミニチュ ア鍋	6.6	3.2	29	—	外) 嵌褐7.5YR4/4 断) 浅黄2.5Y6/1	鉄釉	三足を貼付。褐色の釉。	
501	SK10 下層	陶器	鍋蓋 笠部仔	11.0	—	—	—	外) 灰オリーブSY6/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	上位に多条の沈羅。罐部無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
502	SK10	陶器	捏鉢	316	126	156	—	外) ぶい赤褐 5YR5/4 断) ぶい赤褐 5YR5/4	焼締め	内面標目。内底に交差する斜方 向の標目。体部外縁回転十字。	那
503	SK10 下層・ SK12 下層	陶器	捏鉢	50.2	—	—	—	外) 灰褐5YR4/2 断) 灰褐5YR5/1	焼締め	口縫部にオリーブ灰色の自然釉 が掛かる。	
504	SK10 下層	陶器	土瓶 算盤玉 形	7.8	129	8.2	21.2	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰5Y6/1	灰釉	三足を貼付。灰オリーブ色を帯 びる半透明の釉。	
505	SK10 下層	陶器	土瓶	8.7	134	7.9	19.0	外) 黑褐10YR3/1 断) 黑褐2.5Y7/1	鉄釉	三足を貼付。口縫端部と体部内 面無釉。黒褐色の釉。	
506	SK10	陶器	土瓶	9.2	—	—	—	外) 明赤褐5YR3/3 断) ぶい桜5YR6/4	鉄釉	外面上に強いクロ口目。口縫端部と 内面下半無釉。明赤褐色の釉。	

Tab.21 遺物觀察表(陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地點	種類	器種 形	法量(cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴(成形・調整・施調他)	備考(生産地、 生産年代、鉢、 使用痕跡)
				口径	器高	底径				
507	SK10 下層	陶器	土瓶	92	—	—	21.2	外) にびい赤褐 5YR4/4 断) 黄灰25Y6/1	鉄輪	外面上に強いクロ目。口縁端部と 体部内面無釉。にびい赤褐色の 輪。
508	SK10 下層・ SK12 下層	陶器	土瓶 算盤玉 形	98	—	—	22.8	外) にびい赤褐 5YR4/4 断) 黄灰25Y6/2	鉄輪	体部外面と注口部外面に強い クロ目。内面無釉。褐色の輪。
509	SK10 上層・ SK11 下層・ SK12	陶器	土瓶	76	—	—	17.5	外) 黒褐10YR3/1 断) にびい赤褐 25YR5/4	鉄輪	体部上位に多条の沈線を造らせ、 中位に縱方向の多条の沈線。口 縁端部と体部内面無釉。
510	SK10 下層	陶器	土瓶蓋	笠部径 74	23	47	挿み径 16	外) 広オリーブ5Y6/2 断) 広白5Y7/1	灰釉	横みは三方から内側に折り込む。 内面無釉。広オリーブ色を帯びる 半透明の釉。
511	SK10 上層	陶器	土瓶蓋	笠部径 89	23	かえり 径 69	かえり 挿み径 11	外) 広白25Y7/1 断) 広白25Y8/1	外) 肉瘤による草 文 灰釉	内面とかえり無釉。釉は焼成不 良気味で白濁。
512	SK10 下層	陶器	土瓶蓋	笠部径 33	24	かえり 径 38	かえり 挿み径 11	外) 広白5Y8/1- 断) 橙5YR6/6	灰釉・綠釉	内面とかえり無釉。焼成不良の 灰白色の釉。上面に綠釉筋し掛 け。
513	SK10 上層	陶器	土瓶蓋	笠部径 77	33	かえり 径 58	かえり 挿み径 13	外) 白土・綠釉 断) にびい褐75YR6/3	外) 白土・綠釉 鉄筋による花木・ 鉄筋による花木・ 木本は鉄筋、花は白土、土被は白 土と綠釉で描き分ける。内面とか えり無釉。	木本は鉄筋、花は白土、土被は白 土と綠釉で描き分ける。内面とか えり無釉。
514	SK10	陶器	水注	69	—	—	98	外) 暗75YR4/3 断) 広白25Y8/1	鉄輪	内面ロクロ目。内面施釉。褐色の 釉。
515	SK10 下層	陶器	壺	—	—	10.4	18.3	外) 黒褐5YR2/1 断) 黄灰25Y7/2	鉄輪	対耳を粘付。内面施釉。黒褐色 の釉。内底に目痕。
516	SK10・ SK12	陶器	小壺	9.0	—	100	132	外) 淡黄25Y8/3 断) 広白25Y8/2	灰釉	対耳を粘付。外面横方向のイタナ テ。内面ロクロ目。内面無釉。
517	SK10	陶器	瓶	—	—	55	—	外) 暗75YR4/3 断) 広白25Y8/2	鉄輪	外底回転ケズリ残ナデ。内面施 釉。褐色の釉。
518	SK10・ SK12	陶器	甕	15.0	14.5	100	16.0	外) 灰釉 内) 黑褐5YR3/1 断) 橙25YR6/6	外) 灰釉 内) 粘釉	にびい黄褐色の釉。
519	SK10 下層	陶器	甕	22.0	25.4	142	21.0	外) 黑褐75YR3/3 断) 広白25Y8/1	鉄輪	内面に強いクロ目。内面施釉。 暗褐色の釉。肩部に黑色の釉を 流し掛け。外底に粗筋が付着。
520	SK10	陶器	甕	—	—	9.8	11.6	外) 暗75YR4/4 断) 広白25Y8/2	鉄輪	内面ロクロ目。外底ナデ。内面施 釉。
521	SK10 上層	陶器	甕	—	—	129	19.0	外) 黑褐75YR3/2 断) 広白25Y7/1	鉄輪	内外面ロクロ目。内面無釉。外底 施釉。黒褐色の釉。外底に灰白色 の粗筋と少量に付着。
522	SK10 下層	陶器	蓋物蓋	笠部径 8.4	11	かえり 径 6.5	—	外) 広白5Y7/2 断) 広白10YR8/1	灰釉	内面とかえり無釉。広オリーブ 色を帯びる半透明の釉。
523	SK10 上層	陶器	蓋物蓋	笠部径 6.7	1.4	かえり 径 5.0	—	外) 広白5Y7/2 断) 広白25Y8/1	灰釉	内面とかえり無釉。灰白色を帯 びる半透明の釉。
524	SK10 下層	陶器	蓋物	—	—	5.6	—	外) 広白25Y7/1 断) 広白25Y8/1	灰釉	高台無釉。広白色を帯びる半透 明の釉。
525	SK10 上層	陶器	灯明受皿	11.2	2.2	34	—	外) 淡黄25Y7/3 断) 広白25Y8/1	内) 横目 灰釉	内面に交叉する2条の横目。外面 下半無釉。浅黄色を帯びる半透 明の釉。目痕あり。
526	SK10 上層	陶器	灯明受皿	11.2	2.1	4.6	—	外) 広黄25Y7/2 断) 広白25Y8/1	内) 円形浮文 灰釉	円形浮文を粘付。外面無釉。黄 色を帯びる半透明の釉。目痕 あり。
527	SK10 上層	陶器	灯明受皿	11.6	2.3	3.6	—	外) 淡黄25Y7/3 断) 広白25Y8/2	内) 菊花形の浮文 灰釉	内面に強化した菊花形の浮文を 粘付。外面無釉。淡黄色を帯びる 半透明の釉。目痕あり。
528	SK10 下層	陶器	灯明受皿	11.6	2.6	3.8	—	外) 淡黄25Y7/3 断) 広白25Y8/2	内) 円形浮文・横 目 灰釉	内面に円形浮文と横目。淡黄 色を帯びる半透明の釉。外面無 釉。
529	SK10 下層	陶器	灯明受皿	11.2	2.1	3.8	受部径 6.6	外) 黑褐75YR7/1 断) 広白25Y8/1	灰釉	環部と外底無釉。広オリーブ色 を帯びる半透明の釉。
530	SK10	陶器	灯明受皿	—	—	5.8	—	外) 暗褐75YR3/3 断) にびい黄褐 10YR7/3	鉄輪	外面無釉。
531	SK10 上層・ 下層	陶器	不明	6.8	3.5	31	—	外) 暗褐75YR3/3 断) 広黄25Y7/2	鉄輪	外面上下無釉。褐色の釉。

Tab.22 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器種 形形	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・強調部)	備考(生産地・生産年代・器・使用痕跡)		
				口径	器高	底径						
532	SK10 F層	陶器	不明	53	36	34	—	外) 嵌褐7.5YR3/3 断) にい黄橙 10YER7/2	鉄釉	手捏ねによる把手を貼付。外面下平無釉。褐色の釉。		
533	SK10 下層	陶器	鉢猪口	69	30	72	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白25Y8/2	灰釉	手捏ねによる横みを貼付。外底回転ケズリ。口縁端部無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。		
534	SK10 F層	陶器	鉢猪口	56	31	57	—	外) 灰白5V7/2 断) 灰白25Y8/2	灰釉	手捏ねによる横みを貼付。外底回転ケズリ。口縁端部無釉。灰白色を帯びる透明の釉。		
535	SK10 下層	陶器	植木鉢 端反形	20.4	13.7	12.0	孔径 20	外) にい赤褐 5YR5/4 断) にい赤褐 5YR5/4	焼締め・鉄釉	外面上多条の沈線。底部に径2cmの円孔。黒褐色の釉を横向に流し掛け。		
536	SK10 上層・ 下層	陶器	植木鉢	15.4	8.0	12.6	孔径 20	外) 黑7.5YR2/1 断) 灰白25Y8/1	鉄釉	底部に円孔あり。外底無釉。内底下平無釉。黒色の釉。	外底に墨書。	
537	SK10	陶器	水鉢	—	—	17.2	—	外) 淡黄5V7/3 断) 褐白25Y8/2	外) 片切彫りによる 文様・灰釉	内面施釉。高台無釉。内底に砂目。	廻ロ・美濃	
538	SK10	陶器	火鉢	—	—	24.2	—	外) 緑 断) 灰白25Y8/1	外) 緑釉・鐵銷 内) 鐵銷 高台内) 緑釉	内底と高台内、外面下位に鐵銷を刷毛彫り。内底に灰白色の砂目。	廻ロ・美濃	
539	SK10 上層	陶器	火鉢	—	—	—	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白25Y7/1	白薗した釉	外面上半にヘラによる彫。底面の双耳を貼付。内面に砂目。	内底無釉。	
540	SK10 上層	陶器	火鉢	20.0	17.6	17.0	22.1	外) 緑 断) 灰白10YR8/1	外) 緑釉・鐵銷 内) 鐵銷	外) 丸彫りによる 彫、印刷による花 卉・葡萄・雷文等、 内) 緑釉	印刷による底面の双耳を貼付。外底に円孔2ヶ。内底に鐵銷を刷毛彫り。内底に灰白色の砂目。	廻ロ・美濃
541	SK10 下層	陶器	火鉢 瓶掛形	—	—	16.4	20.6	外) 緑 断) 灰白25Y8/2	外) 印刷による唐 草・松葉・葡萄 高台外) 印刷によ る雷文帶 内) 緑釉	頭部外面に瓶方向の沈線。外底の2箇所に貫通しない凹内れ。内底に鐵銷を刷毛彫り。	廻ロ・美濃	
542	SK10・ SK11	陶器	火鉢	15.0	—	—	15.9	外) 緑 断) 灰白5Y8/1	外) 丸彫りによる 彫、印刷による花 卉・如意頭文、團 紋・綠釉・鐵銷	印刷による底面の双耳を貼付。外表面と口縁部内面に絞釉。体部内面に鐵銷を刷毛彫り。	廻ロ・美濃	
543	SK10	陶器	焜炉	22.4	—	—	—	外) 緑 断) 灰白25Y8/1	外) 印花文・沈織 綠釉	意をもつ。内面上位に手捏ねによる突起を貼付。内面施釉。	廻ロ・美濃	
544	SK10 上層	土師質 土器	中皿	19.0	34	12.6	—	橙7YR6/6		外面上半回転ナデ、下半回転ケズリ。内面周縁回転ナデ、内底不定方向のナデ。外底回転ケズリ。尾戸窓		
545	SK10 下層	土師質 土器	小皿	11.6	20	7.6	—	にい・青7.5YR6/4		外面上半回転ナデ、下半回転ケズリ。内面周縁回転ナデ。内底直線方向のナデ。外底回転ケズリ。尾戸窓		
546	SK10 下層	土師質 土器	小皿	10.1	1.6	7.2	—	にい・青7.5YR6/4		外表面と内面規線削輪ナデ。内底不定方向のナデ。外底回転ケズリ。尾戸窓		
547	SK10	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	7.6	—	灰白25Y8/1	内) 陽刻による青 字文	内底壓押しによる陽刻文様。内面規線と外表面回転ナデ。外底直線方向のナデ。尾戸窓		
548	SK10	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	8.0	—	灰白25Y8/1	内) 陽刻による高 砂文	内底壓押しによる陽刻文様。外底不定方向のナデ。尾戸窓		
549	SK10 下層	土師質 土器	小皿	11.4	21	7.6	—	外) にい黄橙 10YR7/3 断) にい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転系切り。		
550	SK10 下層	土師質 土器	小皿	11.2	2.7	7.6	—	橙7YR6/6		内外面回転ナデ。内底に濃状のロクロ目。外底回転系切り。		
551	SK10	土師質 土器	小皿	7.0	1.0	4.9	—	にい・青7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転系切り。		
552	SK10	土師質 土器	釜	5.8	7.4	5.4	筒部径 13.0	灰白25Y8/1	外) 印花文 白色系の胎土	外面上位に印花文。外面上半回転ナデ、下半と外底回転ケズリ。内面回転ナデ。	京都系 筒部と底部に僅。 内面に墨書。	
553	SK10 下層	土師質 土器	蓋台	8.6	2.3	4.8	受部径 3.0	灰白25Y8/1	白色系の胎土	内外面回転ナデ。外面ロクロ目。外底回転系切り。	尾戸窓又は京都系 外面上に墨書。	
554	SK10	土師質 土器	ミニチュ ア瓶	5.4	2.7	2.6	—	灰白10YR8/2	外) 型による箇 口縁部外側陽刻文様。体部外側 と外底ナデレ目。内面ナデ。			

Tab.23 遺物觀察表（陶磁器・土器）

國版 番号	出土 地點	種類	器種 形器	法量 (cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・施調他)	備考 (生産地・ 生産年代・鉢・ 使用状態)	
				口径	器高	底径					
				最大 径							
555	SK10 下層	施釉 土器	ミニチュ ア碗	52	29	22	—	外) 灰白25YR6/2 内) 灰白25YR6/2	外) 型による陽刻文様 内) 淡緑色の低火度釉	外面上半回転ナデ。下半型による陽刻文様。外底チヂ目。内面回転方向のナデ。口縁部内外面施釉、底は無釉。	高台内に墨書き。
556	SK10 上層	土師質 土器	燒塗壺 蓋	天井部 径 8.4	13	かえり 径 6.7	—	明赤褐5YR5/6		天井部ナデ。内面ユビオサエ・布目・チヂ目。	
557	SK10	土師質 土器	燒塗壺 蓋	天井部 径 8.0	12	かえり 径 7.2	—	にぶv橙7.5YR7/4	胎土中に金雲母を含む。	天井部ナデ。内面布目。	関西産
558	SK10	土師質 土器	燒塗壺 蓋	天井部 径 7.1	10	かえり 径 7.5	—	橙5YR7/6	胎土中に金雲母を含む。	天井部ナデ。内面布目。	関西産
559	SK10	土師質 土器	燒塗壺 蓋	笠部径 7.6	13	かえり 径 7.0	—	にぶv橙7.5YR7/4	胎土中に金雲母を含む。	天井部ナデ。内面布目。	関西産
560	SK10 下層	土師質 土器	燒塗壺	7.5	7.6	5.2	—	にぶv赤褐5YR5/4		たら成形。外面ナデ。内面ヨコナデ。	
561	SK10	土師質 土器	燒塗壺	7.8	7.4	5.4	—	明赤褐5YR5/6		たら成形。外面ユビオサエ・ナデ。内面ヨコナデ。	
562	SK10	土師質 土器	燒塗壺	8.0	7.2	5.2	—	にぶv橙7.5YR6/4	胎土中に金雲母を含む。	たら成形。内面下位に段。外面ユビオサエ・ナデ。内面布目。外底にユビオサエ・板状のナデ。	関西産
563	SK10	土師質 土器	焰壺	28.0	—	—	—	外) にぶい橙7.5YR6/4 内) にぶい橙7.5YR6/4		口縁部内外面別軸ナデ。内底後回転ナデ。内底前回転ナデ。外底にチヂ目。	関西系 内面に焦げ。
564	SK10	瓦質 土器	行平	18.0	—	—	—	外) 灰NA/ 内) 灰白5YR8/1		体部外表面・内面回転ナデ。把手外表面キズ。	
565	SK10	瓦質 土器	茎釜	116	—	—	—	跨部径 25.0 外) 灰NA/ 内) 灰白N7/	外) 菊刻による建 物・船	外面上半に型による陽刻文様。 下半ヨコナデ。口縁部内外面別軸ナデ。内底と内面上半回転ナデ。印記あり。	
566	SK10 下層	瓦質 土器	茎釜	120	—	—	—	跨部径 25.0 外) 灰灰NA/ 内) 灰白N7/	外) 菊刻による建 物・船	外面上半に型による陽刻文様。 下半ヨコナデ。口縁部内外面別軸ナデ。内底と内面上半回転ナデ。内面中位にイタナ。	
567	SK10	土師質 土器	人形	—	—	—	—	灰白25YR8/2	鳥	壓押成形前後貼り合わせ。中空。内面ユビオサエ・ユビナダ。	
568	SK10 下層	土師質 土器	人形	—	—	—	—	にぶv橙7.5YR7/4	人物	壓押成形前後貼り合わせ。中空。内面ユビオサエ・ユビナダ。	
569	SK10	土師質 土器	人形	—	—	—	—	灰黄25Y7/2	人物	壓押成形前後貼り合わせ。中空。内面ユビオサエ・ユビナダ。外表面にキズ。	
570	SK10 上層	土師質 土器	人形	—	—	—	—	橙7.5YR6/6	動物	壓押成形前後貼り合わせ。中空。内面ユビオサエ・ユビナダ。外表面にキズ。	
571	SK10 上層	土師質 土器	人形	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	人物	壓押成形前後貼り合わせ。中空。内面ユビオサエ・ユビナダ。外表面にキズ。	
572	SK10	瓦質 土器	火鉢	—	—	—	—	外) 黒N2/ 内) 黄灰25YR4/1	外) 菊刻による山 文文様・帯状の文 様帶	輪高台を貼付。体部外表面ガキ、内面下位に粘土帯接合軌。外底回転ナデ。	内底に輻方向の彫痕。
573	SK10 上層	瓦質 土器	火鉢	17.0	8.9	15.0	—	灰NA/		三足を貼付。体部外表面ユビオ サエ・回転ナデ。外底に板状の压 痕。	
574	SK10・ SK12	土師質 土器	模印 丸形	19.5	—	—	—	外) にぶい橙7.5YR6/4 内) にぶい橙7.5YR6/4	胎土中に金雲母を含む。	前方に口縁部から切り込む窓。 内面に手探れによる突起を貼付。 外表面ナデ・ミガキ、内面ナデ。	関西産 外間に吹き瀧れ 状の溝。
575	SK10	土師質 土器	模印 丸形	20.6	—	—	—	外) にぶい橙7.5YR6/4 内) にぶい橙7.5YR6/4	胎土中に金雲母を含む。	体部上位に円孔数穴。外表面ナ デ・ミガキ。内面回転ナデ。	関西産
576	SK10・ SK12	土師質 土器	模印 丸形	—	—	15.0	—	にぶい橙10YR6/4	胎土中に金雲母を含む。	輪高台を貼付。体部外表面ナ デ・ミガキ。内面回転ナデ。外底に凹 印。	関西産
577	SK10	土師質 土器	模印 丸形	—	—	13.6	—	浅黄橙10YR8/3		輪高台を貼付。高台の前方に円 孔。体部外表面ナデ・ミガキ。内面 回転ナデ。高台外表面回転ナデ。 外底に凸凹。	外底に墨書き。
578	SK10 下層	土師質 土器	模印 丸形	20.0	19.7	20.0	25.0	にぶv橙7.5YR6/4	胎土中に金雲母を含む。	体部上位に円孔。輪高台を貼付。 高台の前方に円孔。体部外表面ナ デ・ミガキ、内面回転ナデ。内面 外表面回転ナデ。外底に凸凹。	関西産

Tab.24 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器種 形態	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・生産年代・器・使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
579	SK10	土師質土器	楕円形 丸形	—	—	22.1	—	外)に赤い橙7.5YR7/4 断)に赤い橙7.5YR7/4	内外面回転ナデ。		
580	SK10・ SK12	土師質土器	楕円形 筒形	21.0	—	—	—	外)明赤開25YR5/6 断)橙7.5YR7/4	前方に口縁部から切り込み窓。 内面に手捏ねによる突起を貼付。 体部上位に円孔。外面ナデ・ミガキ、内面回転ナデ。	関西産	
581	SK10	土師質土器	楕円形 さな	径 12.7	厚さ 1.2	円孔径 1.5	—	に赤い黄橙10YR7/3	胎土中に金雲母を含む。	たらら成形。円錐状。胎土を数個切つ。上面と下面にチザレ目。側面回転ナデ。	関西産
582	SK10	土師質土器	楕円形 さな	径 11.4	厚さ 1.1	円孔径 1.6	—	外)に赤い黄橙 断)10YR6/3 断)橙7.5YR6/6	たらら成形。円錐状。円孔を数個切つ。上面と下面にチザレ目。側面回転ナデ。		
583	SK10 下層	瓦質土器	楕円形 筒形	—	—	—	—	外)黒N2/ 断)に赤い橙7.5YR6/4	内面施設をもつ。外面に炭素吸着とミガキ。内面ヨコハケ。内面に手捏ねによる突起を貼付。		
596	SK11 下層	磁器染付	小瓶 丸形	7.2	3.6	2.5	—	外)白 断)白	外)菊花・桔子 高台外)二重圓窓	肥前産	
597	SK11	磁器染付	小瓶 丸形	7.0	3.1	2.6	—	外)白 断)白	外)菊花・桔子	肥前産	
598	SK11 下層	磁器染付	蓋物 腰張形	6.4	3.7	3.2	—	外)白 断)白	外)区画割りに四方擇・花に蝶	内面施設。口縁部と口縁部内面無施。	肥前産
599	SK11 下層	磁器染付	蓋物蓋	笠部径 15.5	かえり 径 6.0	縫み径 14.4	—	外)白 断)白	外)草花文・二重圓窓	紐状の摘みを貼付。内面施設。かえり無施。	肥前産
600	SK11 上層・ 下層	磁器染付	碗	笠部径 9.0	2.5	—	縫み径 4.8	外)白 断)白	外)高瀬・蝶 内)鷺	伝東形碗の蓋。	肥前産
601	SK11 上層	磁器染付	小瓶 錐並形	—	—	5.0	9.0	外)灰白N8/ 断)白	外)二重圓窓・團蝶・唐草文 高台外)團蝶	内面無施。	肥前産
602	SK11 下層	陶器	中瓶 瘤反形	11.0	7.1	5.0	—	外)灰白25YT7/1 断)灰白5Y7/1	外)白土・鉄錆による梅文 灰施	花びらは白土で描き分ける。高台内面状。高台施錆。	尾戸窯
603	SK11	陶器	小碗	9.0	—	—	—	外)灰白75Y7/1 断)灰白5Y7/1	灰施	高台無施。灰白色を帯びる半透明の施。	尾戸窯
604	SK11 下層	陶器	小杯 丸形	4.2	2.8	1.8	—	外)灰白25YT7/2 断)灰白25YT7/2	灰施	高台無施。灰白色を帯びる半透明の施。	尾戸窯
605	SK11 上層	陶器	ひょう そく 手付瓶 台付	受部径 4.0	8.2	—	—	外)黒10YR2/1 断)に赤い赤褐 25YB5/3	鉄錆	三足を貼付。外面下半無施。暗褐色の施。	
606	SK11 上層	陶器	ミニチュア鍋	7.6	3.5	3.6	—	外)褐75YR3/3 断)灰白25Y7/1	鉄錆	三足を貼付。外面上半無施。暗褐色の施。	
607	SK11 下層	陶器	火鉢	—	—	20.8	35.7	外)黒褐75YR3/1 断)灰白25Y8/1	外)印刷文 緑植・鉄錆・灰施	裏による瓶面の反対を貼付。三足の有無は不明。外面上位に印刷文、下半に鶴唐文。外面上半に緑植、下半に鉄錆、内面に灰施。外底無施。	瀬戸・美濃
608	SK11 下層	土師質土器	焼塙蓋	天井部 径 8.6	1.3	かえり 径 7.8	—	明赤褐5YR5/6	胎土中に金雲母を含む。	天井部ナデ。内面布目。	関西産
609	SK11	土師質土器	焼塙蓋	7.0	6.6	5.4	—	に赤い黄橙7.5YR6/4	胎土中に金雲母を含む。	たらら成形。外面ユビオサエ・ナデ。内面布目。	関西産
610	SK11	土師質土器	大消し 密蓋	笠部径 18.6	5.6	—	縫み径 5.8	に赤い橙7.5YR7/4	笠部内外面回転ナデ。天井部外面回転ナデ。内面に漆。		
611	SK11 下層	土師質土器	焼塙	—	—	—	—	に赤い橙7.5YR7/4	口縁部内外面回転ナデ。外底に凹凸。	関西系	
612	SK11 下層	土師質土器	鍋	—	—	—	—	外)灰黃褐10YR6/2 断)灰白10YR7/1	体部外表面ユビオサエ・内面コナナ。		
613	SK11 下層	瓦質土器	楕円形 箱形	16.2	—	胴部径 19.9	—	外)灰5Y5/1 断)に赤い黄橙 10YR6/4	内面施設をもつ。たらら成形。外面ナデ・ミガキ。内面イタナデ。接合部にユビオサエ。		
614	SK11 下層	瓦質土器	楕円形 箱形	—	—	—	—	外)灰褐25Y5/1 断)に赤い黄橙 10YR6/3	たらら成形。外面ナデ・ミガキ。内面イタナデ。		
615	SK12	磁器染付	中瓶 広東形	11.0	6.2	6.0	—	外)白 断)白	外)松・鶴・團蝶 内)縫み 二重圓窓 見込み)岩波・團蝶	肥前産又は肥前系	

Tab.25 遺物觀察表（陶磁器・土器）

図版 番号	出土 地點	種類	器種 形	法量 (cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・ 生産年代・鉢・ 使用状態)	
				口径	器高	底径					
616	SK12 上層	磁器 染付	中碗 弧反形	10.8	6.4	5.2	—	外) 明緑灰5GY8/1 白	外) 黄・黒視 高台外) 濃緑 口縁内) 二重團緑 見込み) 不明・團緑		肥前産又は肥前系
617	SK12 上層	磁器 染付	中碗 堆反形	12.0	6.5	4.6	—	外) 灰白5Y8/1 白	外) 黄・黒視 高台外) 濃緑 口縁内) 二重團緑 見込み) 黄・團緑	鉢底は暗青灰色。	肥前産又は肥前系
618	SK12 床	磁器 染付	中碗 堆反形	10.4	5.9	4.2	—	外) 明緑灰10GY8/1 白	外) 花唐草文・帯 緑 口縁内) 黒視 見込み) 花・二重 團緑 高台内) 跡	胎土は透明感をもつ。	瀬戸・美濃 1800～1860年代
619	SK12 上層	磁器 染付	小碗 堆反形	9.4	5.1	4.0	—	外) 白 白	外) 黄面 口縁内) 黄・黄 見込み) 黄・黄		肥前産又は肥前系
620	SK12 上層	磁器 染付	小碗 堆反形	8.8	5.1	3.6	—	外) 白 白	外) 大根 口縁内) 二重團緑 見込み) 団緑		肥前産又は肥前系
621	SK12 下層	磁器 染付	小碗 堆反形	9.4	6.1	3.4	—	外) 白 白	外) 文宝・團緑 高台外) 二重團緑		肥前産又は肥前系
622	SK12 下層	磁器 染付	小碗 堆反形	9.0	5.1	3.6	—	外) 白 白	外) 龍文・龟 見込み) 龟		肥前産
623	SK12 上層・ 下層	磁器 染付	小碗 腰張形	8.4	5.3	3.6	—	外) 灰白5GY8/1 白	外) 草花・岩 見込み) 岩波		肥前産
624	SK12 下層	磁器 染付	小碗 筒形	7.4	5.3	3.6	—	外) 白 白	外) 箔・松葉 高台外) 团緑 口縁内) 方舟摩 見込み) フジニヤ タ印判による五弁 花・團緑		肥前産
625	SK12 下層	磁器 染付	薄手酒 杯	6.0	2.8	3.2	—	外) 白 白	高台内) 「文政三 年」	高台は楕状に開く。鉢底はぼち リープ灰。	肥前系
626	SK12 上層	白磁 又は染付	薄手酒 杯	—	—	2.6	—	外) 灰白5Y8/1 白		高台は楕状に開く。透明釉は質 感が入る。	肥前産又は肥前系
627	SK12- 上層・ 下層	磁器 染付	小杯 浅平碟形	7.2	3.1	2.6	—	外) 白 白	外) 草花・蝶		肥前産
628	SK12 下層	磁器 染付	小皿	13.0	3.2	7.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 白	外) 暗化した唐草 文か 内) 菊・花卉・水 に船	蛇ノ目四形高台。 18世紀後半以降	肥前産又は肥前系 18世紀後半以降
629	SK12 下層	磁器 染付	五寸盤	14.6	4.9	9.0	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 白	外) 黄か 高台外) 二重團緑 内) 山文 高台内) 「成化年 製」	口縁部輪花形。蛇ノ目四形高台。 18世紀後半以降	
630	SK12 上層	磁器 染付	椭小皿 長方形	7.6	2.0	4.6	—	外) 白 白	内) 山水文	糸切り織工。貼付高台。	肥前産
631	SK12 下層	磁器 染付	鉢	14.2	7.6	7.2	—	外) 灰白N8/ 白	外) 美春手 内) 植物・文・植物・ 二重團緑		肥前産又は肥前系
632	SK12 上層	磁器 染付	鉢 筒子形	14.8	7.1	6.6	—	外) 灰白N8/ 白	外) 深山文 口縁内) 黒押きに よる雷文帶 見込み) 宝文		肥前産又は肥前系
633	SK12 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.0	2.5	—	摘み群 5.0	外) 灰白N8/ 白	外) 暈手 内) 文字・二重團 緑・團緑	広東形椀の蓋。	肥前産
634	SK12 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 8.0	2.4	—	摘み群 3.2	外) 灰白N8/ 白	外) 大根・鼠 内) 文宝・二重團 緑・團緑		肥前産
635	SK12 下層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.4	2.1	—	摘み群 3.8	外) 白 白	外) 波・草 内) 布紋・墨押き による波・團緑・ 雲		肥前産
636	SK12	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 9.4	3.0	かえり 径 8.0	かえり 径 8.0	外) 灰白5GY8/1 白	外) 牡丹唐草文	模状の摘みを貼付。内面施釉。 かえりに灰白色の 粗糲が付着。	肥前産

Tab.26 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器種 形態	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・ 生産年代・器・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径				
637	SK12 上層	磁器 染付	合子蓋 笠部付 78	20	かえり 径70	—	外) 白 断) 白	外) 茶・松葉	内面施釉。かえり無釉。	肥前產
638	SK12 下層	磁器 染付	蓋物	11.0	6.0	6.0	—	外) 灰白25GY8/1 断) 白	外) 梅・青輪	端部無釉。
639	SK12 上層	磁器 染付	合子	92	19	9.0	—	外) 灰白10Y8/1 断) 白	外) 元文	内面施釉。底部無釉。
640	SK12 上層	磁器 色繪	紅黒 浅丸形	42	1.8	14	—	外) 白 断) 白	外) 赤の上絵付による海老	肥前產
641	SK12	白磁	紅黒 菊花形	48	0.8	12	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押成形。外面下半無釉。
642	SK12 上層	白磁又 は染付	瓶	46	—	—	—	外) 灰白N8/ 断) 白	口部玉線状。内面ロクロ目。頭部内面施釉。	肥前產
643	SK12 上層	磁器 染付	蟹水入れ	118	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 茶	格円形。内面施釉。外項は深い青色で塗る。透明釉は粗い質入がある。
644	SK12 下層	磁器 染付	火入又 は香炉	84	6.1	5.6	—	外) 灰白N8/ 断) 白	外) 不明・團鏡	蛇ノ目円形高台。内面無釉。内面に灰白色の粉が付着。
645	SK12 下層	陶器	中碗 腰張形	12.6	8.9	6.2	—	外) 灰白25Y8/2 断) 灰白25Y8/2	灰釉	内外面鏡やかなロクロ目。高台内に溝状の施釉。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。
646	SK12 下層	陶器	中碗	10.2	7.2	5.2	—	外) 灰白25Y7/2 断) 灰白25Y8/2	灰釉	内外面鏡やかなロクロ目。高台内に溝状の施釉。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。
647	SK12 上層	陶器	中碗 筒丸形	10.4	7.4	4.8	—	外) オリーブ黄 75Y6/3 断) 灰白N7/	灰釉	外側ロクロ目。高台内に乱れた溝状の施釉。高台無釉。オリーブ黄色を帯びる光沢の強い透明の釉。目視3足。
648	SK12 下層	陶器	中碗 腰張形	10.4	7.0	5.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白25Y7/1	灰釉	内外面ロクロ目。高台無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。目視あり。
649	SK12 下層	陶器	小碗 筒丸形	9.0	6.7	4.6	—	外) 灰白10YR7/1 断) 灰白10YR8/2	灰釉	内外面ロクロ目。高台内に溝状の施釉。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で脚本が入る。目視無し。
650	SK12 下層	陶器	小碗 腰張形	8.4	6.2	4.2	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白25Y8/1	灰釉	内外面ロクロ目。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。目視無し。
651	SK12 下層	陶器	小碗 筒丸形	8.6	5.9	4.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	内外面ロクロ目。高台内に溝状の施釉。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。
652	SK12	陶器	小碗	—	—	4.0	—	外) 灰白25Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1・灰 白10YR8/2	灰釉	内外面ロクロ目。高台内に溝状の施釉。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で脚本が入る。目視無し。
653	SK12 上層	陶器	中碗 腰張形	14.4	9.2	5.8	—	外) 灰白25Y7/1 断) 灰白25Y7/1	灰釉	内外面ロクロ目。高台内に乱れた溝状の施釉。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。目視3足。
654	SK12 上層	陶器	中碗 丸形	12.8	5.0	4.8	—	外) 灰白75Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉	内外面ロクロ目。高台内無釉。オリーブ灰色を帯びる光沢の強い透明の釉。目視5足。
655	SK12 下層	陶器	中碗 丸形	12.4	5.8	5.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白25Y7/1	灰釉	内外面ロクロ目。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。
656	SK12 下層	陶器 色繪	小碗 半盤形	9.0	6.7	3.0	—	外) 灰白25Y8/2 断) 灰白25Y8/1	外) 赤・黄・緑の上絵付による文様	高台無釉。
657	SK12 下層	陶器	小碗 端反形	8.6	4.8	3.2	—	外) 灰白10Y7/1 断) 灰白N8/	灰釉	オリーブ灰色を帯びる透明の釉。
658	SK12 上層	陶器	小碗 端反形	8.0	—	—	—	外) 灰白75Y7/1 断) 灰白10Y8/	外) 鉄錆による支 内) 鉄錆による支 子	京都・信楽系
659	SK12 下層	陶器	小杯 丸形	5.8	3.2	2.2	—	外) 灰白15Y8/2 断) 灰白N8/	灰釉	高台無釉。
660	SK12 上層	陶器	小皿 丸形	12.6	5.7	5.0	—	外) 灰オリーブ 75Y6/2 断) 灰白175Y7/1	灰釉	見込み模様。内外面ロクロ目。高台外周回転ケズリ後ナギ。高台内更巾。高台無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。

Tab.27 遺物觀察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種 形態	法量(cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴(成形・調整・施調他)	備考(生産地・生産年代・鉢・使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
661	SK12 上層	陶器	小鉢 丸形	11.4	4.5	5.4	—	外:黒褐10YR3/2 内:にふい黄褐 10YR7/3	鉄釉	見込み蛇ノ目施調。外面クロ口。 高台外周回転ケズリ。高台無 縫。黒褐色の釉。	能登山窯 1820~1860年代
662	SK12	陶器	搖鉢	17.4	7.2	9.2	—	外:にふい赤褐 5YR4/3 内:にふい赤褐 25YR4/3	焼締め	口縁部外面凹窪、底部外周回 転ケズリ。内面施薬仕上げ部回転 ケズリ。外周板状の圧痕。内底不光 方向の擦目。	那
663	SK12 下層	陶器	鉢	36.6	—	—	—	外:灰白5Y7/2 内:灰白5Y8/4	灰釉	内面緩やかなクロ口。灰白色を 帯びる透明の釉。	
664	SK12 下層	陶器	鍋 丸形	21.6	9.4	8.4	—	外:褐75YR4/3 内:灰白5Y7/1	鉄釉	縦状の草耳付貼付。三足を貼付 外面下寸と外周回転ケズリ。内面 施薬。外周下端無釉。褐色の釉。 内底に目痕。	能登山窯又は尾 刀根か 外底に保。
665	SK12 下層	陶器	鍋	—	—	9.0	—	外:黒褐75YR3/2 内:にふい褐75YR6/4	鉄釉	三足を貼付。外面下半径の粗 い回転ケズリ。内面クロ口。外 面下半無釉。内面施薬。黒褐色 の釉。	田代窯 高知県安芸郡田 野町「田の」跡印 あり。
666	SK12	陶器	土瓶	笠部伴 9.2	2.8	かえり 横み伴 7.3	—	外:にふい赤褐 5YR4/4 内:灰黄25Y6/2	鉄釉	天井部に強い回転ケズリ。内面無 釉。褐色の釉。	
667	SK12 下層	陶器	土瓶 算盤玉 形	9.4	—	—	19.2	外:灰黃褐10YR4/2 内:浅黄褐10YR8/3	鉄釉	内面クロ口。口縁端部無釉。内 面下半無釉。黒褐色の釉。釉は 變成不良臭味。	
668	SK12 下層	陶器	土瓶 算盤玉 形	8.8	—	—	20.4	外:黒褐10YR3/1 内:黄灰25Y6/1	鉄釉	内面クロ口。口縁端部無釉。内 面下半施釉。黒褐色の釉。	
669	SK12 上層	陶器	水注 後手形	4.0	12.0	5.0	—	外:灰白25Y8/1 内:にふい黄褐 10YR7/3	鉄釉	手捏ねによる把手を貼付。内面 クロ口。口縁端部と内面上半手捏 ね無。高台無釉。外面白化粧後 透明釉。	
670	SK12	陶器	水注 後手形	2.6	—	—	6.3	外:灰白25Y8/2 内:にふい褐75YR2/4	白化粧土・灰釉 鉄釉	把手を貼付。内面クロ口。内面 無釉。外面白化粧後透明の釉を 施し、口縁部から絞釉を流し掛 け。	
671	SK12 下層	陶器	水注	4.0	—	3.4	6.4	外:灰白5Y7/1 内:灰白5Y8/1	外:貝殻による束 縛・柳 灰釉	内面施釉。高台無釉。灰白色を 帯びる透明の釉。	
672	SK12	陶器	水注	—	—	4.8	8.0	外:灰白75Y8/1 内:灰白5Y7/1	白化粧土・灰釉	内面クロ口。内面上半無釉。高 台無釉。外面白化粧後透明の釉 を施す。	
673	SK12 上層	陶器	調査利	—	—	7.4	—	外:淡黄5Y8/3 内:灰白25Y8/2	灰釉	内外面クロ口。内面と外底無 釉。灰白色を帯びる透明の釉。	
674	SK12 上層	陶器	瓶	4.0	—	—	—	外:褐75Y6/1 内:黄灰25Y6/1	灰釉	口縁端部と体部内面無釉。灰白 色を帯びる手透明の釉。	
675	SK12 上層	陶器	甕	20.2	—	—	24.9	外:にふい赤褐 5YR4/3 内:にふい黄褐 10YR7/3	鉄釉	肩部に多条の凹窪。体部内面 クロ口。内面施釉。褐色の釉。 部分的に黒色の釉を流し掛け。	
676	SK12 下層	陶器	花生か	11.0	22.7	7.2	—	外:灰7.5Y6/1 内:灰白75Y7/1	桶形 灰釉	柄は切り出しおと貼付による。 体部外表面はへつ括きで手を絞 ます。内面と高台施釉。灰白色を 帯びる透明の釉。	尻尾窯
677	SK12 上層	陶器	花生	13.6	—	—	—	外:灰白5Y7/2・暗オ リーブ5Y4/3 内:灰白25Y8/1	灰釉・暗オリーブ 色の釉	内面クロ口。内面施釉。透明の 釉。暗オリーブ色の釉を口縁部 から流し掛け。	尻尾窯
678	SK12 上層	陶器	蓋物壺	笠部伴 10.8	—	かえり 横 8.9	—	外:灰白5Y8/2 内:灰白25Y7/1	灰釉	内面とかえり無。光沢の強い 透明の釉。	京都・信楽系
679	SK12 上層	陶器	灯明受皿	11.8	2.3	4.4	—	外:灰黄25Y7/2 内:灰白25Y8/1	灰釉	内面に撫目。製作による菊花 を絞付。外面白下寸と外底回転 ケズリ。外面白釉。灰黄色を帯びる 半透明の釉。目痕あり。	京都・信楽系 口縁部外側に タール状の保。
680	SK12 下層	陶器	灯明受皿	11.0	2.6	4.0	—	外:浅黄25Y7/3 内:灰白25Y8/2	灰釉	内面に2条の撫目。外面白下寸と 外底回転ケズリ。外面白釉。浅黄色 を帯びる半透明の釉。目痕3点。	京都・信楽系
681	SK12	陶器	ミニチュ ア鍋	7.7	—	—	—	外:暗褐75Y8/3 内:黄灰25Y6/1	鉄釉	内面施釉。外面白無釉。暗褐 色の釉。	
682	SK12 下層	陶器	蓋物 牛角形	8.0	4.2	4.6	—	外:灰白5Y7/2 内:灰白5Y8/1	灰釉	内面施釉。端部無釉。高台無釉。 灰白色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系
683	SK12 下層	陶器	蓋物 牛角形	7.2	3.6	4.1	—	外:淡黄5Y8/3 内:灰白5Y8/1	灰釉	内面施釉。端部無釉。高台無釉。 淡黄色を帯びる透明の釉。	京都・信楽系 高台に墨書き。

Tab.28 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器種 形形	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・ 生産年代・器・ 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
684	SK12 床	陶器	不明	92	49	68	—	外) 黒白15Y7/2 断) 黑白25Y7/1	灰釉	外底回転ケズリ。内面施釉。外底無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窓、又は京都系
685	SK12	陶器	不明	66	48	39	—	外) 黄褐25Y5/4 断) 黑白25Y7/1	灰釉	内面と高台無釉。黄褐色を帯びる半透明の釉。	
686	SK12 上層	陶器	灰吹き 又は 火入	75	—	—	—	外) 黑白25Y8/2・綠 断) にぶい黄澄 10Y7/2	外底白化粧後灰釉 绿釉	外底白化粧後透明の釉。口縁部内面に緑釉を流し掛け。内面無釉。	口縁部に織打痕。
687	SK12	陶器	植木鉢	—	—	10.2	—	外) 黑白10Y8/1 断) 黑白25Y8/1	灰釉	内面無釉。灰白色を帯びる光沢のない透明の釉。	瀬戸・美濃
688	SK12	陶器	鳥の水 入れ	全長 11.7	27	全幅 85	—	外) 黑白5Y7/2 断) 黑白25Y7/1	灰釉	たらら成形。外底ナデ。外底無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窓
689	SK12 下層	素焼き	碗の 未製品 底東形	12.8	79	70	—	浅黄澄7.5YR8/3		内外面回転ナデ。外面下位と高台回転ケズリ。	尾戸窓
690	SK12 下層	素焼き	碗の 未製品 端反形	10.8	57	47	—	灰白10YR8/1		内外面回転ナデ。外面下位と高台回転ケズリ。	尾戸窓
691	SK12 上層	土師質 土器	碗	10.4	46	63	—	にぶい橙5YR7/4		外面上半回転ナデ、下位回転ケズリ。内面回転ナデ。外底回転ケズリ。	尾戸窓か 口縁部外面に 瘤。下位に径5.0 cmの焼成後円孔 を穿つ。
692	SK12 下層	土師質 土器	碗	10.4	44	54	—	浅黄澄7.5YR8/3		外面上半回転ナデ、下半回転ケズリ。内面回転ナデ。外底回転ケズリ後ナデ。	尾戸窓か 内部に瘤。下位 に径5.0cmの焼成 後円孔を穿つ。
693	SK12 下層	土師質 土器	白土器 小皿	11.8	1.9	85	—	灰白10YR8/2	内) 陽刻による松 竹梅鶴亀文	内軽型押しによる陽刻文様。内面周縁と外面上半回転ナデ。外 底平手と外底回転ケズリ後ナデ。	尾戸窓
694	SK12	土師質 土器	白土器 小皿	10.8	1.4	74	—	灰白10YR8/1	内) 陽刻による寿 字文	内軽型押しによる陽刻文様。内面規定方向のナデ。外底回転ナ デ。外底不定方向のナデ。	尾戸窓
695	SK12 上層	土師質 土器	小皿	12.2	2.2	90	—	にぶい橙7.5YR5/4		外面上半回転ナデ、下半回転ケズリ。内面周縁回転ナデ、内底不 定方向のナデ。外底回転ケズリ。	尾戸窓
696	SK12 上層	土師質 土器	小皿	11.8	1.9	84	—	にぶい橙5YR7/4		外面上半回転ナデ、下半回転ケズリ。内面周縁回転ナデ、内底ナ デ。外底回転ケズリ。	尾戸窓
697	SK12 上層	土師質 土器	小皿	9.8	1.5	74	—	浅黄澄7.5YR8/3		外面上半回転ナデ、下半回転ケズリ後ナデ。内面周縁回転ナデ、内 底ナデ。外底回転ケズリ後ナデ。	尾戸窓
698	SK12 下層	土師質 土器	小皿	11.8	1.2	80	—	浅黄澄7.5YR8/3		外面上半回転ナデ、下半回転ケズリ後ナデ。内面周縁回転ナデ、内 底ナデ。外底回転ケズリ後ナデ。	尾戸窓
699	SK12	土師質 土器	小皿	13.0	2.2	84	—	にぶい橙7.5YR7/3		外面上半回転ナデ。下半回転ケズリ後ナデ。内面周縁回転ナデ、内 底ナデ。外底回転ケズリ後ナデ。	尾戸窓
700	SK12 下層	土師質 土器	小皿	12.4	1.5	84	—	にぶい橙7.5YR6/4		外面回転ナデ。内面周縁回転ナデ、内底ナデ。外底回転ケズリ後 ナデ。	尾戸窓
701	SK12 下層	土師質 土器	小皿	5.9	1.1	37	—	にぶい橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転系切 り。	
702	SK12 上層	土師質 土器	小皿	8.0	1.5	64	—	にぶい橙7.5YR5/4		内外面回転ナデ、外底回転系切 り。内底中央ナデ。	
703	SK12 上層	土師質 土器	中皿	17.8	2.9	120	—	浅黄澄10YR8/3		外面上半回転ナデ、下半回転ケズ リ後ナデ。内面周縁回転ナデ、内 底ナデ。外底回転ケズリ後ナデ。	尾戸窓
704	SK12 下層	土師質 土器	中皿	17.6	2.7	120	—	にぶい黄澄10YR7/3		外面上半回転ナデ、下半回転ケズ リ後ナデ。内面周縁回転ナデ、内 底ナデ。外底回転ケズリ後ナデ。	尾戸窓 口縁部外側に瘤。 内底に焦げ。始 宿として使用か。
705	SK12	土師質 土器	中皿	17.5	2.7	11.6	—	にぶい橙5YR7/4		外面上半回転ナデ、下半回転ケズ リ後ナデ。内面周縁回転ナデ、内 底ナデ。外底回転ケズリ後ナデ。	尾戸窓 口縁部外側に瘤。 内底に焦げ。始 宿として使用か。
706	SK12 床	土師質 土器	中皿	17.6	2.8	11.0	—	にぶい黄澄10YR7/4		外面上半回転ナデ、下半回転ケズ リ後ナデ。内面周縁回転ナデ、内 底ナデ。外底回転ケズリ後ナデ。	尾戸窓 開西系 外底の一部と口 縁部外面に瘤。
707	SK12	土師質 土器	焰燈	35.4	—	—	—	にぶい黄澄10YR7/3		口縁部外側に瘤。外底ナデ・チヂ目。	

Tab.29 遺物觀察表（陶磁器・土器）

図版 番号	出土 地點	種類	器種 形器	法量 (cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴 (成形・調整・施調他)	備考 (生産地・ 生産年代・鉢・ 使用状態)	
				口径	器高	底径					
708	SK12 下層	土師質 土器	鍋小	14.9	—	—	灰白10YR8/1	白色系の胎土	内外面回転ナデ。外面下部回転 ケズリ。	外面に強い保。	
709	SK12 下層	土師質 土器	焼塗器 蓋	笠部伴 67	12	天井部 径7.8	—	にぶい櫻5YR6/4	胎土中に金雲母を 含む。	天井部ナデ。内面ナデ・チザレ 目。	関西産
710	SK12 上層	土師質 土器	焼塗器 蓋	笠部伴 75	11	天井部 径8.4	—	にぶい櫻5YR6/4	胎土中に金雲母を 含む。	天井部ナデ。内面ナデ・チザレ 目。	関西産
711	SK12 下層	土師質 土器	焼塗器 蓋	笠部伴 75	10	天井部 径7.4	—	にぶい櫻7.5YR6/4	胎土中に金雲母を 含む。	天井部ナデ。内面布目。	関西産
712	SK12 上層	土師質 土器	焼塗器 蓋	笠部伴 72	11	天井部 径7.3	—	にぶい櫻7.5YR6/4	胎土中に金雲母を 含む。	天井部ナデ。内面布目。	関西産
713	SK12 下層	土師質 土器	焼塗器	68	76	54	—	にぶい櫻7.5YR6/4	胎土中に金雲母を 含む。	たら成形。内面下位に段。 外面ユビオサエ・ナデ。内面に凹 凸。	関西産
714	SK12 上層	土師質 土器	焼塗器	68	73	48	—	にぶい櫻7.5YR6/4	胎土中に金雲母を 含む。	たら成形。外面部ユビオサエ・ナ デ。内面イタナデ・チザレ目。外 底ナデ。	関西産
715	SK12 上層	土師質 土器	焼塗器	68	75	48	—	にぶい櫻7.5YR6/4	胎土中に金雲母を 含む。	たら成形。外面部ユビオサエ・ナ デ。内面イタナデ・外底回転方向 のナデ。	関西産
716	SK12 床	土師質 土器	焼塗器	64	74	48	—	櫻5YR6/6	胎土中に金雲母を 含む。	たら成形。外面部ユビオサエ・ナ デ。内面イタ・チザレ目。内底ナ デ。外底回転方向のナデ。内面に 縦方向の粘土接合痕が残る。	関西産
717	SK12 下層	土師質 土器	焼塗器	7.0	68	50	—	にぶい櫻5YR6/4	胎土中に金雲母を 含む。	たら成形。外面部ユビオサエ・ナ デ。内面ナデ・チザレ目。外底ナ デ。	関西産
718	SK12 上層	土師質 土器	焼塗器	7.9	74	57	—	にぶい櫻7.5YR6/3	胎土中に金雲母を 含む。	たら成形。内面下位に段。 外面ユビオサエ・ナデ。内面に凹凸 外底に凸オサエ。	関西産
719	SK12	土師質 土器	水注	6.0	4.2	44	79	灰白10YR8/1	白色系の胎土	天井部に型押による彫込みと圓 窓。内面ナデ。	京都系
720	SK12 下層	土師質 土器	蓋	笠部伴 44	0.4	—	—	灰白10YR8/1	白色系の胎土	天井部に型押による彫込みと圓 窓。内面ナデ。	京都系
721	SK12 上層	施釉 土器	ミニチュ ア水注	35	25	30	60	外) 緑 断) にぶい櫻7.5YR6/4	外) 型による陽刻 の点の 緑色の低火度釉	外) 型による陽刻 の点。外) 陽刻文様。 外) 陽刻文様による陽刻文様。 外) 陽刻文様による陽刻文様。 外) 陽刻文様による陽刻文様。	京都系
722	SK12	施釉 土器	ミニチュ ア瓶	4.4	0.9	23	—	外) 緑 断) 灰白10YR8/2	外) 陽刻文 の連文 緑の低火度釉	外) 型による陽刻 の点。外) 陽刻文 の連文。外) 陽 刻文による陽 刻文。	高台内に墨書き。
723	SK12 下層	軟質施 釉陶器	小皿	—	11	—	—	外) 黄・緑 断) 灰白10YR8/1	内) 型による陽刻 の點 緑・黄の低火度釉	内) 型による陽刻 の点。内) 陽刻文 の連文。内) 陽 刻文による陽 刻文。	高台内に墨書き。
724	SK12 下層	軟質施 釉陶器	小皿か	—	—	—	—	外) 灰白25Y8/1 断) 灰白25Y8/1	内) 型による陽刻 の繩 緑の低火度釉 鉄錆	内) 型による陽 刻文。内) 陽 刻文による陽 刻文。	高台内に墨書き。
725	SK12 下層	瓦質 土器	茶釜	11.6	—	—	鶴部伴 252	外) 蝶灰N3/ 断) 灰白NS/	外) 型による陽刻 の牡丹・團紋	外面上半に型による陽刻文 様ナデ・ミガキ、下半ヨコナデ。口 部内面外面回転ナデ。内面上半 回転ナデ。下半ヨコナデ。	高台に丸栓内 古」鉢印。
726	SK12 床	瓦質 土器	茶釜	13.0	—	—	鶴部伴 285	外) 蝶灰N3/ 断) 灰白7.5Y8/1	外) 型による陽刻 の点・團紋	手捏ねによる耳足を貼付。外 面上半に型による陽刻文様ナ デ・ミガキ、下半ヨコナデ。口 部内面外面回転ナデ。内面上半 回転ナデ。下半ヨコナデ。	高台に丸栓内 古」鉢印。
727	SK10・ SK12	瓦質 土器	土瓶	—	—	7.5	—	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/	耳足と注口部は貼付。体部上半 内外面ナデ。外底に型による三 足と鉢。内底イタナデ。	外底に型による三 足と鉢。	外底に型による三 足と鉢。
728	SK12 上層	瓦質 土器	火鉢 火盆丸形	254	120	206	—	櫻7.5YR6/6	胎土中に金雲母を 含む。	体部外面ナデ・ミガキ。内面回転 ナデ・内底ナデ。外底に凹凸。内面 円孔。外底ナデ・ミガキ。内面回 転ナデ。外底に凹凸。贴付高台。	関西産
729	SK12	瓦質 土器	火鉢	—	—	17.3	—	外) 黒5Y2/1 断) 灰5Y5/1	体部前方に窓をもつ。 内面上位に手捏ねによる突起を貼付。 体部に円孔数穴。輪高台の三方に 内底ナデ・ミガキ。内面回 転ナデ。外底に凹凸。贴付高台。	内面上位に手捏ねによる突起を貼付。 体部前方に窓をもつ。 内底ナデ・ミガキ。内面回 転ナデ。外底に凹凸。贴付高台。	関西産
730	SK12 上層・ 下層	土師質 土器	燒印 丸形	20.3	20.0	19.5	25.8	外) にぶい櫻7.5YR5/4 断) 櫻7.5YR6/6	胎土中に金雲母を 含む。	体部前方に窓をもつ。 内面上位に手捏ねによる突起を貼付。 体部に円孔数穴。輪高台の三方に 内底ナデ・ミガキ。内面回 転ナデ。外底に凹凸。贴付高台。	関西産

Tab.30 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器種 形態	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・強調部)	備考(生産地、生産年代、器使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
731	SK12 上層	土師質土器	楕卵形	22.0	—	—	—	に赤い褐7.5YR6/4	胎土中に金雲母を含む。	内面上位に手捏ねによる突起を貼付。体部上位に円孔数穴。外面部ナデ、ミガキ、内面凹凸ナデ。	関西産 口縁部と体部外縁に吹き反れ状の渦み。
732	SK12 下層	土師質土器	楕卵形	17.0	—	—	—	に赤い褐7.5YR7/4		窓は不明。体部上位に製作時にによる突起を貼付。体部上位に円孔数穴。外面部ナデ、ミガキ、内面凹凸ナデ。	在地系か
733	SK12 床	土師質土器	楕卵形	—	—	24.8	29.9	外)に赤い褐7.5YR5/4 断)浅黄橙7.5YR8/4		体部前方に窓をもつ。突起の有無は不明。高台の前方と後方に切り込み。内外面削輪ナデ。貼付高台。	外底に墨書き。
734	SK12 上層・下層	土師質土器	楕卵箱形	16.5	21.2	15.4	21.0	外)に赤い褐7.5YR5/4 断)に赤い褐7.5YR5/4		たらち成形。内部施設をもつ。窓は不明。外面上位に耳を貼付。内面上位に手捏ねによる突起を貼付。外底に4足を貼付。体部外表面ナデ、ミガキ、内面タケハナ。接合部にユビオナヌ。内部施設の内面ヨコハケ。	
735	SK12 上層	瓦質土器	楕卵箱形	13.0	—	—	19.0	外)オーリーブ黒5Y3/1 断)に赤い黄橙10YR6/3	胎土中に金雲母を含む。	内部施設をもつ。たらち成形。外面部ナデ、内面ハケ。複合部にユビナヌ。外底のみに灰被吸着。	関西産 手押捺印あり。
736	SK12	土師質土器	楕卵筒形	—	—	12.4	—	外)に赤い褐7.5YR5/4 断)に赤い褐7.5YR5/4		体部前方に底部から切り込む窓あり。体部内面下位に断面三角形のきな受けを高台。体部外表面ナデ、内面ヨコハケ。きな受けの上下に回転ナデ。	
737	SK12	土師質土器	人形	—	—	—	—	に赤い褐7.5YR7/4	人物	型押成形貼り合わせ。中空。外面導削文様。内面ユビオサエ・ナデ。チフレ目。	
738	SK12 下層	土師質土器	人形	—	—	—	—	に赤い褐7.5YR7/3	魚	型押成形貼り合わせ。中空。外面導削文様。内面ユビオサエ・ナデ。	
739	SK12	土師質土器	人形	—	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	龜	型押成形貼り合わせ。中空。外面導削文様。内面ユビオサエ・ナデ。	
740	SK12 下層	土師質土器	人形	—	—	—	—	に赤い褐7.5YR7/3		型押成形貼り合わせ。中空。外面導削文様。内面ユビオサエ・ナデ。外外面にカラ粉。	
741	SK12	土師質土器	型	—	—	—	—	灰白10YR8/2	人物	外表面ナデ。	
745	SK12	土師質土器	不明	径21	0.6	—	—	褐5YR6/6		外表面ナデ。	
759	SK13 上層	磁器染付	中瓶	12.0	—	—	—	外)灰白25GY8/1 断)灰白N8/	外)雅文	透明釉は貫入が入る。	肥前産 百賀窯 か 1630～1640年代
760	SK13	磁器染付	碗	—	—	—	—	外)明オリーブ灰 25GY7/1 断)灰白N8/	外)不明・團襯 口縁内)團襯	舟形は暗緑灰色。	肥前産 1610～1640年代
761	SK13 床	青花	碗	9.8	—	—	—	外)灰白N8/ 断)白	外)網目文	古染付。口縁端部の釉が食い状に剥がれる。	中国 景德鎮窯系 1620年代前後
762	SK13	青花	碗	—	—	—	—	外)白 断)白	内)花文 高台外)團襯		中国 景德鎮窯系
763	SK13 下層	青花	皿	—	—	—	—	外)灰白7.5Y7/1 断)灰白N8/	内)不明	舟形は暗青灰色。	中国 景德鎮窯系
764	SK13	磁器染付又は白磁	不明	—	—	—	—	外)灰白10Y7/1 断)灰白N8/			肥前産
765	SK13	磁器染付又は白磁	瓶	4.0	—	—	—	外)灰白5GY8/1 断)灰白N8/		口縁部内面施釉。	肥前産
766	SK13 下層	陶器	碗	11.4	—	—	—	外)灰白25Y8/2 断)灰白25Y8/2		透明の釉。	京都
767	SK13 F層	陶器	碗	—	—	4.0	—	外)黑褐10YK3/2 断)に赤い赤褐 25YR5/4	外)白化粧土刷毛 日 灰釉	高台施釉。	肥前産 17世紀第4四半期
768	SK13	陶器	小碗 端反形	6.7	—	—	—	外)灰白5Y7/1 断)灰白5Y7/1	灰釉	外表面クロ目。透明の釉。	尾山窯
769	SK13 上層	陶器	小瓶	12.2	3.2	4.4	—	外)灰黄25Y6/2 断)に赤い褐7.5YR7/2	灰釉	口縁部溝筋状。内底に段。外表面無釉。内底に砂目。オーリーブ灰の釉。	肥前産 1610～1630年代

Tab.31 遺物觀察表（陶磁器・土器）

國版 番号	出土 地點	種類	器種 形	法量 (cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴 (成形・調整・施調他)	備考 (生産地・ 生産年代・鉢 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
770	SK13 上層	陶器	小皿	11.8	—	—	—	外) 広オリーブ 75Y6/2 断) にぶい黄澄 10YR7/2	灰釉	口縁部墨線状。外面無釉。灰オ リーブ色の釉。	肥前產 1610～1630年代
771	SK13 下層	陶器	小皿	—	—	48	—	外) 黄灰25Y1/1 断) 黄灰25Y1/1	内) 白化粧土研毛 目	外面下半と高台無釉。内底に砂 目。	肥前產 1610～1640年代
772	SK13	陶器	小皿	—	—	58	—	外) 広オリーブ5Y5/3 断) 広白25Y7/1	灰釉	高台無釉。灰オリーブ色の釉。	肥前產
773	SK13 床	陶器	小皿	—	—	50	—	外) 広黄褐10YR6/2 断) にぶい橙75YB6/4	灰釉	高台旅釉。灰白色を帯びる半透 明の釉。内底と盤付に砂目。	肥前產
774	SK13 上層・ 下層	陶器	向付	20.0	60	11.7	—	外) にぶい黄澄 10YR6/3 断) 浅黄25Y7/3	内) 鉄錆・白土に よる暗 目 外) 研毛・同立文 灰釉・絵地	手捏ねによる三足を貼付。外面 ロクロ目。透明の釉。部分的に繪 地を施す。	美濃 織部燒
775	SK13 下層	陶器	甕	18.0	—	—	—	外) 黒褐色10YR3/1 断) 広褐5YR5/2	鉄錆	外面ナデ。体部内面タキ後ナ デ。内面に圓状のタキ目が 一部残る。内面施釉。端部無釉。 黒褐色の釉。	
776	SK13	陶器	瓶	7.0	—	—	—	外) 暗赤褐色25YR3/4 断) 広白10YR7/1	鉄錆	暗赤褐色の釉。	
777	SK13 下層	土師質 土器	小皿	11.6	28	8.0	—	にぶい黄澄7.5YR7/3		内外面回転ナデ。外底ナデ。	
778	SK13 下層	土師質 土器	小皿	10.6	26	7.6	—	にぶい黄澄10YR7/2		内外面回転ナデ。外底ナデ。	
779	SK13 下層	土師質 土器	小皿	11.6	18	9.0	—	にぶい黄澄10YR7/2		内外面回転ナデ。	
780	SK13 上層	土師質 土器	小皿	9.8	21	5.0	—	にぶい黄澄10YR7/3		内外面回転ナデ。外底ナデ。	
781	SK13 下層	土師質 土器 又は鉢	小皿 又は鉢	—	—	7.0	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外面下辺ケ ズリ。外底削軋系切り後ケズリ。内 底ナデ。	肥前產 二次燒熱により 釉は変質。
808	SK15	磁器 器物	壺蓋	—	—	—	—	摘み仔 外) 明緑灰75GY8/1 3.3 断) 白	外) 花綻		
809	SK15 下層	磁器 器物	壺蓋	—	—	—	—	外) 底白7.5Y8/1 断) 白	外) 不明・花綻	内面無釉。	肥前產 二次燒熱により 釉は変質。
810	SK15	白磁 又は染付	壺蓋	笠部仔 14.0	—	—	—	外) 底白7.5Y8/1 断) 白		内面施釉。跨部の下面無釉。	肥前產 二次燒熱により 釉は変質。
811	SK15	土師質 土器 又は鉢	鉢	—	—	6.4	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外面下辺と外 底削軋系切り後ナデ。	
812	SK16	磁器 器物	旗口	7.8	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 不明	透明釉は貫入する。	肥前產
813	SK16	磁器 変形形	—	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 柳 高台外) 花綻	貼付高台。	肥前產
814	SK16	土師質 土器	小皿	10.7	2.5	7.8	—	にぶい橙7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底削軋系切 り。内底ロクロ目。	
815	SK16 下層	土師質 土器	小皿	11.0	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。	
816	SK16 下層	土師質 土器	小皿	10.8	2.4	7.5	—	にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底削軋系切 り。	
817	SK16	土師質 土器	小皿	11.2	2.1	7.0	—	にぶい橙7.5YR6/3		内外面回転ナデ。外底削軋系切 り。内底ロクロ目。	
818	JL御1	磁器 器物	中碗 広東形	12.5	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 松・草花 口縁内) 二重團綻 見込み) 花綻		肥前產 1780～1860年代
819	JL御1	磁器 器物	小碗 筒丸形	7.2	5.5	3.8	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 文家・團綻 高台外) 二重團綻 口縁内) 二重團綻		肥前產
820	JL御1	磁器 器物	小皿 丸形	11.6	3.7	4.8	—	外) 底白7.5GY8/1 断) 底白N8/	内) 格子文	見込み蛇ノ目軌跡。外項は暗 オリーブ色に着色する。釉剥落 部に白色粉が付着。	肥前 亂世見 18世紀～19世紀 初頭
821	JL御1	磁器 器物	鉢 八角形	14.2	6.4	7.4	—	外) 白 断) 白	外) 慶風・蘿 高台外) 楢子文 口縁内) 垂弾さに よる雷文帶 見込み) 机・石・ 植物		肥前產
822	瓦御1	磁器 器物	鉢 扇形	26.0	—	—	—	外) 明緑灰7.5GY7/3 断) 底白N8/	内) 草花文	口縁部墨線状。透明釉は明緑灰 色を帯びる。外項は滑む。	肥前產

Tab.32 遺物觀察表(陶器・土器)

団号 番号	出土 地点	種類	器種 形	法量(cm)			色調	文様・釉薬・胎土	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・ 生産年代・器・ 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
823	瓦瀬1	磁器 染付	水滴 箱形	—	32	—	—	外)白 断)白	外)型による陽刻 の菊花	壓模成形底部貼り合わせ。外底 に赤目。内面ナデ。外底施釉。 肥前產	
824	瓦瀬1	青花	中盤	—	—	128	—	外)白 断)白	内)松・植物 外)不明	高台内に放射状の鉢底。微付に 灰白色の粗糲が付着。	中国 景徳鎮系
825	瓦瀬1	陶器	中碗 半筒形	13.0	—	—	—	外)黒オリーブ5Y6/2 断)灰黄25Y6/2	灰釉	外面に強いクロ口目。底)黒オリーブ 色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯又は龍溪 山窯
826	瓦瀬1	陶器	灯明受 皿	11.0	22	44	—	外)灰白15Y7/2 断)灰15Y8/1	内)鶴目 灰釉	外面下回転ナデ。外面無釉。 灰白色を帯びる透明の釉で粗い 質人が入る。	京都・信楽系
827	瓦瀬1	陶器	火鉢 六角形	16.4	—	—	—	外)灰白75Y7/2 断)灰白75Y8/1	外)型による陽刻 文様 灰釉・水色の釉	型による瓶頸の反耳を貼付。外 面の一部に水色の繪を流し書き。 内面に鉢底を網毛塗り。	瀬戸・美濃產
828	瓦瀬1	陶器	擂鉢	29.0	—	—	—	外)にぶい赤褐 25YR4/4 断)25YR6/6	燒締め	内面に模目。口縁部外面凹綻、 内面回転ナデ。体部外面回転ケズ リ。	
829	瓦瀬1	陶器	擂鉢	—	—	18.6	—	外)にぶい赤褐 25YR5/4 断)にぶい橙25YR6/4	焼締	貼付高台。内面鶴目。高台外 面回転ナデ。外面部に鉢底を描 す。	備前 衆岡編年近世3~6 18~19世紀
830	瓦瀬1	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外)灰黄25Y6/2 断)にぶい橙10YR7/4	焼締め	内面強いクロ口目。外面回転ナ デ。内面に鶴目。酸化焼成。	備前 瀬戸編年近世~W A期 14世紀
831	瓦瀬1	瓦質 土器	火鉢	—	—	12.8	19.2	外)灰5Y5/1 断)灰5Y1/1	外)印刷による花 文	型による瓶頸の反耳を貼付。貼 付高台。高台外面回転ナデ。体部 内面回転ナデ。	
832	瓦瀬1	土師質 土器	硯炉少	—	—	10.3	—	灰白25Y8/1		内外面回転ナデ。外面部ロクロ目。	
833	土器 集中1	磁器 染付	小皿	13.0	31	78	—	外)灰白75Y8/1 断)白	内)花唐草文・室 文 外)達磨唐草文 高台外)二重圓綻	口縁部玉筋状。蛇ノ目凹形高台。 乳頭は暗褐色。	肥前產 18世紀前半以降
839	土器 集中1	磁器 染付	碗蓋	笠部様 10.5	30	—	摘み洋 44	外)灰白75Y8/1 断)白	外)山水文 口縁内)帶線・不 明	成不成不良で透明釉は白済。 肥前系又は肥前產	
840	土器 集中1	磁器 色絵	中碗 端反形	14.3	67	67	—	外)白 断)白	外)赤・黄・その 他の上絵付による 文様、花卉か	文様の輪郭は赤で描く。	肥前產
841	土器 集中1	土師質 土器	碗	10.0	3.6	4.4	—	灰白7.5YR8/2	白色系の胎土	外面上半回転ナデ、下半回転ケズ リ後ナデ。内面回転ナデ。外底部 ケズケズリ後ナデ。	尾戸窯か
842	土器 集中4	磁器 染付	小皿 丸形	10.2	23	58	—	外)白 断)白	外) 繩文 高台外)二重圓綻 内)草花文 高台内) 蓋綻		肥前產
843	土器 集中4	磁器 染付	合子蓋	笠部様 59	1.2	—	—	外)白 断)白	外) 茄薄・繩	内面施釉、端部無釉。	肥前產
844	土器 集中4	陶器	鉢	12.4	4.4	48	—	外)灰白5Y8/2 断)灰白5Y7/1	外) 鉢筋による山 水文 灰釉	外面部中位と下位に接。高台無釉。 灰白色を帯びる半透明の釉。内 底に目肌。	尾戸窯
845	土器 集中4	陶器	小甕	14.8	12.3	12.4	14.9	外)暗赤褐色5YR3/4 断)灰白25Y7/1	鉢	内面露ロクロ目。外底ナデ。高台 無釉。暗赤褐色の釉。内底に灰 白色の砂目4箇所。	
846	包含層 II層	磁器 染付	中碗 広東形	11.6	6.9	5.9	—	外)灰白10Y8/1 断)白		透明釉は質人が入る。	能茶山窯 1820~1860年代 「茶」銘あり。
847	包含層 II層	磁器 染付	中碗 端反形	10.6	5.6	4.2	—	外)白 断)白	外) 带線に蔓・区 割間に「福寿」字、 茎に山水文 高台外)二重圓綻 口縁内)二重圓綻 見込み)昆蟲文・ 繩文 高台内) 角栓内) 茶山	透明釉は質人が入る。	能茶山窯 1820~1860年代 角栓内「茶山」銘 あり。
848	包含層 II層	磁器 染付	小瓶 泡池 利 端反形 直形	15	9.5	3.5	5.4	外)灰白5GY8/1 断)灰白NB/	外) 蝋唐草文・若 松・竹・草 高台外) 蓋綻	内面無釉。瓶頸は青灰色に発色。	肥前產

Tab.33 遺物觀察表（陶磁器・土器）

団版 番号	出土 地點	種類	器種 形	法量 (cm)			色調	文様・施薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・ 生産年代・鉢・ 使用状態)		
				口径	器高	底径						
849	包含層 Ⅱ層	磁器 色絵染 付	鉢	17.0	6.6	10.0	—	外) 白 内) 断	外) 鳥頭と赤・金 の上部付による花 卉・窓に魚 内) 薙刈による葉 文、赤の上部付に による方帶 見込み) 帯に菊 花・花卉か 高台内) 跡	黒削型打成形。脚は削り出しに よる。	肥前産	
850	包含層 Ⅱ層	磁器 染付	不明	14.4	9.8	8.6	—	外) 白 内) 断	外) 文化・萬 國線内) 流か	内面下半無釉。	肥前産	
851	包含層 Ⅱ層	陶器	中碗 広口形	12.0	6.4	6.5	—	外) 底白5Y7/2 内) 底白25Y8/1	外) 白土・鐵隕に による梅文 灰釉	内底クロロ目。高台無釉。灰白色 を帯びる半透明の釉。花弁は口 土で描き分けた。	尾戸窯	
852	包含層 Ⅱ層	陶器	中碗	10.5	8.1	4.3	—	外) 底白25Y8/2 内) 底白25Y8/2	灰釉	高台内平底。高台無釉。光沢の 強い透明の釉。日清3足。	尾戸窯	
853	包含層 Ⅱ層	土師質 土器	白土器 小皿	11.4	1.8	8.0	—	底白10YR8/2	内) 銀刷による寿 字文	内底型押しによる陽刻文様。内 面削線と外底上半回転ナデ。外 面下半と外底回転ケズリ。	尾戸窯	
854	包含層 Ⅱ層	陶器	水注 後手垂形	5.2	10.7	5.2	8.8	外) 黒10YR2/1 内) 覆灰10YR5/1	鐵釉	外底クロロ目。口縁部と内面無 釉。黒色の釉。		
855	包含層 Ⅰ層	磁器 染付	小皿	—	—	5.2	—	外) 底白5GY8/1 内) 底白NB/	内) 草花文・二重 團線	置付に灰白色の糞が付着。	肥前産 17世紀前半	
856	包含層 Ⅰ層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.0	2.7	—	摘み群 35	外) 白 内) 断	外) 雷文・山水 文・雷文帶 内) 直文・草花 文		肥前産	
857	複乱	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.4	2.8	—	摘み群 55	外) 白 内) 断	外) 梅・草花・鶯 内) 鶯	外底は暗青灰色。	肥前産 1780~1860年代	
858	包含層 Ⅰ層	磁器 染付	又子 又は 段乗蓋	笠部径 9.3	2.4	—	かえり 群 78	外) 白 内) 断	外) 花卉文・雷文 内) 斜施釉。かえり無釉。		肥前産	
859	包含層 Ⅰ層	磁器 染付	うさぎ・ 茶碗か 段乗蓋	—	—	5.4	—	外) 白 内) 断	内) 人物		肥前産	
860	複乱	磁器 染付	唐	—	—	9.4	—	外) 白 内) 断	外) 山水文	外側の数箇所に楕筋。内面無釉。	肥前産又は肥前 系	
861	複乱	青花	小杯	—	—	2.7	—	外) 白 内) 断	外) 團線 高台外) 二重團線 高台内) 「大明」		中国 明代窯系	
862	包含層 Ⅰ層	青花	小皿	11.8	3.8	4.4	—	外) 底白25GY8/1 内) 底白NB/	内) 雷文・團線 外) 喧底。外底は暗緑灰色。高台 無釉。高台に灰白色的粗糲が付 着。		中国 漢唐窯系	
863	複乱	陶器	中碗	11.0	7.6	5.6	—	外) 底白25Y7/1 内) 底白25Y7/1	鐵釉	高台内に凸状の鉗底。高台無釉。 灰白色を帯びる半透明の釉。日 清3足。	尾戸窯	
864	複乱	陶器	中碗	10.7	7.9	5.2	—	外) 底白25Y7/2 内) 底白25Y8/2	鐵釉	高台内に凸状の鉗底。高台無釉。 灰白色を帯びる半透明の釉。日 清3足。	尾戸窯	
865	複乱	陶器	中碗 廣口形	11.0	7.7	5.2	—	外) 底白25Y7/2 内) 底白25Y8/2	鐵釉	外) 白土・鐵隕に による梅文 内) 型による陰刻 文様・鶯	外) 白土・鐵隕に による梅文 内) 型による陰刻 文様・鶯	尾戸窯又は関西 系
866	複乱	陶器	中碗 端反形	10.0	6.0	4.0	—	外) 浅黄25Y7/3 内) 底白5Y8/2 内) 滲黄橙10YR8/3	外) 白土・鐵隕に による梅文 内) 白化粧釉・鐵釉	内面は白化粧後灰釉。外) 面灰釉。 高台施釉。光沢の強い透明の釉。	尾戸窯又は関西 系	
867	包含層 Ⅰ層	陶器	盤	—	—	—	—	外) 緑 内) 緑	外) 型による陰刻 文様・鶯	鮮やかな緑色の釉。	尾戸窯	
868	包含層 Ⅰ層	陶器	不明	20.0	—	—	—	外) 白5Y6/1 内) 底白5Y6/1	外) 白土・鐵隕に による唐草文・花文 内) 型	花弁は白土で模さる。内外面 に模さるロクロ目。内面下半 無釉。	尾戸窯又は關 東窯	
869	包含層 Ⅰ層	陶器	植木鉢	—	—	13.2	—	外) 底白5Y7/2 内) 底白5Y7/1	鐵釉	底部中央に円孔あり。内外面 クロロ目。高台無釉。灰白色を帯 びる半透明の釉。	尾戸窯	
870	複乱	漁道具	ハマク	様 厚5	5.8	0.8	—	—	底白25Y7/1	上面と下面回転系切り。三足の 角柱内「陳」其印 ビシは剥離。		
871	複乱	土師質 土器	人形	—	—	—	—	底5Y7/6	鰐物	中空。型押成形前後貼り合せ。 内面エビオサエ・ヒビテナ。		
872	複乱	土師質 土器	始燒	33.0	7.4	10.0	—	底5YR6/6	胎土中に金葉母を 含む。	口縁部内外面回転ナデ。内底に 不定方向のナデ。外底に凹凸。	関西産	

Tab.34 遺物観察表 (石製品・金属製品・ガラス製品)

団版 番号	出土 地點	種類	器種	法量(cm)				重量(g)	特徴
				全長	全厚	全幅			
154	SK4 下層	鉄製品	釘	4.4	0.3	0.3	—	[1.1]	断面四角形。使用により曲がる。
330	SK7 床	鉄製品	包丁	[11.8]	0.2	3.9	—	[45.2]	尖端部は欠損する。
415	SK9	石製品	硯	16.5	2.2	7.5	—	[380]	粘板岩製。硯背に穿孔あり。むこう縫合部が欠損する。側面の穿孔により大きく膨らむ。硯背の穿孔の中に雜書『本高島』(石) あり。
593	SK10	鉄製品	包丁	[11.7]	0.5	5.4	—	[97.6]	
594	SK10 下層	鉄製品	釘	9.7	0.7	0.9	—	[12.2]	断面四角形。
595	SK10 下層	ガラス製品	不明	[5.5]	1.6	1.5	厚さ 0.1	[8.7]	棒状。中空。先端部に径1mmの内孔あり。白色半透明。
742	SK12 下層	ガラス製品	不明	—	—	底径 3.9	厚さ 0.1~0.2	[6.2]	白色を帯びる半透明のガラス。
743	SK12 下層	ガラス製品	不明	[11.2]	0.8	1.1	厚さ 0.1	[9.3]	修状。中空。断面稍円形。白色を帯びる半透明のガラス。表面に灰白色の頬料を施す。
744	SK12 床	鉄製品	不明	[10.1]	0.5	1.4	—	[23.6]	頭部に内孔あり。尖端部を欠損。
801	SK13 下層	石製品	碁石か	径 2.2	厚さ 0.6	—	—	4.1	暗灰色。
802	SK13 下層	銅製品	酒管 雅首	6.8	—	ラグラ合 部直径 1.0	火皿径 1.5	[7.7]	曲巡しの溝曲は大きい。
803	SK13 下層	鉄製品	包丁	[11.1]	0.5	4.1	—	[66.0]	尖端部は欠損する。

※法量・重量とも〔〕は残存分。金属製品で儲がみられるものも〔〕表記した。

Tab.35 遺物観察表 (古錢)

団版 番号	出土 地點	種類	器種	法量(cm)			重量(g)	備考
				外径	穿孔	厚さ		
153	SK4	銅錢	寛永通宝	2.4	0.6	0.1	[27]	
331	SK7	銅錢	寛永通宝	2.4	0.6	0.1	[19]	

重複が認められるものは重量を〔〕で示した。

Tab.36 遺物観察表 (瓦)

団版 番号	出土 地點	種類	法量(cm)		色調	特徴	備考 (生産地・跡)
			瓦当高 瓦当徑	文様区高 文様区徑			
6	TP6 笠置壇 II層	軒丸瓦	15.7	11.5	—	外) 灰N5/ 灰) 灰15Y7/1	三巴文。珠数16個。
7	TP6 笠置壇 II層	軒丸瓦 丸瓦	4.0	2.8	1.6	外) 灰NL/ 灰) 灰NS/ 灰) 灰15Y7/1	中心彫りは丁字文。両側に均整唐草文。
8	TP3 祇園壇	軒丸瓦	15.2	11.4	1.8	外) 善灰 N3/ 灰) 灰15Y7/1	三巴文。珠数18個。
9	TP3 祇園壇	軒丸瓦 又は 軒平瓦	4.2	2.4	1.6	外) 善灰 N3/ 灰) 灰5Y6-1	中心彫りは巴文。両側に均整唐草文。
10	TP3 祇園壇	軒丸瓦 又は 軒平瓦	4.5	2.5	1.7	外) 善灰 N3/ 灰) 灰N6/ 灰) 灰7.5Y6-6 灰) 灰7.5Y6-6	中心彫りは不明。均整唐草文。
11	TP3 祇園壇	棟瓦 又は 平瓦	—	—	1.6	外) 棟7.5YR6-6 灰) 棟7.5YR6-6	高知県高知市布郎田 角内「布源」跡印あり。 二次被熱により変色。
12	TP3 祇園壇	軒丸瓦 丸瓦	—	—	1.9	外) 善灰 N3/ 灰) 灰12.5Y8-1	高知県南国市田村 〔口田村〕跡印あり。

Tab.37 遺物觀察表(瓦)

団版 番号	出土 地點	種類	法量(cm)			色調	特徴	備考(生産地・坑)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
13	TP3 廻覆乱	不明	—	—	16	外) 橙7.5YR6.6 面) にふい黄橙10YR7/4		高知県南国市久礼田 陽刻の「久禮田本家ケイ吉」 印あり。
14	TP7 廻2層	縦彫り瓦	10.0	7.0	—	外) 黄10Y4/1 面) 橙7.5Y6/1	三巴文。珠数12個。	
15	TP7 廻2層	軒瓦 右斜瓦	3.5	21	14	外) 褐灰N3/ 面) 黑N7/	中心彫りは三巴文。両側に均整唐 草文。	高知県安芸市 「アキ口」鉢印あり。
16	TP7 廻2層	鬼瓦か 廻	—	—	—	外) 褐灰N3/ 面) 黑N7/		
17	TP7 廻2層	不明	—	—	17	外) 黄7.5Y5/1 面) 橙7.5Y5/1		高知県高知市御田 角桟内「高源」鉢印あり。
18	TP7 廻2層	杣瓦	—	—	15	外) にふい黄橙10YR5/4 面) 淡黄橙10YR8-3		高知県安芸市 「アコ」鉢印あり。 二次被熱により変色。
19	TP7 廻2層	线瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 橙7.5YR6.8 面) 淡黄橙7.5YR8/4		高知県安芸市 「アキ素」鉢印あり。 二次被熱により変色。
20	TP7 廻2層	线瓦又は 平瓦	—	—	19	外) 橙5YR6.8 面) 橙5YR6.8		高知県安芸市 「アコ素」鉢印あり。 二次被熱により変色。
21	TP7 廻2層	线瓦又は 平瓦	—	—	15	外) にふい橙7.5YR7/4 面) 淡黄橙7.5YR8/4		高知県安芸市 「アコ中川口」鉢印あり。 二次被熱により変色。
22	TP7 廻2層	线瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 橙7.5YR7.6 面) 橙7.5YR7.6		「中川寅□」鉢印あり。 二次被熱により変色。
23	TP7 廻2層	线瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 橙7.5YR6.6 面) 橙7.5YR6.6		高知県安芸市 「ア久万」鉢印あり。 二次被熱により変色。
24	TP7 廻2層	线瓦又は 平瓦	—	—	17	外) 橙5YR6.6 面) 淡黄橙7.5YR8/4		高知県香南市野市町中山田 角桟内「山中林」鉢印あり。 二次被熱により変色。
25	TP7 廻2層	线瓦又は 平瓦	—	—	14	外) にふい橙7.5YR7/4 面) 黑N10YR8/2		角桟内「□□□合」鉢印あり。 二次被熱により変色。
26	TP7 廻2層	线瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 橙7.5YR6.6 面) 橙7.5YR6.6		角桟内「大山平」鉢印あり。 二次被熱により変色。
27	TP7 廻2層	线瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 褐灰10YR5/1 面) にふい黄橙10YR7/3		角桟内路筋あり。 二次被熱により変色。
28	TP7 廻2層	线瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 橙7.5YR6.6 面) 淡黄橙7.5YR8/4		鉢印あり。
29	TP7 廻2層	杣瓦	—	—	17	外) にふい黄橙10YR7/3 面) 淡黄橙10YR8/3		角桟内「山口」鉢印あり。 二次被熱により変色。
155	SK4	軒丸瓦	16.8	12.0	—	外) にふい橙7.5YR7/4 面) にふい橙7.5YR7/4	三巴文。珠数16個。	
156	SK4	丸瓦	—	—	—	外) にふい橙7.5YB6/4 面) にふい橙7.5YB6/4		二次被熱により変色。
157	SK4	丸瓦	—	—	—	外) 底黄褐10YR5/2 面) 黑N10YR6/1		
158	SK4	线瓦又は 平瓦	—	—	22	外) にふい橙5YR6/4 面) にふい橙5YR6/4		二次被熱により変色。
159	SK4	线瓦又は 平瓦	—	—	22	外) 底黄褐10YR5/2 面) 黑N10YR6/1		二次被熱により変色。
160	SK4	线瓦又は 平瓦	—	—	20	外) 底黄褐10YR6/2 面) 底黄褐10YR6/2		「○」印あり。 二次被熱により変色。
206	SK6	軒丸瓦	16.5	12.2	19	外) 褐灰N3/ 面) 黑N7/	三巴文。珠数12個。	
207	SK6	軒瓦 右斜瓦	4.3	28	15	外) 褐灰N3/ 面) 黑N6/	中心彫りは鳥文。均整唐草文。	高知県香南市野市町中山田 小判桟内「中己」鉢印あり。
208	SK6	軒瓦	4.5	28	16	外) 褐灰N4/ 面) 黑N6/	中心彫りは不明。均整唐草文。	
209	SK6	軒瓦 右斜瓦	4.5	24	13	外) 褐灰N3/ 面) 黑N7/	中心彫りは不明。均整唐草文。	高知県安芸市 「御瓦頭」鉢印あり。
210	SK6	軒瓦 左斜瓦	4.6	28	15	外) 褐灰N3/ 面) 黑N6/	中心彫りは三巴文。両側に均整唐 草文。	
211	SK6	軒瓦 又は 軒平瓦	—	—	—	外) 黑N6/ 面) 黑N6/	中心彫りは不明。均整唐草文。	

Tab.38 遺物觀察表(瓦)

図版番号	出土地点	種類	法量(cm)			色調	特徴	備考(生産地・鉢)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
212	SK6	線瓦又は 平瓦	—	—	17	外) 灰N5/ 灰) 灰白N7/		高知県香南市野町中山田 小判枠内「中己」鉢印あり。
213	SK6	線瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 灰N4/ 灰) 灰白N7/1		高知県香南市野町恒王子 角枠内「恒口平」鉢印あり。
214	SK6	線瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 灰N4/ 灰) 灰N6/		高知県安芸市 「アキ口」鉢印あり。
332	SK7	軒瓦又は 軒平瓦	46	29	15	外) 灰N4/ 灰) 灰N6/ · 灰白N7/	中心彫りは馬。両側に均整唐草文。	
333	SK7	軒瓦又は 軒平瓦	—	—	—	外) 灰N4/ 灰) 灰N6/ · 灰白N8/	中心彫りは花。均整唐草文。	
334	SK7	軒瓦右端瓦	43	30	17	外) 灰N5/ 灰) 灰N5/	中心彫りは馬。両側に均整唐草文。	
335	SK7	軒瓦又は 軒平瓦	44	30	17	外) 灰N4/ 灰) 灰白N7/	中心彫りは馬。均整唐草文。	
336	SK7	軒瓦又は 軒平瓦	—	—	21	外) 黄灰25Y4/1 灰) 黄灰25Y6/1	中心彫りは不明。均整唐草文。	
337	SK7	線瓦又は 平瓦	—	—	12	外) 灰N4/ 灰) 灰白N7/		高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
338	SK7	線瓦又は 平瓦	—	—	14	外) 喷灰N3/ 灰) 灰N4/		高知県香南市野町中山田 角枠内「中己」鉢印あり。
584	SK10 上層	軒丸瓦	15.8	115	—	外) 灰N4/ 灰) 灰白N8/	三巴文。珠数12個。瓦当にキラ粉。	
585	SK10 上層	軒丸瓦	15.9	—	16	外) 灰N4/ 灰) 灰白N7/	三巴文。珠数12個。瓦当にキラ粉。	
586	SK10 上層	軒瓦右内丸	45	26	18	外) 喷灰N3/ 灰) 灰N6/	中心彫りは三巴文。両側に均整唐草文。	高知県安芸市 「御瓦屋」鉢印あり。
587	SK10 下層	軒瓦又は 軒平瓦	45	33	—	外) 灰N4/ 灰) 灰白N8/	中心彫りは三巴文。両側に均整唐草文。	
588	SK10 上層	軒瓦又は 軒平瓦	45	30	15	外) 灰N4/ 灰) 灰白N8/	中心彫りは花文。葉状の唐草文。瓦当にキラ粉。	
589	SK10 上層	軒瓦又は 軒平瓦	—	—	—	外) 灰N4/ 灰) 灰N5/	中心彫りは丁字文。葉状の唐草文。	
590	SK10 下層	線瓦又は 平瓦	—	—	16	外) 喷灰N3/ 灰) 灰N4/		高知県香南市野町中山田 小判枠内「中己」鉢印あり。
591	SK10 下層	線瓦又は 平瓦	—	—	15	外) 灰N4/ 灰) 灰白N7/		角枠内「一三口」鉢印あり。
592	SK10 下層	線瓦又は 平瓦	—	—	11	外) 灰N4/ 灰) 灰白N8/1		「三口口」鉢印あり。
751	SK12 下層	軒瓦右端瓦	4.5	3.0	17	外) 灰N4/ 灰) 灰白N7/	中心彫りは三巴文。両側に均整唐草文。	高知県安芸市か 「御瓦屋」鉢印か。
752	SK12 下層	軒瓦右内丸	4.4	2.8	15	外) 喷灰N3/ 灰) 灰N6/	中心彫りは萬文。両側に均整唐草文。	高知県香南市野町中山田 小判枠内「中己」鉢印あり。
753	SK12 中	軒瓦左内丸	4.5	3.0	15	外) 喷灰N3/ 灰) 灰N6/	中心彫りは萬文。両側に均整唐草文。	高知県香南市野町中山田 小判枠内「中己」鉢印あり。
754	SK12 上層	軒瓦又は 軒平瓦	4.5	3.0	15	外) 灰N5/ 灰) 喷灰N3/	中心彫りは萬文。両側に均整唐草文。	
755	SK12 上層	軒瓦又は 軒平瓦	—	—	21	外) 灰N4/ 灰) 灰N6/	中心彫りは不明。均整唐草文。	
756	SK12 下層	軒瓦左内丸	—	—	—	外) 灰N5/ 灰) 灰N5/	中心彫りは不明。均整唐草文。	高知県安芸市 「アキ」鉢印あり。
757	SK12 上層 - 下層	線瓦又は 平瓦	—	—	17	外) 灰N4/ 灰) 灰白N7/		高知県安芸市 「アキ口」鉢印あり。
758	SK12 下層	线瓦	—	—	14	外) 喷灰N3/ 灰) 喷灰N3/		高知県安芸市 「御瓦屋」鉢印あり。
804	SK10	楕彫り瓦	—	—	—	外) 灰N5/ 灰) 喷灰N3/	楕彫。粗製。	
805	SK13	楕彫り瓦	—	—	—	外) 灰75Y6/1 灰) 喷灰N3/	楕彫。粗製。瓦当にナゲレ目。	

Tab.39 遺物観察表(瓦)

国版 番号	出土 地点	種類	法量(cm)			色調	特徴	備考(生産地・坑)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
806	SK13 下層	樋脇り瓦	—	—	—	外) 岩N5/ 内) 岩N4/	網紋。粗製。	
807	SK13 下層	鬼瓦か 石瓦瓦	—	—	—	外) 岩N4/ 内) 岩N4/		断面に押痕あり。欠損後、砾石に転用したものか。
833	瓦面1	軒瓦 右斜瓦	—	—	18	外) 岩N3/ 内) 岩N3/	均整唐草文。	高知県安芸市 「アキ口」鉢印あり。
834	瓦面1	瓦瓦又は 半瓦	—	—	16	外) 岩N3/ 内) 岩N3/		高知県安芸市か 「御正口」鉢印あり。
835	瓦面1	瓦瓦又は 半瓦	—	—	15	外) 岩N6/ 内) 岩N7/5V7/1		高知県安芸市 「口*口」鉢印あり。
836	瓦面1	瓦瓦又は 半瓦	—	—	15	外) 岩N5/ 内) 岩N5/		鉢印あり。
837	瓦面1	丸瓦	—	—	16	外) 岩N3/ 内) 岩N7/5V7/1		大阪府堺市 丸柿内「堺」鉢印あり。
873	複乱	軒瓦 右斜瓦	—	—	15	外) 岩N5/ 内) 岩N6/	両側に唐草文。	高知県香南市野市町中山田 小笠井内「甲乙」鉢印あり。
874	複乱	軒瓦 左斜瓦	45	28	15	外) 岩N4/ 内) 岩N7/	中心彫りは不明。両側に乱れた唐 草文。	高知県安芸市 角柿内「安芸友」鉢印あり。
875	複乱	丸瓦	—	—	15	外) 岩N4/ 内) 岩N7/		高知県安芸市 「安芸友」鉢印あり。
876	複乱	瓦瓦又は 半瓦	—	—	17	外) 岩N4/ 内) 岩N7/5V6/2		角柿内「□□」鉢印あり。

Tab.40 遺物観察表(木製品)

国版 番号	出土 地点	器種	法量(cm)			特徴・使用痕跡	
			全長	全厚	全幅		
796	SK12 下層	樋又は 曲物	167	1.4	—	—	樋又は曲物の底板か。残存部分は一枚板で削り出す。
747	SK12 床	曲物蓋	132	0.9	[116]	—	残存部分は一枚板で円形に削り出す。込みを差し込む。
748	SK12 下層	板状製品	137	0.9	2.6	—	尖端部は薄く削り出す。釘穴とみられる径0.3cmの円孔あり。
749	SK12 下層	板状製品	69	0.8	2.1	—	釘穴とみられる径0.2cmの円孔が等間隔で数箇所に残る。
750	SK12 下層	板状製品	[117]	1.1	3.0	—	断面長方形。尖端部は薄く削り出す。釘穴とみられる径0.3cmの円孔あ る。
782	SK13	漆製品 椀	—	—	底径 6.8	—	外面に黒漆、内面に赤漆を施す。
783	SK13	漆製品 碗	29.3	2.6	—	—	黒漆。例り書きによる。把手の根元に刷り込みあり。
784	SK13	棒状製品	18.2	0.3	2.8	—	柄の部分は断面長方形。尖端部はやや薄く削り出す。
785	SK13 床	棒状製品	22.6	0.5	1.0	—	用途不明の棒状製品。断面長方形。
786	SK13	棒状製品 箸	[214]	0.8	0.8	—	側面に面取りを施す。断面四角形。先端部が被熱する。
787	SK13 下層	棒状製品 箸	22.9	0.6	0.8	—	側面に面取りを施す。断面四角形。先端部は守まる。
788	SK13 下層	棒状製品 箸	[204]	0.6	0.7	—	側面に面取りを施す。断面四角形。先端部は守まる。
789	SK13 下層	棒状製品 箸	[26.0]	0.6	0.7	—	側面に面取りを施す。断面不整形。
790	SK13 下層	棒状製品 箸	26.5	0.8	0.8	—	側面に面取りを施す。断面不整形。先端部は守まる。
791	SK13 上層	棒状製品 箸	29.5	0.5	0.6	—	側面に面取りを施す。断面不整形。両先端は守まる。
792	SK13 床	棒状製品 箸	[28.7]	0.4	0.8	—	側面に面取りを施す。断面四角形。
793	SK13 下層	樋か	10.5	0.9	6.2	—	樋の側板か。下部は内面が削られ薄くなる。
794	SK13	樋又は 曲物	[12.0]	0.9	[7.0]	—	樋又は曲物の底板か。複数の板を組み合せる。板の接合部の数箇所に 釘穴あり。

Tab.41 遺物観察表(木製品)

団版 番号	出土 地點	器種	法量(cm)				特徴・使用痕跡
			全長	全厚	全幅		
795	SK13 下層	下駄	—	—	—	歯の厚さ 23	進歯下駄の歯。逆台形。歯の接地面は使用によって摩耗する。
796	SK13	下駄	—	—	—	歯の厚さ 20	進歯下駄の歯。逆台形。歯の接地面は使用によって摩耗する。
797	SK13	下駄	—	—	—	歯の厚さ 20	進歯下駄の歯。歯の接地面は使用によって摩耗する。
798	SK13 F層	板状製品	19.4	2.1	2.6	—	検か。側面に面取りを施す。断面円形。尖端部は空まる。
799	SK13	板状製品	[7.7]	0.6	2.1	—	用途不明の板状製品。釘穴とみられる径0.3cmの円孔が等間隔で数箇所に残る。
800	SK13	棒状製品	10.2	0.5	1.0	—	用途不明の棒状製品。断面長方形。先端部を薄く削り出す。尖端部の2箇所に円孔あり。

※〔〕は残存分。

## 【遺物観察表凡例】

- 色調欄の略号「外」は外面、「内」は内面、「断」は断面を表している。
- 色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」による。
- 以下の遺物については大橋康二氏よりご教示を賜った。(60~63・80~88・91~103・105・106・112~115・759~761・767・771)

## 第IV章 平成21年度調査

### 第1節 調査の方法

平成21年度調査区は、平成17年度調査区の南側に隣接する。調査区は南の張り出し部分をⅠ区、北側部分をⅡ区とし、調査を行った。(Fig.85)

調査にあたっては、重機を用いて表土と擾乱層を除去し、その後、人力にて検出作業と遺構掘削を行った。検出された遺構については、土層観察を行うとともに土層図と平面図を作成し、写真撮影を行った。遺構の測量については、調査区の形状に合わせた任意座標を設定して、調査区全体に4m×4mの方眼区画を設定し、それをもとに実測を行った。平面実測及び土層断面図については、20分の1を基本に適時任意の縮尺を用いた。水準については、高知市丸ノ内1-2-20に設置されている一等水準点より導いた。また、都市再生街区基本調査により設定された基準点を利用して多角測量を行い、調査対象地内にて座標を測定した。



Fig.85 平成21年度調査区位置図

## 第2節 調査の成果

### 1. 基本層序

基本層序はI区の東壁、II区の北壁、東壁、南壁にて観察を行った。基本層序の内容は次の通りである。(Fig.86・87)

I - 1層：橙色砂礫(0.5～5cm大の円礫・角礫を多く含む。)・褐色シルト(1～4cm大の円礫を多く含む。)

I - 2層：灰黄褐色シルト(0.5～3cm大の円礫・角礫を含む。)

I - 3層：灰白色漆喰

II層：明黄褐色シルト

III層：にぶい黄褐色シルト

IV - 1層：褐灰色粘質シルト

IV - 2層：褐灰色シルト質粘土

IV' 層：褐灰色砂質シルト

V層：灰色砂質シルト

I - 1層・I - 2層は近現代の整地層である。この層は標高2.0m前後を最下面として、調査区全域に広がるが、北側に隣接する平成17年度調査区においても同様の整地層が確認されている。I - 3層はI区の東部から南部にかけて、部分的に検出されているもので、漆喰のブロックを多量に含んでいる。同層からは近代の遺物が出土しており、建物の解体に伴う近代の堆積層とみられる。

II層は近世の遺物包含層にあたり、瓦片や近世の遺物を多く含む。I区で検出されるが、II区では近現代以降の削平を受け残存しない。

III層は近世の遺物包含層で、遺物片が少量出土している。

IV層以下はほぼ無遺物で、近世以前の堆積層とみられる。

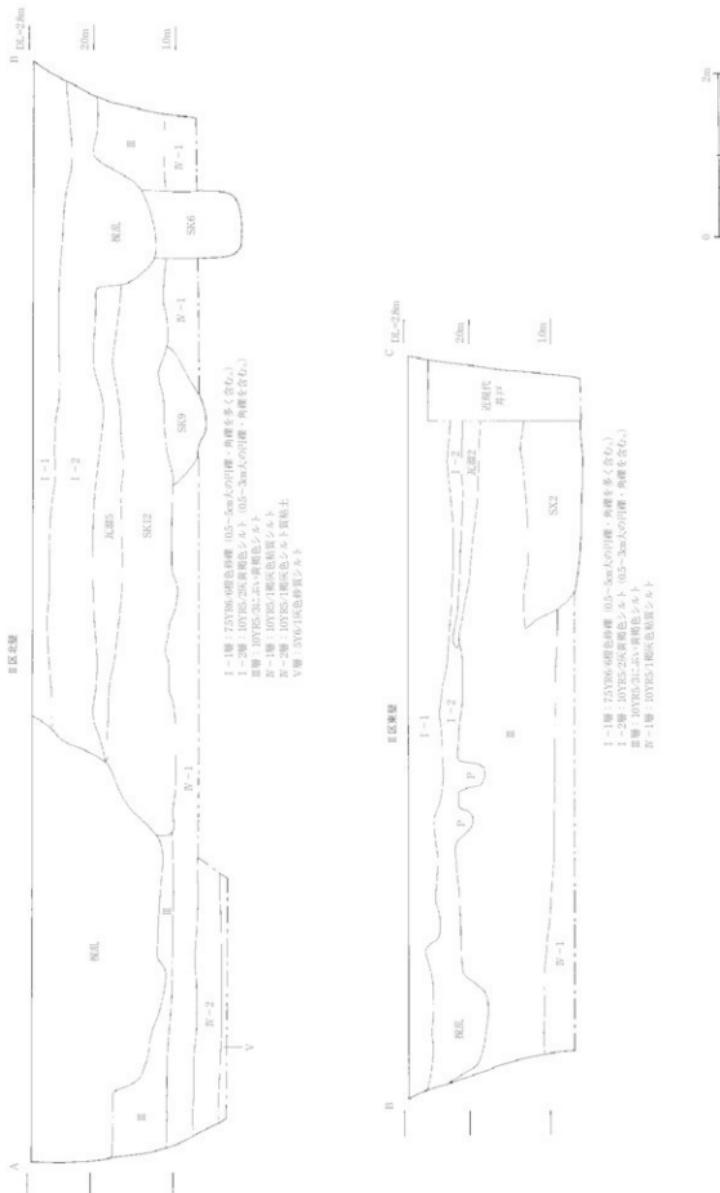


Fig.86 平成21年度調査Ⅱ区北壁・東壁セクション図

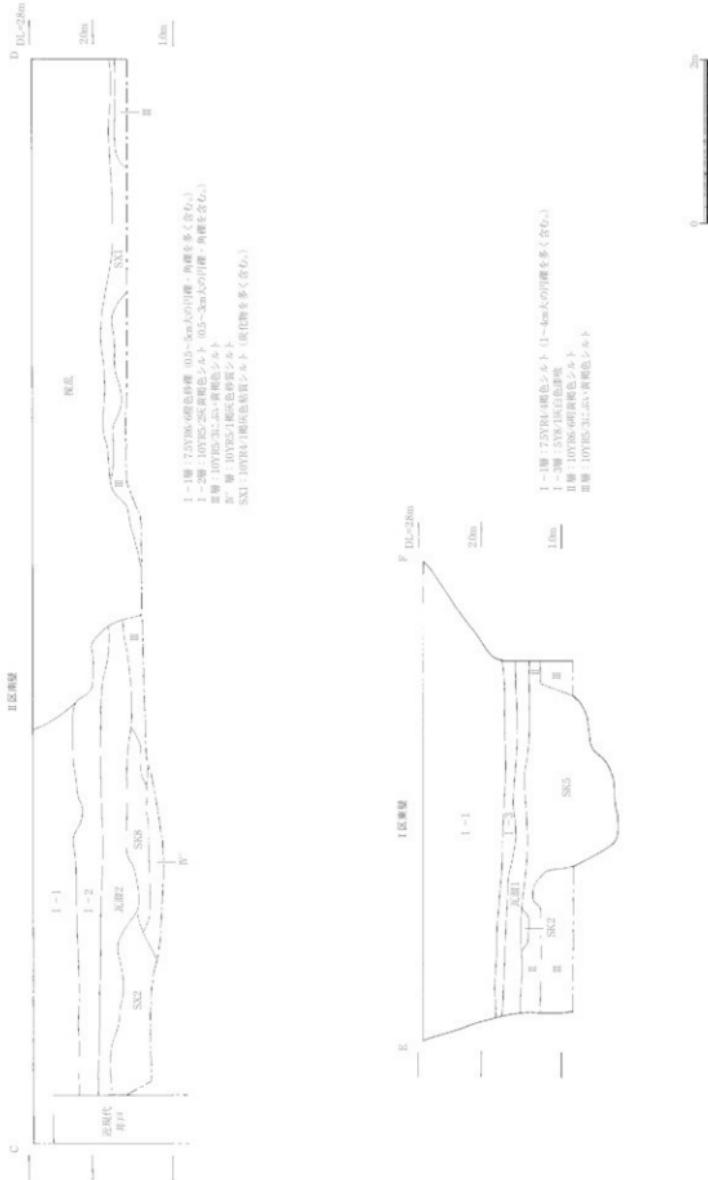


Fig.87 平成 21 年度調査 II 区南壁・I 区東壁セクション図

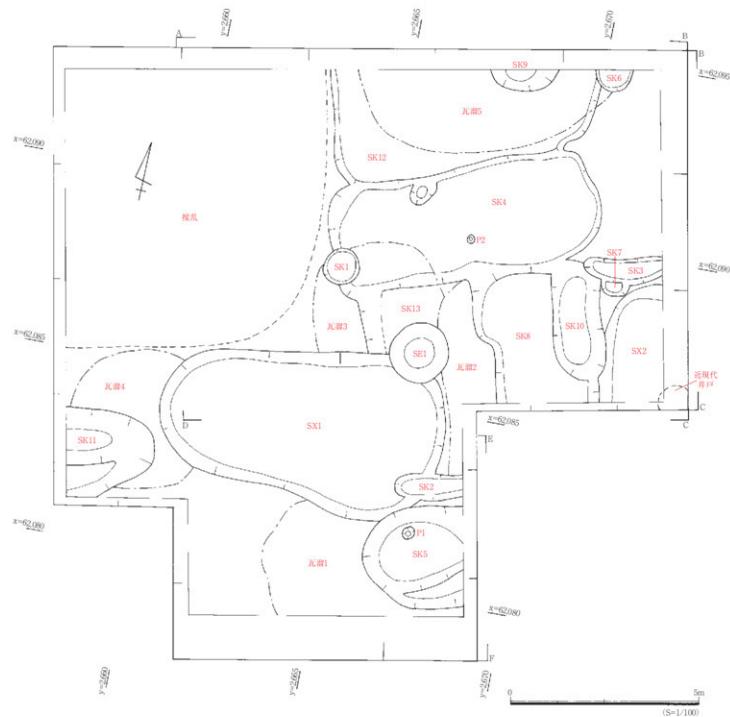


Fig.88 平成 21 年度調査検出遺構全体図

## 2. 遺構と遺物

平成21年度調査区では、近世及び近代の土坑13基、井戸1基、瓦溜り5箇所・性格不明遺構2箇所を検出した。本調査区では近代以降の整地と搅乱が深い部分まで及んでいるため、検出遺構は上面が削平されて浅くなつたものが多く、標高18～20m前後の面にて、江戸後期～近代のSK1・瓦溜り1～5・SX1を検出している。調査区上面にて検出された瓦溜りは調査区のほぼ全域に広がつており、これらの掘削後、下面にて江戸前期～中期のSK2～10・12・13を検出している。またSK11とSE1は、さらに下面の標高13m前後の面にて検出している。

これらのうちSK11は17世紀後半、SE1は17世紀末、SK1・瓦溜り1～5は19世紀前半～中葉、SX1は19世紀中葉以降に比定される遺構群である。また、18世紀前葉に比定されるSK2～4・7・8・10・12・13については、埋土中に炭化物や焼土ブロック、硬化した焼土塊が含まれ、二次被熱の痕跡をもつ遺物が出土していること等から、火災との関連性が窺われるものである。

Tab.42 平成21年度調査土坑・井戸一覧表

遺構名	形態	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	切り合い関係・前後関係	性格	廃絶年代
SK1	円形	皿状	0.9	0.9	12	瓦溜3を切る。SK4の上面で検出。		19世紀前半～中葉
SK2	不明	皿状	東西 確認長 1.70	南北長 0.72	12	瓦溜1・SX1に切られる。	火災関連	17世紀末
SK3	不整形か	皿状	東西 確認長 2.46	南北長 0.70	10	SK10を切る。SK7と切り合う。	火災関連	17世紀末
SK4	不整形	箱形	7.28	3.02	64	SK10・P2を切る。瓦溜3に切られる。SK8・12・13と切り合う。SK1の下面で検出。	火災関連	17世紀末
SK5	不整形	不整形	南北長 2.36	東西 確認長 2.30	92	P1を切る。瓦溜1に切られる。		不明
SK6	円形か	U字形	東西長 0.88	南北 確認長 0.58	106	SK12を切る。瓦溜5に切られる。		不明
SK7	稍円形	皿状	東西長 0.62	南北 残存長 0.44	13	SK10を切る。SK3と切り合う。	火災関連	17世紀末
SK8	不整形	不明	南北 確認長 3.48	東西長 2.68	34	SK10を切る。瓦溜2・SX2に切られる。SK4・13と切り合う。	火災関連	17世紀末
SK9	不明	不整形	東西長 1.68	南北 確認長 0.58	50	SK12に切られる。瓦溜5の下面で検出。		17世紀末以前
SK10	不整形	皿状	3.20	1.55	18	SK3・7に切られる。SK4・8と切り合う。瓦溜2・SX2の下面で検出。	火災関連	17世紀末
SK11	不明	不整形	南北 確認長 2.44	東西 確認長 2.32	110	瓦溜4の下面で検出。		17世紀後半
SK12	不整形か	不明	東西長 6.98	南北 確認長 2.90	83	SK9を切る。SK6・瓦溜5に切られる。SK4と切り合う。	火災関連	17世紀末
SK13	不明	不明	東西 残存長 3.28	南北 残存長 3.18	15	瓦溜2・3・SX1に切られる。SK4・8と切り合う。SE1の上面で検出。	火災関連	17世紀末
SE1	円形	—	掘方径 1.60	井筒径 0.77	井筒 深さ 2.24m	瓦溜2・3・SX1・SK13の下面で検出。		17世紀末

## (1) 土坑

### SK1 (Fig.89・90)

II区中央部に位置する土坑で、瓦溜3を切り、SK4の上面にて検出している。平面形は円形を呈し、検出規模は径0.9m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は褐灰色シルトで、埋土中に炭化物と木片が多く含む。また、上層にはシジミその他の貝殻が多く含まれている。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、白磁小杯1点、陶器鍋2点・瓶1点・壺1点・甕1点、土師質土器小皿1点・白土器小皿1点・焜爐1点、及び瓦片である。

図示したものは877～881である。877は肥前産の白磁桶形小杯。878は鉄袖の小壺で、外底に回転糸切り痕を残す。内面施釉で、黒褐色の釉を施す。879は土師質土器の丸形焜爐で、関西産。881は丸瓦で、「ウエ」刻印をもつ。880は棟瓦又は平瓦で、「とく」銘印をもち徳王子（高知県香南市徳王子）の製品である。

SK1は19世紀前半～中葉に比定される。

### SK2 (Fig.89・91)

I区東部に位置する土坑で、瓦溜1とSK1に上面を切られる。東部が調査区外に出るため、全体の規模や形態は不明であるが、東西確認長1.70m、南北長0.72m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状で、床面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色シルトで、埋土中に焼土ブロックと炭化物を多く含んでいる。

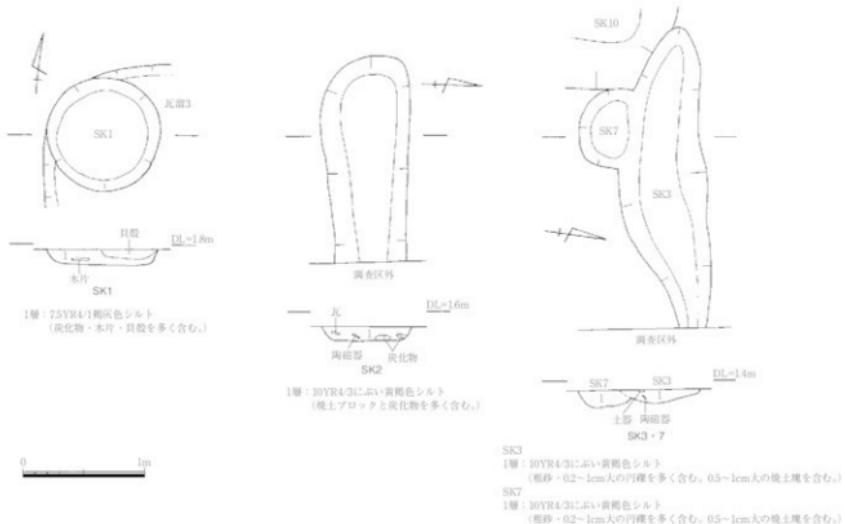


Fig.89 SK1~3・7平面図・セクション図

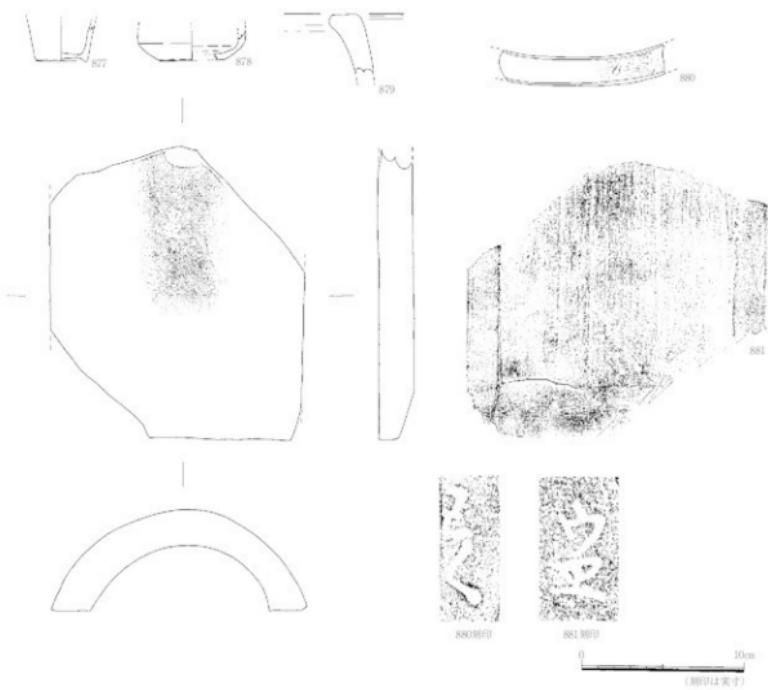


Fig.90 SK1出土遺物実測図

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、陶器中碗1点、土師質土器杯2点・中皿1点・小皿9点、白土器小皿1点、及び瓦片多数である。

図示したものは882～884である。882は肥前産の鉄釉中碗で、黒褐色の釉を施す。883は土師質土器小皿で、内外面回転ナデ。884は尾戸窯の白土器小皿で、外面上半に回転ナデ、外面下半に回転ケズリ後ナデ、内面に不定方向のナデを施す。

SK2は17世紀末に比定され、火災に伴う廃棄土坑と考えられる。

#### SK3 (Fig.89-91)

II区東部に位置する土坑で、SK10を切っている。またSK7と切り合うが、埋土が同質のため、前後関係は不明である。東部が調査区外に出るため全体の規模は不明であるが、平面形は不整形とみられ、東西確認長2.46m、南北長0.70m、深さ10cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで、埋土中に硬化した焼土塊を含んでいる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、土師質土器小皿18点、及び瓦片である。

図示したものは885～887で、このうち887は被熟し変質している。885～887は土師質土器小皿で、口径10～12cm前後の法量をもち、外底に回転糸切り痕を残す。

SK3は17世紀末に比定され、火災に伴う廃棄土坑と考えられる。

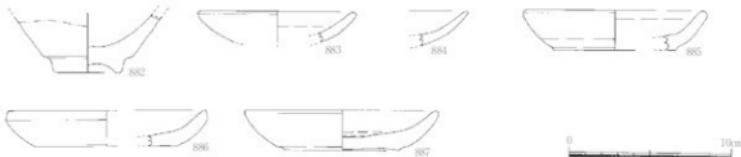


Fig.91 SK2・3出土遺物実測図 (SK2: 882～884、SK3: 885～887)

#### SK4 (Fig.92～96)

II区中央部に位置する大型の遺構で、SK1の下面で検出した。切り合い関係では、SK10・P2を切り、上面を瓦溜3に切られている。またSK8・12・13とは切り合うが、埋土が同質のため、前後関係は不明である。平面形は不整形を呈し、長軸7.28m、短軸3.02m、深さ64cmを測る。断面形は箱形で、壁は直立気味に立ち上がるが、床面は部分的に窪みを伴う。埋土はにぶい黄褐色シルトで、埋土中に炭化物と焼土ブロック、硬化した焼土塊を多く含んでいる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗13点・中皿1点・小皿又は五寸皿31点・皿4点・鉢2点・猪口1点・瓶2点・蓋物2点・碗又は蓋物1点・蓋物蓋2点・鉢又は蓋物の蓋1点・蓋1点・染付又は白磁中碗1点・壺又は瓶1点・器種不明1点・青磁染付中碗2点・五寸皿1点・皿1点・青磁皿か1点・鉢1点・壺1点・壺蓋2点・瓶1点・蓋物1点・香炉か1点・白磁中碗1点・小碗2点・小杯3点・皿1点・鉢1点・磁器色絵中碗1点・中皿1点・小皿2点・青花皿13点・陶器中碗6点・中皿1点・小皿7点・鉢2点・擂鉢3点・水注1点・壺2点・甕5点・壺又は甕2点・蓋1点・土師質土器中皿1点・小皿66点・白土器小皿1点・石臼1点・砥石1点・鉄釘1点・瓦片210点である。

図示したものは888～953である。このうち、889～893・895・899・901～907・912～916・920・922・925～927・932・935～938・947～950は二次被熱によって変質する。

888～896・899～908・912～926は磁器で、何れも肥前産。888・889・894・896・899～906・912・913・918～924は染付である。888は中碗で、山水文とみられる文様を描く。889は碗又は蓋物の体部片で、外面にコンニャク印判による桐文を施す。896～906は皿。896は草花文の小皿で、豊付に白色の粗砂が付着する。900は五寸皿。901は中皿で、高台内に圈線を認める。902～905は変形形の皿で、貼付高台。外面に花唐草文、内面に岩と柳その他の植物を描く。906は内面に植物を描く。912は端反形の鉢。894・913は猪口で、913は外面に植物を描く。923は瓶で、頸部を断面八角形に面取り、外面に縞を描く。924は瓶で、ロクロ成形の後、体部外面に削り出しによる面取りを施す。内面無釉で、外面に竹文を描く。921は蓋物、918・919は蓋物の蓋、920は鉢又は蓋物の蓋、922は蓋付の鉢である。917・925は染付又は白磁で、917は器種不明、925は壺又は瓶である。890は青磁染付の中碗で、外面に明緑灰色の釉を施す。914は青磁染付の皿で、外面に青磁釉を施し、内面に草花文とみられる文様を描く。892・893・916・926は青磁。892は皿か。893は鉢で、蛇ノ目凹形高台をもつ。916は香炉とみられるもの、926は瓶類で、ともに明緑灰色の釉を施し、内面無釉である。895・915は白磁、908は白磁か。895は小杯。908は皿で、口縁。内面に型による陽刻文様を施す。915は小碗である。891・907は色絵。891は中碗で、外面に青・黄・緑・黒の上絵付による文様を施す。文様の輪郭線は黒で描いている。907は中皿で、内面に上絵付による唐草と帶、植物文様を施す。

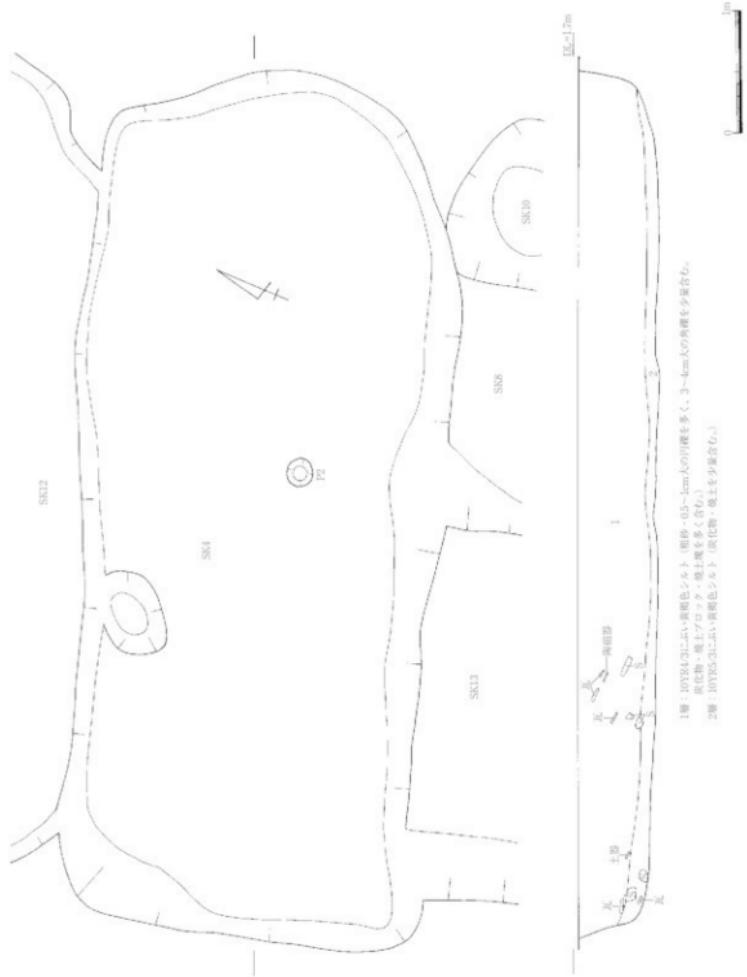


Fig.92 SK4・P2平面図・セクション図



Fig.93 SK4出土遺物実測図 (1)

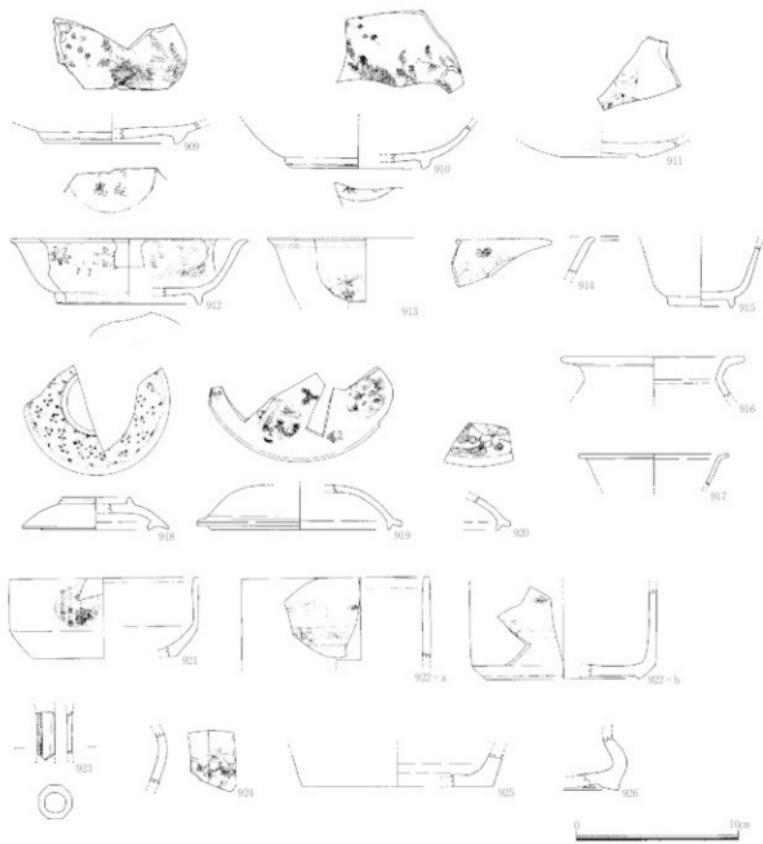


Fig.94 SK4出土遺物実測図 (2)

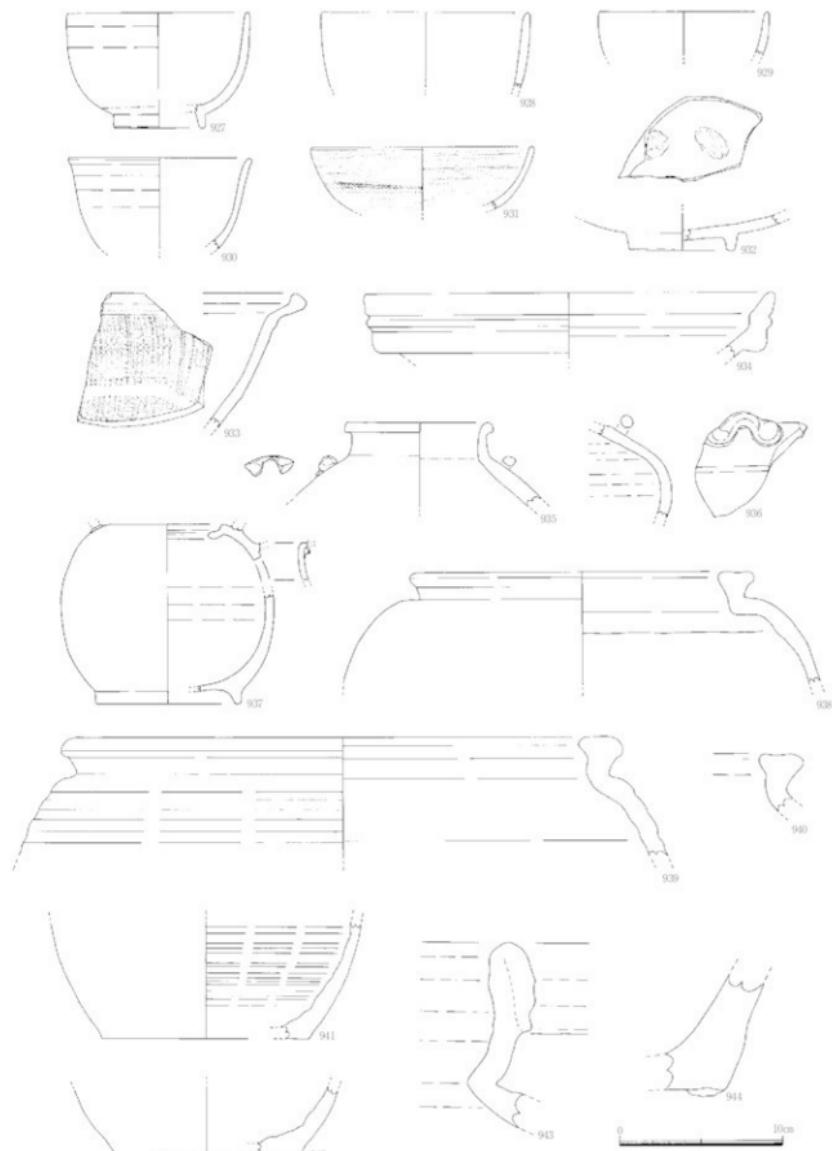


Fig.95 SK4出土遺物実測図 (3)

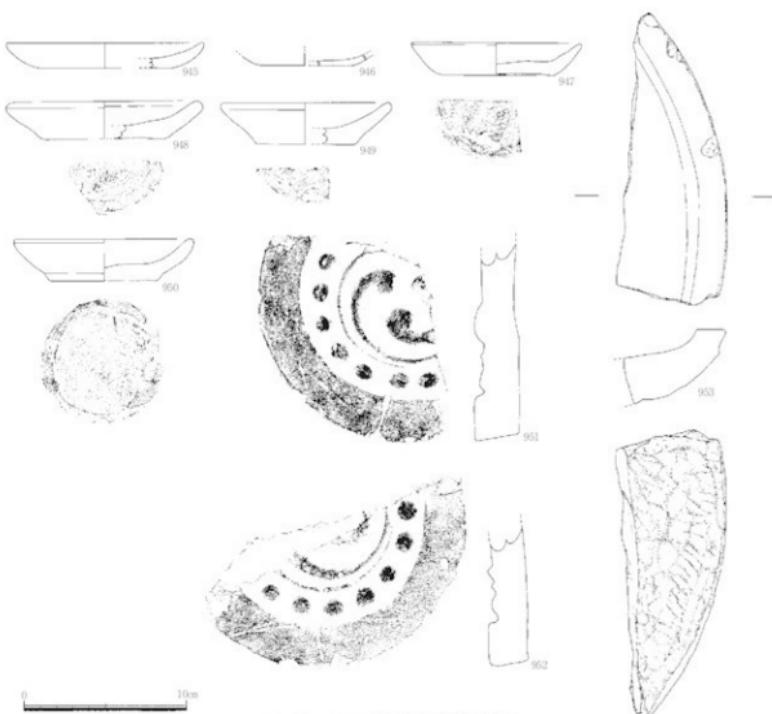


Fig.96 SK4出土遺物実測図(4)

すものとみられるが、釉が変色し剥離するため色調は不明である。

897～900・909～911は青花。897～900・909・910は中国景德鎮窯系の青花皿である。897～899は口縁部輪花形の皿で、897は内面に草花、898は植物、899は梅を描く。900は内面に植物を描くものである。909は内面に梅と草花、高台内に「□明成□□製」銘を描く。910は内面に草花文を描き、高台内に「□…□製」銘を描く。911は中国漳州窯系の青花皿で、基筒底。胎土は軟質で、呉須は暗緑灰色に発色する。

927～944は陶器。927～930は中碗である。927は肥前産の灰釉丸形中碗で、浅黄色を帯びる半透明の釉を施し、高台内外面に鉄錆を塗る。928は肥前産の灰釉丸形中碗である。929は唐津系灰釉陶器の丸形中碗で、灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施す。930は京焼又は京都系の灰釉端反形碗で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。932は肥前産の灰釉小皿で、内底に砂目痕が残る。931・933は鉢。931は肥前産の白化粧土刷毛目の鉢で、褐灰色の胎土をもつ。933は肥前産の刷毛目二彩手の鉢で、内面は白化粧土刷毛目の後、回転によるヘラ描きの線を多条に巡らせる。内面の一部には緑釉を流し掛けしている。934は備前の描鉢である。937は尾戸窯の灰釉水注。高台施釉で、灰白色を帯びる透明の釉を施す。935・936は壺。935は鉄釉の壺で、肩部に紐状の耳を貼付する。936も肩部

に紐状の耳を貼付するもので、釉は被熱し変質しており不明である。938～940は壺で、938は二次被熱により釉が変質する。939・940は焼締めの壺である。941・942は壺又は壺の底部で、焼締め。943・944は備前の焼締めの大壺である。943は口縁部内外面に強いクロ口が残り、口縁内面と肩部に自然釉が掛かる。944は外底に团子状の粗砂が付着している。

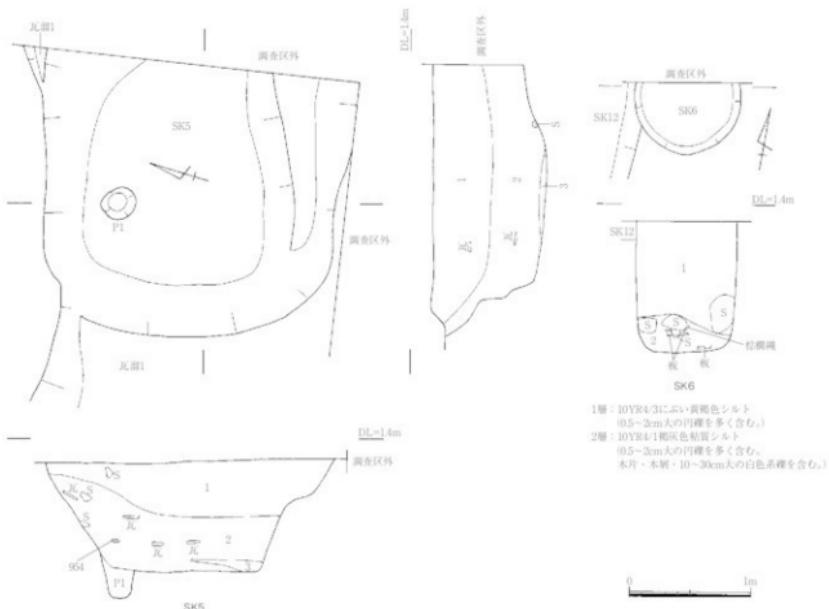
945～950は土師質器小皿。945・946は尾戸窯の小皿である。945は灰白色の胎土をもち、内外面と外底にナデを施す。946は橙色の胎土をもち、外面回転ナデ、内底と外底にナデを施す。947～950は外底回転糸切りの小皿で、口径10～11cm前後の法量をもつ。947・949は内外面回転ナデ。950は内外面回転ナデで、底部脇にヘラケズリを施している。948は体部内外面回転ナデで、内底に不定方向のナデ、外底は回転糸切りの後、底部脇にヘラケズリを施す。

953は砂岩製の石臼。951・952は三巴文軒丸瓦である。

SK4は17世紀末に比定され、火災に伴う廃棄土坑と考えられる。

#### SK5 (Fig.97・98)

I区東部に位置する。切り合い関係では、P1を切り、上面を瓦溜1に切られている。東部が調査区外に出るため全体の規模は不明であるが、平面形は不整形とみられ、南北長2.36m、東西確認長



1層: 25Y3-2黒褐色粘質シート (粗砂・0.2~0.5mm大の円礫が多く含む。)  
2層: 25Y4-1黄褐色粘質シート (粗砂を含む。)  
3層: 10YR3-2黒褐色粘質シート (粗砂・0.5~1mm大の円礫を多く含む。炭化物と植物遺体を多く含む。)

Fig.97 SK5・6・P1平面図・セクション図

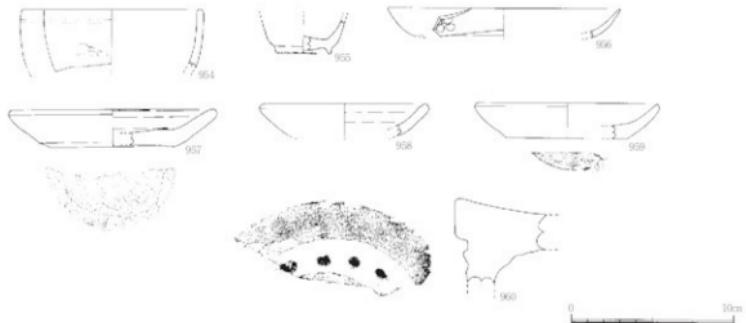


Fig.98 SK5・7出土遺物実測図 (SK5: 954～957・960、SK7: 958・959)

2.30m、深さ92cmを測る。断面形は不整形で、床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質シルトと黄灰色粘質シルトで、最下層には炭化物と植物遺体が多く含まれる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗1点、白磁小杯1点、陶器五寸皿1点・碗蓋1点、土師質土器小皿3点、及び瓦片81点である。

図示したものは954～957・960で、このうち956・957は被熱により変質している。954は肥前産の染付中碗、955は肥前産の白磁小杯である。956は尾戸窯又は京都系の灰釉五寸皿で、外面に白土による花文を描く。957は土師質土器小皿で、内外面回転ナデ。外底は回転糸切りで、底部脇にヘラケズリを施す。960は巴文軒丸瓦である。

#### SK6 (Fig.97)

II区北東部に位置する。切り合い関係では、SK12を切り、瓦溜5に上面を切られている。北部が調査区外に出るため全体の規模は不明であるが、平面形は円形とみられ、東西長0.88m、南北確認長0.58m、深さ106cmを測る。断面形はU字形で、壁は直立して立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトと褐灰色粘質シルトで、下層には白色系の礫と板、木片、木屑等が多く含まれる。

出土遺物は備前焼窯の体部片と、瓦片、板、木片、棕櫚繩である。

#### SK7 (Fig.89・98)

II区東部に位置する土坑で、SK10を切る。SK3と切り合うが、埋土が同質のため前後関係は不明である。平面形は楕円形を呈し、東西長0.65m、南北残存長0.44m、深さ13cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで、埋土中に硬化した焼土塊を含んでいる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、土師質土器小皿13点である。

図示したものは958・959で、ともに被熱し変質する。958・959は土師質土器小皿で、口径10～11cm。内外面回転ナデで、959は外底に回転糸切り痕を残す。

SK7は17世紀末に比定され、火災に伴う廃棄土坑と考えられる。

#### SK8 (Fig.99・101)

II区東部に位置する大型の土坑である。切り合い関係では、SK10を切り、上面を瓦溜2・SX2に切られている。またSK4・13と切り合うが、埋土が同質のため前後関係は不明である。南部が調

Fig.99 SK8・13平面図・セクション図・エレベーション図

査区外となるため全体の規模は不明であるが、平面形は不整形を呈し、南北確認長3.48m、東西長2.68m、深さ34cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで、埋土中に炭化物と硬化した焼土塊を含んでいる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗1点、土師質土器椀1点・中皿1点・小皿6点、及び瓦片30点である。

図示したものは961～964で、このうち963は被熱し変質している。961～964は土師質土器。961は椀で、尾戸窯産の可能性をもつ。内外面回転ナデで、体部を歪ませている。962は小皿で、内外面回転ナデ、外底に回転糸切り痕が残る。964は中皿で、口径18cm。内外面回転ナデの後、外面下

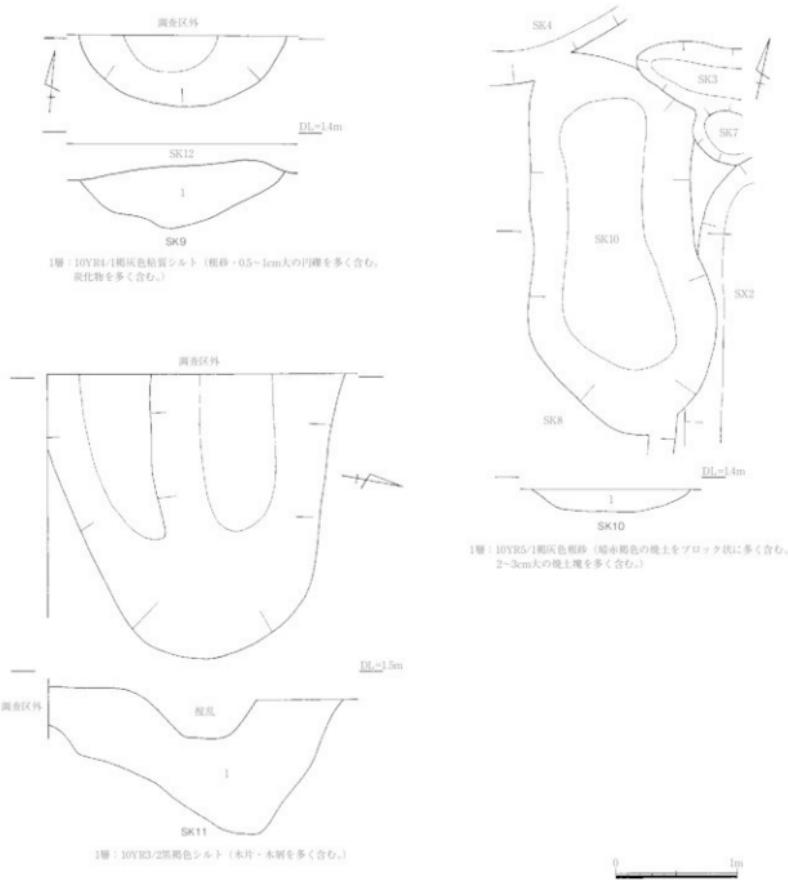


Fig.100 SK9・10・11平面図・セクション図

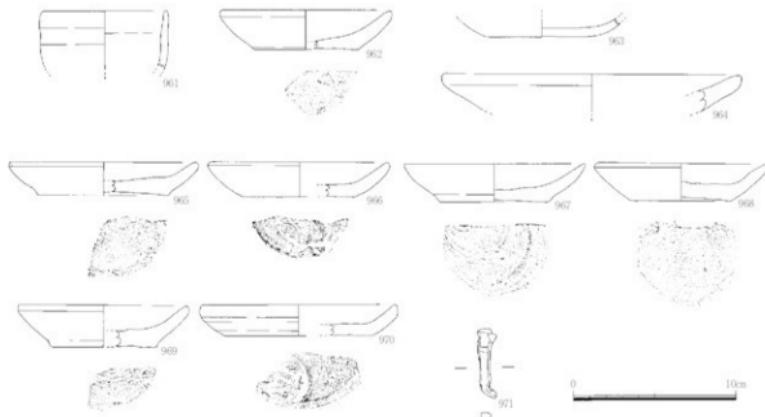


Fig.101 SK8・10出土遺物実測図 (SK8: 961～964、SK10: 965～971)

位にヘラケズリを施す。963は尾戸窓の小皿で、外面下半と外底にナデ、内面周縁に回転ナデ、内底に不定方向のナデを施す。

SK8は17世紀末に比定され、火災に伴う廃棄土坑と考えられる。

#### SK9 (Fig.100)

II区北東部に位置する土坑で、瓦溜5の下面にて検出した。切り合い関係ではSK12に上面を切らされている。北部が調査区外となるため、全体の規模、形態は不明であるが、東西長1.68m、南北確認長0.58m、深さ50cmを測る。断面形は不整形である。埋土は褐灰色粘質シルトで、埋土中に炭化物を多く含んでいる。出土遺物は確認できていない。

SK9は、SK12との前後関係からみて17世紀末以前に比定される。

#### SK10 (Fig.100・101)

II区東部に位置する土坑で、瓦溜2・SX2の下面にて検出した。切り合い関係ではSK3・7に切られる。またSK4・8と切り合うが、埋土が同質のため前後関係は不明である。平面形は不整形で、長軸3.20m、短軸1.55m、検出面からの深さ18cmを測る。断面形は皿状である。埋土は褐灰色粗砂で、埋土中に焼土のブロックと硬化した焼土塊を多く含んでいる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、土師質土器小皿110点、及び備前焼壺の体部片1点と瓦片7点、鉄釘1点である。

図示したものは965～971で、このうち965～970は被熱し変質している。965～970は土師質土器小皿で、口径10～11cm。とともに内外面回転ナデ、外底回転糸切りである。971は鉄製の釘で、頭部をもち、断面四角形。釘の尖端部は使用により曲がる。

SK10は17世紀末に比定され、火災に伴う廃棄土坑と考えられる。

#### SK11 (Fig.100・102～104)

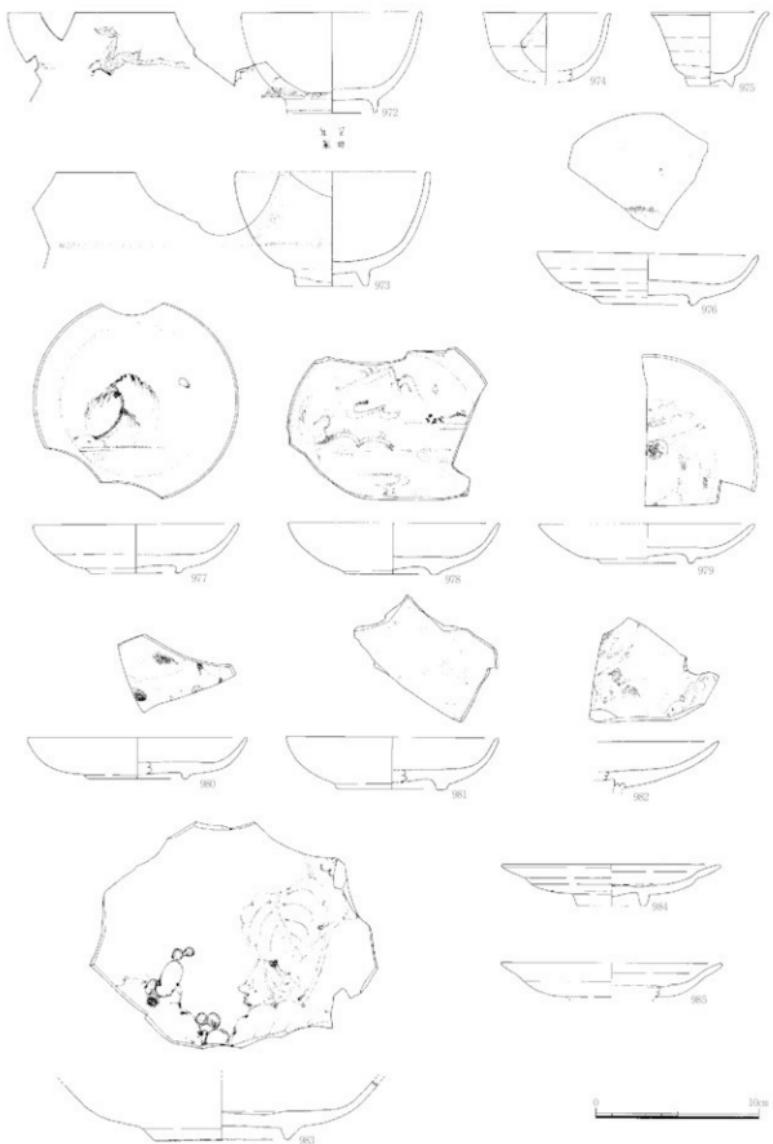


Fig.102 SK11出土遺物実測図(1)

II区南西部に位置する土坑で、瓦溜4の下面で検出した。西部が調査区外となるため、形態と全体の規模は不明であるが、南北確認長244m、東西確認長232m、深さ110cmを測る。断面形は不整形である。埋土は黒褐色シルトで、埋土中に木片と木屑を多く含んでいる。

出土遺物は染付中碗・小碗・大皿・中皿・小皿又は五寸皿、青磁大皿・小皿、白磁小碗・小杯・五寸皿・鉢、青花小皿、陶器中碗・小皿・火入又は香炉・器種不明、窯道具、土師質土器小皿・漆椀、下駄、及び蛤の貝殻である。

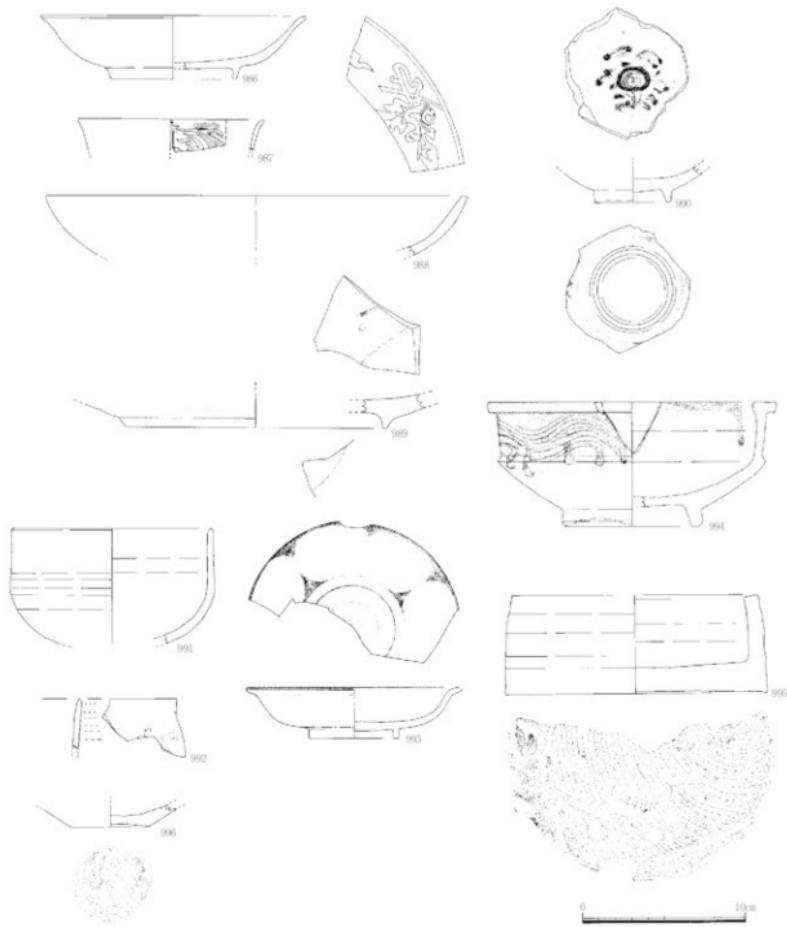


Fig.103 SK11出土遺物実測図 (2)

図示したものは972～999である。972～989は磁器で、何れも肥前産。972～974・976～983・989は染付。972は丸形中碗で、外面に鹿と樹木、高台内に「宣明年製」銘を描く。973は丸形中碗で、肥前1640～1650年代の製品。高台内は兜巾状で、高台内無釉である。974は小碗。97～982は小皿である。976・977は肥前1650～1670年代の製品で、内面に柳を描く。978～981は肥前1630～1650年代の製品で、978～980は疊付に粗砂が付着する。978・981は内面に山水文、979は草花文、980は唐草文を描く。983は中皿で、内面に葛文を描き、透明釉は貫入が入る。989は大皿である。984・985は肥前波佐見の青磁小皿で、見込み蛇ノ目釉剥ぎ。984は高台無釉で、明緑灰色の釉を施す。988は青磁の大皿で、口鋸。内面に型による陽刻文様を施す。975は白磁の小杯で、高台無釉。986は端反形の白磁五寸皿である。987は白磁の鉢か。内面に型による陽刻文様を施す。990は中国漳州窯系の青花小皿で、外面に唐草文、内面に草花文を描く。高台内無釉で、呉須は暗青灰色に発色する。

991～994は陶器。991は尾戸窯の灰釉中碗で、体部中位を押圧し窪ませる。高台無釉で、灰白色を帯びる透明の釉を施す。992は京焼で、器種不明。外面に呉須と鉄鋸による文様を描き、灰白色を帯びる透明の釉を施す。993は京焼の灰釉端反形小皿で、高台無釉。内面に鉄鋸と呉須で文様を描き、灰白色を帯びる透明の釉を施す。994は肥前産の火入又は香炉で、外面は白化粧土刷毛目の後緑釉を流し掛けし、外面下半には鉄釉を施す。内面と高台内は無釉である。

995は窯道具で、匣である。外面に強いロクロ目、外底に回転糸切り痕を残す。

996は土師質土器小皿で、外底に回転糸切り痕を残す。

997～999は木製品。997・998は漆椀である。997は体部内外面に赤漆を施し、高台内には黒漆を施した後、赤漆で文字文を描く。998は体部内外面に赤漆を施し、高台内には赤漆の後、黒漆で文字文を描く。999は下駄。刺り貫きによるもので、平面形は長方形とみられる。歯の接地面は使用

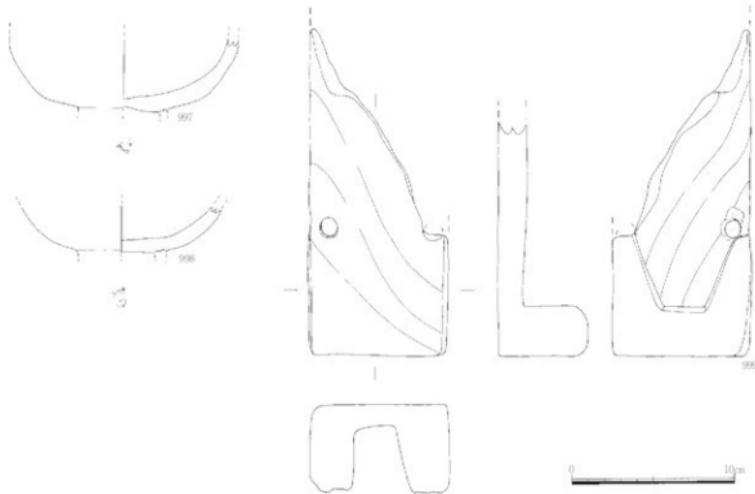


Fig.104 SK11出土遺物実測図 (3)

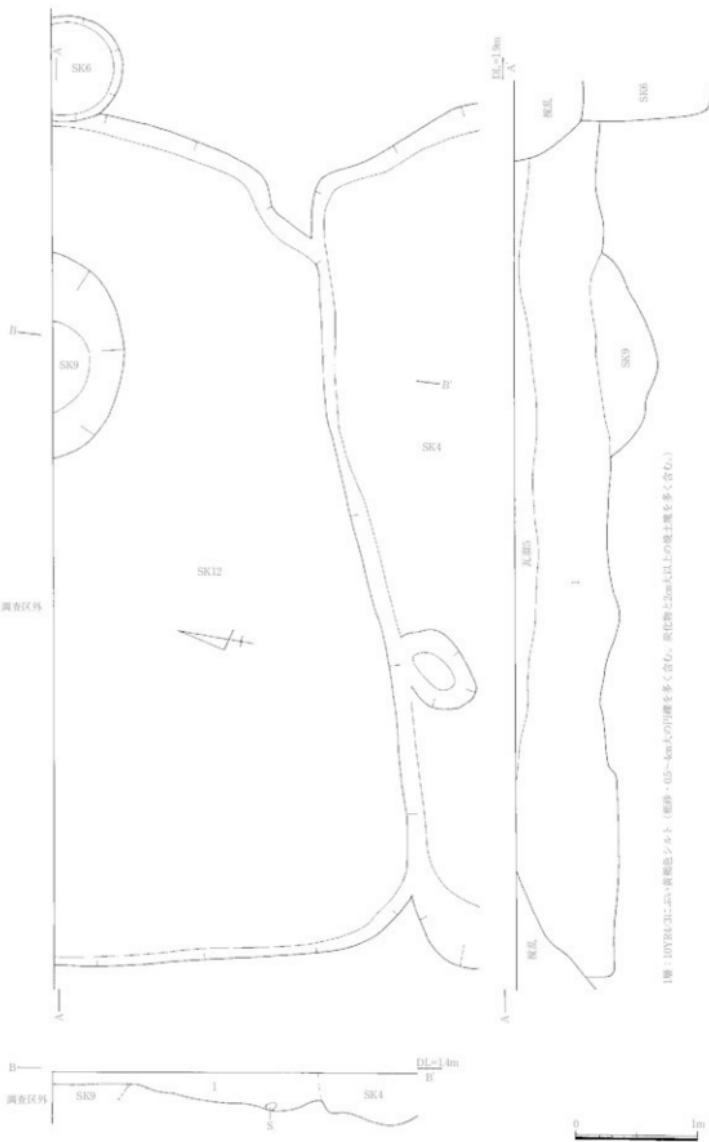


Fig.105 SK12平面図・セクション図

によって摩耗している。

SK11は17世紀後半に比定される。

#### SK12 (Fig.105)

II区北部に位置する大型の土坑である。切り合い関係では、SK9を切り、SK6・瓦溜5に切られる。またSK4と切り合うが、埋土が同質のため前後関係は不明である。北部が調査区外に出ているため全体の規模は不明であるが、平面形は不整形とみられ、東西長6.98m、南北確認長2.90m、深さ83cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで、埋土中に炭化物と硬化した焼土塊を多く含んでいる。

出土遺物は陶磁器、土師質土器、瓦片である。また、瓦片の多くは被熱し変色している。

SK12は17世紀末に比定され、火災に伴う廃棄土坑と考えられる。

#### SK13 (Fig.99)

II区南部に位置する大型の土坑で、SE1の上面で検出した。切り合い関係では、上面を瓦溜2・3・SX1に切られている。またSK4・8と切り合うが、埋土が同質のため前後関係は不明である。規模、形態とも不明であるが、東西残存長3.28m、南北残存長3.18m、深さ15cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで、埋土中に炭化物と硬化した焼土塊を多く含んでいる。出土遺物は陶磁器、土師質土器、瓦片である。

SK13は17世紀末に比定され、火災に伴う廃棄土坑と考えられる。

## (2) 井戸

#### SE1 (Fig.106～113)

II区南部に位置する井戸跡である。他遺構との直接的な切り合い関係はないが、SK13・瓦溜2・3・SX1の下面にて検出されており、これらに先行する。

掘方の平面形は円形を呈し、検出面の径は1.60mを測る。掘方の中央には、板組による井戸側が埋め込まれており、井戸側の検出面の径は0.77m、検出面からの深さは2.24mである。

井戸側は上下2段の井筒を組み合わせたもので、上段の筒の内側に下段の筒の上端部がはめ込まれた構造になっている。上段の筒は24枚の側板を竹製の釘で接合して円形に組み合わせ、竹紐のタガで上下2箇所を締めており、下段の筒も22枚の側板を同様に組み合わせ、3箇所をタガで締めている。また、上下の井筒の接合部分は、上段筒の側板の下端部内側と下段筒の側板の上端部外側を薄く削り出し、両者を重ね合わせることによって固定させている。

埋土は、井戸廃絶後の埋め戻し土にあたる1層と2層が木片と植物遺体を多く含む黒褐色シルトで、1層には白色系の10～20cm大の蝶が多く含まれている。3層は井戸側の最下位に堆積するもので、上面は0.5～1cm大の円蝶と粗砂によって覆われるが、その下には1～5cm前後に碎いた木炭が多量に入れられている。4層は掘方の埋土にあたるもので、灰色砂質シルトである。5層は灰色砂疊層であるが、調査時において掘方の断面を確認できなかったため、5層が人為的なものか、自然堆積によるものかは確認できていない。

出土遺物は陶磁器、土師質土器、木製品、木片、瓦片、金属製品、蛤の貝殻であり、何れも1・2層からの出土である。このうち陶磁器・土器は口縁部及び底部点数にして、染付中碗5点・小杯1

点・瓶1点、陶器中碗5点・中皿1点・小皿1点・擂鉢1点、土師質土器小皿4点・椀又は皿1点・培焰1点・白土器小皿1点が出土している。また口縁部と底部以外には、肥前産の刷毛目二彩手皿の体部片、灰釉丸碗の体部等、17世紀～18世紀前半の遺物が含まれている。またこれらの陶磁器には、二次被熱によって釉が変質したもの(1031)も含まれている。

図示したものは1024～1047である。1024～1030は磁器で、何れも肥前産。1024～1028・1030は染付。1024～1027は中碗で、1024は植物と岩、1025は梅文、1026は千鳥を描く。1027は外面に多重の圓線を巡らせる。1028は小杯で、山水文を描く。1030は小瓶。1029は白磁又は染付の平形中碗である。

1031～1034は陶器。1031は尾戸窯の灰釉中碗で、外面上位にヘラ彫りを巡らせる。高台施釉で、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。1033は灰釉中碗で、尾戸窯の製品か。外面に呉須による注連繩である。

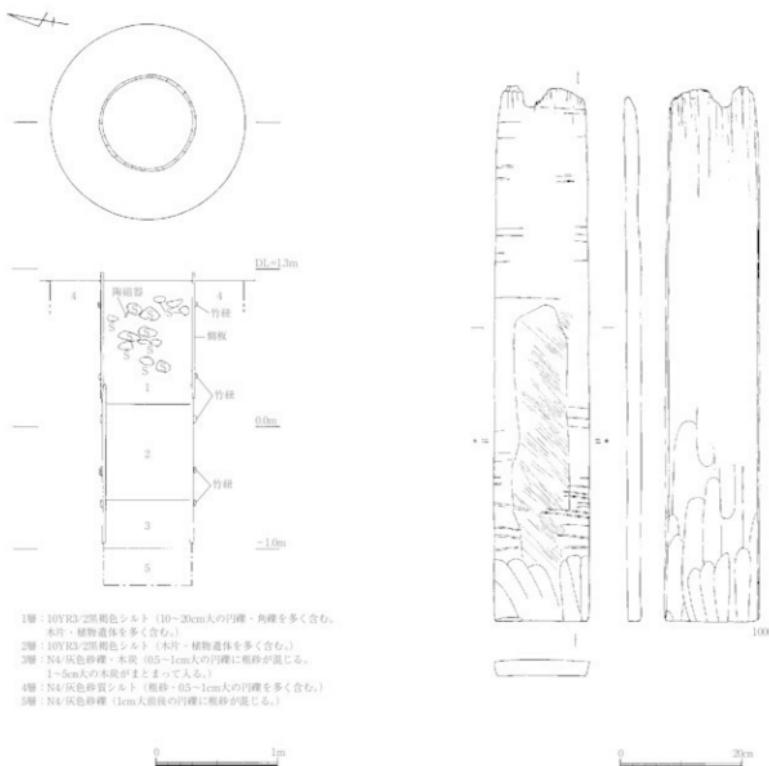


Fig.106 SE1平面図・セクション図・SE1側板実測図(1)



Fig.107 SE1側板実測図(2)

文を描く。1032は肥前産の京焼風陶器の中碗で、文様の有無は不明である。高台無軸で、浅黄色を帯びる半透明の釉を施す。高台内に小判枠内「宝」銘印をもつ。1034は備前の描鉢である。

1035～1037は土師質土器。1035は尾戸窯の白土器小皿で、胎土は灰白色を呈する。無文で、外面上半と内面周縁に回転ナデ、外面下半と外底に回転ケズリ後ナデ、内底にナデを施す。1036は碗又は皿で、内外面回転ナデ、外底は回転糸切りである。1037は関西系の焰烙で、外面に強い煤、内底に焦げ痕が残る。1038は釣針である。

1039～1047は木製品。1039は曲物又は桶状製品の底部か。数枚の板を組み合わせており、板の接合面に4箇所の釘穴を認める。1040は用途不明の木製品の部材で、割り貫きを曲線的に施している。1041～1043は箸で、側面に面取りを施す。1044は撥状の製品で、栓か。1045～1047は用途不明の板状製品で、1045は片側を斜めにカットしており、釘穴とみられる断面四角形の孔が穿たれる。

この他、井戸側の側板(1000～1012・1017～1019)、木釣(1013～1016・1020～1023)を図示している。1000～1009は上段の側板で、上端部は欠損する。何れも外面の両側部分に継方向の削り、内面の全体に丸彫り状の工具による継方向の削りを施し、板の横断面を曲線的に加工している。また、

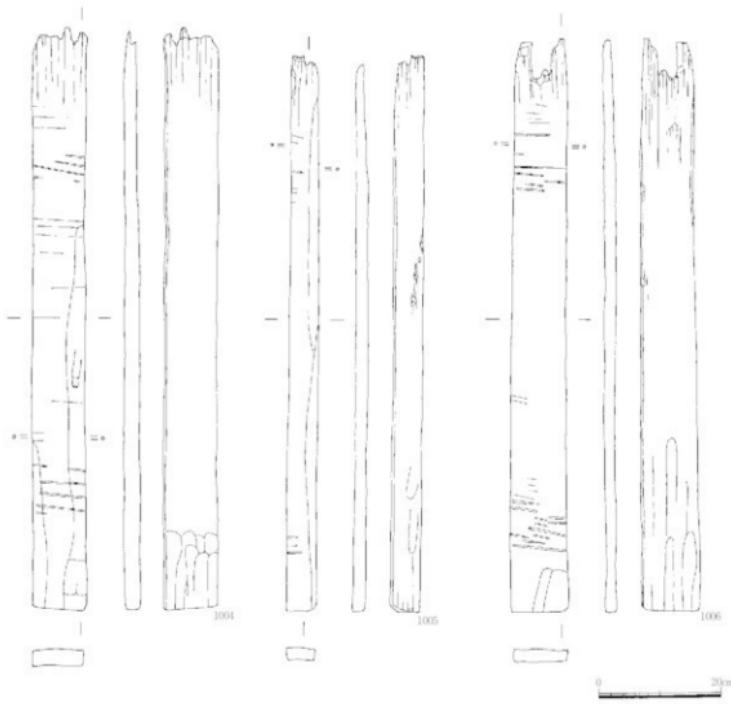


Fig.108 SE1側板実測図(3)

内面の上端と下端部分には丸彫り状の工具で削りを施しており、板の上下部分が薄くなるように加工されている。この他1000～1003・1009には、板の一次加工の痕跡（鋸痕か）とみられる連続的な斜め方向の加工痕が外面の中央付近に残り、板の側面には上位あるいは下位に径5mm前後の円形の釘穴が観察され、竹製の釘が残存している。また、各々の板の外面には竹紐のタガで締めた痕跡が上位と下位の2箇所に観察されている。1010～1012・1017～1019は下段の側板である。上段の板と同様に、何れも外面の両側部分に継方向の削り、内面の全体に丸彫り状の工具による継方向の削りを施し、板の横断面を曲線的に加工している。一方、尖端部への加工は外面の上端のみにあり、先端から10cm付近までの部分に粗く削りを施し、先端部を薄く尖らせており、木釘が残存している。また、外面の上位、中位、下位の3箇所にはタガの圧痕が認められる。板の一次加工の痕跡とみられる斜め方向の加工痕は、1010～1012・1017・1019の外面中央部付近に認められる。なお側板は、図示しなかったものについても同様の加工痕が観察された。各々の法量については、上段の側板は幅が50～15.5cmと大小あり、規格性が認めにくい。一方、下段は板の幅が10.0～12.5cmとある程度の規格性が認められる。

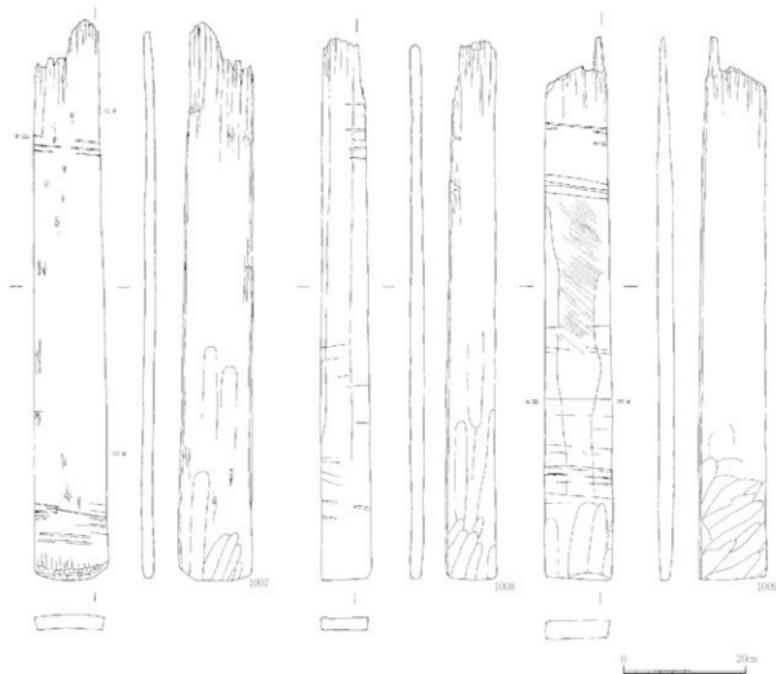


Fig.109 SE1側板実測図 (4)

1013～1016・1020～1023は竹製の釘で、側板接合部の孔内に残存していたものである。1013～1015・1020～1023は片側を欠損するが、何れも竹管を縱方向に細く切り、尖端部分を尖らせている。1016は完形のもので、両先端に削りを施し尖らせている。

SK13との前後関係及び出土遺物の内容からみて、SE1の廃絶年代は17世紀末に位置付けられる。



Fig.110 SE1側板・釘実測図(5)

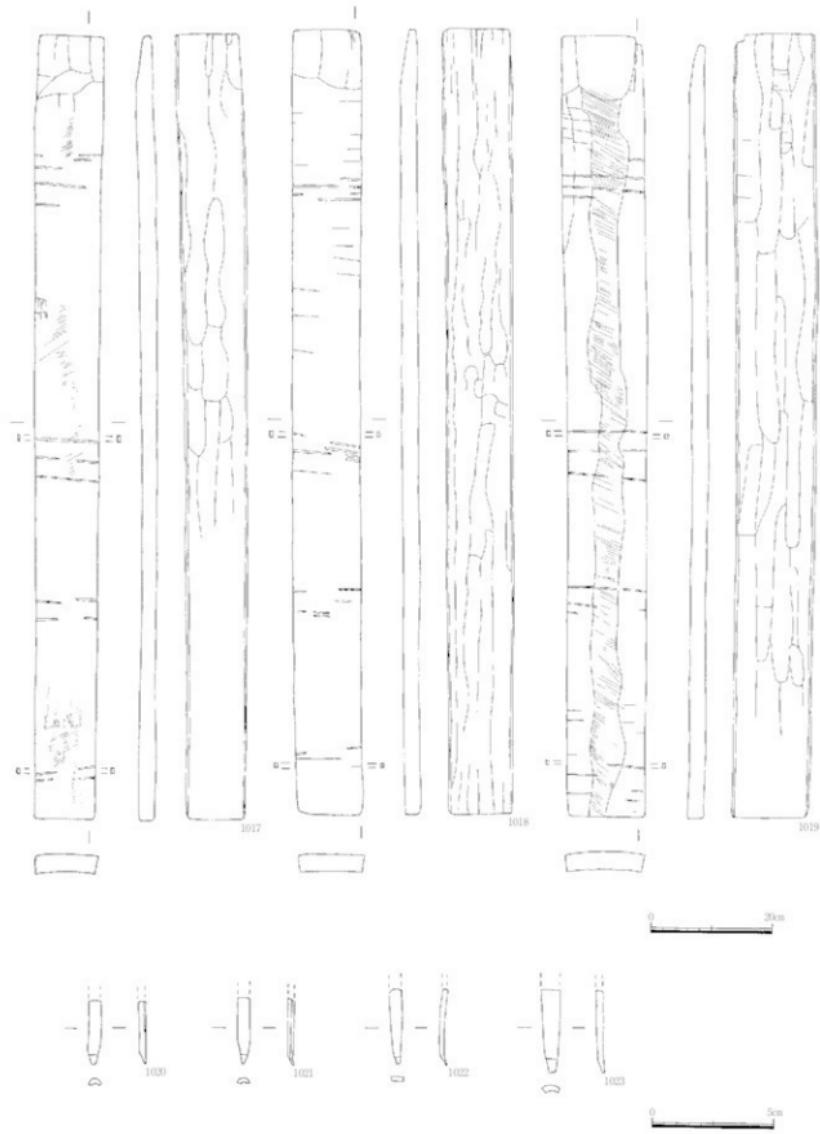


Fig.111 SE1側板・釘実測図 (6)

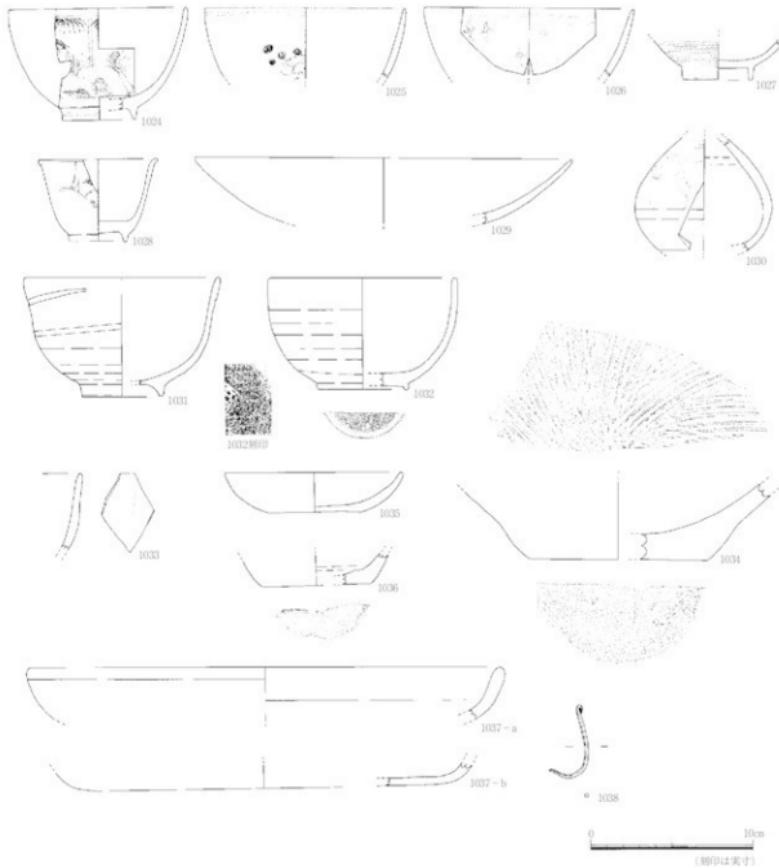


Fig.112 SE1出土遺物実測図 (1)

### (3) ピット

P1 (Fig.97)

SK5の床面で検出したピットで、検出規模は径0.26m、検出面からの深さは35cmを測る。埋土は黄灰色粘質シルトで、埋土中には焼土塊が含まれる。出土遺物は瓦片3点である。

P2 (Fig.92)

SK4の床面で検出したピットで、検出規模は径0.22m、検出面からの深さは10cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は確認できていない。

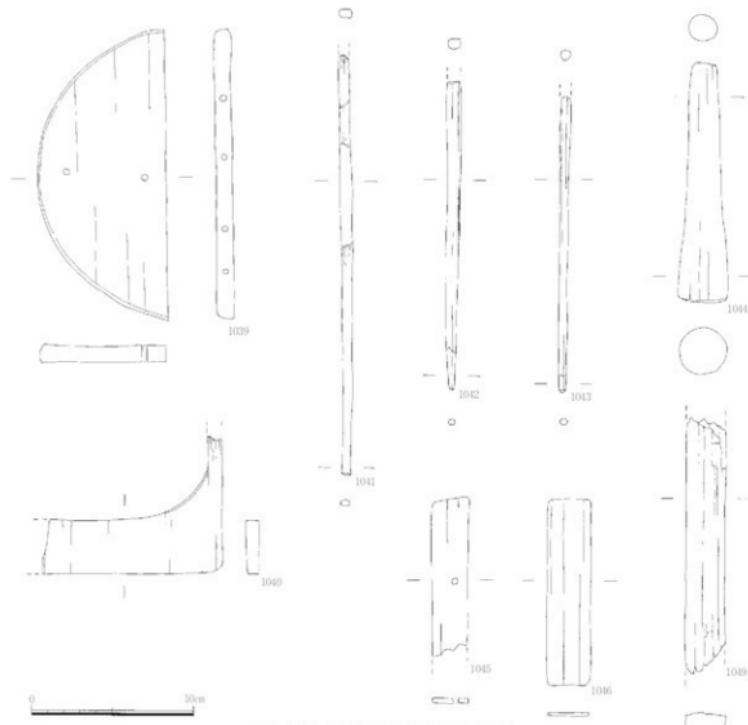


Fig.113 SE1出土遺物実測図(2)

#### (4) 性格不明遺構・瓦溜り

**SX1** (Fig.87・115)

II区南部からI区にかけて検出された浅い落ち込みで、瓦溜1～4・SK2・13・SE1の上面に広がっている。近代以降の搅乱を強く受けており、形態や規模が分かりにくいが、床面は平坦でなく高低差がある。埋土は褐色粘質シルトで、炭化物を多く含んでいる。

出土遺物は陶磁器、土師質土器である。図示したものは土師質土器小皿(1065)である。

SX1は19世紀中葉以降に比定される。

**SX2** (Fig.86・87)

II区南東部にて検出された落ち込みで、SK8・10を切る。埋土は褐色シルトである。出土遺物は確認できていない。

**瓦溜1** (Fig.87・114～117)

I区にて検出された瓦溜りで、SK2・5の上面に広がり、SX1に切られている。規模は東西確認長

5.18m、南北確認長3.10m、検出面からの深さは10～15cmである。埋土は1層：褐灰色シルト、2層：炭化物層で、1層には瓦片、炭化物、木片、木屑が多く含まれる。

出土遺物は口縁部及び底部点数にして、染付中碗9点・小碗1点・小杯2点・大皿1点・小皿又は五寸皿3点・鉢1点・猪口1点・碗蓋7点・瓶1点・髪油壺1点・仮飯器1点・青磁香炉1点・白磁紅皿2点・陶器中碗2点・小碗2点・小杯1点・中皿1点・捏鉢1点・擂鉢3点・土瓶蓋1点・壺1点・甕1点・灯明皿1点・香炉1点・器種不明1点・土師質土器小皿2点・白土器小皿2点・蓋1点・焙烙1点・焜爐2点・瓦質土器火鉢1点・施釉土器蓋1点・石臼1点・器種不明の石製品2点・鉄釘5点、及び木製品、瓦片で、瓦はコンテナ8箱分が出土している。

図示したものは1048～1064・1066～1080である。1048～1058は磁器で、何れも肥前産。1048～1053・1056～1058は染付。1048は丸形小碗で、外面にコンニャク印判による菱文を施す。1049は箇文の丸形小杯。1050は蛇の目四形高台の五寸皿で、外面に如意頭連続唐草文、内面に草花文を描く。1051は丸形の五寸皿で、見込み蛇ノ目釉剥ぎし、内面に花唐草文とコンニャク印判による五弁花文を施す。1052は大皿で、樓閣山水文を描く。1053は広東形碗の蓋、1057は小瓶、1058は髪油壺で

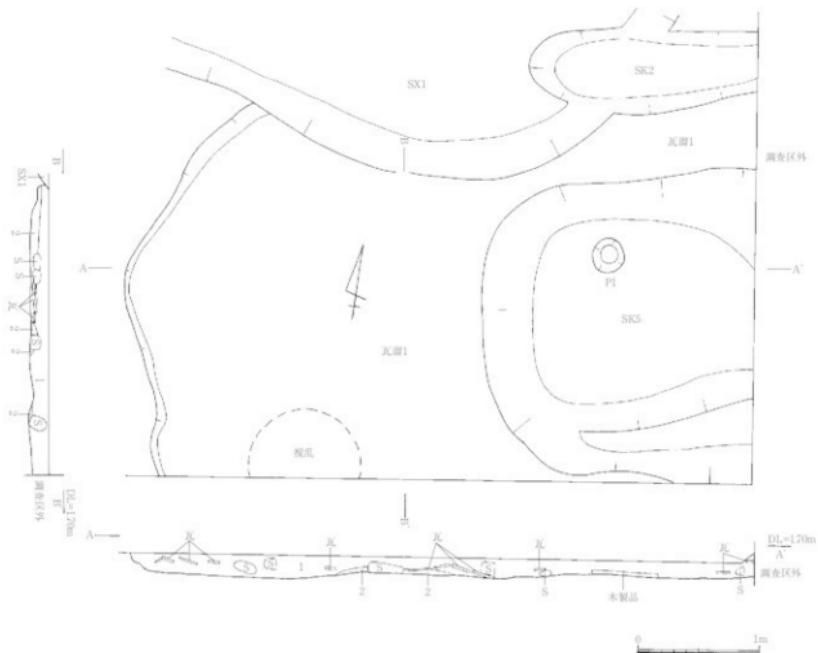


Fig.114 瓦溜1平面図・セクション図



Fig.115 SX1・瓦溜1出土遺物実測図(1)(SX1:1065、瓦溜1:1048~1064・1066~1068)

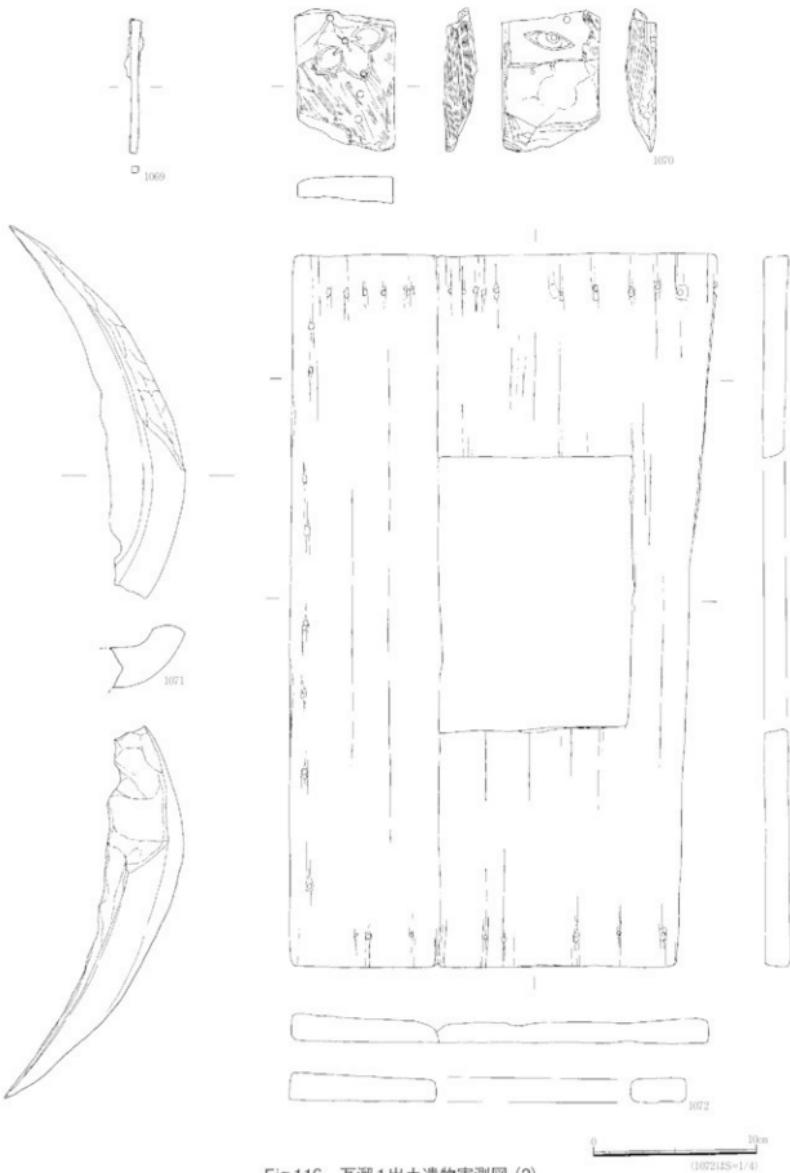


Fig.116 瓦溜1出土遺物実測図 (2)

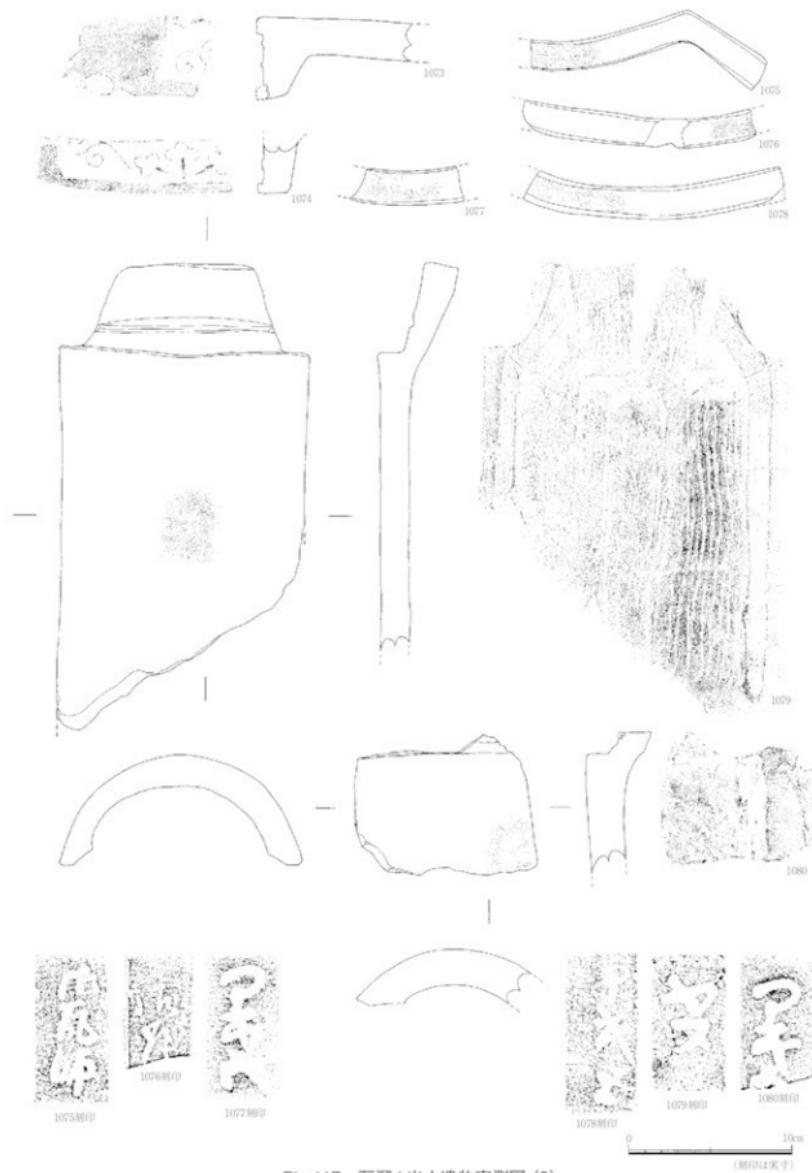


Fig.117 瓦溜1出土遺物実測図(3)

ある。1056は仏飯器で、雨降り文を描く。1054は青磁香炉で、三足を貼付する。釉はオリーブ灰色を呈し、内外面と外底施釉で、外底中央は無釉である。1055は白磁の菊花形紅皿である。

1059～1062は陶器。1059は灰釉端反形中碗で、口鉢。外面に鉄鋸による芙蓉手の文様、内面に列点文を描く。高台施釉で、灰白色を帯びる透明の釉を施す。1060は京都・信楽系の灰釉半球形小碗である。文様の有無は不明で、高台無釉である。1061は鉄釉の灯明受皿で、外面無釉。1062は器種不明で、尾戸窯の製品とみられる。手捏ね成形で、内外面に光沢の強い透明の釉を施す。

1063・1064・1067・1068は土師質土器。1063・1064は尾戸窯の白土器小皿で、ともに内底に型による陽刻の松竹梅鶴亀文を施す。胎土は灰白色を呈し、内外面と外底にナデを施す。1067は関西系の焙烙。1068は関西産の丸形の焜炉で、内面上位に手捏ねによる突起を貼付する。1066は施釉土器の蓋で、外面に型による陽刻の菊花文を施し、透明の低火度釉を掛けた。

1069は鉄製の釘で、尖端部を欠損する。頭部をもち、断面は四角形を呈する。1070は器種不明の石製品で、削り出しによって陰刻の花文が施され、数箇所に円孔が穿たれる。欠損し、砥石に転用されている。1071は器種不明。1072は木製品で、用途不明の板状製品。中央に長方形の窓を設けるもので、3枚の板を組み合わせている。板の接合面には数箇所の釘穴が残る。周縁にも複数の釘穴が穿たれており、鉄釘が残存する。

1073～1080は瓦。1073・1074は軒桟瓦又は軒平瓦、1079・1080は丸瓦、1075は棟瓦、1076～1078は棟瓦又は平瓦で、1074は丁字文と均整唐草文を配する。これらのうち、1077・1078・1080は「アキ□」、1075は「御瓦師」、1076は「御瓦□」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）産。1079は「ヤス」銘印をもち夜須（高知県香南市夜須町）の製品である。

瓦溜1は19世紀前半に比定される。

#### 瓦溜2 (Fig.87・118)

II区南東部にて検出された瓦溜りで、SK3・7・8・10・13・SE1・SX2の上面に広がり、SX1に切られている。規模は東西確認長5.76m、南北確認長3.28m、検出面からの深さは21～45cmである。床面は平坦でなく、部分的に高低差がある。埋土は褐色シルトで、埋土中に瓦片を多く含む。

出土遺物は陶磁器、土師質土器、及び多量の瓦片である。

図示したものは1081～1089である。1081は肥前産の染付合子で、外面に宝珠繫ぎ文を描き、外底に墨書を認める。1082～1085は陶器。1082は肥前産の鉄釉丸形中碗で、高台と外面下位無釉。1083・1084は尾戸窯の灰釉中碗で、ともに灰白色を帯びる半透明の釉を施す。1083は高台無釉で、高台内に渦状の鉋痕を残す。1085は鉄釉の土瓶蓋で、黒褐色の釉を施す。1086・1087は土師質土器。1086は小皿で、外底に回転糸切り痕が残る。1087は人形で、動物を表す。型押成形前後貼り合わせによるもので、中空。内面にユビオサエとユビナデ痕が残る。1088・1089は瓦。1088は軒桟瓦又は軒平瓦、1089は棟瓦又は平瓦である。1089は「アキ□」銘印をもち、安芸（高知県安芸市）の製品である。

瓦溜2は19世紀前半に比定される。

#### 瓦溜3 (Fig.118)

II区南部にて検出された瓦溜りで、SK4・13・SE1の上面に広がり、SK1・SX1に切られる。規模

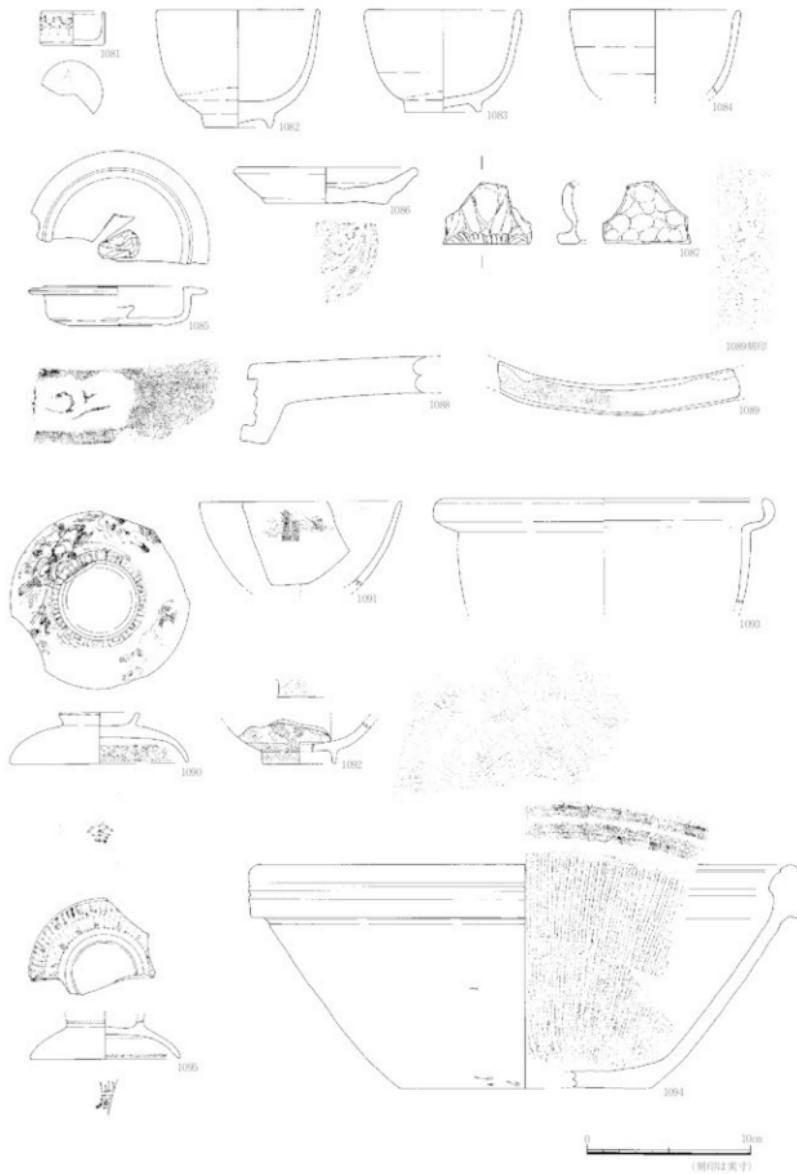


Fig.118 瓦溜2・3・4出土遺物実測図 (瓦溜2:1081~1089、瓦溜3:1090~1094、瓦溜4:1095)

は東西長3.52m、南北残存長2.88m、検出面からの深さは20cmである。埋土は褐灰色シルトで、埋土中に瓦片、漆喰のブロックと炭化物を多く含む。出土遺物は陶磁器、土師質土器、及び多量の瓦片である。

図示したものは1090～1094である。1090～1092は磁器で、何れも肥前産。1091は染付の広東形中碗。1090は染付の碗蓋で、望料碗の蓋とみられる。1092は色絵染付の中碗で、外面に赤の上絵付による花文と呉須による菊花文、丸文を描き、高台外には赤の上絵付による四方擣と呉須による圈線を描く。1093・1094は陶器。1093は鉄釉の鍋で、把手は欠損する。1094は堺産の擂鉢である。

瓦溜3は19世紀前半に比定される。

#### 瓦溜4 (Fig.118)

II区南西部、SK11の上面にて検出された瓦溜りで、SX1に切られる。規模は南北長3.60m、東西残存長2.40m、検出面からの深さは20cmである。埋土は褐灰色シルトで、瓦片、炭化物を多く含む。出土遺物は陶磁器、土師質土器、及び多量の瓦片である。

図示したものは1095である。1095は肥前産の染付広東形碗の蓋で、暦手文を描く。

瓦溜4は19世紀前半に比定される。

#### 瓦溜5 (Fig.86)

II区北東部にて検出された瓦溜りで、SK6・9・12の上面に広がる。規模は東西残存長6.08m、南北確認長2.08m、検出面からの深さは18～36cmである。埋土は褐灰色シルトで、瓦片、炭化物を多く含んでいる。出土遺物は陶磁器、土師質土器、及び多量の瓦片である。

瓦溜5は19世紀前半に比定される。

### (5) 包含層出土遺物・その他の遺物

#### I・III層出土遺物 (Fig.119)

図示したものはIII層出土の1096・1097、I層出土の1098である。1096は陶器壺の口縁部片で、にぶい橙色の胎土をもち、外面は灰褐色を呈する。口縁端部は拡張させる。1097は土師質土器小皿である。1098は肥前産の染付瓶で、二次被熱により釉は変質する。

#### 搅乱層出土遺物 (Fig.119)

この他、搅乱層からも近世・近代の遺物が出土している。

図示したものは1099～1104である。1099～1102は染付で、酸化コバルトによる文様を施しており、何れも近代の製品である。このうち1101は肥前産又は肥前系。1099・1100・1102は鹿児窯跡から類例の製品が出土しており、鹿児窯（高知市大津鹿児）産の可能性をもつものである。1099は端反形中碗で、外面は区間に草花文を描く。1100は丸形中碗で、外面に鶴と草花を描く。1101は平形の中碗で、外面に型紙刷りによる团扇、窓に草花、唐草による地理め、口縁部内面に型紙刷りによる宝珠繫ぎ文を施す。1102は角形の小皿。型押成形で、高台にチヂレ目が残る。内面に海浜風景文を描く。1103・1104は土師質土器の焜炉。1103は口縁部に团子状の受けを貼付し、体部上位に円孔を穿つ。1104は焜炉の内部施設とみられるもので、前方には底部から切り込む窓をもち、体部の数箇所に円孔を穿つ。外面には凹凸とチヂレ目が残る。底部には粘土紐を貼付している。

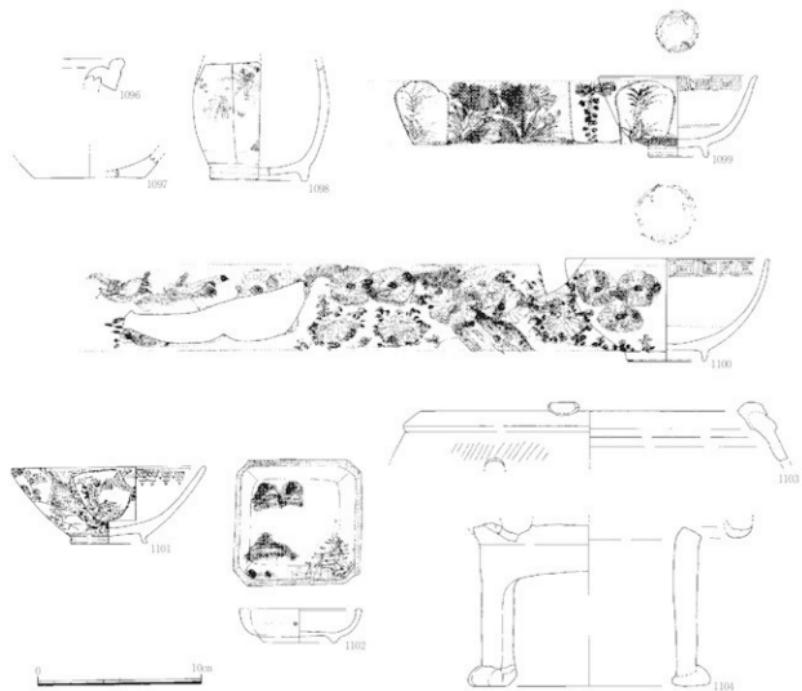


Fig.119 I・III層・搅乱層出土遺物実測図

Tab.43 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器種 形形	法量(cm)			色調	文様・施業・ 胎土・焼成	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・ 生産年代・器・ 使用痕跡)
				口径	器高	底径				
877	SK1 下層	白磁	小杯 桶形	—	—	31	—	外) 白 断) 白		肥前產
878	SK1	陶器	小盤 蓋入か 丸形	—	—	40	—	外) 黒褐7.5YR3/2 断) 黄灰2.5YH1/2	鉄釉	外底回転系切り、内面施釉。外底無釉。黒褐色の釉。
879	SK1 下層	土師質 土器	楕卵形	—	—	—	—	外) にふい場7.5YR5/4 断) にふい場7.5YR6/4	含む。	内面回転ナダ。 関西産 口縁部内面に煤。
882	SK2	陶器	中碗	—	—	40	—	外) 黒褐2.5Y3/1 断) にふい黄橙 10YR6/3	鉄釉	高台内兜状。外面上下位と高台 無釉。黒褐色の釉。
883	SK2	土師質 土器	小皿	9.4	—	—	—	にふい場7.5YR7/4		内外面回転ナダ。
884	SK2	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	—	—	灰白2.5Y8/2		文様の有無は不明。外面上半回 転ナダ、下半回転ケズリ後ナダ。 内面不定方向のナダ。
885	SK3 下層	土師質 土器	小皿	10.8	24	75	—	にふい場7.5YR7/4		内外面回転ナダ。外底回転系切 り。
886	SK3 下層	土師質 土器	小皿	12.0	22	88	—	場7.5YR7/6		内外面回転ナダ。外底回転系切 り。
887	SK3	土師質 土器	小皿	11.6	24	68	—	にふい場5YR6/4		内外面回転ナダ。外底回転系切 り。内底に墨代のロクロ口。
888	SK4 下層	磁器 染付	中碗	12.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 山水文か、二 重團鏡 (1164P) 二重團鏡	肥前 有田 1660～1690年代
889	SK4 染出面	磁器 染付	碗 又は 蓋物	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) コニャック印 骨による柄文、團 鏡	肥前 有田 1680～1690年代 二次被熱により 釉は変質。
890	SK4 F層	青磁 染付	中碗	—	—	42	—	外) 明褐灰10GY8/1 断) 白	外) 青磁釉 見込み 二重團鏡	肥前 有田 1670～1700年代 二次被熱により 釉は変質。
891	SK4 染出面	磁器 赤磁	中碗	—	—	50	—	外) 白 断) 白	外) 青・黃・綠・黑 の上絵付による文 様 輪郭は黒で描く。	肥前 有田 1660～1690年代 二次被熱により 釉は変質。
892	SK4 F層	青磁	皿か	—	—	54	—	外) オリーブ灰 2SGY6/1 断) 灰白1N8/	青磁釉	肥前 有田 17世紀前半 二次被熱により 釉は変質。
893	SK4 中層	青磁	鉢	—	—	82	—	外) 緩灰7.5GY6/1 断) 灰白1N8/	青磁釉	純ノ目四形高台。青磁釉は粗い 質入が入る。
894	SK4	磁器 染付	猪口	—	—	32	—	外) 白 断) 白	外) 不明	肥前產
895	SK4 下層	白磁	小杯	—	—	30	—	外) 白 断) 白	白磁釉	肥前產 17世紀後半 二次被熱により 釉は変質。
896	SK4 下層	磁器 染付	小皿	—	—	46	—	外) 白 断) 白	内) 草花文	豊作付に白色の粗糲が付着。
897	SK4 下層	青花	皿	142	31	70	—	外) 白 断) 白	内) 草花文 高台内) 團鏡	口縁部輪花形。 中国 景德鎮窯系 17世紀前半
898	SK4 中層	青花	皿	162	30	92	—	外) 白 断) 白	内) 植物	口縁部輪花形。 中国 景德鎮窯系 17世紀前半
899	SK4 染出面	青花	皿	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 梅文	口縁部輪花形。 中国 景德鎮窯系 17世紀前半
900	SK4 F層	青花	皿	174	29	100	—	外) 白 断) 白	内) 植物 高台内) 團鏡	中国 景德鎮窯系 17世紀前半
901	SK4 下層	磁器 染付	中皿	—	—	152	—	外) 白 断) 白	外) 团鏡 高台外) 二重團鏡 内) 不明、團鏡 高台内) 團鏡	肥前 有田 1670～1690年代 二次被熱により 釉は変質。内面 に燒土が溶着。
902	SK4 上層・ 中層	磁器 染付	皿 変形形	—	29	—	—	外) 白 断) 白	外) 花唐草文 内) 柳・岩・植物	肥前 有田 1650～1670年代 二次被熱により 釉は変質。

Tab.44 遺物觀察表（陶磁器・土器）

図版 番号	出土 地點	種類	器種 形態	法量 (cm)			色調	文様・施釉・ 胎土・焼成	特徴 (成形・調整・補調他)	備考 (生産地・ 年代・鉢・ 使用範囲)	
				口径	器高	底径					
903	SK4 下層	磁器 染付	直 変形	—	27	—	—	外) 白 内) 白	外) 花唐草文 内) 柳・岩・植物 高台内) 不明	赤切り織工。貼付高台。	肥前 有田 1650～1670年代 二次焼成により 釉は変質。
904	SK4 下層	磁器 染付	直 変形	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 花唐草文 内) 柳・岩・植物	赤切り織工。貼付高台。	肥前 有田 1650～1670年代 二次焼成により 釉は変質。
905	SK4 中層・ 下層	磁器 染付	直 変形	—	27	—	—	外) 白 内) 白	外) 花唐草文 内) 柳・植物	赤切り織工。貼付高台。	肥前 有田 1650～1670年代 二次焼成により 釉は変質。
906	SK4 検出面	磁器 染付	直	—	—	90	—	外) 白 内) 白	高台外) 二重圓錐 内) 植物・二重圓錐 高台内) 圓錐		肥前 有田 1660～1690年代 二次焼成により 釉は変質。内面 に燒土が溶着。
907	SK4 検出面	磁器 色絵	中直	—	—	120	—	外) 白 内) 白	内) 上繪付 (変色・ 剥離)による帶に 唐草・植物		肥前 有田 1650～1670年代 二次焼成により 釉は変質。
908	SK4	白磁か	直	—	—	—	—	外) 白 内) 白	内) 型による繩刻 文様 口縁	繩刻型打成形。	肥前 有田 1640～1660年代
909	SK4 下層・ 検出面	青花	直	—	—	80	—	外) 白 内) 白	内) 梅・草花 高台内) □明或□ □製・圓錐		中国 黑德鎮窯系 17世紀前半
910	SK4 下層	青花	直	—	—	80	—	外) 白 内) 白	内) 草花文 高台内) □□□ □製・圓錐		中国 黑德鎮窯系 17世紀前半
911	SK4 検出面	青花	直	—	—	50	—	外) 底白25Y8/2 内) 底白25Y8/2	外) 圓錐 内) 不明・圓錐	器筒底、斜傾は暗緑灰褐色に発色。 燒土は軟質。	中国 漢州窯系 16世紀末～17世 紀初期
912	SK4	磁器 染付	鉢 鐘反形	146	40	86	—	外) 白 内) 白	外) 草花文・圓錐 高台外) 二重圓錐 内) 亀甲文 高台内) 圓錐		肥前 有田 1670～1690年代 二次焼成により 釉は変質。外 面に燒土が溶着。
913	SK4 中層	磁器 染付	猪口	100	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 植物・二重圓錐		肥前 有田 17世紀後半 二次焼成により 釉は変質。
914	SK4 中層	青磁 染付	直	—	—	—	—	外) 明緑灰10GY7/1 内) 白 内) 白	外) 青磁釉 内) 草花文か		肥前 有田 17世紀末～18世 紀初期 二次焼成により 釉は変質。
915	SK4	白磁	小碗	—	—	38	—	外) 白 内) 白	白磁釉		肥前 有田 17世紀後半 二次焼成により 釉は変質。内面 に燒土が溶着。
916	SK4 下層	青磁	香炉か	108	—	—	—	外) 明緑灰7.5GY7/1 内) 白 内) 白	青磁釉	体部内面無釉。	肥前窯 17世紀後半 二次焼成により 釉は変質。
917	SK4 検出面	染付 又は 白磁	不明	9.0	—	—	—	外) 底白25Y8/1 内) 底白25Y8/1			肥前窯
918	SK4 下層・ SK8	磁器 染付	蓋物の 蓋	笠部伴 9.0	20	かえり 径 64	42	内) 白 内) 白	外) 四方彫・二重 圓錐 (挿み付) 外) 二重圓錐	内面施釉。かえり無釉。	肥前 有田 1660～1670年代
919	SK4 中層・ 検出面・ 下層	磁器 染付	蓋物の 蓋	笠部伴 13.6	—	かえり 径120	—	外) 白 内) 白	外) 丸に竹・草花	内面施釉。かえり無釉。	肥前窯 919・921挿いか
920	SK4 上層	磁器 染付	鉢又は 蓋物の 蓋	—	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 草花文か・二 重圓錐	内面施釉。かえり無釉。	肥前 有田 1660～1690年代 二次焼成により 釉は変質。
921	SK4 上層・ 中層	磁器 染付	蓋物	11.6	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 丸に竹	内面施釉。口縁部内面と端部無 釉。	肥前窯 17世紀後半 919・921挿いか

Tab.45 遺物觀察表（陶磁器・土器）

国版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量(cm)			色調	文様・施業・ 胎土・焼成	特徴(成形・調整・焼成他)	備考(生産地・ 生産年代・器・ 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
922	SK4 中層	磁器 壺付	鉢	11.6	—	9.4	—	外)白 断)白	外) 雪綿・紫・松	内面施釉。口縁部内面と端部無釉。	肥前 有田 1660~1680年代 三次被熱により 釉は変質。
923	SK4 下層	磁器 壺付	瓶	—	—	—	—	外)白 断)白	外) 純	頭部は断面八角形に面取る。頭部内面施釉。	肥前 有田 17世紀中葉
924	SK4 下層	磁器 壺付	瓶	—	—	—	—	外)白 断)白	外)竹文	口クロ成形の後、体外部面に削り出しによる面取り。内面無釉。	肥前 有田 1640~1660年代
925	SK4 下層	壺付 又は 白磁	壺又は 瓶	—	—	11.6	—	外)灰白NB/ 断)灰白NB/	—	内面クロ口。内面無釉。	肥前產 二次被熱により 釉は変質。
926	SK4	青磁	瓶類	—	—	—	—	外) 明緑灰10GY7/1 断)灰白NB/	青磁釉	内面と高台内面無釉。明緑灰色の釉。	肥前產 17世紀後半 二次被熱により 釉は変質。
927	SK4 下層	陶器	中碗 丸形	10.8	7.0	5.4	—	外)浅黃25Y7/3 断)灰白25Y8/2	灰釉・鉄錆	浅黄色を帯びる半透明の釉。高台内外面に鉄錆を施す。	肥前產 17世紀後半 二次被熱により 釉は変質。
928	SK4 中層	陶器	中碗 丸形	12.6	—	—	—	外)灰白25Y7/2 断)灰白25Y8/1	灰釉	灰白色を帯びる光沢の強い透明の釉。	肥前產 17世紀後半~18 世纪初頭
929	SK4	陶器	中碗 丸形	10.2	—	—	—	外)灰オリーブ5Y5/2 断)灰白5Y7/1	灰釉	唐津系赤釉陶器。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	肥前產 1590~1630年代
930	SK4 中層・ 下層	陶器	中碗 環反形	11.0	—	—	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)浅黃橙10YR8/4	灰釉	外面面口目。灰白色を帯びる半透明の釉。	京都又は京都系
931	SK4 下層	陶器	鉢	13.6	—	—	—	外)灰白5Y7/1・褐 10YR4/1 断)褐10YR4/1	白化粧土刷毛目 透明釉	内外面に白化粧土刷毛目の後、透明釉を施す。	肥前產 17世紀第4四半期
932	SK4 中層	陶器	小皿	—	—	6.2	—	外)変色し不明 断)灰白7Y5/1	灰釉	高台内側の施釉。高台の一部に施釉。内底に砂目。	肥前產 二次被熱により 釉は変質。
933	SK4 検出面	陶器	鉢	—	—	—	—	外)黄灰25Y4/1 断)赤褐4YR4/6	研毛目二彩手 白化粧土刷毛目 綠釉・灰釉	外面面口目。内面白化粧土刷毛目、回転によるハラ描きの模様を多条に残す。一部に綠釉の流し掛け。外面上手無釉。	肥前 武雄 17世紀後半
934	SK4 検出面	陶器	擂鉢	24.8	—	—	—	外)にぶい赤褐色 25YR4/3 断)にぶい赤褐色 25YR5/4	燒結め	口縁部内面に2条の凹溝。内面焼結ナラ。柄は不明。	備前
935	SK4 下層	陶器	壺	8.6	—	—	—	外)黑10YR2/1 断)灰白7Y5/1	鉄釉	肩部に梯状の耳を貼付。体部内面無釉。黒褐色の釉。	二次被熱により 釉は変質。
936	SK4 中層	陶器	壺	—	—	—	—	外)変色し不明 断)灰白25Y7/1	變色し不 明	肩部に梯状の耳を貼付。内面口目。内面無釉。	二次被熱により 釉は変質。
937	SK4 下層	陶器	水注	6.8	10.9	9.0	12.9	外)灰白5Y7/1 断)灰白5Y7/1	灰釉	内面施釉。受部無釉。高台施釉。灰白色を帯びる透明の釉。	尾山窯 二次被熱により 釉は変質。
938	SK4	陶器	甕	20.4	—	—	—	外)変色し不明 断)灰褐5YR5/2	不明	外面对凹ナラ。体部内面に凹凸。	二次被熱により 釉は変質。
939	SK4 下層	陶器	甕	32.0	—	—	—	外)褐焼10YR4/1 断)褐焼10YR5/1	燒結め	体部外面對凹ロクロ目。内面ロクロ目。	尾山窯 二次被熱により 釉は変質。
940	SK4	陶器	甕	—	—	—	—	外)明赤褐25YR3/3 断)灰黄25YR6/2	燒結め	外面对自然釉。	外面对自然釉。
941	SK4 下層	陶器	甕又は 甕	—	—	12.4	—	外)灰赤25YR4/2 断)灰5Y6/1	燒結め	外面对凹ナラ。内面に強いロクロ目。	外面对凹ナラ。
942	SK4 下層	陶器	甕又は 甕	—	—	11.0	—	外)黑褐75YR3/1 断)灰NS/	燒結め	外面对凹ナラ。内面に凸凹。	外面对凹ナラ。
943	SK4	陶器	大甕	—	—	—	—	外)褐焼75YR4/1 断)灰褐5YR5/2	燒結め	口縁部内面強いロクロ目。体部内面回転ナラ。口縁部内面と肩部外面对自然釉。	備前
944	SK4 中層	陶器	大甕	—	—	—	—	外)灰褐5YR4/2 断)明赤褐25YR5/6	燒結め	外面对凹ナラ。内面凹ナラ。内面ナラ。外対凹ナラ。	備前
945	SK4 下層	土師質 土器	小皿	12.0	—	—	—	灰白NB/	—	外面对凹ナラ。内面不定方向のナラ。外対凹ナラ。	尾山窯
946	SK4 中層	土師質 土器	小皿	—	—	5.6	—	橙7.5YR7-6	—	外面对凹ナラ。内面不定方向のナラ。	尾山窯

Tab.46 遺物觀察表(陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地點	種類	器種 形態	法量(cm)			色調	文様・施釉・ 胎土・焼成	特徴(成形・調整・施調他)	備考(生産地・ 年代・鉢・ 使用痕)
				口径	器高	底径				
947	SK4 下層	土師質 土器	小皿	10.2	1.9	6.6	—	澄5YR6-6		内外面回転ナデ。内底ロクロ目。 外底回転系切り。
948	SK4 上層・ 下層	土師質 土器	小皿	11.0	2.3	7.0	—	にぶい澄7.5YR7-4		全体内外面回転ナデ。内底不定方 向のナデ。外底回転系切り。 底部鈎ハラケズリ。
949	SK4 検出面	土師質 土器	小皿	10.2	2.5	6.0	—	にぶい黄澄10YR7-3		内外面回転ナデ。外底回転系切 り。
950	SK4	土師質 土器	小皿	10.8	2.5	6.6	—	にぶい赤褐5YR5-4		内外面回転ナデ。外底回転系切 り。底部鈎ハラケズリ。
954	SK5 下層	磁器 乗付	中碗	10.8	—	—	—	外)白 内)白	外)不明・二重圓 襯	肥前產
955	SK5 下層	白磁	小杯	—	—	3.4	—	外)白 内)白	白磁釉	肥前產
956	SK5 下層	陶器	五寸皿	14.2	—	—	—	外)黄灰25Y6-1 内)灰白25Y7-1	外)白土による花 文 灰釉	尾戸窯又は京都 系 二次被熱により 釉変質。
957	SK5	土師質 土器	小皿	12.3	2.2	7.6	—	にぶい黄澄10YR7-3		内外面回転ナデ。外底回転系切 り。底部鈎ハラケズリ。
958	SK7 下層	土師質 土器	小皿	10.0	—	—	—	にぶい澄7.5YR6-4		内外面回転ナデ。
959	SK7 下層	土師質 土器	小皿	11.0	2.1	7.4	—	外)褐灰10YR5-1 内)にぶい黄褐 10YR5-3		内外面回転ナデ。外底回転系切 り。
961	SK8	土師質 土器	碗	約7.6	—	—	—	にぶい澄7.5YR6-4		内外面回転ナデ。歪みあり。
962	SK8	土師質 土器	小皿	10.4	2.4	6.4	—	澄7.5YR7-6		内外面回転ナデ。外底回転系切 り。
963	SK8	土師質 土器	小皿	—	—	6.2	—	澄5YR6-6		外面半ナデ。内面四縁回転ナ デ。内底不定方向のナデ。外底 ナデ。
964	SK8	土師質 土器	中盤	18.0	—	—	—	にぶい澄7.5YR7-4		内外面回転ナデ。外底下位ハラ スリ。
965	SK10	土師質 土器	小皿	11.3	2.0	8.0	—	にぶい澄5YR6-4		内外面回転ナデ。外底回転系切 り。
966	SK10	土師質 土器	小皿	10.8	2.1	7.0	—	にぶい赤褐5YR5-4		内外面回転ナデ。外底回転系切 り。
967	SK10	土師質 土器	小皿	11.0	2.3	6.5	—	にぶい澄7.5YR6-4		内外面回転ナデ。内底ロクロ目。 外底回転系切り。
968	SK10	土師質 土器	小皿	10.2	2.3	6.1	—	にぶい澄7.5YR6-4		内外面回転ナデ。内底ロクロ目。 外底回転系切り。
969	SK10	土師質 土器	小皿	10.2	2.5	6.4	—	外)変色し不明 内)にぶい澄7.5YR6-4		内外面回転ナデ。内底ロクロ目。 外底回転系切り。
970	SK10	土師質 土器	小皿	11.8	1.9	8.8	—	明赤褐25YR5-6		内外面回転ナデ。内底ロクロ目。 外底回転系切り。
972	SK11	磁器 乗付	中碗 丸形	11.0	6.2	5.4	—	外)白 内)白	外)鹿・樹木 高台内「宣明年 製」	肥前產
973	SK11	磁器 乗付	中碗 丸形	11.8	7.0	4.4	—	外)明緑灰7.5GY8-1 内)灰白N8/	外)植物か・團襯 高台内兜巾状。高台内無地。	肥前產 1640~1650年代
974	SK11	磁器 乗付	小碗	7.8	—	—	—	外)灰N7/ 内)白	外)不明・團襯	肥前產
975	SK11	白磁	小杯	7.0	4.5	2.8	—	外)白 内)白	白磁釉 高台無地。	肥前產 1650~1680年代
976	SK11	磁器 乗付	小皿 丸形	13.4	3.1	5.8	—	外)灰白10Y7-1 内)白	内)柳・二重圓襯	肥前產 1650~1670年代
977	SK11	磁器 乗付	小皿 丸形	12.6	3.0	5.6	—	外)明オリーブ灰 25GY7-1 内)灰白N8/	内)山水文・蝶 高台無地。	肥前產 1650~1670年代
978	SK11	磁器 乗付	小皿 丸形	12.8	3.1	5.6	—	外)明緑灰10GY8-1 内)灰白N8/	内)山水文・蝶 高台内兜巾状。蓋付に粗砂が付 着。	肥前產 1630~1650年代
979	SK11	磁器 乗付	小皿	13.2	2.4	5.6	—	外)明緑灰7.5GY8-1 内)灰白N8/	内)草花文・二重 團襯 高台内兜巾状。蓋付に粗砂が付 着。	肥前產 1630~1650年代
980	SK11	磁器 乗付	小皿 丸形	13.3	2.5	6.0	—	外)明緑灰7.5GY8-1 内)灰白N8/	内)草花文 蓋付に粗砂が付着。	肥前產 1630~1650年代
981	SK11	磁器 乗付	小皿 丸形	13.0	3.2	6.8	—	外)明緑灰10GY8-1 内)灰白N8/	内)山水文・團襯	肥前產 1630~1650年代

Tab.47 遺物觀察表(陶磁器・土器)

回収番号	出土地点	種類	器種 器形	法量(cm)			色調	文様・他業、 胎土・焼成	特徴(成形・調整・釉調性)	備考(生産地・ 生産年代・品・ 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
982	SK11	磁器 染付	小瓶	—	—	—	—	外) 白 内) 白	内) 唐草文・植物 口縁外) 圓潤	肥前產	
983	SK11	磁器 染付	中瓶	—	—	84	—	外) 朱白SGYR/1 断) 朱白N8/	外) 不明 内) 茶文	透明釉は貫入が入る。	肥前產
984	SK11	青磁	小瓶	13.2	25	42	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 朱白N8/	青磁釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。高台無釉。	肥前 佐佐見 17世紀後半～18 世紀前半
985	SK11	青磁	小瓶	13.4	—	—	—	外) 明緑灰10GY7/1 断) 白	青磁釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	肥前 佐佐見 17世紀後半～18 世紀前半
986	SK11	白磁	五寸瓶 端反形	16.1	38	76	—	外) 白 内) 白	白磁釉	—	肥前產
987	SK11	白磁	鉢か	11.2	—	—	—	外) 灰白25GY8/1 断) 白	内) 型による陽刻 文様 口縁	陽刻型打成形。	肥前產
988	SK11	青磁	大瓶	25.6	—	—	—	外) 明緑灰10GY7/1 断) 朱白N8/	内) 型による陽刻 文様 口縁	—	肥前產
989	SK11	磁器 染付	大瓶	—	—	16.0	—	外) 圓潤 高台外) 二重圓潤 内) 不明 高台内) 圓潤	透明釉は貫入が入る。豊付に粗 糸が付着。	肥前產	
990	SK11	青花	小瓶	—	—	46	—	外) 朱白5Y8/1 断) 朱白25Y8/1	外) 唐草文・圓潤 内) 草花文・二重 圓潤	高台内無釉。呂頬は暗青灰色に 発色。透明釉は貫入が入る。	中国 淳安窯系 16世紀末～17世 紀初頭
991	SK11	陶器	中瓶 変形形	—	—	—	—	外) 朱白7.5Y7/1 断) 朱白5Y7/1	朱釉	体部中位を押任し瘦ませる。内 外面ロクロ目。高台無釉。朱白色 を帯びる透明の釉。	尾羽窯
992	SK11	陶器	不明	—	—	—	—	外) 朱白5Y7/1 断) 朱白5Y8/1	外) 兵頃と鉄筋によ る文様 朱釉	外面ロクロ目。内面施釉。朱白色 を帯びる透明の釉。	京都
993	SK11	陶器	小瓶 端反形	13.2	31	54	—	外) 朱白10Y8/1 断) 朱白N8/	内) 鉄筋・朱頬によ る文様 朱釉	高台無釉。朱白色を帯びる透明 の釉。	京都
994	SK11	陶器	火入 又は香炉	17.5	7.5	8.2	—	外) 圓潤7.5YR4/2 断) 圓潤7.5YR5/1	外) 白化粧土刷毛目後緑釉の流 し滴け。外面下部のみ鉄筋。内 面無釉。高台無釉。	肥前產 17世紀後半	
995	SK11	煮道具	匣	15.0	6.0	16.0	—	外) 黄褐蘭10YR5/2 断) 朱白7.5YR6/4 に付い橙7.5YR6/4	前部に長石の角 を含む。	内外面回転ナデ。外面に強いロク ロ目。外底系切り。	尾羽窯
996	SK11	土師質 土器	小瓶	—	—	47	—	に付い橙7.5YR6/4	—	内外面回転ナデ。外底回転系切 り。	
1024	SE1 2層	磁器 染付	中瓶 丸形	10.8	6.8	44	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 朱白N8/	外) 植物・岩・二 重圓潤 高台外) 二重圓潤	透明釉は貫入が入る。	肥前產 1650～1670年代
1025	SE1 1層	磁器 染付	中瓶 丸形	12.4	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 植文・二重圓潤	透明釉は貫入が入る。	肥前 有田 1650～1670年代
1026	SE1 1層	磁器 染付	中瓶 丸形	12.8	—	—	—	外) 白 内) 白	外) 千鳥・二重圓潤 内) 圓潤	透明釉は貫入が入る。	肥前 有田 1660～1670年代
1027	SE1 2層	磁器 染付	中瓶	—	—	42	—	外) 朱白10Y8/1 断) 朱白5Y8/1	外) 多重圓潤	—	肥前產 1650～1670年代
1028	SE1 2層	磁器 染付	小杯 端反形	7.4	5.0	3.6	—	外) 白 内) 白	外) 山水文・圓潤 高台外) 圓潤	豊付に白色の粗糸が付着。	肥前產 1650～1670年代
1029	SE1 1層	白磁 又は染付	中瓶 平形	23.0	—	—	—	外) 朱白N8/ 断) 朱白N8/	—	—	肥前產 17世紀中葉
1030	SE1 1層	磁器 染付	小瓶	—	—	—	8.4	外) 朱白5GY8/1 断) 朱白N8/	外) 略化した文 様・二重圓潤・圓 潤	外外面ロクロ目。内面無釉。朱頬 はオリーブ色に発色。	肥前產 1640～1660年代
1031	SE1 1層	陶器	中瓶	11.8	7.2	4.6	—	外) 朱白7.5Y7/1 断) 朱白2.5Y7/1	外) ヘラ彫り 朱釉	外面上位にヘラ彫りを施す。 下位に回転ケズリによる模様。高 台無釉。朱白色を帯びる半透明 の釉。	尾羽窯 二次被熱により 釉は変質。
1032	SE1 1層	陶器	中瓶 丸形	11.2	6.7	5.5	—	外) 浅黄25Y7/3 断) 淡黄25Y8/3	朱釉	京焼風陶器。文様は不明。外 面ロクロ目。高台無釉。淡黄色を帯 びる半透明の釉。	肥前產 17世紀後半 小判枠内「家」鉢 印あり。
1033	SE1 1層	陶器	中瓶	—	—	—	—	外) 兵頃による注 邊施文 朱釉	外) 朱白色を帯びる透明の釉。	尾羽窯	

Tab.48 遺物觀察表（陶磁器・土器）

國版 番号	出土 地點	種類	器種 形	法量 (cm)			色調	文様・ 胎・焼成	特徴 (成形・調整・焼成他)	備考 (生産地・ 生産年代・鉱・ 使用鉛種)	
				口径	器高	底径					
1034	SE1 1層	陶器	擂鉢	—	—	10.8	—	外: 褐灰7.5YR4/1 内: 褐灰7.5YR4/1	燒結め	外底回転ナダ。内面擴目。外底 回転系切り。	尾山里 備前
1035	SE1 1層	土師質 土器	白土器 小皿	10.8	24	55	—	灰白2.5YR8/2	無文	外面上半削輪ナダ。下半回転ケス り後ナダ。内面周縁削輪ナダ。内 底ナダ。外底回転ケスり後ナダ。	尾山里 口緑部内外面に タール状の斑。
1036	SE1 1層	土師質 土器	楕又は 皿	—	—	66	—	橙7.5YR6/4		外外面回転ナダ。内底ロクロ目。 外底回転系切り。	
1037	SE1 1層	土師質 土器	培塔	28.8	—	—	—	外: 褐黃褐10YR6/2 内: 褐黃褐10YR6/2		口緑部外底回転ナダ。内面前削 ナダ。外底盤ナダ。外底に凹 凸。	開西系 外前に強い偏 向性に無け。
1048	瓦礫1	磁器 染付	小碗 丸形	9.0	43	32	—	外: 褐2.5GY8/1 内: 褐白N8/	外) コンニャク印 判による變文・團 襯(高台外) 二重團襯	外殻は暗青灰色に発色。蓋付に 白色の粗糲が残る。	肥前產 17世紀末～18世 紀前半
1049	JL.1	磁器 染付	小杯 丸形	7.2	36	28	—	外: 褐5GY8/1 内: 褐白N8/	外) 花文		肥前產
1050	JL.1	磁器 染付	五寸皿	13.8	40	83	—	外: 灰白10Y8/1 内: 褐白N8/	外) 意頭蓮葉唐 草文(高台外) 二重團襯 (内) 草花文(二重 團襯)	姫の目円形高台。透明釉は貴人 が入る。	肥前產 18世紀後半以降
1051	瓦礫1	磁器 染付	五寸皿 丸形	14.3	26	80	—	外: 褐2.5GY8/1 内: 褐白N8/	内) 花唐草文・コ ンニャク印判によ る五瓣化	見込み丸ノ目輪剥ぎ。	肥前產 18世紀
1052	JL.1	磁器 染付	大皿	—	—	18.0	—	外) 白 内) 断白	内) 横山水文 (高台外) 二重團襯 (高台内) 團襯	透明釉は貴人が入る。	肥前產
1053	瓦礫1	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.0	28	—	—	摘み浮 58	外) 舟・人物 内) 重團襯・團 襯・不明	舟束形綻の蓋。	肥前產 1780～1860年代
1054	瓦礫1	青磁	香炉	9.0	6.5	7.6	—	外) オリーブ10Y6/2 内) 褐白10Y8/1	外) 青磁釉	三足を船足。内外面と外底無 釉中央のみ無釉。	肥前產
1055	瓦礫1	白磁	紅里 菊花形	4.7	17	1.6	—	外) 白 内) 断白	外) 型による菊瓣 外) 菊瓣形。	外面ナデレ目。外面無 釉。	肥前產 1780～1860年代
1056	瓦礫1	磁器 染付	仏瓶器	7.0	5.0	38	—	外) 褐5Y8/1 内) 断白	外) 隆陽文	外底無釉。透明釉は焼成不良で 白濁。	肥前產 1690～1780年代
1057	瓦礫1	磁器 染付	小瓶	—	—	4.0	6.0	外) 褐2.5GY8/1 内) 断白	外) 岩・植物・團 襯(高台外) 團襯	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前產
1058	瓦礫1	磁器 染付	髮油壺	2.4	8.3	42	8.8	外) 明緑灰7.5GY8/1 内) 褐白N8/	外) 梅文	内外面ロクロ目。内面無釉。	肥前產
1059	瓦礫1	陶器	中碗 環反形	10.4	6.5	5.0	—	外) 褐2.5Y8/1 内) 褐灰2.5Y8/1	外) 鉄錆による美 容手 内) 鉄錆による列 点文 口輪・底輪	高台施釉。灰白色を帯びる透明 の釉。	
1060	瓦礫1	陶器	小碗 半球形	—	—	2.6	—	外) 褐5Y7/1 内) 褐5Y7/1	釉	文様の有無は不明。高台無釉。 灰白色を帯びる半透明の釉。	京都・信楽系
1061	瓦礫1	陶器	灯明 受皿	8.0	13	—	—	外) に赤褐色 5.2 内) 明赤褐色2.5YR5/6	釉	外底回転ケズリ。外面無釉。	尾山里
1062	瓦礫1	陶器	不明	—	—	—	—	外) 褐5Y6/1 内) 褐5Y7/1	釉	手捏ね成形。内面施釉。光沢の 強い透明の釉。	尾山里
1063	瓦礫1	土師質 土器	白土器 小皿	11.2	15	8.4	—	灰白2.5Y8/1	内) 薙削による松 竹梅鶴文	内底削押しによる隆削文様。 内面團襯と外底ヨコナダ。外底直綫 方向のナダ。	尾山里
1064	JL.1	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	—	—	灰白2.5Y8/1	内) 薙削による松 竹梅鶴文	内底削押しによる隆削文様。 内面團襯と外底ヨコナダ。外底直綫 方向のナダ。	尾山里
1065	SX1	土師質 土器	小皿	11.0	20	7.2	—	に赤い塵 5.0 内) 褐5Y8/4		内外面回転ナダ。内底ロクロ目。 二次焼成より 硬化。	
1066	JL.1	土師質 土器	蓋	笠部径 3.2	18	29	—	外) に赤い塵 5.0 内) 褐5Y8/6	外) 剥削による菊 花透明の低火度釉	外表面による菊瓣文様。内面に 凹凸。	
1067	瓦礫1	土師質 土器	培塔	26.0	—	—	—	外) 褐黃褐10YR5/2 内) に赤い塵 10YR7/3		外底回転ナダ。外底に凹凸。内 面回転ナダ。	開西系
1068	JL.1	土師質 土器	短脚 丸形	22.6	—	—	—	外) 褐黃褐10YR5/2 内) に赤い塵 7.5YR6/4	胎土中に金雲母を 含む。	内面上側に手捏ねによる突起を 貼付。外面ナデ・ミガキ。内面回 転ナダ。	開西系

Tab.49 遺物觀察表(陶磁器・土器)

団号 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量(cm)			色調	文様・施業、 胎土・焼成	特徴(成形・ 調整・釉・ 焼成)	備考(生産地・ 生産年代・器・ 使用痕跡)	
				口径	器高	底径					
1081	瓦瀬2 下層	磁器 染付	合子	38	21	36	—	外) 白 断) 白	外) 宝珠繫ぎ文	内面施釉。口縁部内面と底部無釉。肥前産 外底に墨書き。	
1082	瓦瀬2	陶器	中碗 丸形	10.0	7.1	4.2	—	外) 黄褐7.5YR4/2 断) 黄5Y6/1	灰釉	高台内兜巾状。外底下位無釉。 釉は焼成不良で灰褐色に発色。 肥前産 1590~1630年代	
1083	瓦瀬2 床	陶器	中國 丸形	9.2	6.2	4.6	—	外) 黄褐2.5Y7/2 断) 黄白2.5Y8/2	灰釉	高台内溝底の瘤痕。高台無釉。 灰白色を帯びる半透明の釉。 尾口窓	
1084	瓦瀬2 下層	陶器	中碗 丸形	10.0	—	—	—	外) 黄白15Y7/1 断) 黄15Y7/1	灰釉	外面部や小さなクロロ目。灰白色を 帯びる半透明の釉。 尾口窓	
1085	瓦瀬2 下層	陶器	土師皿 笠部付	80	24	6.0	—	摘み付 外) 黄褐7.5YR3/2 断) 黄2.5Y6/1	灰釉	釉頭を貼付。内面回転ケズリ。外 面無釉。黒褐色の釉。	
1086	瓦瀬2 下層	土師質 土器	小皿	10.6	2.2	7.4	—	橙7.5YR7/6		外面部回転ナデ。内底口クロ目。 外底回転系切り。	
1087	瓦瀬2	土師質 土器	人形 動物	—	—	—	—	浅黄褐10YR8/3		型造成形前後貼り合わせ。中空。 内面ユビオサエ・ユビナデ。	
1090	瓦瀬3	磁器 染付	碗蓋	笠部付 11.0	3.1	—	摘み付 5.0	外) 白 断) 白	外) 逆井文・草花文 柄のみ外) 二重圓錐 内) 四方摩・二重 圓錐・寺	望月岡の蓋。 肥前産 18世紀後半	
1091	瓦瀬3	磁器 染付	中碗 広東形	12.4	—	—	—	外) 明緑灰10GY8/1 断) 黄白N8/	外) 山水文・團錐 (口内) 二重圓錐 見込み) 團錐		肥前産 1780~1860年代
1092	瓦瀬3	色絵染 付	中碗	—	—	4.4	—	外) 白 断) 白	外) 乳頭による旁 化・丸文、赤の上 絵白による花文 (高台外) 乳頭によ る圓錐、赤の上絵 白による四方摩		肥前産
1093	瓦瀬3	陶器	鍋	19.8	—	—	—	外) 黄7.5YR4/3 断) にぶい黄褐 10YR7/3	灰釉	内面施釉。周色の釉。	
1094	瓦瀬3	陶器	擂鉢	32.4	13.6	15.2	—	外) 明赤25YR5/6 断) 明赤25YR5/6	焼締め	口縁部外面凹窪、内面、横目後 回転ナデ。体部外面回転ケズリ、 内底横目。外底に凹凸。	埋產
1095	瓦瀬4	磁器 染付	碗蓋	笠部付 9.1	—	—	—	外) 黄白10Y8/1 断) 白	外) 唐手文 内) 二重圓錐・圓 錐・変形字	広東形の蓋。 肥前産 1780~1860年代	
1096	112 包含層 Ⅲ層	陶器	壺	—	—	—	—	外) 黄褐7.5YR4/2 断) にぶい黄褐 7.5YR7/3	焼締めか	口縁端部を上下に扒張させる。 口縁部内面に自然釉が掛る。	
1097	包含層 Ⅲ層	土師質 土器	小皿	—	—	6.6	—	にぶい黄褐10YR6/3		摩耗し調整不明。	
1098	Ⅱ区 包含層 Ⅲ層	磁器 染付	瓶	—	—	6.0	8.2	外) 明緑灰10GY8/1 断) 白	外) 松・梅・圓錐 (高台外) 二重圓錐	体部外間に面取り。内面無釉。 肥前産 二次被熱により 釉は柔質。	
1099	複乱1	磁器 染付	中碗 端反形	9.6	5.0	3.7	—	外) 白 断) 白	外) 区画間に草花 文 (口縁内) 菱文帶 見込み) 暗化した 円形文・二重圓錐	酸化コバルトによる文様。 施業黒か 近代	
1100	複乱1	磁器 染付	中碗 丸形	12.5	6.3	4.8	—	外) 白 断) 白	外) 菊・草花 (口内) 宝珠文 見込み) 暗化した 円形文・二重圓錐	酸化コバルトによる文様。 施業黒か 近代	
1101	表揮	磁器 染付	中碗 平形	11.9	4.7	4.6	—	外) 白 断) 白	外) 紙刷りによ る斑駁・意に草花 ・唐草 (口縁内) 二重圓 錐・紙刷りによ る宝珠繫ぎ	酸化コバルトによる文様。 施業黒か 近代	
1102	複乱1 下層	磁器 染付	小皿 角形	7.6	2.1	4.4	—	外) 白 断) 白	外) 不明 内) 海浜風景文	型紙刷りによる 型押成形。高台にチヂ目。酸化 コバルトによる文様。 施業黒か 近代	
1103	複乱1	土師質 土器	擂鉢	20.3	—	—	—	外) 黄白10YR8/1 断) にぶい黄褐 7.5YR7/4	内外面に白土を施 す。 口縁部上位に円孔。体部外面回転 ナデ後斜方向のハケ。内面回転ナ デ。	口縁部に团子状の受けを貼付。 体部前方に丸孔。体部外面に 円孔あり。外面上に凸とチヂ目。 内面ナデ。底部に粘土紐を 貼付。	
1104	複乱1 下層	土師質 土器	擂鉢	—	—	14.0	—	外) にぶい黄褐 10YR5/3 断) にぶい黄褐 10YR5/3	胎土中に金芸毛を 含む。	窓枠の内部施設か。体部前方に 丸孔から切り込む事。施設箇所に 円孔あり。外面上に凸とチヂ目。 内面ナデ。底部に粘土紐を 貼付。	開西産

Tab.50 遺物観察表(石製品・金属製品)

国版 番号	出土 地点	種類	器種	法量(cm)			重量(g)	特徴
				全長	全厚	全幅		
963	SK4 下層	石製品	石臼	復元径 38.6	—	—	[450]	砂岩製。
971	SK10	鉄製品	釘	43	—	—	[4.3]	頭部をもつ。断面四角形。尖端部は使用により曲がる。
1038	SE1 2層	金属製品	釘針	45	0.2	0.2	1.3	先端部は尖らせる。
1069	瓦罐1	鉄製品	釘	[81]	0.4	0.4	[5.5]	頭部をもつ。断面四角形。
1070	瓦罐1	石製品	不明	[75]	1.7	5.8	[104.1]	陰刻の花文、円孔数穴。欠損し砾石に転用。
1071	瓦罐1	石製品	不明	径 36.6	—	—	[322.0]	外面に丁寧なケズリ。

※法量・重量とも〔 〕は残存分。金属製品で諸がみられるものも〔 〕表記した。

Tab.51 遺物観察表(瓦)

国版 番号	出土 地点	種類	法量(cm)			色調	特徴	備考(生産地・銘)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
880	SK1	軒瓦 又は 平瓦	—	—	15	外) 黄N4/ 断) 黄N5/		高知県香南市徳王子 「とく」銘印あり。
881	SK1	丸瓦	—	—	19	外) 褐灰 N3/ 断) 褐E N7/	内面に压痕。	「ウエ」銘印あり。
951	SK4	軒丸瓦	178	120	—	外) 黄N4/ 断) 黄E N7/	三巴文。	
952	SK4 下層	軒丸瓦	172	112	—	外) 黄N4/ 断) 黄E N7/	三巴文。珠数16個。	
960	SK5 下層	軒丸瓦	168	118	—	外) 黄灰 25Y6/1 断) 黄灰 25Y6/1	三巴文か。珠数は不明。炎素吸着 なし。	
1073	瓦罐1	軒瓦 又は 軒平瓦	—	—	20	外) 褐灰 N3/ 断) 褐白 N7/	中心彫りは不明。両側に均整唐草 文。	
1074	瓦罐1	軒瓦 又は 軒平瓦	—	—	—	外) 黄 N4/ 断) 黄 N4/	中心彫りは丁字。両側に均整唐草 文。	
1075	瓦罐1	軒瓦	—	—	16	外) 褐灰 N3/ 断) 黄N5/		高知県安芸市 「御瓦屋」銘印あり。
1076	瓦罐1	軒瓦 又は 平瓦	—	—	15	外) 褐灰 N3/ 断) 黄 N6/		高知県安芸市 「御瓦口」銘印あり。
1077	瓦罐1	軒瓦 又は 平瓦	—	—	18	外) 褐灰 N3/ 断) 黄白 25Y7/1		高知県安芸市 「アキ口」銘印あり。
1078	瓦罐1	軒瓦 又は 平瓦	—	—	15	外) 褐灰 N3/ 断) 黄灰 25Y6/1		高知県安芸市 「アキ口」銘印あり。
1079	瓦罐1	丸瓦	—	—	17	外) 褐灰 N3/ 断) 黄灰 25Y6/1	内面に布目。	高知県香南市夜須町 「ヤメ」銘印あり。
1080	瓦罐1	丸瓦	—	—	20	外) 褐灰 N3/ 断) 黄白 25Y7/1		高知県安芸市 「アキ口」銘印あり。
1088	瓦罐2	軒瓦 又は 軒平瓦	—	—	22	外) 黄 N5/ 断) 黄白 N7/	中心彫りは不明。両側に均整唐草 文。	
1089	瓦罐2	軒瓦 又は 平瓦	—	—	18	外) 黄 N5/ 断) 黄白 N7/		高知県安芸市 「アキ口」銘印あり。

Tab.52 遺物觀察表(木製品)

団版 番号	出土 地點	器種	法量(cm)			特徴・使用痕跡
			全長	全厚	全幅	
997	SK11	漆製品 椀	—	—	—	体部内外面に赤漆、高台内に黒漆。高台内に赤漆による文字文。
998	SK11	漆製品 椀	—	—	—	内外面赤漆。高台内に黒漆による文字文。
999	SK11	下駄	[200]	5.5	8.7	鋤り貫き下駄。平面形は長方形。歯の厚み3.0cm。鼻緒の穴径10cm。歯の接地面は使用によって摩耗する。
1000	SE1 井戸側 上段 No.22	井戸櫛板	[878]	上径20 中径24 下端20	154	内面下駄を丸彫り状の工具で削り出す。内面の全体と外側の両側に削りを施す。外側の下駄と上駄に斜く削りを施し、縦断面の上下を薄くする。外側中央に斜方向の加工痕が残る。側面は下駄の左右に径5mmの円形の釘穴があり、木釘が残存する。外側の上駄と下駄にタガの圧痕あり。
1001	SE1 井戸側 上段 No.9	井戸櫛板	[960]	上径1.8 中径2.5 下端20	9.4	内面の上駄と下駄を丸彫り状の工具で削り出す。外側の両側に削り、外側中央に斜方向の加工痕が残る。側面は下駄の左右に径5mmの円形の釘穴があり、木釘が残存する。外側の上駄と下駄にタガの圧痕あり。
1002	SE1 井戸側 上段 No.10	井戸櫛板	[1030]	上径1.8 中径2.4 下端2.8	143	内面下駄を丸彫り状の工具で削り出す。内面の上駄と中央にも削りを施したとみられるが、削りの痕跡は見えない。外側の両側に削り、外側中央に斜方向の加工痕が残る。左右側面の下駄に径5mmの円形の釘穴があり、木釘が残存する。外側の上駄と下駄にタガの圧痕あり。
1003	SE1 井戸側 上段 No.11	井戸櫛板	[977]	上径2.0 中径2.5 下端20	158	内面下駄を丸彫り状の工具で削り出す。内面の上駄と中央にも削りを施したとみられるが、削りの痕跡は見えない。外側の両側に削り、外側中央に斜方向の加工痕が残る。左右側面の下駄に径5mmの円形の釘穴があり、木釘が残存する。外側の上駄と下駄にタガの圧痕あり。
1004	SE1 井戸側 上段 No.12	井戸櫛板	[957]	上径2.0 中径2.5 下端1.9	85	内面の上駄と下駄を丸彫り状の工具で削り出す。内面の両側に削り。内面の全体に丸彫り状の工具による削りを施す。側面の下駄の左右に径5mmの円形の釘穴があり、木釘が残存する。外側の上駄と下駄にタガの圧痕あり。
1005	SE1 井戸側 上段 No.13	井戸櫛板	[911]	上径1.9 中径2.1 下端20	47	内面の中央に削りを施し、断面を曲線的に加工するが、加工痕は認めにくい。側面の上駄の左右に径4mmの円形の釘穴があり、木釘が残存する。外側の上駄と下駄にタガの圧痕あり。
1006	SE1 井戸側 上段 No.14	井戸櫛板	[940]	上径1.9 中径2.1 下端1.6	9.0	内面下駄を丸彫り状の工具で削り出す。外側面の上駄と下駄にも削りを薄く施す。上下をやや斜く、断面を曲線的に削っているが、加工痕は認めにくい。側面は上駄左側と下駄右側に斜めの圧痕あり。
1007	SE1 井戸側 上段 No.15	井戸櫛板	[918]	上径1.8 中径2.2 下端20	113	内面下駄を丸彫り状の工具で削り出す。上駄付近もやや薄く加工するが加工痕は認めにくい。外側の両側と内面の中央付近に削りを施す。側面は上駄・下駄とも左右に径5mmの円形の釘穴があり、木釘が残存する。外側の上駄と下駄にタガの圧痕あり。
1008	SE1 井戸側 上段 No.16	井戸櫛板	[887]	上径1.8 中径2.0 下端1.7	7.7	内面下駄を丸彫り状の工具で削り出す。内面の中央付近に丸彫り状の工具で削りを施す。側面の下駄を薄く加工するが、外側の加工痕は認めにくい。側面は上駄右側に径5mmの円形の釘穴があり、木釘が残存する。外側の上駄と下駄にタガの圧痕あり。
1009	SE1 井戸側 上段 No.17	井戸櫛板	[888]	上径2.0 中径2.5 下端1.5	106	内面下駄を丸彫り状の工具で削り出す。内面の全体に丸彫り状の工具で削りを施す。外側の上駄と下駄にも削りを施し、縦断面の上下を薄くする。外側中央に斜方向の加工痕が残る。側面は下駄の左右に径5mmの円形の釘穴があり、木釘が残存する。外側の上駄と下駄にタガの圧痕あり。
1010	SE1 井戸側 下段 No.1	井戸櫛板	1283	上端1.0 中径2.5 下端2.8	106	外側上駄を粗く削り出す。外側の両側に縱方向の削り、内面の全面にも丸彫り状の工具による削りを施す。外側中央に斜方向の加工痕が残る。側面の上駄と下駄の左右に7×3mm~9×3mmの長方形の釘穴があり、木釘が残存する。外側の3箇所にタガの圧痕あり。
1011	SE1 井戸側 下段 No.2	井戸櫛板	1288	上端1.2 中径2.6 下端2.5	106	外側上駄を粗く削り出す。外側の両側に縱方向の削り、内面の全面にも丸彫り状の工具による削りを施す。外側中央に斜方向の加工痕が一部残る。側面の上駄と下駄の左右に7×3mm~9×3mmの長方形の釘穴があり、木釘が残存する。外側の3箇所にタガの圧痕あり。
1012	SE1 井戸側 下段 No.3	井戸櫛板	1285	上端1.1 中径2.5 下端2.4	131	外側上駄を粗く削り出す。外側の両側に縱方向の削り、内面の全面にも丸彫り状の工具による削りを施す。外側中央に斜方向の加工痕が残る。側面の上駄と下駄の左右に7×3mm~9×3mmの長方形の釘穴があり、木釘が残存する。外側の3箇所にタガの圧痕あり。
1013	SE1 上段櫛板 No.3左	木釘	[42]	0.3	0.3	竹管を縦筋に沿って細く切り、先端は尖らせる。端部は表面と裏面の双方から斜めに削りを施す。片側は欠損する。
1014	SE1 上段櫛板 No.5左	木釘	[47]	0.3	0.3	竹管を縦筋に沿って細く切り、先端は尖らせる。端部は表面から斜めに削りを施す。片側は欠損する。
1015	SE1 上段櫛板 No.7左	木釘	[51]	0.3	0.3	竹管を縦筋に沿って細く切り、先端は尖らせる。端部は表面から斜めに削りを施す。片側は欠損する。
1016	SE1 上段櫛板 No.20左	木釘	67	0.3	0.4	竹管を縦筋に沿って細く切り、先端は尖らせる。端部は表面から斜めに削りを施す。

Tab.53 遺物観察表(木製品)

国版 番号	出土 地点	器種	法量(cm)			特徴・使用痕跡
			全長	全厚	全幅	
1017	SE1 井戸側 下段 No.7	井戸側板	1285	上端13 中位27 下端26	10.4	外面上位を粗く削り出す。外面の全面に削り、内面の全面にも丸彫り状の工具による削りを施す。外面中央に斜方向の加工痕が一部残る。側面の中位と下位の左右に7×2mm～9×3mmの長方形の釘穴があり、木釘が残存する。外面の3箇所にタガの圧痕あり。
1018	SE1 井戸側 下段 No.8	井戸側板	1287	上端15 中位27 下端27	11.0	外面上位を粗く削り出す。外面の両側に縦方向の削り、内面の全面にも丸彫り状の工具による削りを施す。側面の中位と下位の左右に7×3mm～10×3mmの長方形の釘穴があり、木釘が残存する。外面の3箇所にタガの圧痕あり。
1019	SE1 井戸側 下段 No.10	井戸側板	1286	上端12 中位27 下端26	13.2	外面上位を粗く削り出す。外面の両側に縦方向の削り、内面の全面にも丸彫り状の工具による削りを施す。側面の中位と下位の左右に4×3mm～8×3mmの長方形の釘穴があり、木釘が残存する。外面の3箇所にタガの圧痕あり。
1020	SE1 下段側板 No.1	木釘	[26]	0.2	0.5	竹管を根筋に沿って細く切り、先端は尖らせる。端部は表面から斜めに削りを施す。片側は欠損する。
1021	SE1 下段側板 No.2	木釘	[27]	0.2	0.5	竹管を根筋に沿って細く切り、先端は尖らせる。端部は表面から斜めに削りを施す。片側は欠損する。
1022	SE1 下段側板 No.10	木釘	[31]	0.2	0.4	竹管を根筋に沿って細く切り、先端は尖らせる。端部は表面から斜めに削りを施す。片側は欠損する。
1023	SE1 下段側板 No.22	木釘	[34]	0.2	0.7	竹管を根筋に沿って細く切り、先端は尖らせる。端部は表面から斜めに削りを施す。片側は欠損する。
1039	SE1 2号	棒又は 圓柱か	17.8	1.1	[78]	曲物又は棒状製品の底か、複数の板を組み合わせる。板の接合面に4箇所の釘穴あり。
1040	SE1 1号	不明	[85]	0.8	[11.0]	不明本製品の部材。曲線的に削り貫きを施す。
1041	SE1 1号	著	[25.8]	0.5	0.8	側面に面取りを施す。断面不整形。
1042	SE1 1号	著	[18.9]	0.6	0.8	側面に面取りを施す。断面不整形。先端部は空まる。
1043	SE1 1号	著	[18.0]	0.6	0.6	側面に面取りを施す。断面円形。先端部は空まる。
1044	SE1 1号	栓か	146	29	3.0	栓の栓か。断面円形。両端部とも使用痕なし。
1045	SE1 2号	板状製品	[9.8]	0.3	2.1	用途不明の板状製品。片側は斜め方向にカットする。断面四角形の釘穴あり。
1046	SE1 2号	板状製品	11.5	0.2	2.6	用途不明の板状製品。
1047	SE1 2号	板状製品	[15.8]	0.9	2.4	用途不明の板状製品。
1072	瓦頭1	板状製品	58.3	2.6	[35.0]	中央に22.5×16.0cmの長方形の窓をもつ。3枚の板を組み合せ、板の接合面に数箇所の釘穴あり。栓の周囲に複数の釘穴が穿たれ、鉄釘が残存する。

※〔 〕は残存分。井戸側板のNoは検出時の側板の配置順(右回り)を示している。

## [遺物観察表凡例]

- 色調欄の略号「外」は外面、「内」は内面、「断」は断面を表している。
- 色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」による。
- 以下の遺物については大橋康二氏よりご教示を賜った。(888～893・895～910・912～916・918・920～924・926・927・931・933・1024～1030)

## 第V章 考察

### 第1節 絵図、文献にみる高知城跡内堀跡西側地区の性格と変遷

#### はじめに

当報告遺跡は西内堀の外縁にあたり、江戸前期には侍屋敷、その後は堀端の縁地と広小路へと転じ、幕末頃には馬場が設けられるなど、近世を通じて土地利用や景観の変遷がみられている。

平成17・21年度に発掘調査が行われた地点は、西内堀以西の外縁部南半にあたっており、南部では平成19年度にも試掘調査<sup>(注1)</sup>が行われている。また周辺では、これまでに高知城伝下屋敷跡<sup>(注2)</sup>、西弘小路遺跡<sup>(注3)</sup>の発掘調査が実施されており、西内堀以西の近世遺跡の実態が明らかになりつつある。

今回の調査では、近世前期から後期にかけての遺構と豊富な遺物が検出されており、高知城周辺の土地利用のあり方を知る貴重な情報が得られている。これらの検出遺構と遺物の性格を知る手掛かりとして、ここではまず、関連の絵図、文献の情報を読み解きながら、その歴史的背景と変遷をみていくこととする。

#### 1. 17世紀の景観と居住者

##### 居住者と変遷

高知城西内堀の外縁一帯には、西大門から西に向かう西大門立町と、内堀に沿って南北に伸びる横町<sup>(注4)</sup>があり、侍屋敷が並んでいた。

寛永5年(1628)から万治2年(1659)間の作成と推定される『侍町小割帳』<sup>(注5)</sup>によると、内堀以西では、「西一番北南横町東川北のはしむ」とあり、横町東側の北の端から「岡村平次」「安藤宇右衛門」「沼津玄達」の武士名が記されている。(史料1) 同史料では「岡村平次」(三拾武間)、「安藤宇右衛門」(三拾毫間)、「沼津玄達」(武拾六間五尺)と屋敷地の間口が示されており、各間口の比を現在(近代以降)の地図上に復元してみると、平成17年度調査区は「安藤宇右衛門」、平成21年度調査区は「沼津玄達」の屋敷が対応すると推定できる。

また同史料では、内堀の南側を東西に延びる「御屋敷筋」の西端に「御屋敷 下やしき」の記載があり、前後の屋敷との位置関係からみて、内堀の南西角外側の一角、すなわち「沼津玄達」屋敷の南側が、「御屋敷 下やしき」にあたると考えられる。(注6)

同屋敷については、「皆山集」に「下屋敷 詔謀記事云 加賀爪甲斐守殿御預ニ成御屋敷門の西今  
の廣小路杉垣の辺ニ御屋敷ありしと也此屋敷甲斐守殿居住の為ニ立たるニあらず先年より御下屋敷  
と号し御末子様方御住被成ため也其時明キ居たる故甲斐守殿を御差置被成たると也元禄戊寅の大火  
事ニ焼失し跡廣小路に成けると云 韓川筆話云御屋敷の西杉のある所もと山内式部様の御邸なりし  
におかれたり云々」があり、当初は藩主の家族の屋敷、その後、土佐藩預かりの身となった甲斐守  
の居住に利用されたという藩関連の屋敷<sup>(注7)</sup>が、沼津氏屋敷の南側に存在していたことが窺われる。

次に、寛文9年(1669)とされる「寛文己酉高知絵図」<sup>(注8)</sup>(Fig.121 - 図1)では、横町の東側に北

から「桑山伊左衛門」、その隣地は空白、南端に「福岡内丞」の屋敷がみえ、平成17年度調査区は居住者無し又は不明、平成21年度調査区は「福岡内丞」の屋敷が対応すると考えられる。また、内堀南西角外側の一角には、堀を伴った屋敷の絵が描かれているが、本絵図では城内及び藩関連の施設を絵画的に描き、侍屋敷は区画と居住者名のみで表現するなどの描き分けがみられることから、この屋敷は藩に関わる施設、すなわち『侍町小割帳』に記された「御屋敷 下やしき」と同一のものと推察される。

統いて、『皆山集』に収められた「元禄自十年至十二年間之図」<sup>(註9)</sup>(1697～1699)(Fig.121～図2)では、平成17年度調査区は「安藤藤十郎」屋敷、平成21年度調査区は「長屋彦太夫」屋敷となっている。また、堀の南西角外側の一角は「御下屋敷」と記されている。

#### 居住者の性格

この様に、17世紀中葉から17世紀末までは、平成17年度調査区が該当する北側の区画には「安藤」屋敷、平成21年度調査区が該当する南側の区画には「沼津」「福岡」「長屋」屋敷があり、南側の屋敷地では比較的短期間に内に居住者が入れ替わっていることが分かる。当地は内堀の西岸に接するとともに、藩に関わる屋敷のすぐ北側にあたるなど、城下でも重要な位置にあたっている。そこで、ここに屋敷を与えられた各氏の性格についてみておきたい。

安藤氏については、藩差し出しの系図である『御侍中先祖書系図帳』<sup>(註10)</sup>に該当するものがみえず、不明なところが多いが、『皆山集』に収められた「万治三年分限帳」<sup>(註11)</sup>に「二百石 安藤宇右衛門」、『寛文二年卯正月一日 御家中侍衆分限帳』<sup>(註12)</sup>に「三百石 安東宇右衛門」との記載がみえ、万治3年(1660)から寛文2年(1662)には、知行200～300石となっている。

沼津氏については、『侍町小割帳』にある「沼津玄達」の他には、絵図、系図、その他の史料に名が見えず、手掛かりが得られていない。

福岡氏は初代から藩の要職につき、三代藩主忠豊の代から明治維新まで家老職を勤めている。寺石正路『土佐名家系譜』<sup>(註13)</sup>によると、福岡氏はもと大和国添上郡狭河の城主であったもので、初代の福岡丹波千孝が江州長浜で山内一豊に仕え、遠州掛川では500石仕置役となっている。一豊の土佐入国後には、福岡丹波千孝は1000石の中老職、仕置役を勤め、二代藩主忠義の代には、国内を巡行して境界を調査し年貢を決めるなどの功績を残した。寛文10年(1670)には3代の福岡宮内孝序が家老となって、以後明治維新まで福岡氏が家老職を勤めている。

寛文9年(1669)の「寛文己酉高知絵図」で西内堀の外縁に屋敷を構えた「福岡内丞」は福岡氏の支家にあたり、当時中老であった福岡圖書孝政(福岡氏二代)の二男、福岡左近右衛門孝章を初代として、代々御馬廻を勤めた上級武士である。八代福岡兵三孝和が藩に差し出した系図<sup>(註14)</sup>によると、初代の左近右衛門孝章は慶安2年(1649)に登用されて御小姓組<sup>(註15)</sup>となるが、その後、万治元年(1658)に知行200石、寛文元年(1661)と寛文12年(1672)にそれぞれ100石を加増して、天和2年(1682)に御馬廻<sup>(註16)</sup>となっている。同系図に記された家督相続の期間からみると、寛文9年絵図に見える「福岡内丞」は初代の福岡左近右衛門孝章(当時、300石か)が該当するとみられる。その後の絵図では、福岡氏は升形へ移っており、以後幕末まで升形に屋敷を置いている。

長屋氏は、初代の長屋喜内重之が慶長7年に知行300石を与えられ、山内一豊に仕えて以降、幕

末まで御馬廻を勤めた上級武士で、山内家資料に収められた『寛永五年諸士分限帳』<sup>(註17)</sup>では初代の長屋喜内が御馬廻、知行500石となっている。八代の長屋数衡重次が藩に差し出した系図<sup>(註18)</sup>によると、「元禄自十年至十二年間之図」(Fig.121 - 圖2)で同位置に見える「長屋彦太夫」は四代の長屋彦太夫茂良にあたるとみられ、四代の長屋彦太夫茂良は300石となっている。西内堀外縁の屋敷群が撤去となって以降は、長屋氏の屋敷は本町に移り、幕末まで留まつたことが以後の絵図から窺える。

この様に、本地点には17世紀末まで侍屋敷が所在し、藩の重鎮の家系となる武家や、山内家初代より御馬廻を勤め、知行300石以上を給された上級武士の屋敷が置かれた。各氏のうちで最も早く居住が確認される安藤氏と沼津氏については、17世紀前半には居住を開始していることが推察できるが、今回の発掘調査では17世紀前半の遺構は検出されていない。しかし、平成19年度に行われた試掘調査<sup>(註19)</sup>では、景德鎮窯の古赤絵皿、志野焼など16世紀～17世紀初頭の遺物を含む落ち込み状の遺構が検出されており、江戸前期から、高い経済力をもつ人物の屋敷が西内堀外縁に存在したことが窺われる。

## 2. 18世紀の景観と変遷

その後、西内堀以西では、侍屋敷が撤去されることにより景観が大きく変化する。

一帯の変化について、『皆山集』には「詔諒記事云西大門廣小路も元禄十一寅年火事以前ハ西ノ口瀬戸氏門前より南不破氏の辻迄両輪侍屋敷二て第十某などと云侍居けると也 火事以後東側ハ除きて廣小路と成也」とあり<sup>(註20)</sup>、城内の下屋敷と太鼓丸が焼失した元禄11年(1698)の大火以後、西内堀外縁の侍屋敷が除かれ、広小路になったとされている。

### 元禄、享保の大火と被害

元禄11年の大火について、『南路志』<sup>(註21)</sup>に収められた記事「十月六日出火、御侍屋敷焼失之覚」<sup>(註22)</sup>には、被害を受けた北奉公人町筋、内堤、帶屋町筋、大門町、本町筋、中島町、与力町、南片町の屋敷名が列挙されている。そこには焼失したとされる「内堤」の侍屋敷の中に「内堤 … (中略) … 岡田又兵衛 飯沼太右衛門 安藤藤十郎 長屋彦太夫」とあり、先の「元禄自十年至十二年間之図」(Fig.121 - 圖2)で、西内堀外縁に屋敷があった安藤藤十郎と長屋彦太夫、その西面に屋敷があった岡田又兵衛と飯沼太右衛門の屋敷名が見出される。このことから、平成17年度調査区が該当する安藤藤十郎屋敷、平成21年度調査区が該当する長屋彦太夫屋敷は、ともに元禄11年に焼失していることが分かる。

また同史料では、内堀の南側を東西に延びる帶屋町筋について「帶屋町筋 御下屋敷 御屋敷 新馬場御亭 同御厩 太□(鼓カ)丸 山内勘兵衛 桑山貞右衛門 … (以下略)」と記しており、屋敷の位置関係等からみて、内堀南西角外側の一角にあった屋敷も焼失したとみられる。

統いて、享保12年(1727)の大火での、城内及び西内堀以西の状況をみてみたい。

『南路志』に収められた「城下大火、御城本丸まで焼失 附公義御差出」の記事<sup>(註23)</sup>によると、「御城本丸 二丸 三丸 鉄門 良橋上下 乾櫓 二丸内櫓二ヶ所 本丸納戸藏 二丸茶蔵 杉之段長崎蔵 紙役所 新庭亭 射場亭并射手己屋 北ノ口作事木屋并左官房 同萬方 掃除方役所共焼失」とあり、焼け残ったとされる大手(追手)門、西ノ口大門、北ノ口大門を除いて、城内の殆どが被害を受けたことが

窺える。

また同史料の中では、郭中の侍屋敷で焼け残ったものについて「郭内残家 帯屋町北側山田多門屋敷合下堀端火之見迄拾六軒。同南側高屋又兵衛宅合今田清左衛門迄拾壹軒。本町乾又五郎、大黒甚左衛門、野中六左衛門迄三軒。西大門北蔵際、佐藤五郎左衛門壹軒。金子橋之内北小笠原又右衛門外輪合南鷹匠町堺迄、東ハ大塚藤右衛門、金子傳十郎合而八軒。鷹匠町南側西合八軒。同北側後藤甚五右衛門一軒。外江ノ口分鷹見市丞壹軒、合四拾九軒残。」と記されている。この当時、内堀外縁の屋敷群はすでに無いため、西側の並びの侍屋敷は「西大門北蔵際、佐藤五郎左衛門」の屋敷1軒を除いて、その他は残らず焼失したことが分かる。

この他、同史料の「附公義御差出 覚」に挙げられた被害箇所には、「役所 三ヶ所」「城外役屋敷 四ヶ所」も含まれており、城内外の役所もこの時に焼失している。

## 18世紀の景観

さて、その後の西内堀外縁一帯の景観を知るものとして、延享3年(1746)の写図である「高知城郭図絵」<sup>(注24)</sup>(Fig.121 - 図3)と、それ以降の近世絵図を参考としたい。それによると「高知城郭図絵」では、内堀西岸に接する一帯には侍屋敷は無く、黒色の帶で表記されている。また、その西側は広小路となっており、「西大門廣小路」と記されている。堀南西角外側の空間については空白で、かつての藩閥連の屋敷は無くなっている。なお、この絵図で黒色表記された部分の性格については、後の「天保元年高知之圖」(Fig.122 - 図5)、他の絵図において<sup>(注25)</sup>該当箇所に樹木が描かれており、「高知城郭図絵」の黒帯部分は植栽を施した緑地を意味するものと考えられる。

元禄11年以降とされる侍屋敷の撤去後は、西内堀外縁は緑地と広小路となり、以後、19世紀まで変化が無い。

## 3. 19世紀の景観と変遷

### 景観の変化

19世紀以降、西内堀外縁とその周辺にみられる景観の変化を追ってみると、享和元年(1801)の「高知御家中等施図」<sup>(注26)</sup>(Fig.122 - 図4)では、内堀の西岸沿いには特に変化が無く、西側に「西弘小路」の記載がみえる。しかし、広小路の南の詰めには「御厩」が現れている。この「御厩」は、延享3年(1746)写図の「高知城郭図絵」で中島町にあり、延享3年の大火以降の状況を示した「高知廓中図」<sup>(注27)</sup>では城郭の南門前にあったもので、これが現段階には広小路の南詰めに移動している。<sup>(注28)</sup>

続いて、天保元年(1830)の「天保元年高知之圖」<sup>(注29)</sup>(Fig.122 - 図5)では、堀の西岸沿いは変化が無く、緑地と広小路である。また、広小路の南詰めは「御厩」と「馬場」となっており、その隣に「□□役 御門□ 劍料役」と記された役所がみえる。さらに内堀南西角外側の敷地にも変化があり、境界施設で周囲を囲み南東に小さな建物を伴った施設の絵が描かれて、建物の脇に「御番所」の文字が記されている。

また、天保12年(1841)の「土佐国高知城下町絵図」<sup>(注30)</sup>でも内堀西岸沿いは帶表記、南北の広小路が「廣小路」と表記されている。広小路の南詰めは「御厩」、内堀南西角外側の敷地は表現が略

化されるものの、やはり南東に建物を伴った施設が描かれている。

次に、内堀以西に変化が認められるのは、弘化年間（1844～1848）の「弘化年間舊郭中絵図」<sup>(註31)</sup>（Fig.122－図6）である。ここではもとの広小路の一部が「新御馬場」となっている。広小路の南詰めは「御厩馬場」。内堀南西角外側の敷地は境界を伴った施設の絵が描かれている。

続いて、「皆山集」に収められた文久3年（1863）の絵図（Fig.122－図7）では、内堀外縁に「御留杉」の文字が見え、その西が「新馬場」となっている。広小路の南詰めは「御厩」で、大きな変化が無いが、内堀南西角外側の敷地部分は「薬園」と「住吉宮」になっており、この時には「御番所」とみられる施設の姿が無い。

さて、これらの絵図によって、江戸後期以降の西内堀外縁と周囲の動きを知ることができる。撤去された侍屋敷の跡地のうち、東側の内堀に沿った一帯は緑地、西側は「西大門廣小路」「西弘小路」「廣小路」と呼称される広小路となっており、19世紀までほぼ変化が無かった。しかし、享和元年（1801）の絵図に見える「御厩」が広小路の南詰めに現れて以降は、その周辺にも変化が見え始める。「天保元年高知之圖」に見るように、1830年代頃には、内堀南西角外側の敷地に「御番所」が所在し、広小路南詰めの「御厩」と「馬場」の側には「□□役　御門口　飼料役」とする関連の役所があるなど、周辺部に藩の施設が増加している。さらに、19世紀中葉以降には、広小路の場所に「新御馬場」が現れる。この「新馬場」の新設時期については、「皆山集」に、「新馬場　嘉永二酉年五月月初テ馬場トナル東西八間南北九十六間」とあり、嘉永2年（1849）に設けられたとされている。<sup>(註32)</sup>

#### 4. 高知城跡平成17・21年度調査区の位置付け

最後に、西内堀外縁部でのこうした動きの中で、平成17・21年度調査地点がどのような位置付けができるのか、検討しておきたい。

まず、藩撰図と推定され<sup>(註33)</sup>その製図法の巧緻さが評価されている「寛文己酉高知絵図」をもとに、平成13年の市街地図と比較すると（Fig.120－図A）、現況の街区画が近世の町割りを比較的良く踏襲していることが見て取れる。近代以降の改修が認められる箇所を除き、近世当時の規模をとどめていると考えられる西大門から西に向かうかつての「西大門筋」と、内堀に沿って南北に延びる道を焦点に、双方の図の縮尺を合わせ、さらに今回の調査区を「寛文己酉高知絵図」上に推定復元<sup>(註34)</sup>したもののがFig.120－図Bである。

これによると、平成17年度調査区は北側の空白の屋敷地、平成21年度調査区は福岡氏の屋敷地となり、平成13年地図での四国森林管理局と南側の民間地との境界付近に江戸前期の屋敷境があつたと思われる。

次に、17世紀末以降、広小路へと変化した部分を推定したい。「寛文己酉高知絵図」以降のその他の絵図は、縮尺に精度を求めることができないが、広小路出現前後の絵図を比較することによって、どの部分が広小路に変化したのかというおよその推定は可能であろう。まず17世紀までの絵図では、内堀南西角の「御下屋敷」の辺りから道が一度西に折れて、その後北へ直進しているが、18世紀以降の絵図では、東側の侍屋敷が撤去されたことによって、かつての西に折れる分だけ道幅が東へ広がっている。これをもとに広小路の東端を「寛文己酉高知絵図」（Fig.120－図B）上で復元する

と、平成17・21年度調査区は広小路の推定部分に入る。さらに、平成13年の地図(Fig.120-図A)上にも広小路の位置を復元すると、民間地と国有地であったテニスコートとを分ける南北の境界付近に該当している。このため、この境界付近から西側がかつての広小路、東側が緑地と考えられよう。そして、この南北方向の地割りが現代まで引き継がれていると仮定すれば、幕末頃まで存続した「新馬場」と緑地の境界もこの辺りになるのではないかと推定される。

以上のことから、平成17・21年度調査区の位置は、侍屋敷の撤去以降、18世紀は広小路の一部、19世紀中葉には「新馬場」になったと推定できる。

## おわりに

さて、ここまで絵図、文献をもとに、西内堀の外縁と周辺部の動向をみてきた。内堀外縁の一帯は城や藩の屋敷に近接するなどの立地条件をもち、17世紀までは、老中の縁戚など藩の重臣に関係の深い武士や、山内家初代より御馬廻を勤めた武士が屋敷を与えられた。その後は元禄11年の大火を契機に緑地と広小路へと転じるが、19世紀以降は、周間に厩、番所、馬場などの施設が現れるとともに、関連の役所が増加していった。こうした動きから、その初期は大火を契機に広小路と緑地へと転じる17世紀末と、周辺に藩の施設が増設され一帯の機能が変化し始める19世紀前半にあつたといえる。

こうした中で、内堀西岸に面した一帯は、17世紀末に侍屋敷が撤去されて以降は緑地と広小路になるが、19世紀中葉に広小路が「新馬場」に転じた後も、堀端に近い緑地部分は杉林として残されたようである。『皆山集』文久3年(1863)の絵図に記された「御留杉」の呼称からは、一般的の立ち入りを禁じた杉林の役割が窺えるが、周辺部で藩の施設が増設されていく中、敢て杉林として残されたこの空間は、城の内外を分ける緩衝地帯としての役割を果たしていたと思われる。

一方、広小路の一部となつた平成17・21年度調査区の地点は、「新馬場」が新設されるまでの期間、どのような機能を果たしていたのだろうか。今次調査区部分が東西幅約24mあることからも、広小路が非常に大きな空間であったことが窺われる。この地点がどのように利用され、その役割を果たしてきたのかという課題については、次節以降、検出遺構や遺物の検討を通して探ることとしたい。

## 謝辞

今回の報告にあたっては、大脇保彦氏より貴重なご教示を賜り、絵図資料の調査については吉松靖峯氏よりご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

[註]

- 1)『高知城跡－西堀地区試掘確認調査報告書』高知市教育委員会2009年
- 2)『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁序舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
- 3)『西弘小路遺跡－総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2010年  
『西弘小路遺跡－高知法務総合庁舎新営埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター2012年
- 4)近世城下町においては、東西の通りの町並み（屋敷並み）を立町、南北の通りの町並み（屋敷並み）を横町と呼んだ。
- 5)『侍町小割帳』は高知城下の侍町の住居者名簿とでもいべき史料であり、通りごとに屋敷地の間口と居住者の氏名が列記されている。史料の成立年代は不詳であるが、寛政3年（1791）の写しが文政9年（1826）に再写され、その伝来資料を明治29年（1896）に松野尾章行が再転写したものが「皆山集」に収められている。寛政期に書寫した人物が史料末尾に付記した内容によると、寛永元年（1624）に山内家に召し抱えられた仙石忠右衛門と、万治2年（1659）に他囯へ出た間宮左衛門の屋敷が記されていることから、寛永元年から万治2年の間に成立したものと推定されている。さらに、松野尾章行はその上限を永国寺創建の寛永5年（1628）、下限を寛政期の筆写者が推定した万治2年としている。ただし、「御侍中先祖書系図帳」と人名との照合など今後の研究によって、成立時期をさらに絞り込むことが可能であろうとされる。『土佐国史料集成土佐國群書類從』第八巻 高知県立図書館2006年、大脇保彦「侍屋敷調査帳と廓中圖」「描かれた高知市－高知市史絵図地図編」高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年
- 6)池澤俊幸「高知城伝下屋敷跡の調査成果と文献史料」『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁序舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
- 7)『皆山集』「高知市沿革地図説」「土佐之国史料類纂 皆山集」第九巻 高知県立図書館 昭和50年
- 8)「寛文己酉高知絵図」（高知市立市民図書館所蔵）は作成者や年時を示す奥書きは欠落しており、図中の屋敷名などから松野尾章行が寛文9年頃の図と判定したと推測されている。また、同絵図は内容の詳細さと製図手法の正確さが高く評価されており、藩内用に藩が作成したものと推測されている。大脇保彦「高知城下町絵図について－歴史空間の情報源としての吟味と課題」「土佐女子短期大学紀要8』土佐女子短期大学2001年
- 9)「元禄自十年至十二年間之図」「皆山集」三一卷所収、高知県立図書館所蔵
- 10)『御侍中先祖書系図帳』土佐山内家宝物資料館
- 11)『万治三年分限帳』の末尾には「文化十四丁丑五月中旬写田中加実原本仙石氏所蔵也 文政二年己卯三月廿七日之夜以楠目氏之本校合了」とある。「土佐之国史料類纂 皆山集」第七巻 高知県立図書館 昭和52年
- 12)『寛文二年卯正月 日 御家中侍衆分限帳』の末尾には「此一冊楠目成氏蔵本を以写之 松野尾章行」とある。「土佐之国史料類纂 皆山集」第七巻 高知県立図書館 昭和52年
- 13)寺石正路「土佐名家系譜」歴史図書社 昭和51年 「土佐名家系譜」は寺石正路が昭和17年に高知教育会より発刊行。
- 14)『御侍中先祖書系図帳』土佐山内家宝物資料館  
八代の福岡兵三孝和が藩に差し出した系図による、福岡氏の跡目相続の期間と役職は次の通りである。  
初代 左近右衛門孝章 慶安2年（1649）登用 天和2年（1682）御馬廻 元禄11年（1698）没  
二代 平馬孝輝 元禄12年（1699）相続 享保17年（1732）没 御馬廻  
三代 内之丞孝周 享保18年（1733）相続 宝曆7年（1757）没 御馬廻  
四代 内之丞孝惟 宝曆7年（1757）相続 安永8年（1779）没 御馬廻  
五代 助之進孝時 安永8年（1779）相続 文政5年（1822）没 御馬廻

- 六代 平馬孝行 文政6年(1823)相続 嘉永4年(1851)没 御馬廻
- 七代 左門孝壽 嘉永4年(1851)相続 安政6年(1859)没 御馬廻
- 八代 兵三孝和(貞吉 三兵衛) 安政6年(1859)相続 御馬廻
- 15)御小姓組は藩主に従って戦場や参勤交代に行くという意味が身分名となった中級武士で、30石～300石。
- 16)御馬廻は藩主の周辺を固めるという意味が身分名になった上級武士で、150石～600石。
- 17)「山内家史料 第二代忠義公紀」第二編 土佐山内家宝物資料館
- 18)「御侍中先祖書系図帳」土佐山内家宝物資料館
- 八代の長屋数衛重次が藩に差し出した系図による、長屋氏の跡目相続の期間その他は次の通りである。
- |          |                                 |
|----------|---------------------------------|
| 初代 喜内重之  | 慶長7年(1602)                      |
| 二代 喜内重吉  | 寛永19年(1642)相続 延宝3年(1675)没       |
| 三代 右内重孝  | 延宝3年(1675)相続 元禄7年(1694)没        |
| 四代 彦太夫茂良 | 元禄8年(1695)相続 宝曆6年(1756)没 知行300石 |
| 五代 慧四郎茂通 | 宝曆6年(1756)相続 寛政3年(1791)没 知行200石 |
| 六代 源内繁嗣  | 寛政3年(1791)相続 文化4年(1807)没        |
| 七代 彦太夫重直 | 文化4年(1807)相続 廉応2年(1866)没        |
| 八代 数衛重次  | 廉応2年(1866)相続 世禄80石、知行150石       |
- 19)「高知城跡－西堀地区試掘確認調査報告書」高知市教育委員会2009年
- 20)「皆山集」「高知市街誌稿」「土佐之国史料類纂 皆山集」第九巻 高知県立図書館 昭和50年
- 21)「南路志」は文化12年(1815)、高知城下の豪商美濃家の武藤致和、武藤平道父子が編纂。
- 22)「南路志」巻七十、豈昌公御代七付録 「土佐国史料集成 南路志」第七巻 高知県立図書館 平成6年
- 23)「南路志」巻七十五、敷農公御代一 「土佐国史料集成 南路志」第七巻 高知県立図書館 平成6年
- 24)「高知城郭図絵」高知県立図書館所蔵 「高知城郭図絵」は延享3年9月の写図であり、原図はそれ以前、町会所が移転した元文5年(1740)以降の状況を示した図であったと推定されている。大脇保彦「延享の大火前後の城下町絵図写図」「描かれた高知市－高知市史絵図地図編」高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年
- 25)この他、佐川町立青山文庫所蔵の「貞享三年高知城下町絵図」でも、同様の箇所に多数の樹木が描かれている。「貞享三年高知城下町絵図」は貞享3年(1686)に幕府へ城と城下町の修築を願い出た際の絵図の控えとされている。「描かれた高知市－高知市史絵図地図編」高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年
- 26)「高知御家中等施図」安芸市立歴史民俗資料館所蔵 「高知御家中等施図」は土佐藩家老五藤家に伝わる高知城下町絵図で、享和元年(1801)の原図を、文化8年(1811)に写したもの。
- 27)「高知廓中図」個人所蔵。「高知廓中図」は写図で、原図も写した年次も不明である。しかし、延享3年(1746)の写図である「高知城郭図絵」作成の直後の12月に大火があり、同図の中島町にあった御厩屋はこの図では城郭の南門前に移動していることから、大火以降の状況が読み取れる。下限は家老屋敷名から寛延期(～1750)までの状況とされる。大脇保彦「延享の大火前後の城下町絵図写図」「描かれた高知市－高知市史絵図地図編」高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年
- 28)延享3年(1746)写図の「高知城郭図絵」では「御厩屋」が中島町にみえ、延享3年(1746)の大火以降の状況を示した「高知廓中図」では「御馬屋」が城郭の南門前にみえている。
- 29)「天保元年高知之圖」吉松靖峯氏所蔵 「天保元年高知之圖」は吉松清氏による模写。原図の伝来は不明で、図中の書き込みには文政13年(1830)に南鏡が作成した「土陽府御絵図」を、天保5年(1835)に鏡立敬人が改正作団した図の模写という図歴記録がある。大脇保彦「民掛城下町絵図」「描かれた高知市－高知市史絵図地図編」高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年
- 30)「土佐国高知城下町絵図」国立公文書館所蔵。竹内重意が天保12年に作図との奥書あり。『中・四国の市街

古図】鹿島出版会 昭和54年

- 31)「弘化年間舊郭中絵図」高知市立市民図書館所蔵。個人所有のものを平尾道雄氏が昭和27年に模写したもの。「描かれた高知市 - 高知市史絵図地図編」高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年
- 32)「皆山集」「高知市街誌稿」「土佐之国史料類纂 皆山集」第九巻 高知県立図書館 昭和50年
- 33) 大脇保彦「高知城下町絵図について - 歴史空間の情報源としての吟味と課題」「土佐女子短期大学紀要」土佐女子短期大学2001年
- 34) 現在の街区区画のうち、高知城西門から西に延びる東西の筋と、高知城内堀の南側を東西に延びる筋の南面は、当時の位置を比較的良好にとどめていると考えられるため、これをもとにA地図とB絵図の縮尺を揃え、B絵図上に調査区の南北の位置を推定復元した。調査区の東西方向の位置については、現況の南北道路の位置が移動している可能性があったため、東側の城山斜面麓の位置を基準として、調査区の東西位置を推定した。さらに、平成17年度試掘調査、平成19年度試掘調査にて検出した内堀西岸の位置をA地図上に表わし、B絵図の内堀西岸と比較したうえで、調査区の東西位置推定の参考とした。なお、平成17・19年度調査で確認した内堀西岸は近代以降の石垣を伴うものであり、これが近世の内堀西岸位置に一致するものかどうかは特定できていない。「高知城跡西堀地区、検出遺構の性格」「高知城跡 - 西堀地区試掘確認調査報告書」高知市教育委員会2009年

#### 【参考文献】

- 大脇保彦「高知城下町絵図について - 歴史空間の情報源としての吟味と課題」「土佐女子短期大学紀要8」土佐女子短期大学2001年
- 大脇保彦「土佐の近世絵図、その歴史地理資料面の解題事始め - 高知城下町絵図を中心事例に - 」「土佐史談」第248号
- 土佐史談会 平成23年
- 寺石正路「土佐名家系譜」歴史図書社 昭和51年
- 『土佐之国史料類纂 皆山集』高知県立図書館 昭和48年
- 『土佐国史料集成 - 南路志』高知県立図書館 平成6年
- 『土佐国史料集成 土佐國群書類從』高知県立図書館2006年
- 『御侍中先祖書系図帳』土佐山内家宝物資料館
- 『特別展 - 絵図の世界』安芸市立歴史民俗資料館1998年
- 『高知城下町読本 - 改訂版 - 』土佐史談会・高知市教育委員会2004年
- 『描かれた高知市 - 高知市史絵図地図編』高知市史編さん委員会絵図地図部会・高知市2012年

#### 【絵図出典】

- No.1)「正保土佐国城絵図」国立公文書館内閣文庫所蔵
- No.2)「慶安五年高知廓中絵図」高知市立市民図書館所蔵
- No.4)「寛文己酉高知絵図」高知市立市民図書館所蔵
- No.5)「元禄自十年至十二年間之図」「皆山集」三一巻所収 高知県立図書館所蔵
- No.6)「高知城郭図」高知県立図書館所蔵
- No.7)「高知御家中等施図」安芸市立歴史民俗資料館所蔵
- No.8)「天保元年高知之圖」吉松靖峯氏所蔵
- No.9)「土佐国高知城下町絵図」国立公文書館所蔵
- No.10)「弘化年間舊郭中絵図」高知市立市民図書館所蔵
- No.11) 文久3年(1863) 絵図 「皆山集」稿本所収 高知県立図書館所蔵

Tab.54 絵図・文献にみる高知城跡西側の変遷

No.	挿図番号	年代	資料名	平成17年度 調査地点の記載	平成21年度 調査地点の記載	堀南西角外側の 記載	南北堀南詰めの 記載	所蔵
1		正保年間 (1644～ 1648)	「正保土佐国城絵 図」	「侍星敷」	空白			国立公文書館 内閣文庫所蔵
2		慶安5年 (1652)	「慶安五年高知郡中 絵図」	「侍星敷」	空白			高知市立市民 図書館所蔵
3		寛永5年～ 万治2年推定 (1628～ 1659)	「侍町小割帳」	「安藤宇右衛門」「沼津玄達」	「御星敷 下やし き」			
4	Fig.121 - 図1	寛文9年 (1669)	「寛文己酉高知絵 図」	空白	「福岡内添」	堀で囲んだ星敷の 松	侍星敷	高知市立市民 図書館平尾文 庫所蔵
5	Fig.121 - 図2	元禄10～ 12年 (1697～ 1699)	「元禄自十年至十二 年間之図」	「安藤藤十郎」「長屋彦太夫」		「御下星敷」	侍星敷	高知県立図書 館所蔵
6	Fig.121 - 図3	延享3年 (1746) 万國 「高知城郭絵図」		堀西岸は黒色帶表記、西は「西大門 横小路」	空白		侍星敷	高知県立図書 館所蔵
7	Fig.122 - 図4	享和元年 (1801)	「高知御家中等魚 図」	堀西岸は記載なし、西は「西弘小路」	空白		「御庭」	安芸市立歴史 民俗資料館所 蔵
8	Fig.122 - 図5	天保元年 (1830)	「天保元年高知之 圖」	堀西岸は緑地、西は広小路	「御番所」敷地と 建物の松	「御庭」「馬場」 〔□役御門□御料 役〕	古松清峯氏 所蔵	
9		天保12年 (1841)	「土佐国高知城下町 絵図」	堀西岸は緑色帶表記、西は「廣小路」	敷地と建物の松	「御庭」		国立公文書館 所蔵
10	Fig.122 - 図6	弘化4年 (1844～ 1848)	「弘化年間高知中絵 図」	「新御馬場」	敷地の松	「御庭馬場」		高知市立市民 図書館所蔵
11	Fig.122 - 図7	文久3年 (1863)		「新馬場」	「堀園」「住吉宮」「御庭」			高知県立図書 館所蔵

A 平成13年地図 (S=1/2,500)  
(平成13年修正の「高知広域都市図38」に加筆)B 「寛文己酉高知絵図」  
(高知市立図書館所蔵の絵図をもとに加筆)

Fig.120 高知城跡内堀跡西側地区調査区の推定位置



図1 「寛文己酉高知絵図」寛文9年(1669)  
(高知市立市民図書館所蔵)



図2 「元禄自十年至十二年間之図」  
元禄10~12年(1697~1699)  
(高知県立図書館所蔵『皆山集』所収)

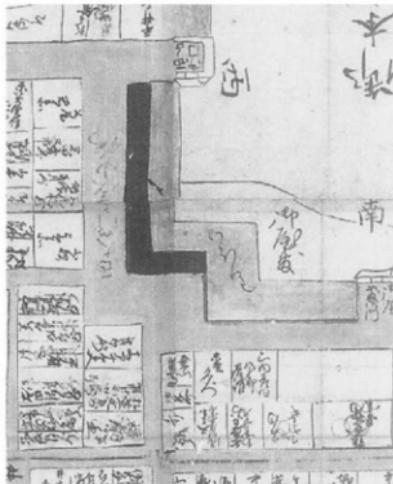


図3 「高知城郭図絵」延享3年(1746)写図  
(高知県立図書館所蔵)

Fig.121 絵図にみる高知城内堀西側の変遷(1)

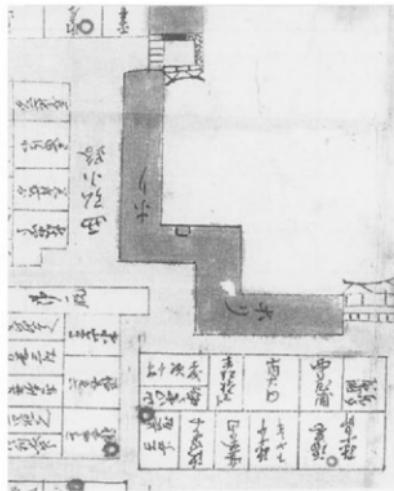


図4 「高知御家中等龜図」享和元年（1801）  
(安芸市立歴史民俗資料館所蔵)



図5 「天保元年高知之圖」天保元年（1830）  
(吉松靖峯氏所蔵)

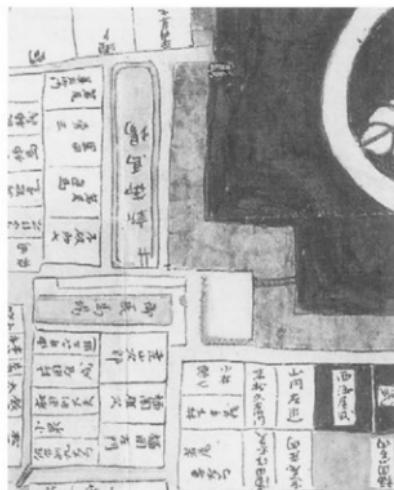


図6 「弘化年間高郭中絵図」  
弘化年間（1844～1848）  
(高知市立市民図書館所蔵)



図7 文久3年（1863）絵図  
(高知市立図書館所蔵 「皆山集」所収)

Fig.122 絵図にみる高知城内堀西側の変遷（2）

史料 1 「侍町小割帳」(抜粋)

御堂敷筋西ノはしる北川立川	西大岡立町東のはし北川
一四拾間半南様取田筋北	一武拾九間 平井數馬
一七拾九間五尺七寸	御堂敷 下やしの
一七百七間 番町九間半	御やしき堺ノ長少
一五十間	福岡源書
一五拾壹間 橘町四百零四尺	西一番北南様町東用北のはしる
一三拾間五尺	西一一番北南様町東用北のはしる
一武拾壹間	野々村大学
一三拾間 墓町四百零四尺	山内市正
一武拾間	高麗所左衛門
一七拾七間	百々平兵衛
一武拾武間半	百々刑部
一拾壹間半	山内左衛門佐
一拾間四尺	寺田太左衛門
一九間	柏原太郎兵衛
一九間半	近藤左左衛門
一九間五尺	北川忠後
一拾間	西田作左衛門
一拾間半	市左衛門
一武拾六間	宮田忠左衛門
一武拾六間	片岡武右衛門
一武拾武間	橋本猪太夫
一九間半	森久八
一九間五尺	共、仙石忠右衛門、間宮富九左衛門、門士之屋敷有之ヲ以
一拾間	考に候處、寛永より万治の年間御改正明矣也。其證如左。
一拾二間半 東様武右衛門	寛永元年於江戸、御當家へ被召拘、仙石忠右衛門。
一五百拾七間四尺四寸五分	万治二年百姓と出入有之。他國へ御職被遣、間宮九左衛門。
(中略).....	寛政三年亥九月十五日写之。 文政九年戌十一月十九日写之。 市原辰之

## 第2節 高知城跡内堀跡西側地区検出遺構の性格と変遷

### はじめに

当報告遺跡は、内堀の西岸に沿って南北に広がる一帯である。江戸前期から後期にわたるそこでの景観の変化は、絵図や文献からもつかむことができ、今次調査地点が、17世紀までは侍屋敷、17世紀末以降は堀縁の緑地と広小路、19世紀中葉には馬場が設けられるなど、その性格が様々に変化したことは前節にて触れた通りである。

平成17年度と21年度の発掘調査では、南北に隣接する2つの調査区によって、南北37m、東西16~24mの範囲の遺構分布状況が明らかにでき、近世の土坑、井戸、ピット、瓦溜り、その他の遺構を検出した。

本節では各検出遺構の出現時期と特徴をまとめ、その機能を検討していく。また、絵図、文献とも照合させながら、各検出遺構の性格を検証し、内堀西側における空間利用のあり方とその変遷を見ていくこととしたい。

### 1. 近世の検出遺構

今回の調査では、平成17年度調査区にて近世の土坑17基、瓦溜り1箇所、平成21年度調査区にて近世の土坑13基、井戸1基、瓦溜り6箇所を検出した。これらのうち、土坑、井戸の規模や形態、その他の特徴については、Tab.1・42に挙げた通りである。

検出遺構のうちで、時期が明らかにできたものを時期別に区分すると次の様になる。

1群：17世紀末以前に廃絶或は機能するもの (H17-SK13~15、H21-SK11、H21-SE1)

2群：17世紀末に廃絶するもの (H17-SK3・4、H21-SK2~4・7・8・10・12・13、H21-SE1)

3群：19世紀前半に廃絶するもの (H17-SK6~12、H21-瓦溜1~5)

これによると、今回の調査区では特に、17世紀末と19世紀前半に廃絶遺構数のピークが認められる。またこの中で、17世紀末以前に廃絶したH17-SK13~15、H21-SK11、及び17世紀に機能し17世紀末に廃絶に至ったH21-SE1は、本地点において侍屋敷が撤去され広小路に転じる以前の遺構であったと考えられるものである。

では、これらの検出遺構はどのような性格をもち、高知城跡内堀跡西側地区の歴史的な変遷の中で、どのような位置付けができるのだろうか。上記の時期別区分をふまえながら、以下、年代毎に各検出遺構の特徴や遺構間の関係性を検討していくこととする。また、前節での内容とも一部重なるが、近世の絵図及び文献によってつかめる歴史的動向を振り返り、今次検出遺構との関わりについても考えてみたい。

### 2. 検出遺構の性格と変遷

#### (1) 17世紀末以前 —1群

17世紀末以前の検出遺構は少なく、土坑H17-SK13~15・H21-SK11、井戸H21-SE1を確認したのみである。この時期の検出遺構数が少なかった背景として、一つには、平成17年度調査区での下面

検出遺構の調査が調査区南東部の一画に限定されて行われており、全域にわたる遺構の分布状況が明らかにできていないなどの調査上の理由が挙げられる。しかし、平成21年度調査区においてもやはり遺構の分布密度は疎らであり、当時の建物と庭空間の配置のあり方が、調査区内の土坑の検出数に関係している可能性も考えなければならない。

さて、絵図や文献との照合によれば、この時期、本地点は侍屋敷となっており、1群の検出土坑H17-SK13～15・H21-SK11、及びH21-SE1は何れも屋敷地内の廃棄土坑や井戸として機能したとみられるものである。そのうちH17-SK13は17世紀第4四半期、H21-SK11は17世紀後半、H17-SK14・15は17世紀末以前に廃絶時期を求めることができる。

廃棄土坑で注目されるものとしては、平成17年度調査区の南部で検出したH17-SK13がある。H17-SK13は平面形の長軸3.10m、短軸1.63m、深さ40cmの規模をもつ橢円形の土坑であり、埋土の最下層には薄く削られた多量の木屑からなる層があり、その他の埋土中にも木屑や加工木片が多く含まれている。また土坑内には、瓦片及び、17世紀初頭から17世紀後半にかけての陶磁器、土器、木製品、金属製品、石製品などからなる生活用具も廃棄されている。こうした検出状況からみてH17-SK13は、建築部材その他木製品の加工によって生じる木屑や瓦片の処理を目的とした廃棄土坑と考えられ、これに併せて日常生活の中で生じる少量の塵が捨てられたと思われる。

井戸では、平成21年度調査区の中央部で検出したH21-SE1がある。H21-SE1は木製の井筒を伴う円形の井戸で、底には木炭片を多量に埋め込み、その上面に玉石を敷き詰めるなどの工夫を施して水質の浄化が図られていた。屋敷の存続中には生活用水として機能したとみられるこの井戸は、その後埋め戻されて廃絶に至るが、埋め戻しの際の埋土中には17世紀後半を中心とする陶磁器、土器が含まれ、二次被熱を受けて釉が変質した尾戸焼の陶器片も出土している。そのため、これらの出土遺物の内容から導かれるH21-SE1の廃絶時期は17世紀後半以降となるが、出土遺物中に火災の被害を思わせる被熱陶器片が含まれることや、本地点における侍屋敷の撤去が元禄11年の火災以降なされたとする文献<sup>[註1]</sup>との照合からみると、17世紀末に廃絶した可能性が最も高い。

## (2) 17世紀末—2群

この時期の遺構には、平成17年度調査区のH17-SK3・4と平成21年度調査区のH21-SK2～4・7・8・10・12・13、H21-SE1がある。

H17-SK3は長軸3.48m、短軸2.86m、深さ20cm、H17-SK4は南北長3.40m、東西残存長2.76m、深さ42cmの規模をもつ不整形土坑で、2基の土坑が4m程離れて南北に並んで検出されている。ともに埋土中に焼土と硬化した焼土塊、炭化物を多く含んでおり、被熱し変質した陶磁器、土器、橙色に変色した瓦片が多量に出土することから、火災によって焼失した建物の瓦や道具類の処理を目的に掘削された廃棄土坑と考えられるものである。

同じく、H21-SK2～4・7・8・10・12・13も埋土中に焼土や焼土塊、被熱した遺物を含んでおり、火災後の廃絶遺構群と捉えられるものである。中でも大型の土坑H21-SK4・8・10・12・13は重複して検出されており、埋土がほぼ同質で、南北確認長11m、東西7mの範囲に深さの異なる複数の掘り込みが連続して掘削されたように見える。これらの土坑はH21-SK4が長軸7.28m、短軸3.02m、深さ64cmの規模をもつ他、何れも大型であるが、遺物の含有量が少ないため、塵の廃棄を直接的な目

的とした廃棄土坑であったのかその用途を特定し難い。しかし、先述の埋土及び出土遺物の内容からみて、火災に関連した処理遺構と捉えておきたい。

これらH17-SK3・4、H21-SK2～4・7・8・10・12・13は、両調査区間にわたって南北に分布している。その火災関連土坑群の時期についてであるが、含まれる肥前産陶磁器の生産年代が何れも17世紀末以前に止まること<sup>(22)</sup>や、その他の生産地製品についても17世紀までで構成されていることなどからみて、城下町の多くが焼失し、内堀西側一帯の侍屋敷も被害を受けた元禄11年(1698)の大火灾に伴う可能性が高い。前節にて触れたように、この時、平成17年度調査区が該当する一画は安藤藤十郎の屋敷地、平成21年度調査区が該当する一画は長屋彦太夫屋敷に該当しており、安藤藤十郎と長屋彦太夫の屋敷が元禄11年の火災によって焼失したことを記録からつかむことができる。<sup>(23)</sup>そのため、H17-SK3・4、H21-SK2～4・7・8・10・12・13は當時焼失した上級武士の屋敷に関わる片付け跡の可能性が考えられよう。なお、今次調査区では近現代以降の削平が深部まで及んでいるため、焼土層はすでに削平されたと考えられ、当時の焼土層を検出することはできていない。<sup>(24)</sup>

また、本地点は元禄11年大火の後、侍屋敷が撤去されているため、侍屋敷の廃絶との関わりが示唆されるH21-SE1の埋め戻しが、H17-SK3・4、H21-SK4・8・10・12・13の掘削とはほぼ同時期であった可能性が出てくる。このことについては、出土遺物中に、揃い又は同一個体とみられる染付碗の破片2点(63・1026)があり、これがH17-SK3とH21-SE1埋め戻し埋土の双方から出土していることなどからも推定できる。碗63と1026は非常に珍しい文様構成をもつものであるため、同一の所有者によって所持されていた陶磁器が双方に廃棄された可能性が高く、井戸H21-SE1と火災関連土坑群の埋め戻しが同時、或は非常に近い時期であったことを示唆している。

### (3) 19世紀前半—3群

この時期には検出遺構数が増加し、各遺構内の遺物出土量も多くなっている。該当期の土坑としては、平成17年度調査のH17-SK1・2・5～12、平成21年度調査のH21-瓦溜1～5がある。

このうちH17-SK6～12は、平面形の規模がH17-SK6で3.78m×2.94m、H17-SK7で4.03m×2.80m、H17-SK10で5.60m×4.02m、H17-SK12で7.50m×4.70mを測る大型の土坑群である。近現代以降の搅乱によって上面を削平されるため確認深度は18～26cmと浅いものが多いが、搅乱部分が少なかったH17-SK8・9では深さ50～58cmを測っている。

H17-SK6～12は埋土中に陶磁器、土器、石製品、金属製品、ガラス製品、木製品、瓦片等の遺物が多量に廃棄されており、何れの土坑も埋土中の遺物含有量が多く、廃棄を目的として掘削された廃棄土坑群と捉えられるものである。これらは近接して分布しているが、各土坑間で出土遺物片の接合関係が成立立ち、同一地点から出た廃棄物が複数の土坑内に一括廃棄されたことが推察される。これらの廃棄遺物の内容をみると、陶磁器、土器その他からなる道具類の他に、瓦片や板材などの建築部材が多量に含まれており、屋敷や施設の撤去又は改修など、建物の解体を伴う非日常的な事象に際して行われた大量の廃棄と考えられる。

これらの廃棄の年代については、H17-SK10・12の出土遺物中に「文政三年」の年号を描いた染付薄手酒杯(382・743)が含まれていることから、1820年代以降と捉えられる。また、能茶山窯産の磁器、肥前、瀬戸・美濃その他の主要生産地製品の出土のあり方からは、19世紀中葉以前の廃棄資料

の様相がみており、19世紀前半、そのうちでも1820年代以降19世紀中葉以前と捉えられる。

この他にも、H17-SK6～12に類似した廃棄遺構として、平成21年度調査区で検出されたH21-瓦溜1～5が挙げられる。これらは壁の立ち上がりが緩やかな浅い掘り込みの中に多量の瓦と陶磁器、土器その他の遺物が廃棄されているもので、特に平成21年度調査区では調査区全域に瓦溜りが広がる様子が確認された。H17-SK6～12とH21-瓦溜1～5は出土遺物の接合関係等が確認できていないため、両者の関係性がつかめないが、出土遺物の年代観が類似しており、この時期、南北の調査区の全域にわたって瓦や遺物の廃棄が行われていたことが窺われる。

さて、ここでH17-SK6～12やH21-瓦溜1～5への廃棄が行われた背景についても、補足しておきたい。19世紀以降の内堀西側一帯とその周辺部での状況について、前節までの内容を振り返ると、享和元年（1801）の絵図では「御厩」が広小路の南詰めに現れ、1830年代頃の絵図では内堀南西角外側の敷地に「御番所」が所在し、広小路南詰めの「御厩」と「馬場」の側に「□□役 御門□ 飼料役」とする関連の役所があるなど、この時期、周辺では藩の施設の増加が顕著であった。さらに、19世紀中葉以降には、本調査区が所在する広小路の位置にも「新御馬場」が新設されることとなる。また、こうした施設の出現に際して、該当地とその周辺では侍屋敷の撤去や道の改修等が進められており、景観が大きく変化している。この様に、19世紀前半から中葉までの時期は内堀西側一帯の景観が大きく変る転換期にあたっており、今次調査地点に瓦片その他の大量の塵が廃棄された時期もこの時期とはほぼ重なっている。

なお、前節までの検証によると、平成17・21年度調査区は侍屋敷の撤去後には広小路の一部になつたと推定されている。さらに嘉永2年（1849）とされる「新馬場」の新設<sup>[85]</sup>以降には、本調査区はその一部になつたとみられ、こうした動向を考え合わせると、本地点に土坑群H17-SK6～12とH21-瓦溜1～5が出現するのは、出土遺物の内容から導いた1820年代以降、「新馬場」が新設される1849年以前と推定される。

### 3. 内堀西側地区の性格と空間利用

ここまで、平成17・21年度調査区での検出遺構の特徴と性格を時期別に検討してきた。

本調査区は、17世紀末までは2棟の侍屋敷の敷地内に該当しており、井戸跡と廃棄土坑を確認した。しかし、建物跡及び2棟の屋敷地の境界施設については未検出であり、内堀西側一帯の侍屋敷の建物及び屋敷境の構造がどのようなものであったのかという点については課題が残されている。一方で、廃棄土坑の検出数は多く、17世紀末に遺構検出数のピークを認めた。それらの廃棄土坑は、城内及び内堀西側の一帯が甚大な被害を受けた17世紀末の大火灾の直後の状況を伝えるものであり、その遺物内容の豊かさは今次調査の成果の一つであった。

また18世紀以降については、今次調査地点は広小路の一部になったと推定されるが、道路面や側溝など、道としての機能に関わる遺構は検出できておらず、本地点が広小路としてどのような役割を果たしていたのかについては実態が明らかにできなかった。

しかし、19世紀前半には廃棄土坑や瓦溜りへの大量の塵の廃棄が確認され、広小路であった本地点での土地利用のあり方が看取できた。ただし、本地点が広小路に転じたとみられる18世紀以降、

大規模な廃棄土坑群はこの時期以外に認め難いため、ここへの塵の廃棄は日常的に行われたものではなく、建物の撤去など、膨大な量の塵が生じる非日常の場面に限定されたものと考えられる。本地点は内堀沿いの縁地に接した広小路東側の空間であり、城内や近隣の役所からも近く、大量の瓦礫や塵の処理場所として利用され易い環境にあったと考えられ、ここにも広小路であった頃の本地点の空間利用の一侧面が認められる。なお、広小路の空間に廃棄された大量の遺物がどこからもたらされたかという問題については、後節にて出土遺物の内容を検討しつつ明らかにすることとしたい。

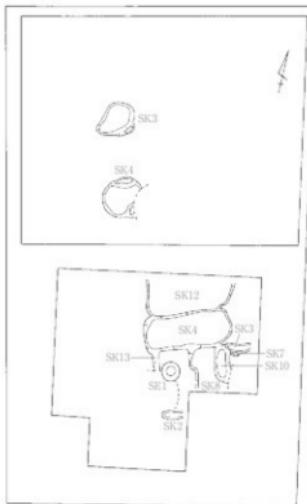
その後、広小路は19世紀中葉には馬場へと転じ、本調査区も馬場の一部になったと考えられる。明治4年（1871）の廃藩置県の後、内堀の南西側には明治8年（1875）に旧裁判所が設置され、内堀西側の敷地は旧営林局、裁判所などの国有地となるが、平成17年度調査区では、現在の道路面とほぼ同じレベルにて、昭和30年頃の営林局建物に伴うとみられる石列を検出している。<sup>〔註6〕</sup>

#### 〔註〕

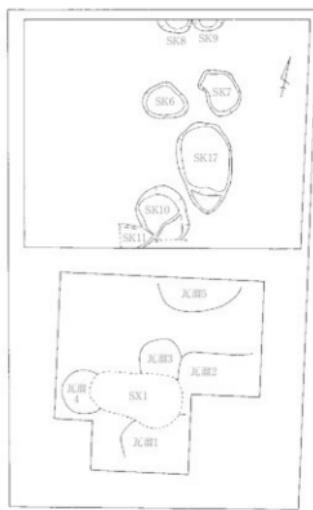
- 1)『皆山集』には「詔謀記事云西大門廣小路も元禄十一寅年火事以前ハ西ノ口瀬戸氏門より南不破氏の辺迄  
両輪侍屋敷二て第十某なと云侍居けると也 火事以後東側ハ除きて廣小路と成也」とある。『皆山集』「高知市街誌稿」『土佐之国史料類纂 皆山集』第九卷 高知県立図書館 昭和50年
- 2) 肥前産陶磁器の年代観については大橋康二氏のご教示を得た。
- 3)『南路志』巻七十、豊昌公御代七付録「十月六日出火、御侍屋敷焼失之覚」『土佐国史料集成 南路志』第七卷 高知県立図書館 平成6年
- 4) 火災に伴う焼土層としては、西弘小路遺跡平成19年度調査で、近世の遺物包含層II層の最上面から20cm程下位の面で、享保12年（1727）大火に伴うと推定される焼土層が数箇所で確認されている。『西弘小路遺跡－総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2010年
- 5)「新馬場」新設の時期については、『皆山集』に、「嘉永二年五月初テ馬場トナル東西八間南北九十六間」とあり、嘉永2年（1849）に設けられたとされている。『皆山集』「高知市街誌稿」『土佐之国史料類纂 皆山集』第九卷 高知県立図書館 昭和50年
- 6) 昭和30年の営林局施設配置図面との照合から、当時の営林局事務所に隣接する石列と推定される。石列の上面は現在の道路面とほぼ同じレベルにあたっている。



1群：17世紀末以前



2群：17世紀末



3群：19世紀前半

Fig.123 高知城跡内堀跡西側地区検出遺構の分布と変遷 (S=1/400)

## 第3節 高知城跡内堀跡西側地区出土遺物の様相

### はじめに

今回の調査では、江戸前期から後期にかけての遺構が検出されており、土坑出土の良好な一括資料が得られている。中でも17世紀末と19世紀前半の2時期は、遺物廃棄量、土坑の検出数とともに急増しており、本遺跡の性格が大きく変化する画期である。

本調査区が立地する西内堀外縁は、17世紀まで侍屋敷となっていたが、17世紀末以後は広小路と堀縁の緑地に転じ、その後19世紀中葉に馬場が新設されている。またその間にも、元禄11年（1698）と享保12年（1727）に大火災に見舞われ、周辺の景観が大きく変化したことは、前節にて触れた通りである。これらの動きは絵図や文献によってつかむことができるが、さらに今次調査で得られた出土資料には、遺物所有者の生活様式や当時の商品流通のあり方など、その実態像を伝える多くの情報が含まれている。

本節では、各期の遺構に含まれる陶磁器、土器の組成上の特質を検討し、検出遺構の性格や、遺物所有者の生活様式と経済力、遺物の使用場面等を知る手掛かりとしたい。また、近年までに報告された城下町遺跡出土資料とも対比させながら、遺物所有者の性格や使用場面の違いによって、陶磁器、土器の所有のあり方にどのような違いが現れるのかについても検討したい。

### 1. 17世紀後半の様相

今次調査区においては17世紀末以前の検出遺構は極めて少なく、平成17年度調査の土坑H17-SK13、平成21年度調査の土坑H21-SK11、井戸H21-SE1を確認したのみである。これらのうち、H17-SK13は遺物量がやや少ないものの、多様な内容の陶磁器、土器、金属製品、石製品、木製品が出土しており、当時の生活様式を伝える貴重な資料が得られている。この時期の良好な一括資料は県下でも事例が少なく、その実態が分かり難かったため、ここではH17-SK13出土資料を取り上げ検討したい。

#### H17-SK13出土資料の性格

H17-SK13は平成17年度調査区の南部で検出された、平面形の長軸3.10m、短軸1.63m、深さ40cmの規模をもつ楕円形の土坑である。最下層には薄く削られた多量の木屑からなる堆積層があり、その他の埋土中にも木屑や加工木片が多く含まれている。また木屑に混じって瓦片約70点と、少量の陶磁器、土器、金属製品、石製品、木製品が出土している。こうした検出状況からみてH17-SK13は、建築部材その他木製品の加工によって生じる木屑や瓦片の処理を目的とした廃棄土坑と考えられ、これに併せて、日常生活の塵が捨てられたと思われる。H17-SK13掘削の背景については、木屑、瓦片の出土からみて、近辺での建築物の改修などの事象が想像されるが、限定された検出状況からの特定は難しい。

H17-SK13出土資料には17世紀前半から後半にかけての陶磁器が含まれており、1653年以降生産を開始する尾戸窯の碗（768）や、17世紀第4四半期に生産された肥前産の刷毛目碗（767）も出土している。こうした内容からみて、H17-SK13の廃絶年代は17世紀第4四半期と捉えられる。

次に、H17-SK13の遺物所有者についてであるが、第1節での検証によって、本調査地点では安藤氏の屋敷が所在したことが明らかになっており、「安藤藤十郎」屋敷が元禄11年大火に焼失している。<sup>(註1)</sup> 安藤氏については不明なところが多いが、万治3年（1660）から寛文2年（1662）にかけての記録では知行200～300石となっている。<sup>(註2)</sup>

### 陶磁器、土器の組成と特徴

H17-SK13出土遺物における陶磁器、土器の器種別出土点数<sup>(註3)</sup>と組成比はTab.55に示した通りである。出土点数が少ないため、組成比についてはその傾向を大まかに捉えるにとどめるが、これによると、土師質土器小皿が50.9%と最も多く、これに陶磁器の皿が21.8%、碗が16.4%と続き、その他、向付、瓶、壺、土師質土器の皿又は椀が出土している。用途としては、土師質土器小皿以外では、碗、皿、向付などからなる供膳具が40.0%、瓶、壺からなる貯蔵具が5.4%となっている。

次に陶磁器を生産地別にみると、磁器では肥前の製品が多数を占め、これに中国景德鎮窯系の青花が少量含まれる。陶器ではやはり肥前が最も多く、その他に備前、美濃、京都、在地の尾戸窯の製品が含まれている。各地の特徴的な製品についてみると、肥前産磁器では、初期伊万里の碗（759・760）、染付瓶（765）がある。このうち、碗（759）は百間窯の製品の可能性があるもので、特殊な形態の碗である。肥前産陶器では日用品的性格の強い唐津系灰釉陶器の小皿（769・770・772・773）が10点出土しているが、この他にも、白化粧土刷毛目を施した砂目積みの小皿（771）、白化粧土刷毛目の碗（767）がある。その他、鉄鋸による文様を描いた京焼の碗（766）、尾戸焼の碗（768）、織部焼の向付（774）、中国景德鎮窯系の青花碗（761・762）、青花皿（763）も出土している。

上記のうちで、茶の湯に関連する道具としては、古染付の碗（761）、京焼の碗などがある。また織部焼の向付、中国景德鎮窯系の青花碗、青花皿などの食器は、茶の湯の懐石用食器や、要応の器に用いられたとみられるものである。

この他にも、木製品の漆椀（782）、漆の匙（783）、箸（786～792）、桶又は曲物（793・794）、下駄（795～797）、鉄製の包丁（803）など、食事や調理その他様々な生活の場面で使用する道具がみられた。また、銅製の煙管（802）、碁石（801）もあり、上級武士の生活を彩る多様な生活道具が認められている。

最後に、H17-SK13からは瓦片が多く出土しており、この中に桐紋の棟飾り瓦3点（804～806）が含まれていた。桐紋瓦は何れも胎土が粗く、表面の炭素吸着が不十分なもので、16世紀末～17世紀前葉に生産された瓦の特徴をもつものであった。また、その他の瓦片についても同様の特徴をもつものである。<sup>(註4)</sup> 桐紋の棟飾り瓦は、西弘小路遺跡<sup>(註5)</sup>でも出土している。西弘小路遺跡は内堀西側の南北筋に面した待屋敷跡で、今次調査区のすぐ西側にあたる地点であるが、ここでは桐紋瓦が17世紀末の土坑内から出土し、3点がまとまって出土している。小片のため同范瓦かどうかの判断はできないが、胎土、焼成特徴は何れも今次出土資料と共通したものである。この他、城内からの桐紋瓦の出土例として、平成16年度に行われた高知城三ノ丸跡の試掘調査で、石垣裏込の堆積層内から桐紋軒丸瓦1点が出土したことが報告されている。<sup>(註6)</sup>

## 2. 17世紀末の様相

この時期の検出遺構で特徴的なものとしては、平成17年度調査のH17-SK3・4、平成21年度調査のH21-SK2～4・7・8・10・12・13、17世紀に機能しその後17世紀末に廃絶したH21-SE1が挙げられる。これらの遺構は埋土特徵や被熱遺物の出土などから、火災直後の廃絶遺構であった可能性が考えられるものである。ここでは、当火災関連遺構の出土資料を取り上げ、その性格や組成上の特徴について検討を行いたい。

### H17-SK3・4、H21-SK2～4・7・8・10・12・13出土資料の性格

H17-SK3・4はともに埋土中に焼土と硬化した焼土塊、炭化物を多く含んでおり、被熱し変質した陶磁器、土器、変色した瓦片が多量に出土することから、焼失した建物の瓦や焼け出された道具類の処理を目的とした廃棄土坑と考えられるものである。

同じく、H21-SK2～4・7・8・10・12・13も埋土中に焼土や焼土塊、被熱した遺物を含んでおり、火災後の廃絶遺構群と捉えられるものである。土坑は何れも大型であるが、遺物の包含量が少ないため、塵の廃棄を直接的な目的とした廃棄土坑であったのか、その用途を特定し難い。しかし、埋土及び出土遺物の内容からみて、火災に関連した処理遺構と捉えておきたい。

これらの遺構の時期についてであるが、17世紀後半を主体とする肥前産陶磁器が出土し、17世紀末以降に生産された肥前製品の出土を認めないことや、その他の生産地製品についても17世紀までの製品で構成されていることからみて、城下町の多くが焼失し内堀西側一帯の侍屋敷も被害を受けた元禄11年（1698）の大火灾に伴う可能性が高い。

また第1節にて触れたように、平成17・21年度調査区はこの時、安藤藤十郎と長屋彦太夫の屋敷地となっており、ともに元禄11年の火災によって焼失している。そのため本出土資料群については両氏に関わる侍屋敷からの廃棄遺物であった可能性が挙げられる。安藤氏、長屋氏の屋敷は元禄11年の大火以後撤去され、内堀西側の敷地から姿を消すこととなるが、この時に廃絶したとみられる井戸H21-SE1と廃棄土坑H17-SK3では、揃い又は同一個体となる染付碗の破片（63・1026）が出土しており、火災の直後には、H17-SK3・4、H21-SK2～4・7・8・10・12・13、H21-SE1への廃棄が屋敷地の境界を越えて行われたことが窺われる。

### 陶磁器、土器の器種組成

ここでは、良好な一括資料が得られたH17-SK3・4、H21-SK4出土資料を取り上げる。

H17-SK3・4、H21-SK4出土資料の陶磁器、土器の器種別出土点数と組成比はTab.56に示した通りである。これによると、H17-SK3出土資料では、土師質土器小皿が58.8%、壺と甕が11.8%、擂鉢が8.8%が多く、これに碗、小杯、皿、鉢、瓶が加わっている。また、H17-SK4出土資料では、土師質土器小皿が80.7%、壺と甕が9.5%、土師質土器鉢が4.1%、土師質土器中皿が2.0%で、これに碗、皿、鉢、瓶、蓋物が少量加わっている。一方、H21-SK4出土資料では、土師質土器小皿が34.7%、陶磁器の皿が33.2%、碗が13.5%、壺と甕が52%となり、これに小杯、鉢、猪口、擂鉢、瓶、水注、蓋物、香炉、土師質土器中皿が加わっている。

器種構成をみると、陶磁器では供膳具の碗、小杯、皿、鉢、猪口、調理具では擂鉢、貯蔵具では壺、甕、その他、瓶、水注、蓋物、段重等の器種が含まれているが、後に触れる江戸後期の廃棄資料と

比較すると器種が乏しい。また、土師質土器小皿の出土比率が突出して高いことも、H17-SK3・4、H21-SK4出土資料全てに共通した特徴である。

その他、注目すべきこととして、H17-SK3・4出土資料においては、土師質土器小皿が58.8%と80.7%、壺と甕が11.8%と9.5%となっており、双方とも土師質土器小皿と壺、甕の占める割合が非常に高い。特にH17-SK4では土師質土器小皿が239個体、磁器の壺が16個体、陶器の壺と甕が12個体、壺蓋が18点出土しており、径3m前後の土坑にもかかわらず遺物廃棄量が突出して多くなっている。一方、H21-SK4では、やはり土師質土器小皿が多いが、その比率は34.7%にとどまり、碗、皿、鉢、猪口などからなる供膳具の比率が高くなっている。

#### H17-SK3・4、H21-SK4器種組成の特質

こうした内容から、各土坑のどのような特質が読み取れるのだろうか。ここで対比資料として、17世紀末の上級武士の屋敷跡の廃棄資料である西弘小路遺跡SK3出土資料<sup>(註7)</sup>を取り上げながら、比較検討し、今次資料の性格について考えてみたい。

西弘小路遺跡SK3出土資料における陶磁器、土器の器種別出土点数と組成比はTab.57に示した通りである。これによると、西弘小路遺跡SK3では、陶磁器の碗が27.3%、皿が28.4%と、碗、皿の出土比率が最も高く、これに土師質土器小皿が25.3%と続いている。その他の器種では、小杯、鉢、猪口、擂鉢、捏鉢、焙烙、瓶、壺、甕、蓋物、火鉢、灯明受皿、香炉、火入、人形、土師質土器小皿、焼塩壺などが出土している。

双方を比較すると、上級武士の屋敷地からの廃棄資料である西弘小路遺跡SK3では、供膳具、調理具、貯蔵具の他に、火鉢、灯明受皿、香炉、火入、人形、焼塩壺などからなる豊富な生活用具が認められているが、高知城跡H17-SK3・4、H21-SK4出土資料では、同じく侍屋敷からの廃棄遺物であるにもかかわらず、全体に器種が乏しい傾向がみえる。特にH17-SK3・4で土師質土器小皿と壺、甕の比率が極めて高かったことは先に触れた通りで、西弘小路遺跡の廃棄資料とは様相が大きく異なっている。また、H17-SK4から出土した磁器壺には、国内での流通が稀な染付の蓋付壺など、稀少の価値をもつ上質の肥前産磁器が多数含まれていた。こうした内容からみて、H17-SK3・4については、土器小皿と上質の壺、甕を保管する蔵などが焼失した際の廃棄遺物であった可能性が想定できる。

一方、H21-SK4では土師質土器小皿と壺、甕が多いとはいえ、特に際立ってはおらず、供膳具その他の器種の組成比も西弘小路遺跡SK3の様相にやや近い。従って、H17-SK3・4とは別の性格をもつ場所からの廃棄物であったと思われる。

この様に、今次調査区の火災関連土坑群では、遺構によって遺物組成に異なる特徴が認められており、焼け出された建物の性格によって廃棄遺物の内容に差が生じていることが窺われる。

#### 各生産地製品の内容

次に、H21-SK4における陶磁器の生産地別組成についてもみてみたい。(Tab.58) それによると、磁器では肥前の製品が86.3%を占め、この他に中国産の青花が13.7%含まれている。また、陶器では、肥前の製品が30.0%と最も多く、他に在地の尾戸窯が10.0%、京都又は京都系が3.3%、備前が16.7%、在地系又は産地不明が40.0%となっている。このうち尾戸窯の製品では、灰釉の水注(937)

Tab.55 H17-SK13出土遺物の器種別出土点数と組成比

	磁器	陶器	土師質土器	出土点数計	組成比
中碗	2	2		4	16.4%
小碗		1		1	
碗	4			4	
中皿	1			1	21.8%
小皿	1	10		11	
向付		1		1	
瓶	1	1		2	3.6%
壺		1		1	1.8%
土師質土器小皿			28	28	50.9%
土師質土器皿又は椀			1	1	1.8%
器種不明	1			1	1.8%
計	10	16	29	55	99.9%

Tab.56 H17-SK3・4、H21-SK4出土遺物の器種別出土点数と組成比

	H17-SK3					H17-SK4					H21-SK4				
	磁器	陶器	土器	出土点数計	組成比	磁器	陶器	土器	出土点数計	組成比	磁器	陶器	土器	出土点数計	組成比
中碗	1		1		5.9%	2	2		4	14%	18	6		24	13.5%
小碗	1		1								2			2	
小杯	1		1	29%							3			3	1.6%
中皿											2	1		3	
小皿・五寸皿	1		1	29%	1	1		2		0.7%	34	7		41	33.2%
皿(法量不明)											20			20	
鉢	1		1	29%	1			1	0.3%	4	2		6	3.1%	
猪口											1			1	0.5%
搖鉢	3		3	8.8%							3			3	1.6%
瓶	1		1	29%	2			2	0.7%	3			3	1.6%	
水注											1			1	0.5%
壺・壺	1	3	4	11.8%	16	12		28	9.5%	1	9		10	5.2%	
蓋物						1		1	0.3%	3			3	1.6%	
香炉											1			1	0.5%
土師質土器小皿		20	20	58.8%		239	239		80.7%		67	67		67	34.7%
土師質土器中皿						6	6		20%		1	1		1	0.5%
土師質土器鉢						12	12		4.1%						
器種不明		1	1	2.9%		1	1		0.3%	3	1		4	2.1%	
計	7	7	20	34	99.8%	23	15	258	100.0%	95	30	68	193	100.2%	

Tab.57 西弘小路遺跡SK3出土遺物の器種別出土点数と組成比

	磁器	陶器	土器	出土点数計	組成比
中碗	56	64		120	27.3%
小碗	25	2		27	
小杯	22			22	
大皿		2		2	4.1%
中皿	10	10		20	
小皿・五寸皿	70	57		127	
皿(法量不明)	4			4	28.4%
鉢	3	5		8	
猪口	8			8	
擂鉢		16		16	3.0%
捏鉢		3		3	0.6%
培塔			1	1	0.2%
瓶	6	6		12	2.2%
壺・甕	3	4		7	1.3%
蓋物	2	1		3	0.6%
火鉢			1	1	0.2%
灯明受皿		2		2	0.4%
香炉		2		2	0.4%
火入又は香炉		1		1	0.2%
人形	1			1	0.2%
土師質土器小皿			136	136	25.3%
焼塙壺			1	1	0.2%
器種不明	3	11		14	2.6%
計	213	186	139	538	100.2%

Tab.58 H21-SK4陶磁器の生産地別出土点数と組成比

	磁器			陶器					
	肥前產	中国	磁器計	尾戸	肥前產	京都・京都系	備前	在地系・不明	陶器計
中碗	18		18	1	3	1		1	6
小碗	2		2						
小杯	3		3						
皿	43	13	54		4			4	8
鉢	4		4		2				2
猪口	1		1						
擂鉢						3		3	
瓶	3		3						
水注				1					1
壺・甕	1		1				2	7	9
蓋物	3		3						
香炉	1		1						
器種不明	3		3	1					1
点數計	82	13	95	3	9	1	5	12	30
組成比	86.3	13.7	100.0	10.0	30.0	3.3	16.7	40.0	100.0
%	%	%	%	%	%	%	%	%	%

が出土している。

この他、今回の火災関連廃棄資料のうちで特に注目されるものには、H17-SK4から出土した貯蔵具的一群がある。の中には、肥前で生産された染付壺(81・82・91・100～103)、青磁壺(84)、白磁壺(85・86・88・90)、染付又は白磁の壺蓋(92～99)など、上質の製品が含まれている。また、陶器の壺(105～107・113・114)でもやはり肥前の製品が多く、緑釉の壺(105・106・113)、花唐草の浮文を貼付した二彩手の壺(107)、緑釉又は二彩手の壺(114)など、17世紀第2・3四半期に肥前武雄で生産された装飾性の強い壺が含まれている。壺では、肥前産の鉄釉壺(115・116)、備前の大壺(117～121)などが認められる。

また、H17-SK4では土師質土器の内容についても特徴がみられた。出土した小皿は、殆どが口径10～13cm前後の大振りのタイプで構成されており、形態にも規格性が認められている。その中には、褐色系の胎土であるが、ロクロ成形の後、外底にナデ調整、体部に回転ケズリや静止ナデ調整を施しているタイプの小皿(124～128他)があり、尾戸窯の白土器小皿と同じ形態や成形、調整上の特徴をもつことから、尾戸窯の製品とみられる。またH17-SK4出土の鉢(146～150)についても、同様の成形、調整痕をもち、尾戸窯の製品と考えられるものである。その他の土師質土器小皿については、生産地の特定ができなかったが、藩窯である尾戸窯の土器製品が一定量入っていることが明らかとなった。

### 3. 19世紀前半の様相

19世紀の廃棄遺構には、平成17年度調査のH17-SK1・2・5～12、平成21年度調査のH21-SK1、H21-瓦溜1～5などがあり、検出遺構数、廃棄遺物量ともに多くなっている。中でも、H17-SK6～12では遺構間で出土遺物片の接合関係が認められ、遺物廃棄が同時期に行われたと考えられる一群である。以下では、良好な一括廃棄資料が得られたH17-SK6～12出土資料をもとに検討を行いたい。

#### H17-SK6～12出土資料の性格

H17-SK6～12は、大型の不整形土坑の中に、陶磁器、土器、石製品、金属製品、ガラス製品、木製品、瓦片等の遺物が多量に廃棄されているものである。H17-SK6～12は近接して分布しているが、各土坑間で出土遺物片の接合関係が成り立っており、同地点から出た不要品と瓦が複数の土坑内に一括廃棄されたことが推察される。その廃棄遺物の内容をみると、陶磁器、土器その他からなる道具類の他に、瓦片や板材などの建築部材も多く含まれており、施設や屋敷の移転など、建物の解体を伴う事象に際した塵の廃棄と考えられる。

その廃棄の年代については、H17-SK10・12出土遺物中に「文政三年」の年号を描いた染付薄手酒杯(436・625)が含まれることから、1820年代後半以降と捉えられる。また、能茶山窯<sup>(33)</sup>産の磁器製品は、1836年以降に銘の使用が一般化して量産品の販売が進められ、19世紀中葉には城下への普及が急速に高まるのであるが、H17-SK6～12出土資料では能茶山窯産磁器の出土が認めにくく、肥前・瀬戸・美濃その他の生産地製品のあり方についても、19世紀中葉以前の様相がみられている。このため、H17-SK6～12出土資料の年代観については19世紀前半、特に1820年代以降19世紀中葉

以前と捉えておきたい。

また前節にて触れたように、内堀西側の一帯では、19世紀、中でも19世紀第2四半期から幕末にかけて藩の施設の新設などの動きが著しく、南に近接する堀南西隅外側の敷地には「御番所」とされる施設が設けられ、本調査地点が立地する内堀西側の一画も1849年以降「新馬場」が設けられるなど、大きな動きがあった。景観が変化し、建物の撤去や役所の改修等があったとみられるこの時期には、それに伴う大量の瓦や塵の廃棄が各所で行われたのではないだろうか。

本調査地点は当時、内堀西側の広小路の一画にあった。広小路の東側部分に掘削された土坑の廃棄物がどこからもたらされたのかという問題については、先の推察から、近隣の藩関連施設の新設や撤去などに関連して生じた塵の廃棄等が考えられるが、根拠となる記録が無く、推定の域を出ない。そこで以下では、H17-SK6～12出土資料の遺物組成を検討し、その特質から推定できる遺物所有者像及び使用施設の性格についても言及したい。

#### H17-SK6～12出土資料の器種組成と特質

H17-SK6～12出土資料における器種別出土点数と組成比はTab.59に示した通りである。これによると、器種では碗が28.9%と最も多く、これに皿8.3%、灯明受皿7.6%、土師質土器小皿6.1%、土瓶と急須4.7%、紅皿4.7%、小杯4.5%、鍋4.2%、焜炉3.5%、焼塙壺3.4%と続く。この他、鉢、猪口、盃台、擂鉢、捏鉢、片口、釜、培烙、胡麻煎り、燭徳利、瓶、水注、瓶、壺、甕、蓋物、火消し壺、竈、火鉢、ひょうそく、火入又は香炉、仏飯器、仏花瓶、花生、髪油壺、餐水入れ、合子、段重、水滴、灰吹き又は火入、柄杓、飼猪口、鳥の水入れ、植木鉢、水鉢、人形、ミニチュア、土師質土器椀・杯・鉢・中皿など、多様な用途の陶磁器と土器が認められている。

これらH17-SK6～12出土資料の遺物組成の特質を捉えるうえで、対比資料として、同じく19世紀の上級～中級武士の屋敷跡の一括廃棄資料である西弘小路遺跡SK84、金子橋遺跡SK2～4・6・7・9の組成データ<sup>(39)</sup>を取り上げ、比較検討してみたい。(Tab.59) それによると、各資料とも認められる器種の種類については大差がなく、供膳具、調理具、貯蔵具、その他多様な用途の器種が一様に認められた。しかし、西弘小路遺跡と金子橋遺跡出土資料では、碗、皿、鉢、猪口などからなる供膳具と土師質土器小皿が多く、その他の器種では、西弘小路遺跡で灯明受皿、擂鉢、鍋、瓶、土瓶がやや多いが、突出して多いものは認められない。

そこでH17-SK6～12出土資料に多くあり、西弘小路遺跡と金子橋遺跡出土資料に少ない器種についてみてみたい。まず、焼塙壺についてはH17-SK6～12出土資料では3.4%を占めるが、西弘小路遺跡SK84、金子橋遺跡SK2～4・6・7・9出土資料では共に0%であり、遺跡全体を通して、西弘小路遺跡では4点、金子橋遺跡では未確認と、確認数が非常に少なかった。対して、H17-SK6～12では焼塙壺の身が69点、蓋が46点出土しており、焼塙壺の出土数が非常に多い。灯明受皿についても、H17-SK6～12出土資料では7.6%、西弘小路遺跡出土資料では3.6%、金子橋遺跡出土資料では23%で、やはりH17-SK6～12での多さが際立っている。その他、鍋、土瓶、焜炉も多く、鍋ではH17-SK6～12が4.2%、西弘小路遺跡が2.8%、金子橋遺跡が0.6%、土瓶ではH17-SK6～12が4.7%、西弘小路遺跡が2.6%、金子橋遺跡が0.3%、焜炉ではH17-SK6～12が3.5%、西弘小路遺跡が2.2%、金子橋遺跡が1.2%と違いが表れている。

Tab.59 H17-SK6～12、西弘小路遺跡SK84、金子橋遺跡SK2～4・6・7・9出土遺物の器種別出土点数と組成比

	高知城跡H17～SK6～12				西弘小路遺跡SK84		金子橋遺跡SK2～4・6・7・9		
	磁器	陶器	土器	出土点数計	組成比	出土点数計	組成比	出土点数計	組成比
大甌	5			5					
中甌	248	187		435	28.9%	215	32.9%	139	27.6%
小甌	92	49		141		95		62	
小杯・酒杯	73	18		91	4.5%	53	5.6%	42	5.8%
大皿		1		1		2			
中皿	2	7		9	8.3%	8	14.5%	12	12.2%
小皿・五寸皿	135	24		159		127		76	
鉢	19	11		30	1.5%	33	3.5%	16	2.2%
猪口	5	1		6	0.3%	18	1.9%	23	3.2%
壺台			1	1	0.1%				
搖鉢	33			33	1.6%	26	2.8%	21	2.9%
捏鉢・片口	16			16	0.8%	8	0.9%	10	1.4%
鍋	81	4		85	4.2%	26	2.8%	4	0.6%
釜			11	11	0.5%	2	0.2%		
培塔	33			33	1.6%	11	1.2%	4	0.6%
胡麻煎り		2		2	0.1%	5	0.5%		
土瓶・急須	93	1		94	4.7%	25	2.6%	2	0.3%
彌徳利	6			6	0.3%	1	0.1%		
瓶(徳利・その他)	14	16		30	1.5%	26	2.8%	12	1.7%
水注	8	2		10	0.5%	6	0.6%	1	0.1%
茶入								1	0.1%
壺・壺	31			31	1.5%	23	2.4%	15	2.1%
蓋物	32	19		51	2.5%	20	2.1%	12	1.7%
焼塙壺			69	69	3.4%				
火消し壺		1		1	0.1%	3	0.3%		
焜炉	1	69		70	3.5%	21	2.2%	9	1.2%
竈		1		1	0.1%	5	0.5%		
火鉢	28	11		39	1.9%	9	1.0%	5	0.7%
灯明受皿	153			153	7.6%	34	3.6%	17	2.3%
ひょうそく	2			2	0.1%			3	0.4%
火入又は香炉	3	9		12	0.6%	6	0.6%	4	0.6%
仏龕臺	1			1	0.1%	3	0.3%	1	0.1%
仏龕瓶	1			1	0.1%				
神酒徳利						6	0.6%		
花生		2		2	0.1%				
紅皿	95			95	4.7%	15	1.6%	7	1.0%
うがい茶碗						1	0.1%	4	0.6%
髪油壺	3			3	0.1%	5	0.5%	4	0.6%
髪水入れ	1			1	0.1%			1	0.1%
合子	4			4	0.2%	6	0.6%	1	0.1%
段重	2			2	0.1%	11	1.2%		
水滴	1			1	0.1%	2	0.2%	7	1.0%
筆筒								1	0.1%
灰吹き又は火入		1		1	0.1%	2	0.2%	8	1.1%
炳杓		1		1	0.1%	4	0.4%		
餌猪口・鳥の水入れ	1	15		16	0.8%	5	0.5%	2	0.3%
植木鉢・水鉢	1	14		15	0.7%	6	0.6%		
人形・ミニチュア・泥面子・型		5	40	45	2.2%	8	0.8%	7	1.0%
土師質土器小皿			123	123	6.1%	41	4.3%	179	24.7%
土師質土器・杯・鉢			10	10	0.5%	4	0.4%	4	0.6%
土師質土器中皿			47	47	2.3%				
器種不明	1	12	1	14	0.7%	17	1.8%	10	1.4%
計	739	844	426	2009	99.9%	944	99.7%	726	100.4%

Tab.60 H17-SK6~12陶磁器の生産地別出土点数と組成比

	磁器						陶器									
	肥前窯・肥前系	瀬戸・美濃	関西系	中国	磁器計	尾戸	尾戸又は能茶山	能茶山	肥前窯・肥前系	瀬戸・美濃	京都・京都系	備前	堺・明石	その他関西	在地系・不明	陶器計
大碗・中碗	199	54			253	165			5	9					8	187
小碗	67	24	1		92	15				1	31			1	1	49
小杯	73					73	1				9				8	18
皿	136		1	137	7	6	3	4	3					9	32	
鉢	19				19	6								5	11	
猪口	5				5									1	1	
擂鉢												1	32		33	
捏鉢・片口									5	1					10	16
鍋						49	3								29	81
土瓶・急須							1								92	93
調味利											1				5	6
瓶・徳利	14			14	2	1	2			1					10	16
水注						1									7	8
盃・羹							4	1					12	14	31	
蓋物	32			32					1	16					2	19
提灯・火鉢									25						4	29
灯受明祖						1	1			149					2	153
ひょうそく															2	2
火入又は香炉	3			3											9	9
仏飯器	1			1												
仏花瓶	1			1												
花生					2										2	
紅皿	95			95												
うかい茶碗																
髪油壺	3			3												
髪水入れ	1			1												
合子・段重	6			6												
本滴・筆筒	1			1												
灰吹き又は火入													1	1		
柄杓												1			1	
瓶鉢・鳥の水入れ	1			1	8	2									5	15
植木鉢・水鉢	1			1						11					3	14
ミニチュア															5	5
不明	1			1	3	2						1			6	12
点数計	659	78	1	1	739	210	65	11	14	52	207	2	32	13	238	844
組成比	892	106	0.1	0.1	1000	249	77	13	17	62	245	0.2	38	15	282	1000
%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	

その他に、器種組成以外にも視点を移すと、各遺跡ともに供膳具の出土比率が高いものの、その内容には違いが生じている。まず西弘小路遺跡と金子橋遺跡出土資料では、色絵磁器や色絵陶器、染付の望月碗など、上質の製品が多く含まれ、鉢、猪口、蓋台などの種類も豊かであった。一方、H17-SK6～12出土資料では、碗と皿が突出して多く、器種のバリエーションが乏しい傾向がある。また、量産品が殆どで、高級品は確認できていない。その他、文房具や調度品についても、西弘小路遺跡と金子橋遺跡では、赤絵や金彩を施した磁器製品などの上質ランクの陶磁器や、嗜好性の高い製品が所有されていたのに対して、H17-SK6～12ではそういう性格の陶磁器は認められず、实用に即した日用品で構成されている。

また、侍屋敷の撤去に伴う廃棄資料では一般に、伝世品の所持などによって廃棄遺物の年代幅が大きくなる傾向があるが、H17-SK6～12では19世紀前半代の製品が大多数を占め、比較的短期間の使用品が廃棄されている点にも違いがみられている。

焼塙壺、鍋、土瓶、焜炉、灯明受皿などの特定器種の多さ、日用品で構成された製品内容など、H17-SK6～12出土資料に認められるいくつかの特徴は、遺物が使用された場所の性格を反映したものとみられる。遺跡の性格が出土遺物の内容にどの様に反映されてくるかという問題について、他遺跡での事例を参考にすると、江戸の加賀藩邸の詰入空間や役所に関わる廃棄資料において、碗、皿、土瓶が多い、墨書きを伴う遺物が多い、セットで揃えた物が認められる、などの特徴が報告されている。また、同報告では、安価で画一性の感じられる遺物内容から配給品のようなものと推定され、役所で使用されたり、詰入達に支給された後に廃棄されたものではないかとの推定がなされている。<sup>(註10)</sup>

上述の内容をふまえながら、H17-SK6～12出土資料についてその特徴をまとめてみると、組成に侍屋敷での出土資料との違いが認められ、近隣の侍屋敷からもたらされた廃棄遺物とは考え難い。そして、器種組成や製品内容に認められる幾つかの特徴は、役所や侍の詰め所等の空間で使用された出土資料に近く、H17-SK6～12出土資料については、藩に関連する施設からの廃棄遺物と捉えるのが妥当であろう。焼塙壺、鍋、土瓶、焜炉、灯明受皿などの一部器種の出土点数の多さからは、施設におけるこれら器種の使用頻度の多さが推察される。そして、各製品の内容から、安価な碗や小皿を多用した食事、小碗と土瓶を用いた喫茶、移動可能な小型の加熱器具である焜炉に鍋や土瓶を掛けた調理方法など、その場所での生活形態も想像される。また、今回の出土資料では紅皿の多さも目立っており、女性の存在も暗示されている。

#### 各生産地製品及び在地窯製品の需要

次に陶磁器の生産地別組成<sup>(註11)</sup>をみると (Tab.60)、磁器では肥前産・肥前系が89.2%と最も高く、この他、瀬戸・美濃産磁器が10.6%、関西系磁器が0.1%、中国景德鎮窯系の青花が0.1%含まれる。陶器では、在地の尾戸窯が24.9%、尾戸窯又は能茶山窯が7.7%、能茶山窯が1.3%確認されており、その他、京都・京都系が24.5%、瀬戸・美濃が6.2%、肥前産・肥前系が1.7%、備前が0.2%、堺・明石系が3.8%、その他関西の諸窯が1.5%となっている。なお、能茶山磁器窯の製品については、藩窯が1820年に操業を開始しているため、すでに流通している可能性があるが、銘を持たない資料の同定が困難であったため、肥前系磁器としたものの中に含まれている可能性がある。また、能茶山

陶器窯を含めて、在地の陶器窯製品についても同定が困難なものが多く、産地不明としたものの中に多く含まれているとみられる。

上記の内容をみると、H17-SK6～12出土資料では、多様な生産地の製品が含まれている点に17世紀までの出土資料との違いがみえる。その他、今回、土器の生産地については触れなかつたが、焙烙、焜炉、燒塗壺では関西産の製品が多く認められており、商品流通における関西とのつながりの深さが窺われる。

また、陶器では尾戸窯<sup>(註12)</sup> 製品の多さが目立っており、碗が最も多く、他に小杯(604)、皿(371・487・488・660)、鉢(250・251・372・494)、猪口(496)、瓶・瓶類(269・517)、水注類(379)、花生(188・676・677)、鳥の水入れ(688)などの器種が認められている。特に碗では、飯碗とみられる丸形碗(174・654・655)、広東形中碗(173)、端反形中碗(247・364・602)、茶碗、湯飲み碗、飯碗等の用途が特定し難い器高の高い丸形碗、筒丸形碗、腰張形碗、端反形碗等(244～246・365・400・471～481・603・645～651・653)があり、後者の碗が特に多い。H17-SK6～12出土資料の尾戸窯碗の出土量は、西弘小路遺跡、金子橋遺跡と比較しても極めて多いが、ここには、藩の施設において藩窯製品の支給があったなど、尾戸窯の碗が多く需要される理由が介在していたのかもしれない。

#### 4. 出土遺物にみる高知城跡内堀跡西側地区の特質

ここまで、17世紀後半、17世紀末、19世紀前半の遺構出土資料を検討し、遺物組成とその特徴をみてきた。本調査区では17世紀末を境に、侍屋敷から広小路へと遺跡の性格が大きく転換しており、それとともに廃棄遺物の内容にも変化が現れた。また、江戸前期から後期までの間には、新たな器種の出現や、流通する各生産地製品の増加など、いくつかの変化が認められた。

中でも際立っていたのは、遺跡の性格の変化によってもたらされた違いである。侍屋敷からの廃棄遺物にあたるH17-SK3・4・13、H21-SK4では遺物所有者の生活形態や嗜好、藩連の施設からの廃棄遺物にあたるH17-SK6～12では使用場面や使用者の性格など、その背景にある様々な要素が遺物内容に反映されていた。

また今次出土資料では、他の侍屋敷よりも出土比率が多く、当遺跡を特徴付ける幾つかの製品が認められた。とりわけ17世紀末までの廃棄資料に含まれていた多量の土師質土器小皿や、肥前有田で生産された上質の磁器製品、茶の湯に供された古染付の碗や京焼の碗、織部焼の向付などの道具の数々は特徴的であるが、中でもH17-SK4出土の壺の一群は注目されるものであった。

この一括資料は、多量の土師質土器小皿とともに、磁器の壺16個体と壺蓋18点、陶器の壺と甕12個体が出土したもので、元禄11年の火災によって焼失した蔵等の収蔵品と推定されるものである。このうち磁器は、染付の壺と壺蓋、白磁の壺と壺蓋、青磁の壺があり、蓋が供伴することから殆どが蓋付壺とみられるものである。何れも肥前有田産の高級品で、1630～1650年代に生産された初期の染付壺蓋(94)が含まれる他は、多くが17世紀後半の製品にあたる。

近世における蓋付壺の用途としては、藏骨器や胞衣壺としての使用が知られ、武家において白磁壺を骨壺として使用した事例があるが、他に、肥前産の上質の壺を將軍家献上品の容器に使用した例も確認されている。

その他、肥前では室内装飾用の蓋付壺も生産されている。肥前の蓋付壺は17世紀後半から18世紀中葉にかけて海外輸出品として生産されたもので、主な輸出先であるヨーロッパ各地では室内の飾り壺とされた。壺は17世紀末までは染付が主流で、18世紀以降は色絵や金襷手が増加するが、これら輸出向けの壺は多くの伝世品が知られるものの、国内の消費地遺跡から出土することは少なく、今回の高知城跡のようにまとまって出土した例は稀である。当遺跡にて蓋付壺が多数所有された背景については、容器としての使用、贈答用、遺物所有者個人の壺への嗜好など、幾つかの理由が考えられるが、実態が解り難い。

上級武士層におけるこうした稀少品所有の例としては、同じく内堀西に所在する西弘小路遺跡の報告例<sup>(注13)</sup>があり、17世紀前半に中国景德鎮窯で生産された青花段重、14世紀後半～15世紀中葉に中国龍泉窯で生産された青磁瓶が、17世紀の遺構内から出土している。前者はヨーロッパ輸出向け製品のため国内での出土が稀なもので、後者の青磁壺も出土事例が沖縄首里城跡などに限定された稀少なものである。特に後者は骨董としての価値から求められたと思われるものであるが、こうした稀少な陶磁器を所有することが当時の上級武士のステータスであったのだろうか。

また前節で触れた様に、本調査区の近隣には、かつて藩主の家族が居住した下屋敷であり、その後甲斐守の居住地になったという藩の屋敷<sup>(注14)</sup>が存在していた。こうしたことからも本地点の立地上の重要性が窺われており、陶磁器所有の背景を考えるについては、その特殊な立地環境にも考慮しなければならない。

17世紀の土佐の上級武士が、どのようなルートを介して国内流通が稀な陶磁器を入手していたのか、また、こうした稀少品の所持が内堀外縁に居住する上級武士に限定されていたのかなど、幾つかの課題が残るが、今回の出土資料からは、当時の上級武士層の経済力や陶磁器への価値観が垣間見られた。近年は高知城周辺を中心に近世遺跡の発掘調査が進められているため、その実態解明につながる今後の資料の集積に期待したい。

## 謝辞

今回の報告にあたっては、肥前産陶磁器について大橋康二氏、桐紋瓦について金子智氏より貴重なご教示を賜りました。心より感謝申し上げます。

## [註]

1)『南路志』に収められた記事「十月六日出火、御侍屋敷焼失之覚」には、当時、内堀西側に屋敷があった安藤十郎と長屋彦太夫の屋敷名が見出される。『南路志』卷七十、豊昌公御代七付録。『土佐国史料集成 南路志』第七巻 高知県立図書館 平成6年

2)『皆山集』に収められた『万治三年分限帳』に「二百石 安藤宇右衛門」、『寛文二年卯正月 日 御家中侍衆分限帳』に「三百石 安東宇右衛門」との記載がみえ、万治3年(1660)から寛文2年(1662)にかけての間には、安藤氏は知行200～300石となっている。『土佐国史料類纂 皆山集』第七巻 高知県立図書館 昭和52年

3) 数値はいずれも推定個体数。個体数の算出は、口縁部点数と底部点数をもとに行った。この場合、接合不能な複数の口縁部片でも形態、調整痕、釉調、胎土等の観察から同一個体とみられるものは1個体とみなしてカウントした。また底部は同一個体の口縁部を伴わないもののみを1個体としてカウントしている。

- ただし、土器小皿については底部点数、水滴、人形、型については別個体と判断できる体部片の点数を用いた。なお、碗蓋、鍋蓋、土瓶蓋、急須蓋、壺蓋、焼塙壺蓋、火消し壺蓋、その他器種不明の蓋については、蓋と身が同一個体かどうか特定できないものがあり、個体数のカウントが重複する可能性があったため、出土点数計・組成比の項目から除外した。また窯道具も除外した。各資料の蓋の出土点数は次の通りである。H17-SK13【該当無し】、H17-SK3【器種不明蓋1点】、H17-SK4【壺蓋18点】、H21-SK4【壺蓋2点、蓋物蓋4点】、H17-SK6～12【碗蓋47点、鍋蓋2点、土瓶・急須蓋35点、蓋物蓋2点、焼塙壺蓋46点、火消し壺蓋1点、合子蓋1点、器種不明蓋4点】、西弘小路遺跡SK84【碗蓋49点、鍋蓋9点、土瓶・急須蓋11点、蓋物蓋18点、器種不明蓋2点】、金子橋遺跡SK2～4・6・7・9【碗蓋10点、蓋物蓋4点、器種不明蓋2点】  
4) 金子智氏よりご教示を得た。
- 5)『西弘小路遺跡-総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2010年  
6)『史跡高知城跡-三ノ丸石垣整備事業に伴う発掘調査報告書』高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター2010年  
7)『西弘小路遺跡出土遺物の様相』『西弘小路遺跡-総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2010年  
8) 能茶山窯は高知市の西部にある能茶山に所在する。藩の磁器窯と陶器窯は文政3年(1820)に開窯され、明治3年まで操業が続けられている。能茶山磁器窯では天保8年(1837)以降は日用雜器を主体とする生産体制へと経営の方向転換がなされ品質の低下がみられたものの、それ以前の製品には絵師の巧みな絵付けが施されたものが多く、数々の名品が伝世している。民間窯は明治以降も継続し、明治の西和田窯の頃最盛期を迎える。  
9)『金子橋遺跡出土遺物の様相』『金子橋遺跡-第六小学校屋内体育館及びプール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2008年  
10) 大貫浩子『加賀藩邸内における陶磁器消費の様相-SK01出土の遺物からみた19世紀前葉の様相』『東京大学本郷構内の遺跡 工学部1号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室2005年  
11) 信楽産陶器のうちで、京都産と識別出来ない色絵半球形碗や柄杓などは、「京都系」としてカウントした。また、尾戸窯製品については実態の分からないものがあるため、京焼と識別のつかないものを「京都系」としてカウントした。堺・明石の鋤鉢以外で、「その他の関西」とした陶器には、丹波焼の甕4点、產地不明の関西系甕8点、小杯1点が含まれる。肥前窯の陶器碗には陶胎染付碗と高台施釉の灰丸甕、瀬戸・美濃産の陶器碗には太白手碗が含まれる。  
12) 尾戸窯は高知城の北側にある尾戸戸に開かれた藩窯である。承応2年(1653)の開窯以降、贈答用の上質の陶器の他、藩用、民間販売用の陶器や土器が製作された。文政3年(1820)には藩の磁器窯と陶器窯が能茶山に開かれ、藩窯経営の主力が磁器生産に移るとともに、文政5年(1822)に尾戸の窯場も能茶山に移転する。明治4年には藩窯は廃止され、明治以降、尾戸窯は民間窯として継続されていく。  
13)『西弘小路遺跡-総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知市教育委員会2010年  
14) 同屋敷については、『皆山集』に「下屋敷 諸謀記事云 加賀爪甲斐守殿御預ニ成御屋敷門の西今の廣小路杉垣の辺ニ御屋敷ありしと也此屋敷甲斐守殿居住の為ニ立たるニあらず先年より御下屋敷と号し御末子様方御住被成ため其時明キ居たる故甲斐守殿を御差置被成たると也元様戊寅の大火灾ニ焼失し跡廣小路に成けると云 韓川筆話云御屋敷の西杉のある所もと山内式部様の御邸なりしにおかれたり云々』とある。『皆山集』『高知市沿革地図説』『土佐之国史料類纂 皆山集』第九巻 高知県立図書館 昭和50年

写 真 図 版  
平成17年度調査





調査区遠景（西より）



調査区遠景（下面検出遺構調査時、北より）



上面検出遺構完掘状況（東より）



下面検出遺構完掘状況（北より）



調査区北壁



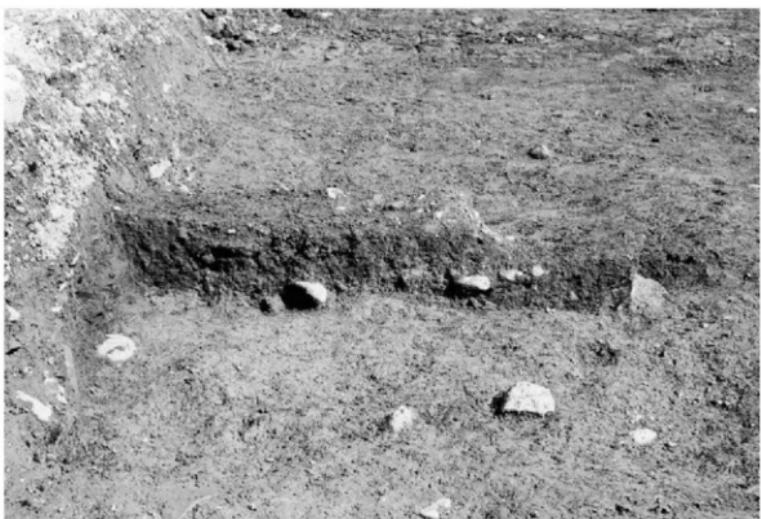
調査区南壁



SK4 遺物出土状況（西より）



SK4 セクション



SK3 セクション (東より)



SK6 セクション (北より)



SK7 遺物出土状況



SK7 完掘状況（東より）



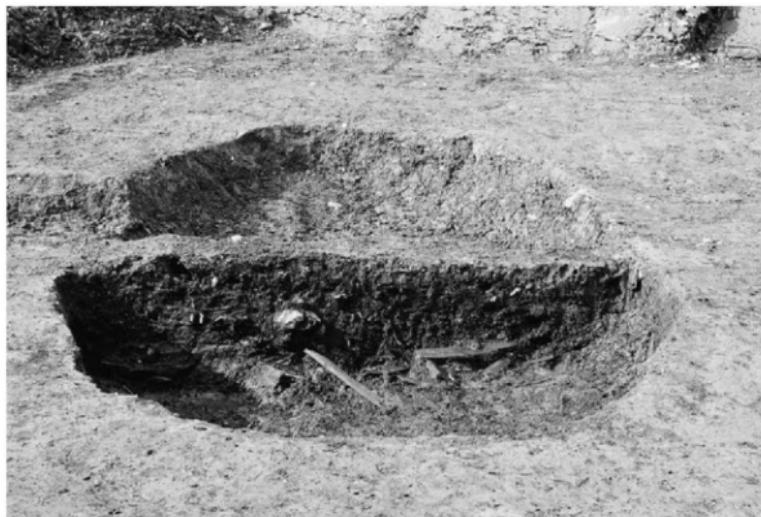
SK12 遺物出土状況



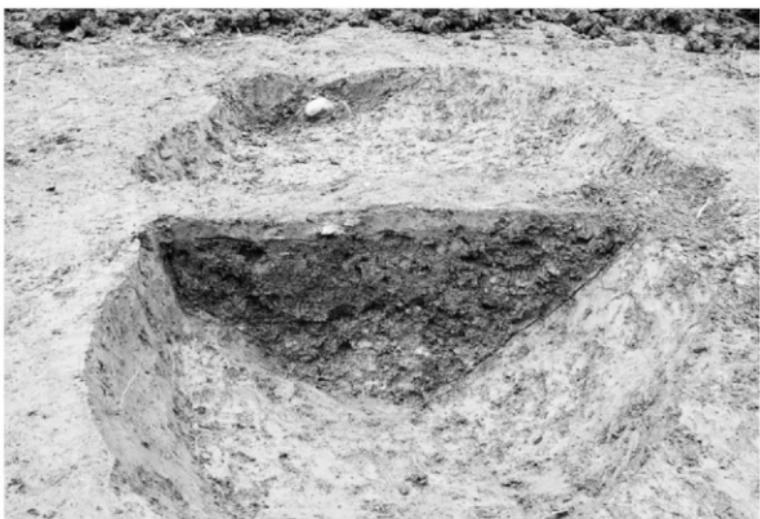
SK12 完掘状況（北より）



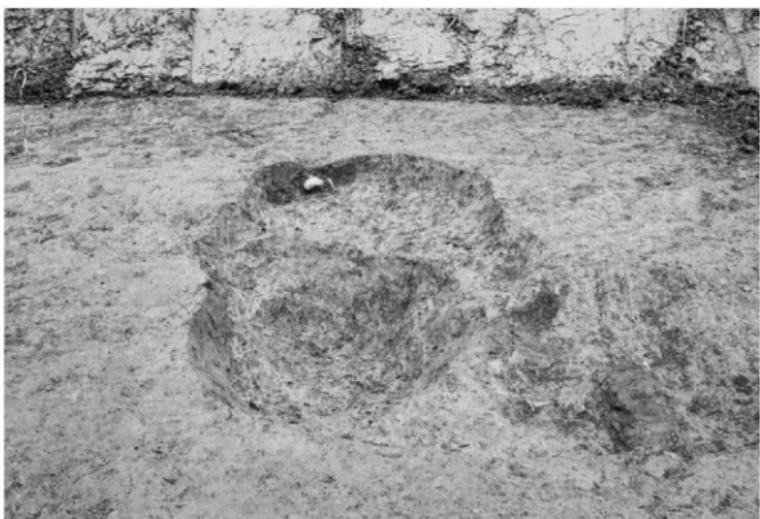
SK8 遺物出土状況及びセクション（南より）



SK13 セクション（南より）



SK15 セクション (南より)



SK15 完掘状況 (南より)



包含層 I 層遺物出土狀況 (867)



SK2 遺物出土狀況 (36・50・54)



SK4 遺物出土狀況



SK4 遺物出土狀況



SK4 遺物出土狀況



SK4 遺物出土狀況



SK7 遺物出土狀況  
(289・302・305・309・312・315・316)



SK7 遺物出土狀況 (313)



SK10遺物出土狀況 (漆製品)



SK12遺物出土狀況



SK12遺物出土狀況 (753)



SK12遺物出土狀況



SK13遺物出土狀況 (805)



SK13遺物出土狀況 (806)



SK13遺物出土狀況 (802)



SK13遺物出土狀況 (773)



SK13遺物出土状況 (774・782)



SK13遺物出土状況 (783)



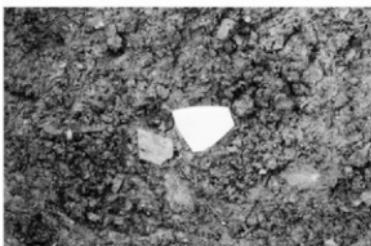
SK13遺物出土状況 (箸)



SK13遺物出土状況 (籠)



SK13遺物出土状況



SK13遺物出土状況 (764)



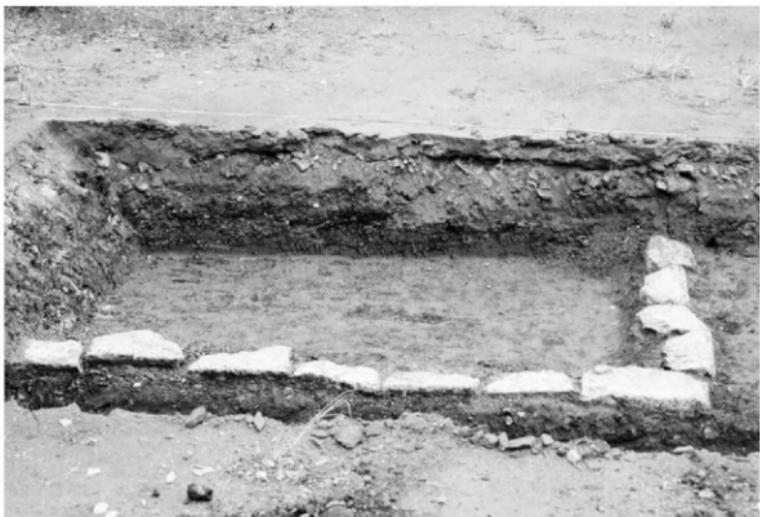
調査区風景 (南より)



作業風景



営林局石列出土状況（東より）



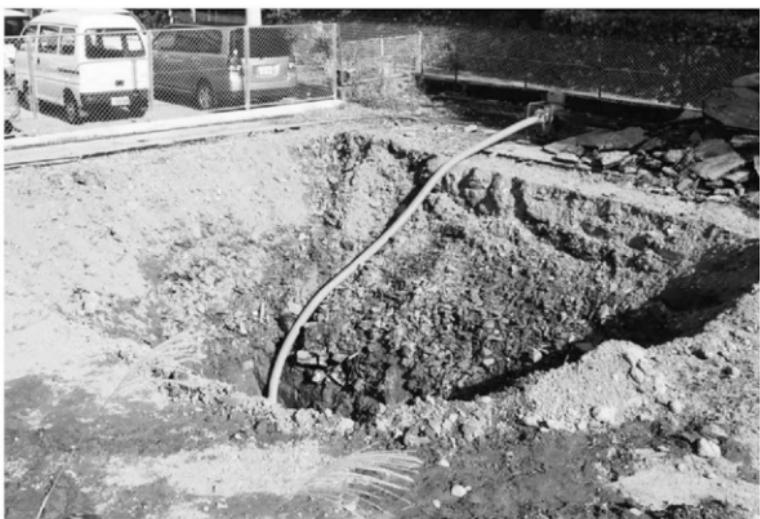
TP5 石列出土状況（東より）



TP3 石垣出土状況（東より）



TP3 石垣出土状況（南東より）



TP7 挖削風景（南より）



TP7 自転車・瓦礫出土状況



TP7内堀跡掘削状況（北より）



TP7内堀跡下層セクション（東より）



TP7自転車・瓦礫出土状況（南東より）



TP3石垣出土状況（東より）



TP4石垣出土状況（東より）



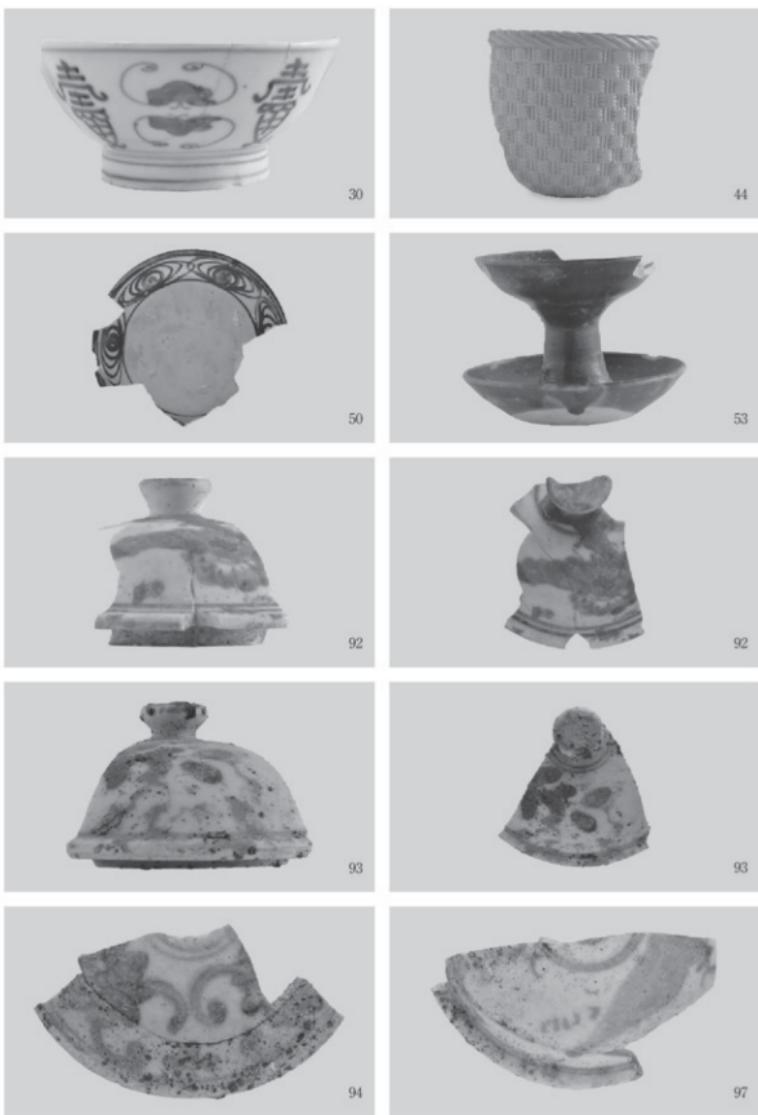
TP4石垣と土留め出土状況



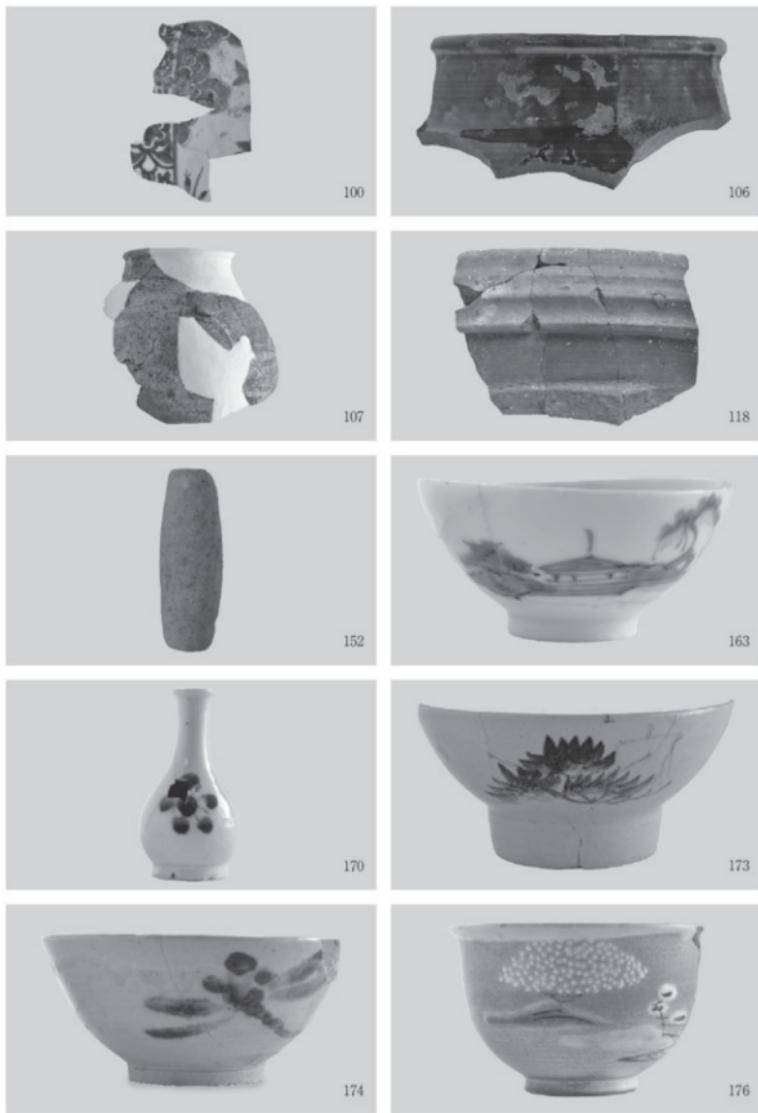
TP6包含層Ⅱ層遺物出土状況（5）



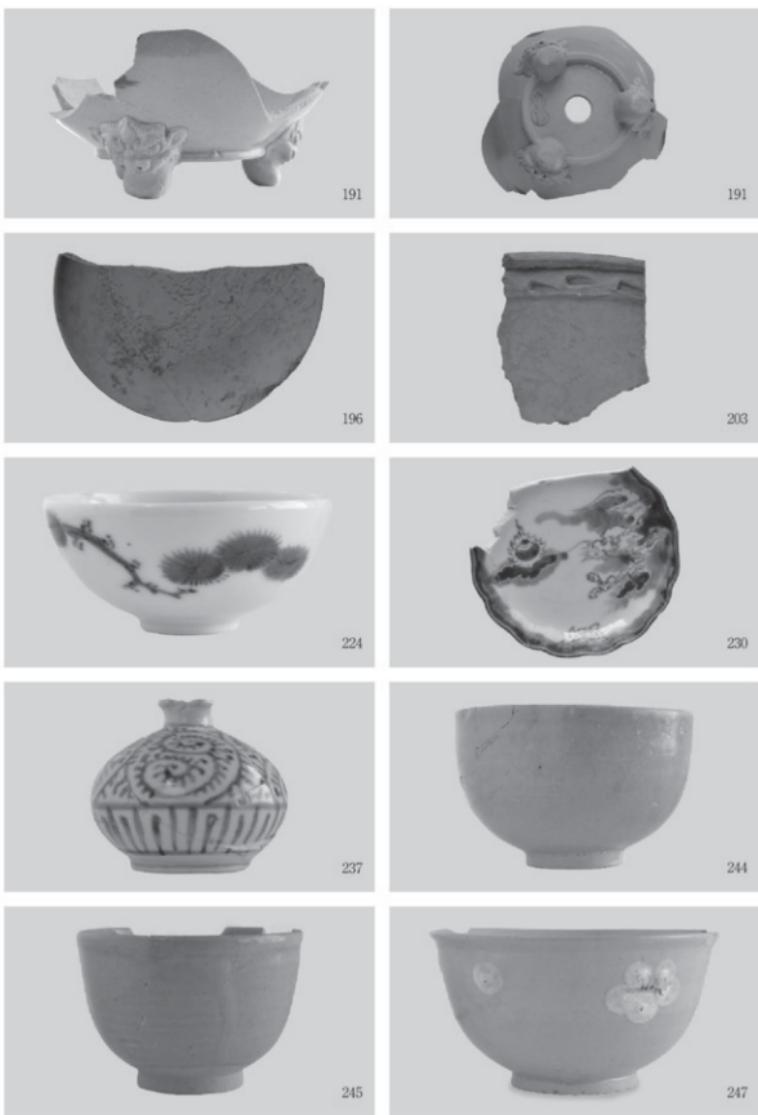
TP4掘削風景（西より）



SK1 · 2 · 4出土遺物



SK4 · 6 · 12 出土遺物



SK6 · 7 · 12 出土遺物



251



257



270



283



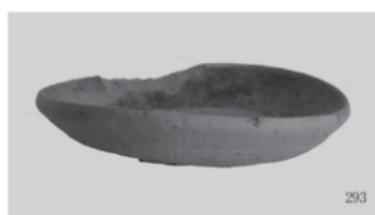
286



288



289



293

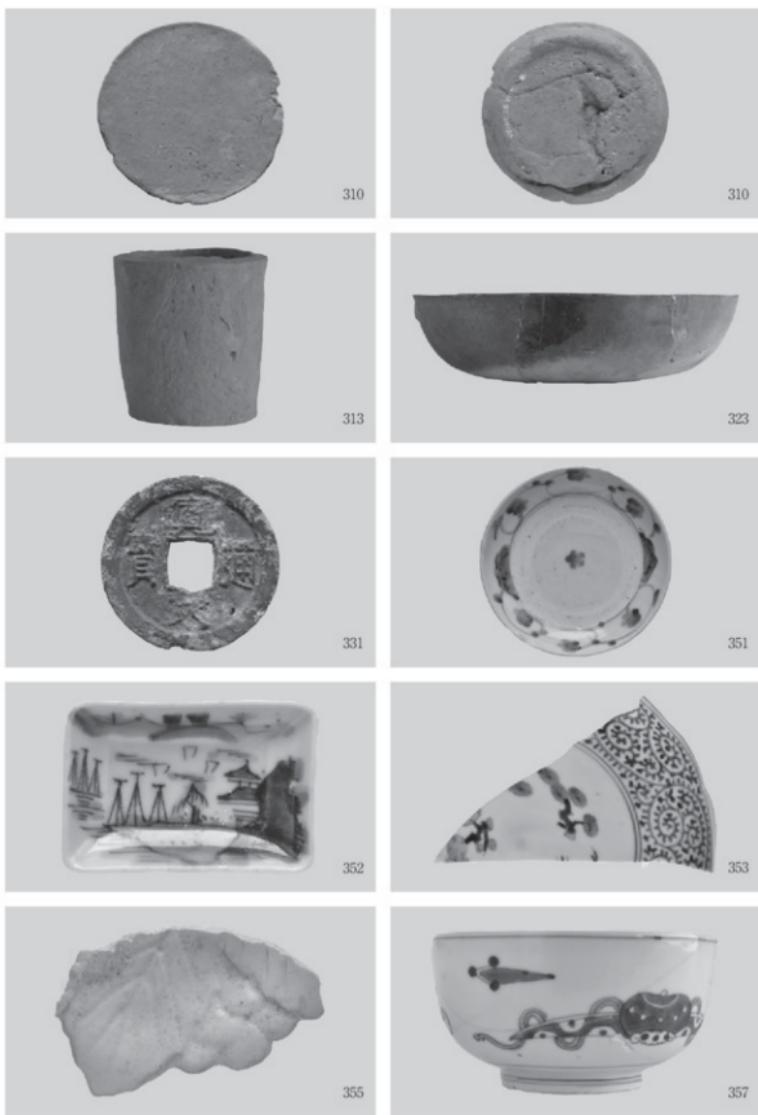


306



306

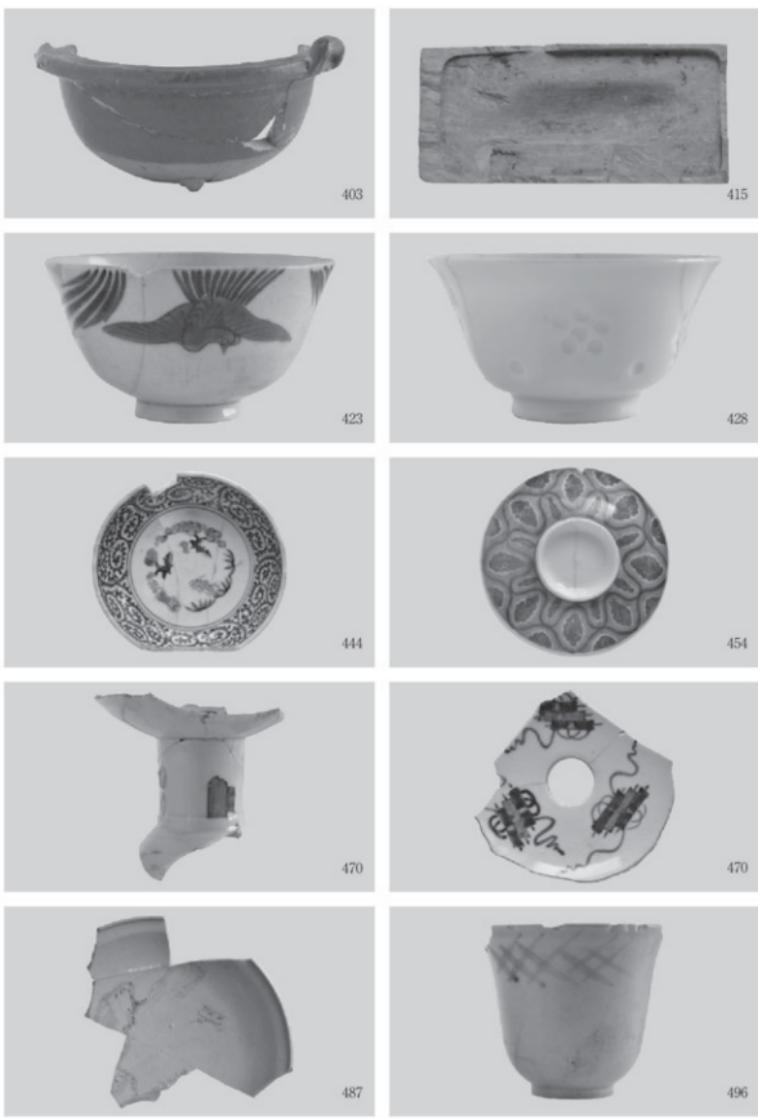
SK7 出土遺物



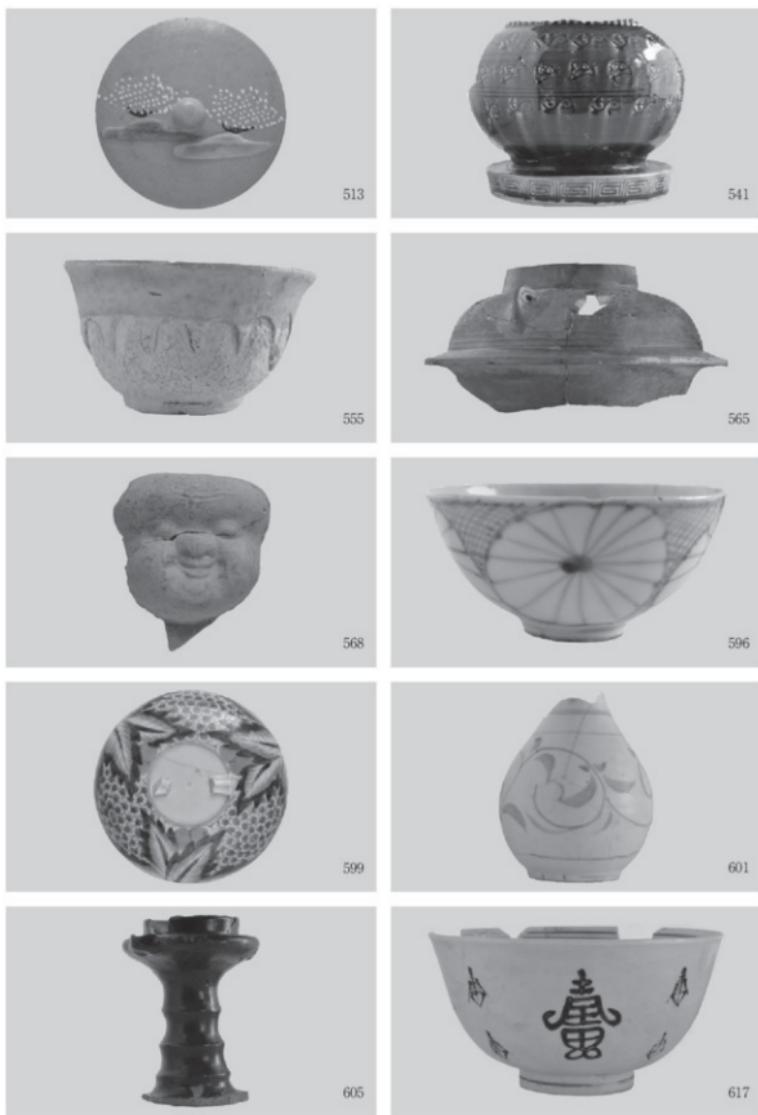
SK7·8出土遺物



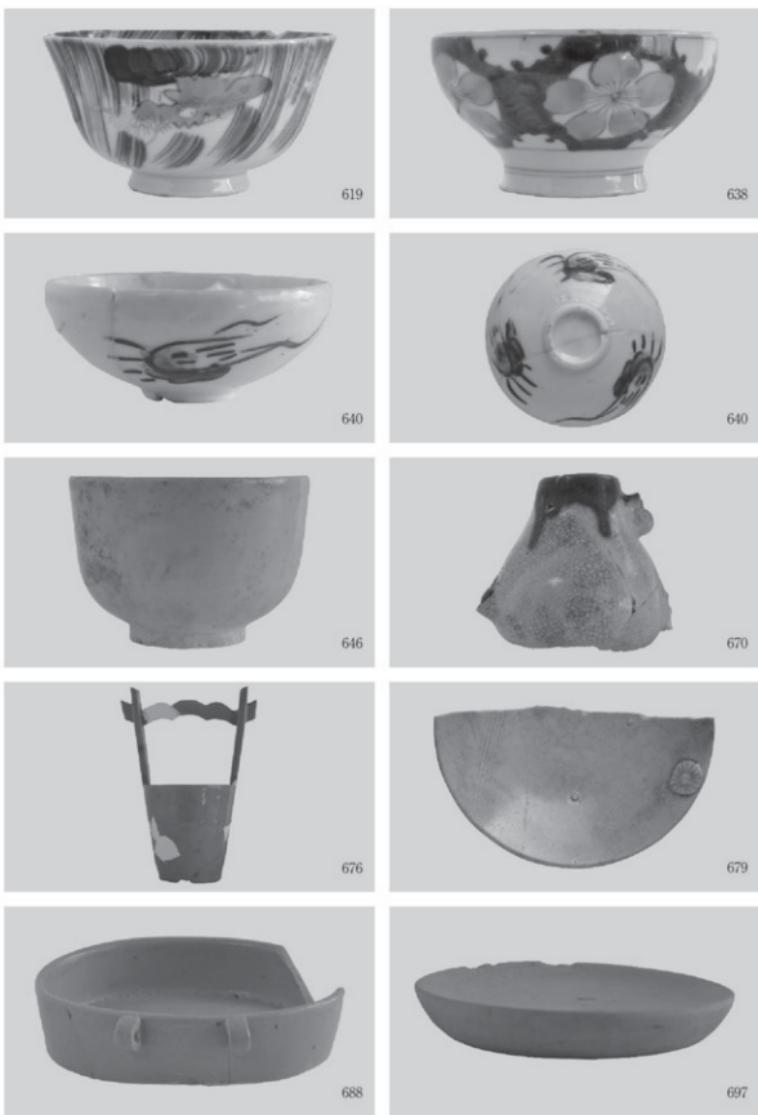
SK8·9 出土遺物



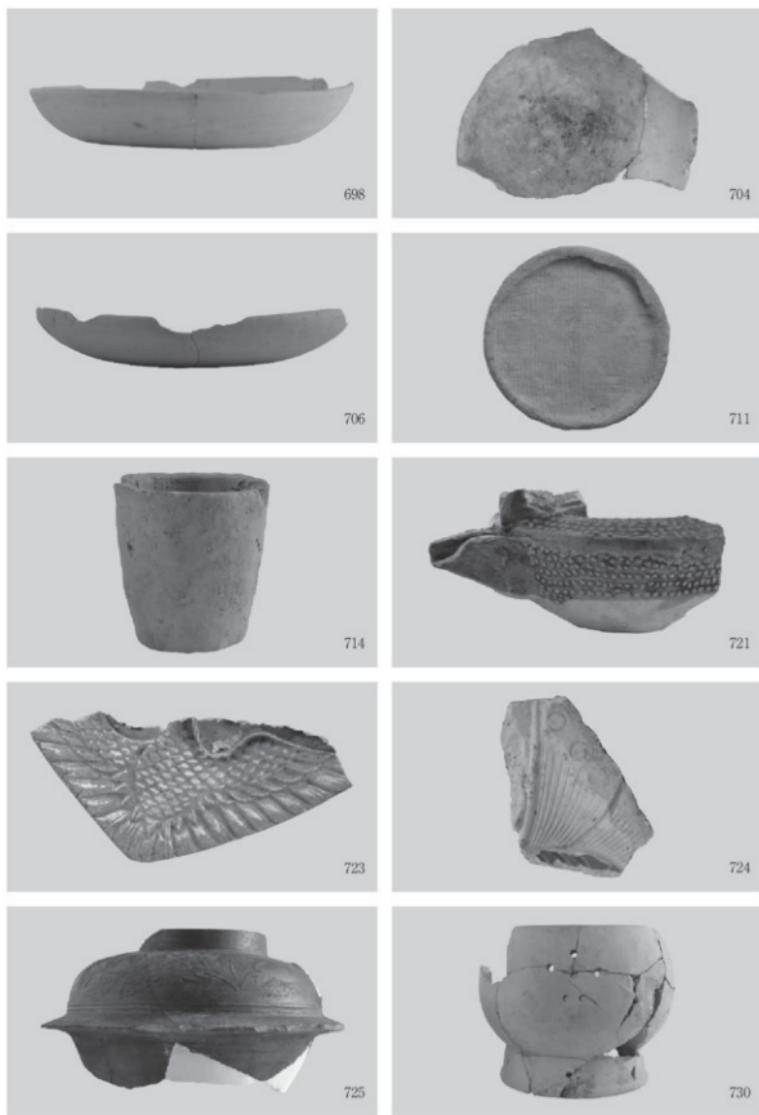
SK9~12出土遺物



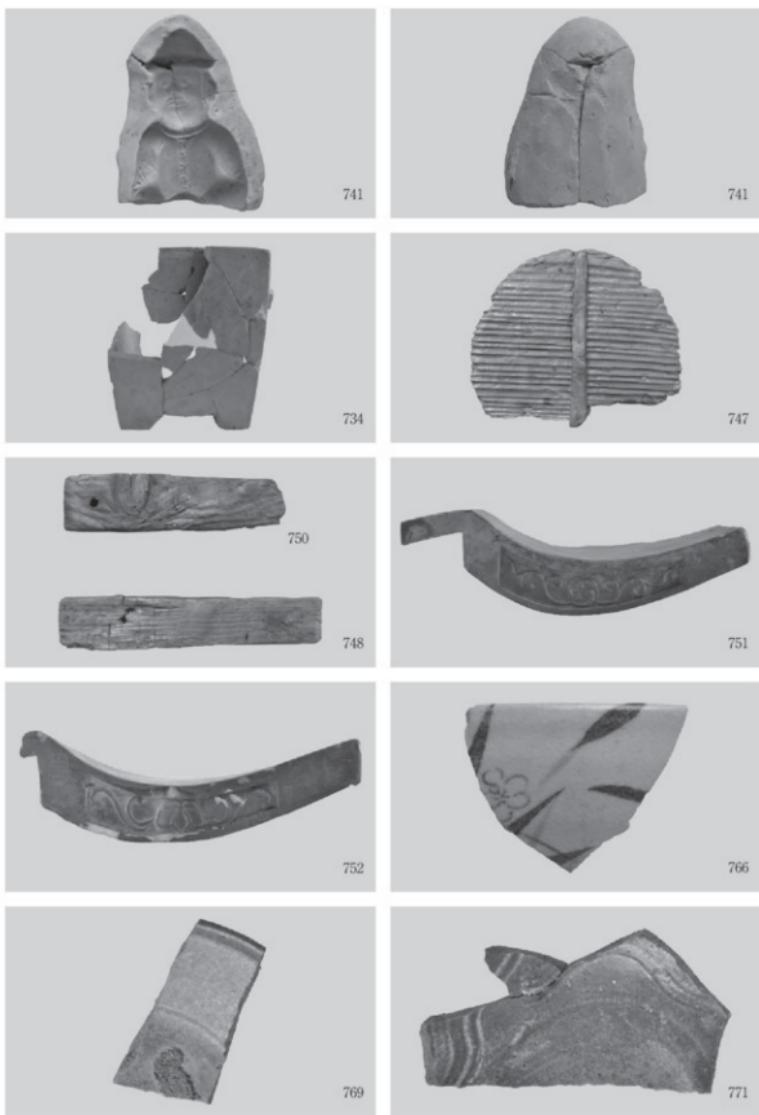
SK10~12出土遺物



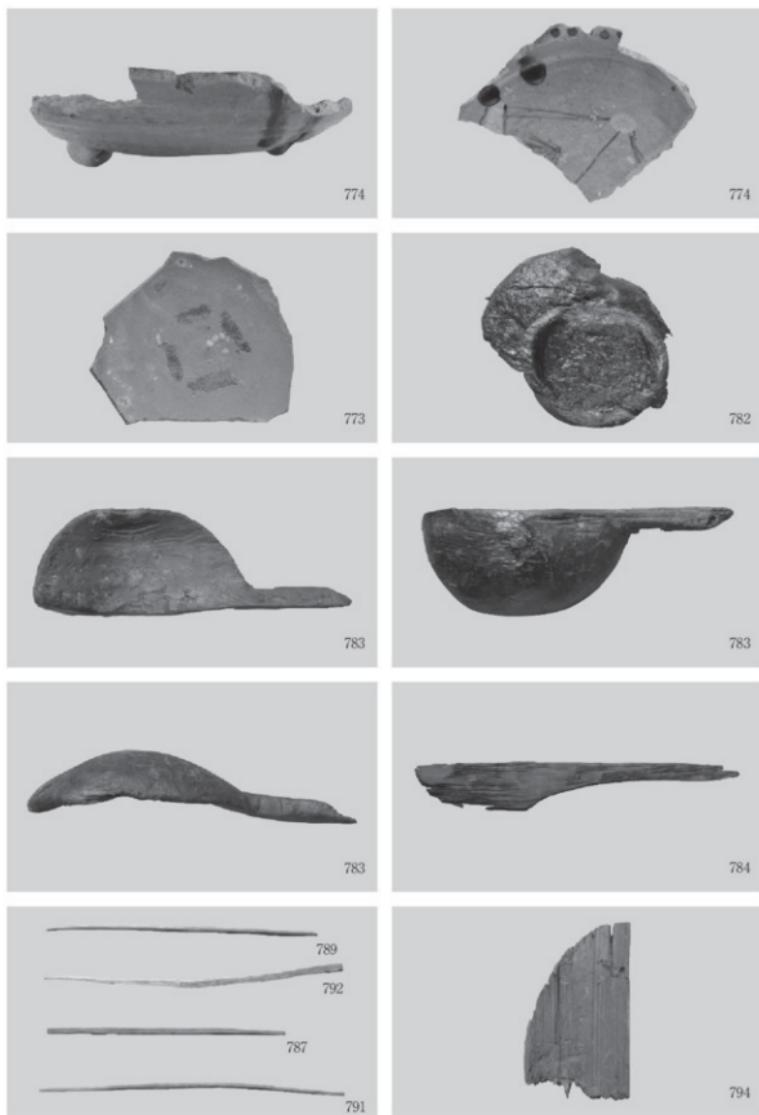
SK12出土遺物



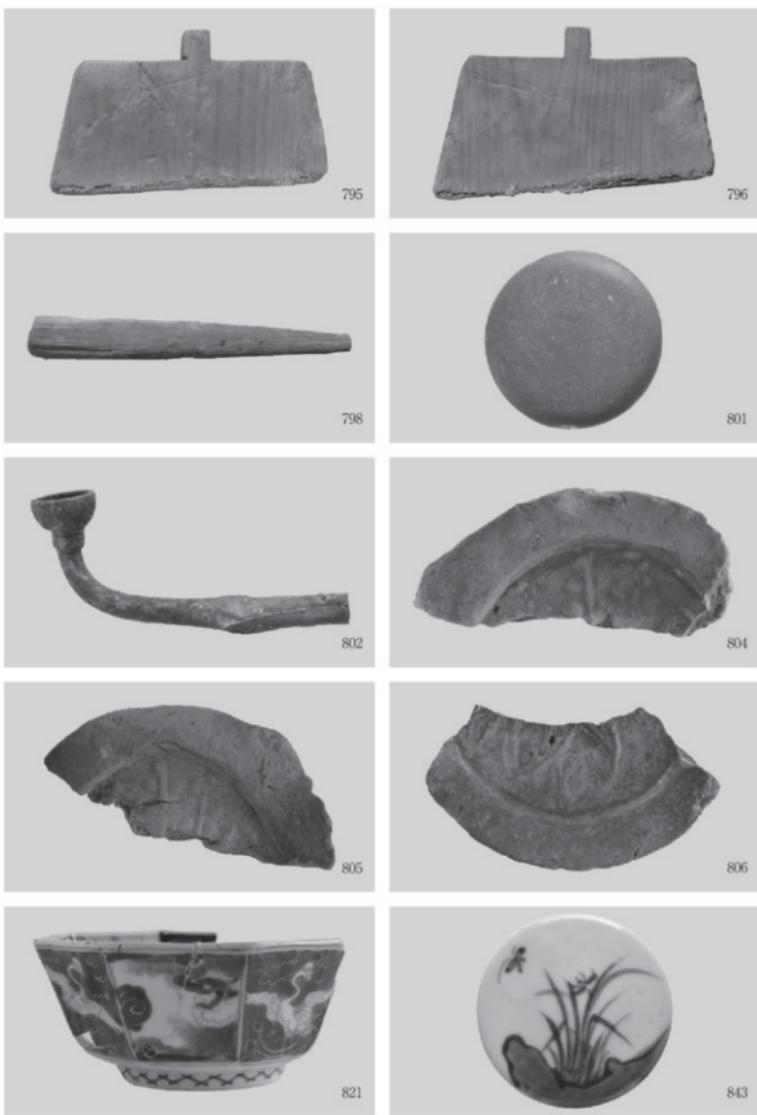
SK12 出土遺物



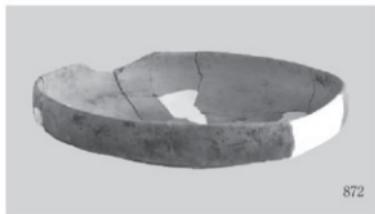
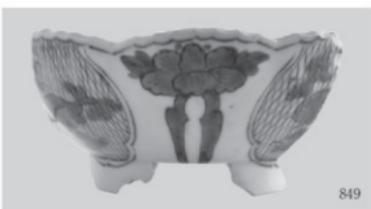
SK12・13出土遺物



SK13 出土遺物



SK13·瓦溜1·土器集中4出土遺物



包含層Ⅰ・Ⅱ層・搅乱・内堀跡1層出土遺物

# 平成 21 年度調査





調査区風景（南西より）



Ⅱ 区上面検出遺構完掘状況（西より）



II 区北壁



II 区北壁セクション



II区南壁



I区東壁



SK1半截状況（南より）



SK2セクション（西より）



SK3・7 (東より)



SK4 半截状況(北西より)



SK4セクション（北より）



SK4・12完掘状況（西より）



SK5 完掘状況（西より）



SK5 セクション（西より）



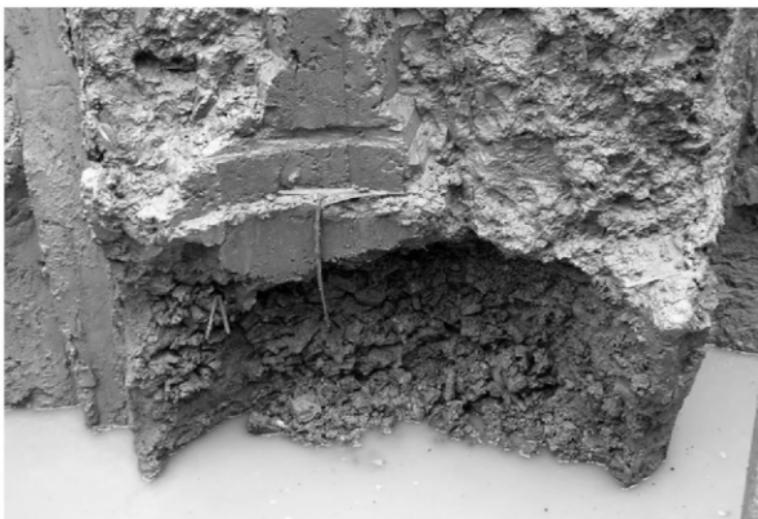
SE1掘方検出状況（南西より）



SE1半截状況（西より）



SE1完掘状況



SE1木炭出土状況



瓦溜1・SX1検出状況（北より）



瓦溜1遺物出土状況（北東より）



SK2遺物出土状況 (882)



I区東壁セクション (瓦溜1・SK5)



SK5 (西より)



瓦溜1遺物出土状況 (西より)



瓦溜1遺物出土状況



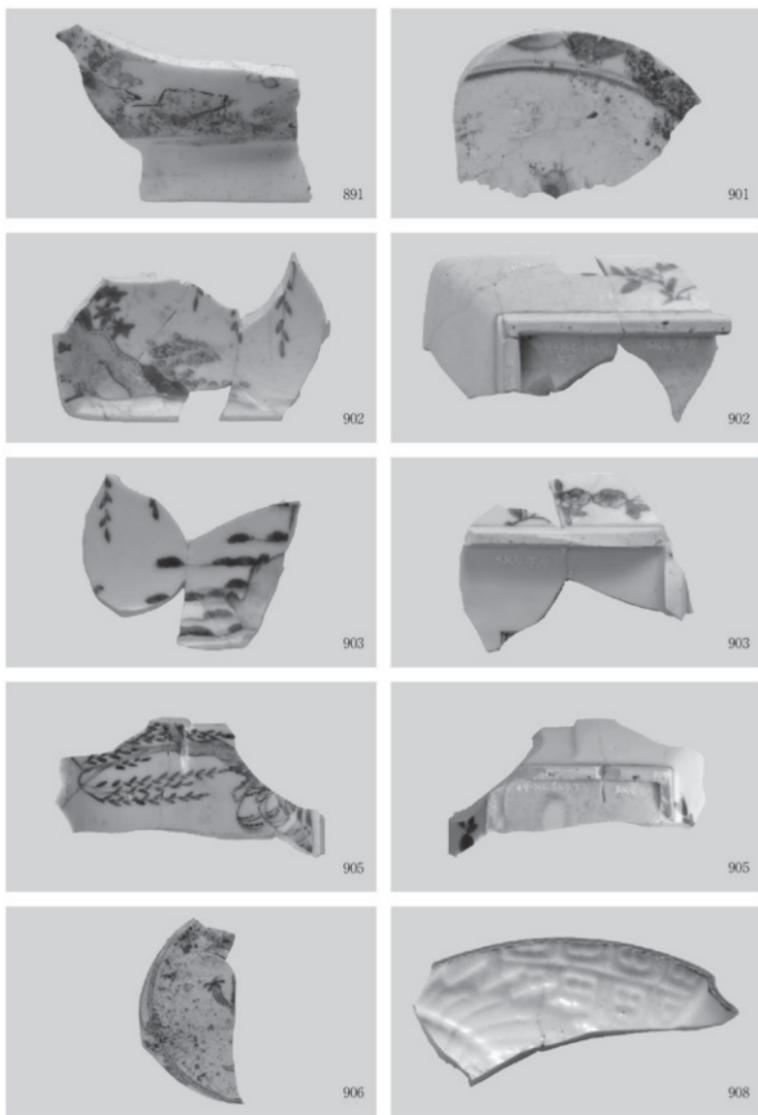
瓦溜1遺物出土状況 (1072)



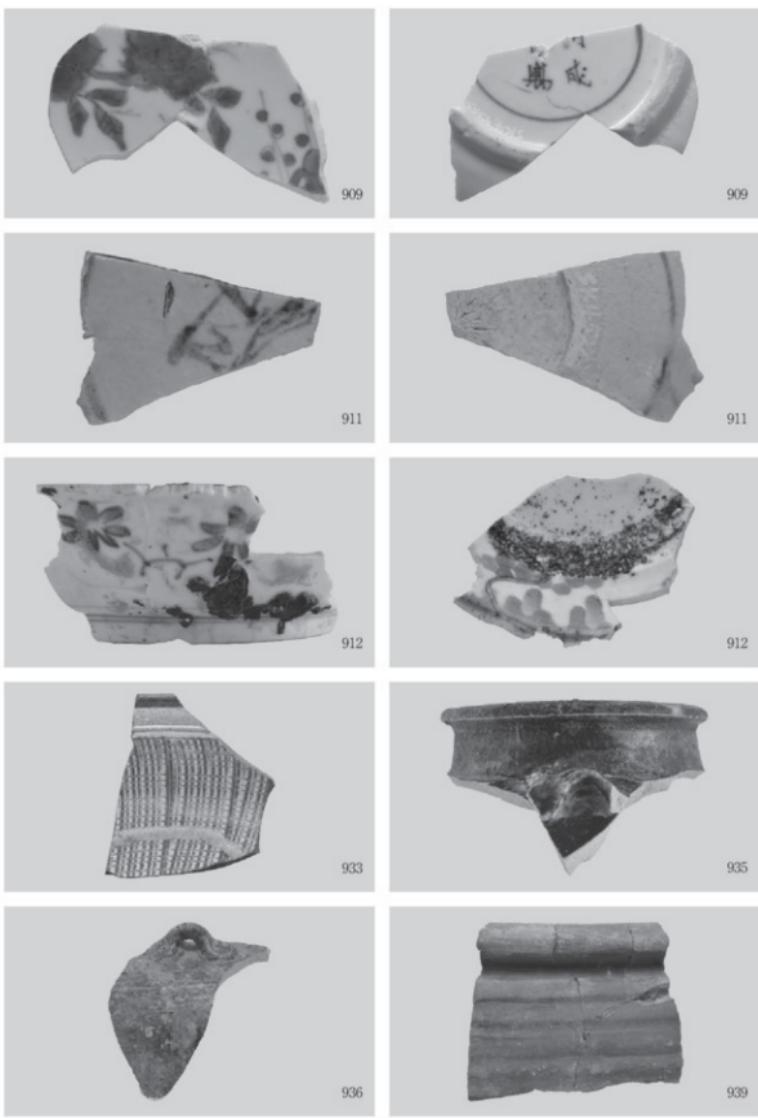
瓦溜1遺物出土状況 (1062)



瓦溜1遺物出土状況 (1055)



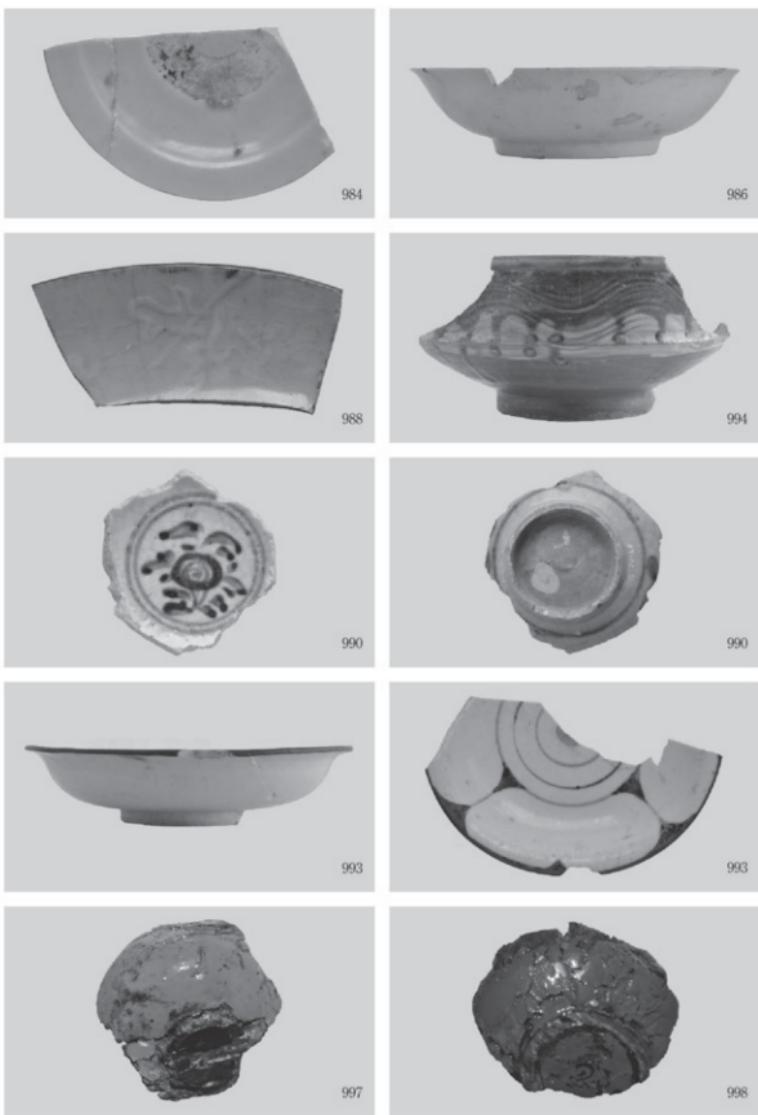
SK4 出土遺物



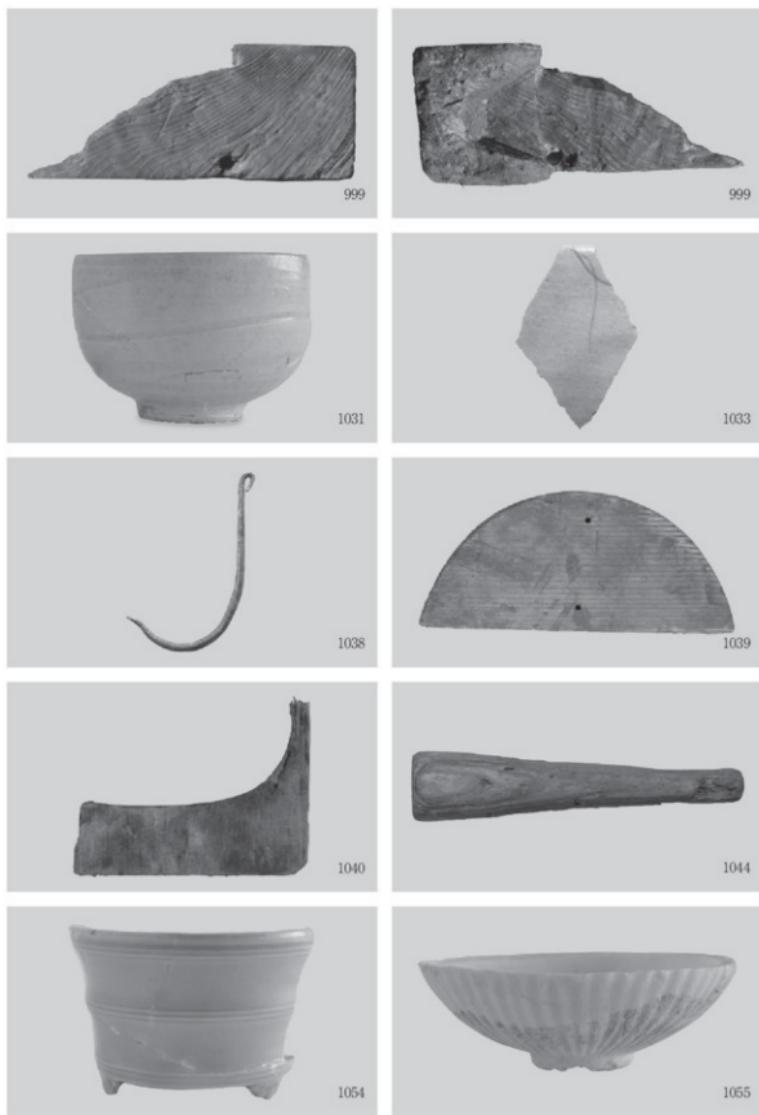
SK4 出土遺物



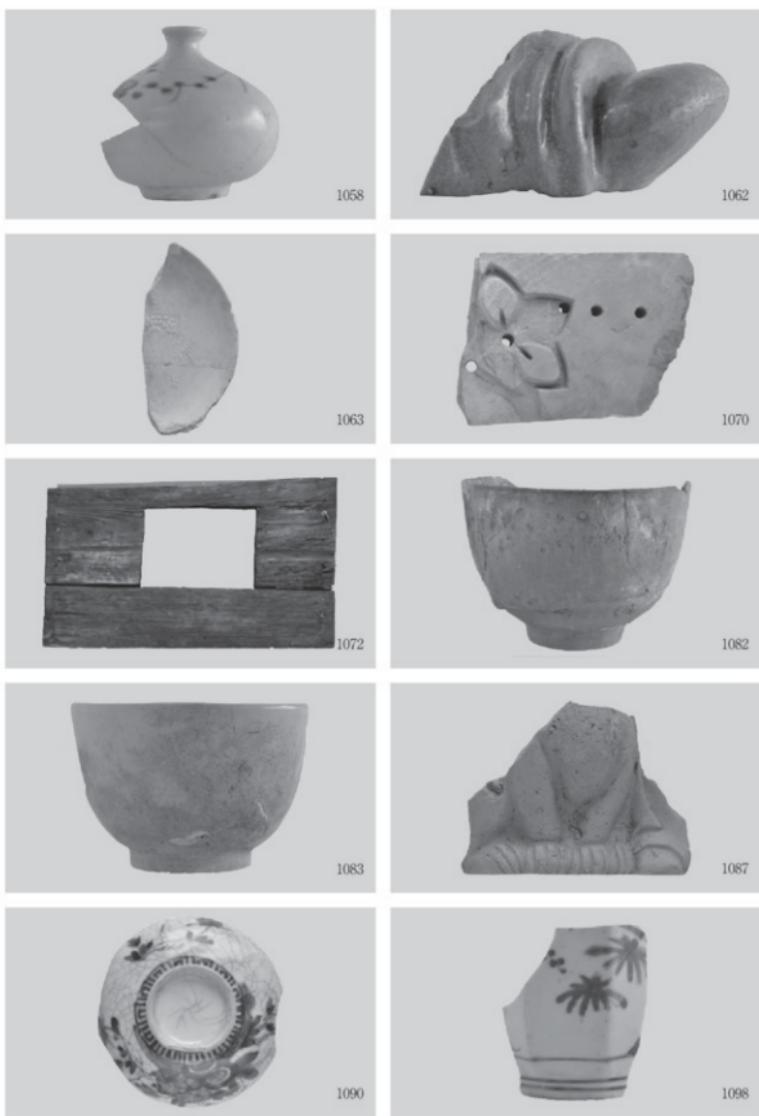
SK4 · 5 · 11 出土遺物



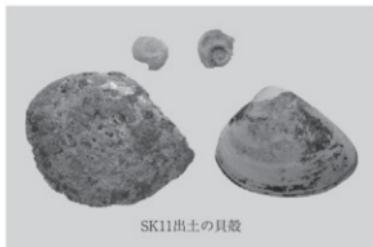
SK11 出土遺物



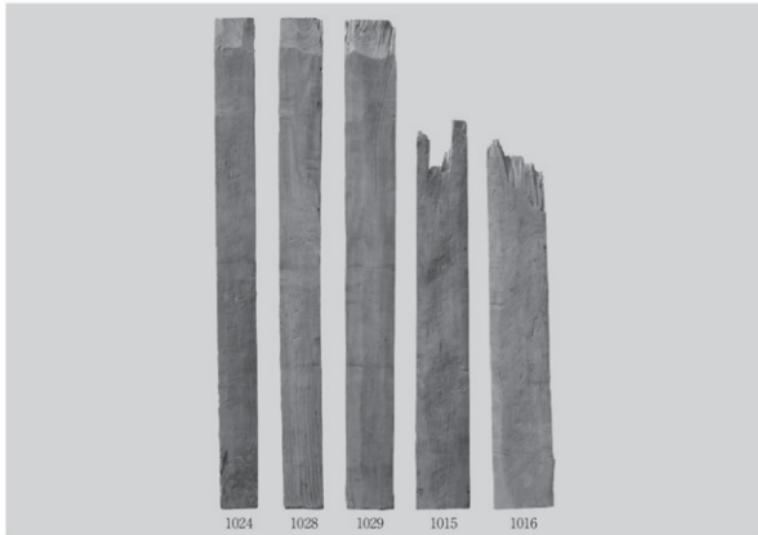
SK11 · SE1 · 瓦罐 1 出土遗物



瓦溜1~3·包含層I層出土遺物



搅乱・包含層Ⅱ層・SK11出土遺物



SE1 井戸側板

## 報告書抄録

ふりがな	しせき こうちじょうせき・こうちじょうせき							
書名	史跡 高知城跡・高知城跡							
副書名	内堀跡西側地区埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高知市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第37集							
編著者名	浜田恵子・梶原瑞司							
編集機関	高知市教育委員会							
所在地	〒 780-8571 高知県高知市鷹匠町2丁目1-43 Tel.088-832-7277							
発行年月日	西暦 2013年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 °.°.°	東経 °.°.°	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
史跡 高知城跡	こうちけんこうちし まるのうち 丸ノ内1丁目 27番3号	39201	010082	33度 33分 36秒	133度 31分 43秒	2006年 2月13日 ～ 2006年 3月11日	511 m <sup>2</sup>	モルーム 建設・学術 調査
高知城跡	こうちけんこうちし まるのうち 丸ノ内1丁目 3番23号	39201	010082	33度 33分 35秒	133度 31分 43秒	2009年 6月15日 ～ 2009年 7月10日	225 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高知城跡	屋敷跡 近世城郭堀跡	近世	土坑 ピット 溝 井戸 性格不明遺構 瓦溜り 堀跡	土師質土器 瓦質土器 施釉土器 近世陶磁器 貿易陶磁器 金属製品 石製品 木製品・瓦	近世武家屋敷跡に関連する土坑、井戸を検出。火災関連の廃棄土坑、江戸後期の廃棄土坑と瓦溜りを検出。高知城内堀の範囲を確認。			



高知市文化財調査報告書第37集

# 史跡 高知城跡 高知城跡

内堀跡西側地区埋蔵文化財発掘調査報告書

---

2013年3月

発行 高知市教育委員会

〒780-8571 高知県高知市鷹匠町2丁目1-43

民権・文化財課

電話088-832-7277

印刷 共和印刷株式会社









